

図2 中平遺跡 調査路線と公共座標

〔写真撮影〕原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1,220万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。また、必要に応じて6×7中判カメラや高所作業車を使用したほか、業者に委託してラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。

## 2 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果古代の堅穴住居跡36軒を中心に、土坑102基（縄文時代を含む）、溝跡60条、掘立柱建物跡27棟、ピット331基、ピット列2条、焼土遺構7基、溝状土坑5基、埋設土器3基、赤褐色範囲4ヶ所が検出され、縄文時代・古代の土器類65箱、石器類11箱、鉄・陶磁器類3箱の合計79箱が出土した。主に古代の集落の時期・構造等を解明するため、堅穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と建物跡としての同時性、集落の変遷等の検討に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺20分の1で図化し、簡易遣り方測量で作成した堆積土層断面図や炉・カマド等の付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕遺構出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に接合し、復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器・金属器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層等の整理を怠らないようにした。

〔報告書掲載遺物の選別〕遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。特に、縄文土器の復元個体や拓本では表現しきれない隆帯・突起等の凹凸のある遺物については、実測図を作成するように心掛けた。また、種類ごとに遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔理化学的分析〕出土火山灰の噴出源を特定するための火山灰分析、炭化材や炭化種実の年代を特定するための放射性年代測定、堅穴住居跡の建築材を特定するための炭化材の樹種同定、出土炭化種子を特定するための種子同定、銅製鈴の製作工程分析、須恵器の生産地を特定するための胎土分析、石器の石材産地を確定するための鑑定・同定を、研究者や研究機関・業者等に委託して行った。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、ロットリングペンによる手作業と（株）CUBIC製「トレースくん」（遺物実測支援システム）を用いたデジタル

トレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成についても、紙図版による手作業とパソコンによるデジタルデータ加工作業を併用した。遺構内出土遺物のうち、床面（底面）出土遺物や竪穴住居跡の炉・カマド出土遺物等については、原則として遺構の平面図にそのドットマップ図・形状実測図等を掲載した。

〔遺構の検討・分類・整理〕遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代と古代の集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。（神）

### 第3節 調査経過等

#### 1 発掘作業の経過

平成20年度の中平遺跡発掘調査は、調査委託者の要望に応じて工事発注がなされている農道9・10・11号をまずは調査対象とし、調査の進捗状況に応じて順次調査区域を追加していくこととなった。その結果4月22日から10月24日までの発掘作業期間で、さらに農道8・2・1号の調査も実施した。平成18年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行った確認調査の結果、縄文時代・古代の遺物・遺構が確認されているが、表土から古代の遺構確認面までは畑地造成や砂利道として攪乱されていることが分かっていたので、重機を使用して掘削の省力化を図り、古代の遺構検出・調査、縄文時代の遺物包含層・遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	伊藤 博文（現 青森県総合社会教育センター所長）
次長（調査第一GL）	工藤 大
総務GM	櫻庭 孝雄（平成21年3月退職）
文化財保護主査	神 康夫（発掘調査担当者）
文化財保護主査	茅野 嘉雄 （発掘調査担当者、現・県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室）
文化財保護主査	田中 珠美（発掘調査担当者）
文化財保護主事	岩田 安之（発掘調査担当者）
調査補助員	山田 真太郎（平成21年3月退職）、工藤 浩子 山下 生詩（平成21年3月退職）、川村 昌子 坂本 真由美、佐藤 裕太

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人弘前大学名誉教授（考古学）
調査員	葛西 勲	前青森短期大学教授（考古学）
	三浦 圭介	北里大学非常勤講師（考古学）

山口 義伸 青森県立浪岡高等学校教諭（地質学）

鳥口 天 青森県立郷土館学芸主査（地質学）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成20年度〕

- 4月上旬 青森県東青地城県民局地域農林水産部（調査委託者）、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。
- 4月中旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。
- 4月21日 最初に着手する農道9・10号の隣接地に敷鉄板を敷設して農作業用車両の通路を確保した上で農道9号の掘削（重機による砕石等除去作業）を開始した。
- 4月22日 発掘器材等を調査事務所、器材庫に搬入し、職員3名、調査補助員6名、発掘作業員70名の規模で発掘調査を開始した。環境整備後、農道9号の北西端部から発掘作業員による遺構確認作業に着手した。測量基準点・水準点は工事用のものを使用し、必要に応じて調査区周辺に増設した。
- 5月上旬～ 農道9号と併行して農道10号の遺構確認と精査をすすめる。これ以後はすべての農道において、調査が終了し次第埋め戻す、通路確保のために敷鉄板を移設、重機で砕石等の表土除去作業、人力による遺構の確認・精査、という手順を繰り返すこととなる。併せて、各農道で土層観察用のトレンチを1～数箇所深掘りし、基本土層を確認していった。
- 5月中旬～ 農道9・10号とも南東部から古代の竪穴住居跡や土坑・溝跡などが次々と検出され、精査のペースを上げた。
- 5月下旬～ 農道9号の調査に目途ができたことから、調査に難航が予想される農道8号の調査に入る準備を進める。
- 6月中旬～ 農道9・10号の空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託し、別に高所作業車を借り上げて遺構群の近景写真も撮影する。写真撮影作業と併行しながら農道8号には敷鉄板を移設して表土等砕石除去作業を開始する。
- 6月25日 農道9号の調査がすべて完了し、後片付けをして受注業者へ引き渡しを行う。農道8号で人力による遺構確認作業と遺構精査を本格的に進め、併せて農道11号の調査準備を進める。
- 7月上旬～ 農道8・10・11号の3路線に作業員を配置して調査を進め、7月11日には農道10号の調査をすべて終了したことから受注業者へ引き渡しを行う。
- 7月下旬～ 農道8号西半部は、現道用地内で車両通行スペースを確保しなければならず、調査区域を細かく分割して調査・埋め戻し作業を繰り返すこととなる。農道11号は予想より検出遺構が少なかったことから、委託者の要望により次の調査路線となる農道2号の調査準備を進める。7月31日に農道11号は調査完了し引き渡しを行った。
- 8月 お盆休暇を挟みながら、狭い調査区内で農作業通路の切り替えを行う農道8号と、長い調査区の農道2号の調査を精力的に進める。また、今年度最後の調査路線は農道1号と決定したことから、その調査準備を8月中旬から始める。
- 8月28日 株式会社シン技術コンサルに委託して農道8・2号の空中写真撮影を行い、農道8号は調

査をすべて完了した。

- 9月3日 農道2号と併せて農道1号の調査にも着手する。
- 9月24日 遺構の精査が進んできたことから高所作業車を借り上げて農道2・1号の遺構群近景写真撮影する。
- 10月1日 農道2号の調査がすべて完了したことから調査器材等を本部事務所へ移動し、受注業者へ現地引き渡しを行う。予定より早く調査の進捗をみたことから、これ以後は農道1号の調査を残すのみとなった。そこで調査体制を見直し、職員2名、調査補助員3名、作業員51名に規模を縮小した。
- 10月中旬 天気に恵まれたことと、農道1号での検出遺構が思ったより少なかったことから調査は順調に進んだ。10月16日には株式会社シン技術コンサルへ委託し、ラジコンヘリによる農道1号の空中写真撮影を行った。
- 10月24日 農道1号の調査もすべて完了し、調査器材等を洗浄・梱包し、トラックで搬出した。
- 10月下旬 今年度工事発注されない農道1号の一部について、農作業用車両が通行できるよう重機によって埋め戻しと砕石の敷均しを行う。また調査事務所及び駐車場として借用していた土地からプレハブ・トイレ・敷鉄板などを搬出し、平成20年度の調査をすべて完了した。
- 11月25日 所轄警察署へ県教育庁文化財保護課から遺物発見届を提出。(同日付青教文第1008号)

## 2 整理・報告書作成作業の経過

報告書刊行事業は平成21年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成20年11月に終了している。その他の整理・報告書作成作業は平成21年4月1日から平成22年3月31日までの期間で行った。中平遺跡は縄文時代と古代の複合遺跡であり、検出遺構の中では古代の竪穴住居跡が多く、出土遺物も古代の土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。報告書の総頁数は400頁で、この約7/8を古代の遺構・遺物の記載にあてることにした。

整理・報告書作成体制は、原則として発掘調査体制に整理作業員4名を加えたものである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長	新岡 嗣浩
次長	工藤 大
総務GM	木村 繁博
調査第二GM	畠山 昇
文化財保護主幹	神 康夫 (報告書作成担当者)
文化財保護主査	茅野 嘉雄
(報告書作成担当者、現・県教育庁文化財保護課三内丸山遺跡保存活用推進室)	
文化財保護主査	新山 隆男 (報告書作成担当者)
文化財保護主査	田中 珠美 (報告書作成担当者)
調査補助員	工藤 浩子、川村 昌子、坂本 真由美、 佐藤 裕太、福田 南、佐々木 隆英
整理作業員等	堀越 あすか、岸田 美雪、吉田 力、小林 恵

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

〔平成20年度〕

- 11月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。写真類の整理作業は終了した。  
 1月 炭化材のサンプル等を整理して年代測定・樹種同定の理化学的分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。銅製鉛の分析について村上隆上席研究員（京都国立博物館）に依頼した。

〔平成21年度〕

- 4月上旬～ 発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。遺構ごと、グリッドごと、層位ごとに出土遺物の点数と重量の計測を行い、遺物台帳等を作成した。  
 5月中旬 計測作業が終了した農道から、順次接合・復元作業を進めた。焼失家屋から採取してきた土壌サンプルの水洗選別作業を行う。  
 6月8日 水洗選別し十分乾燥した炭化種子等を大別する作業に着手し、2週間強を要した。  
 6月下旬～ 遺構実測図・遺構データ等の整理作業は終了し、遺構の検討・整理作業を開始し、遺構一覧表及び図版等の作成を開始した。遺物整理は、炭化種子等の大別作業が終了し、接合・復元作業を再び集中的に行った。  
 7月下旬 石器・土器製品類の報告書掲載遺物を選別し、実測作業にとりかかる。併せて炭化種子等の同定のため椿坂基代客員研究員（札幌国際大学博物館）に理化学的分析を委託した。  
 8月中旬 土器類の接合・復元作業が終了したので、報告書掲載遺物の選別作業を行った。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、ナンバリング・遺物観察表等の作成を開始した。  
 9月上旬 選別した報告書掲載土器類の図化作業を始めた。また、柴正敏教授（弘前大学理工学部）へ火山灰の分析依頼をする。  
 9月下旬～1月上旬 この間、数回に分けて報告書掲載遺物の写真撮影を行った。土器類はシルバーフォト、石器類はスタジオエイトにそれぞれ委託した。  
 10月上旬 三辻利一非常勤講師（大阪大谷大学）へ須恵器産地同定の依頼をする。  
 11月上旬～ 遺構実測図の図版組み作業を進め、遺構配置図・調査区域図等の作成を行った。石器類の石材産地同定を島口天主任学芸主査（青森県立郷土館）へ依頼した。調査成果を総合的に検討して、報告書原稿作成を開始した。  
 12月上旬 土器類の写真撮影の間隙をぬって土器類の拓本を取り、器面調整等の図化作業を本格化させた。併せて仮図版や遺構写真図版等を作成し、報告書の内容・ページ数を再確認した。  
 1月中旬 素図が出来上がった遺物から順次、ロットリングペンとパソコンによるデジタルトレースを併用して清書作業を行った。トレース終了後、印刷用版下と遺物写真図版を作成した。また印刷業者を入札・選定し、原稿・版下等の入稿、割付・編集作業を行った。  
 2月 必要に応じて適宜印刷業者と打ち合わせを行い、校正やデータの精査を繰り返した。  
 3月29日 3回の校正を経て報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納した。

（神）

## 第2章 遺跡周辺の地形と基本層序

### 第1節 遺跡周辺の地形

中平遺跡は梵珠山系の南西麓に広がる扇状地性の低位段丘上で、標高35～40mの緩やかな小丘地上に位置している（図1・2、表2）。小丘地の南北には東西に延びる開析谷が存在し、北側の谷上流部と南側の谷が堰き止められ、それぞれ吉野田新溜池、熊沢溜池として現在利用されている。小丘地頂部はりんご園造成のために削平され、ほぼ平坦となっている。遺跡周辺の詳細な地形・地質については青森県埋蔵文化財調査報告書第474集「中平遺跡」（青森県教委2009）を参照されたい。

### 第2節 基本層序

各路線に1～数カ所の土層観察用のトレンチを設け、そのうち記録した基本層序の位置を図3に、各土層図を図4に示した。第V層より上層では各路線の層序に大きな変化は見られないが、上面の削平により欠落する層や傾斜地・谷地形などの地形により細分可能な層がある。

各層の色調及び諸特徴は以下のとおりである。

#### 第Ⅰ層 10YR1.7/1～2/3 黒色～黒褐色土

表土である。耕作土で、φ1～2mmのローム粒をわずかに混入する。

#### 第Ⅱ層 10YR1.7/1～2/3 黒色～黒褐色土

平安時代の包含層である。φ10mmまでのローム粒をわずかに混入する。農道8号や農道9号などでは、第Ⅱa層と第Ⅱb層に細分される。

**第Ⅱa層** 10YR1.7/1～2/1 黒色土 白頭山苦小牧火山灰が混入する箇所もあり、第Ⅱb層に比べて幾分色調が明るい。

**第Ⅱb層** 10YR2/1 黒色土 第Ⅱa層に比べると全体的に締まりがあり、粘性・湿性がある。

#### 第Ⅲ層 10YR1.7/1～3/2 黒色～黒褐色土

縄文時代の包含層で、φ3mmまでのローム粒や焼土粒をわずかに混入する。主に農道9・10・11号南西端の傾斜地や農道1号中央の谷地形で確認された。一部では第Ⅲa層と第Ⅲb層に細分される。

**第Ⅲa層** 10YR1.7/1～3/2 黒色～黒褐色土 全体的に混入物が少なく、乾燥しやすい。

**第Ⅲb層** 10YR1.7/1～2/2 黒色～黒褐色土 第Ⅲa層に比べ混入物が多く、ややしまりがある。

#### 第Ⅳ層 10YR2/2～4/6 黒褐色～褐色土

漸移層で第Ⅴ層に由来するローム粒・ブロックを中量含む。農道1号の谷地形では粘土が混入する。

#### 第Ⅴ層 10YR6/4～8/6 におい黄褐色～黄橙色ローム質土

千曳浮石に対比される。φ5mmまでの浮石をわずかに混入する。農道1号の谷地形では部分的に粘土化している。農道2号では上面が削平されており、表土直下が本層となる。

#### 第Ⅵ層 7.5YR8/1～10YR6/6 灰白色～明黄褐色粘土

混入物はほとんどないが、酸化鉄が粒状あるいは筋状に混入する。農道2号と農道8号では本層は粘土質ではなく、ローム質となる。

**第Ⅶ層** 10YR8/1 灰白色粘土 緻密で締まりがある。酸化鉄が混入する。

**第Ⅷ層** 7.5YR6/8 橙色粘土 灰白色粘土を多量に含む。 (田中)

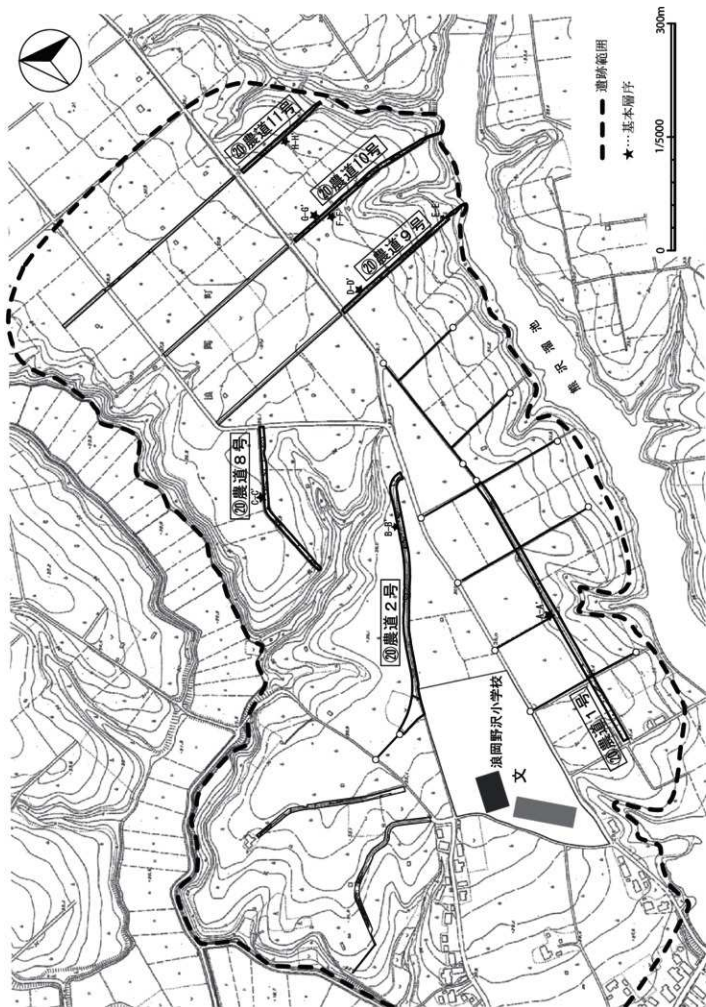


図3 中平道跡 平成20年度調査区域図



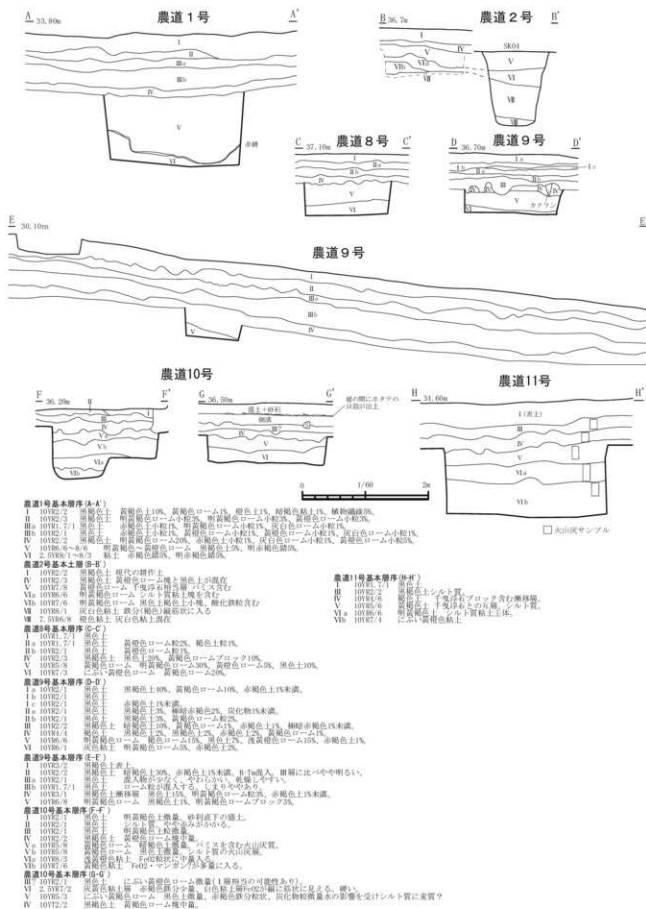


図4 基本層序

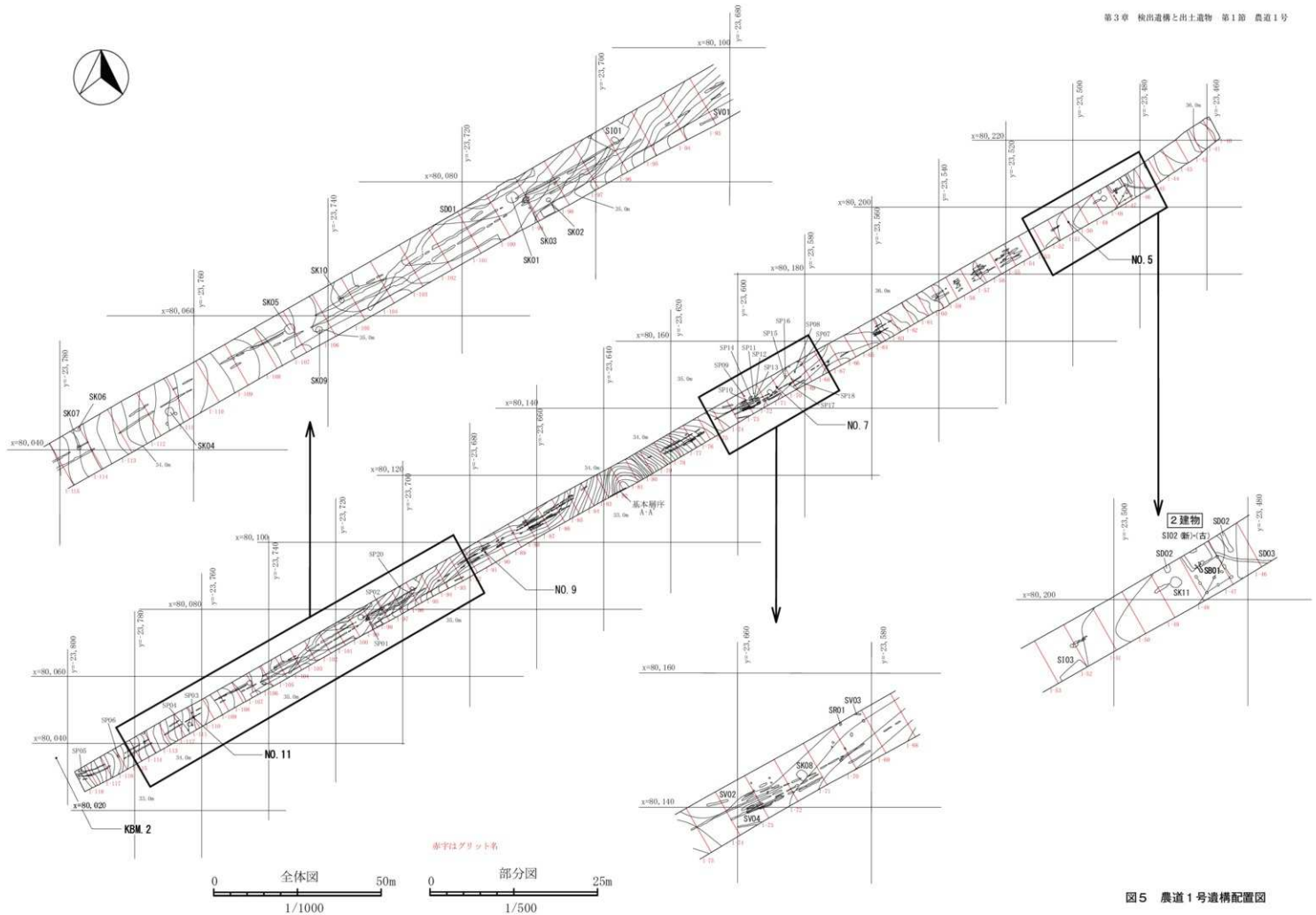


図5 農道1号遺構配置図

## 第3章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 農道1号

#### 1 検出遺構

農道1号で検出された遺構は、竪穴住居跡4軒（拡張含む）、土坑11基、溝跡3条、掘立柱建物跡1棟、ピット20基、溝状土坑4基、埋設土器1基である。このうち、竪穴住居跡と掘立柱建物跡や溝跡（外周溝）、土坑などセットと考えられる建物跡は1棟で、拡張を含めると2棟となる。そう考えると検出遺構の構成は建物跡2棟、単独の竪穴住居跡2軒、土坑10基、溝跡1条、ピット20基、溝状土坑4基、埋設土器1基となる。また、調査区域内に徹跡や側溝跡が調査区（現道）に平行して幾条も検出されたが、それらは遺構配置図（図5）に図示するに止めた。（田中）

#### (1) 建物跡・竪穴住居跡

農道1号で検出された竪穴住居跡は4軒（SI01、SI02（新）・（古）、SI03）で、いずれも平安時代のものである。SI01は調査区西側の標高約35.0mの丘陵上に位置し、SI02（新）・（古）とSI03は調査区東側の標高約36.5mの丘陵上に位置する。SI02は外周溝・排水溝と掘立柱建物跡が付属する拡張された建物跡であるが、他は単独の竪穴住居跡である。

#### 第1号竪穴住居跡（SI01、図6）

【概要】標高約34.9～35.2mの丘陵上に位置する。調査区際位置するため、北側は検出されなかった。緩やかな南斜面に位置しているため、住居東側の壁・東隅は削平されていた。



【位置・確認】 1-95・96グリッドに位置し、第V層上面で確認した。

【平面形・規模】 南西壁は4.3mで、南東壁は4.0mと推定される。平面形は方形を呈する。

【堆積土】 暗褐色土を混入する褐色土を主体とする。第3層には十和田a火山灰と考えられる火山灰が微量に混入していた。自然堆積と考えられる。なお火山灰分析の結果、十和田八戸火山灰と同定された(第4章第1節参照)。

【壁・床面】 壁高は0～10cmで、壁は開きながら立ち上がる。床は第V層をそのまま床面とする部分と明黄褐色土やロームブロックが混入する褐色土で構築される部分がある。床面はほぼ平坦である。

【カマド】 南東壁北寄りに位置し、火床面のみ検出された。火床面は長軸63cm、短軸45cmの楕円形を呈し、赤褐色に赤変していた。

【柱穴・周溝】 検出されなかった。

【土坑】 2基検出された。SI01内SK01は西壁中央部に位置する。長軸97cm、短軸57cmの楕円形を呈し、深さは19cmである。SI01内SK02は掘り方で検出され、南壁中央部に位置する。長軸126cm、短軸81cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは78cmである。

【出土遺物】 出土した土器の総重量は0.38kgで、内訳は土師器0.16kg、須恵器0.21kg、縄文土器0.01kg、小破片0.003kgである。そのうち床面から出土した土師器甕(1)と、覆土から出土したミニチュア浅鉢(2)を図示した。

【小結】 床面で検出された炭化材の樹種同定を行った結果、3点ともアサダと判明した。クリやアサナロが主体的である他の住居の様相とは異なっており、建築材ではない可能性も考えられる。このうち1点の年代測定を行い、776AD-894ADという結果が得られた。(第4章第2節参照)。(田中)

## 第2号建物跡 (SI02(新)・古)、SD02・03、SK11、SB01、図7～9)

【概要】 標高約36.4～36.6mの丘陵上に位置する。調査区際に位置し、住居南半のみ検出された。床構築土を取り除いたところ、もう1枚床面が検出され、拡張された住居であることがわかった。本住居跡の東西にはSD02が検出され、本住居跡の東-北-西側を囲む外周溝と考えられる。また、住居の南東隅からはSD03が東に延びており、排水溝と考えられる。さらに、住居南側には掘立柱建物跡が附属する。

### 【竪穴住居跡-SI02(新)・古】

【位置・確認】 1-45～48グリッドに位置し、第V層上面で確認した。

【平面形・規模】 南東壁4.3mで、平面形は方形を呈すると考えられる。拡張前の住居は南東壁3.4mで、南西に0.5m、南東に0.2m、北東に0.6m拡張している。

【堆積土】 ローム粒をわずかに混入する黒色土と黒褐色土を主体とする。自然堆積と考えられる。

【壁・床面】 壁高は3～19cmで、壁は開きながら立ち上がる。拡張前の住居をローム粒が混入する黒色土と黒褐色土で埋め戻し、床面としている。拡張前の住居の床面はローム粒を混入する黒色土で構築されている。検出できた壁高は0～21cmである。どちらの床面にも緩やかな起伏はあるものの概ね平坦である。

【カマド】 南壁西側に位置し、残存状況は良好で、袖・火床面・煙道が残存していた。袖は粘土で構築され、土師器甕を芯材とする。土師器片が火床面より奥からまとまって出土しており、天井部の芯材に用い



られていたものと考えられる。火床面は長軸57cm、短軸48cmの楕円形を呈し、明赤褐色に赤変していた。煙道は半地下式で、住居外に0.9m延びている。煙道底面はほぼ平坦である。カマドの主軸方位はN-146°-Eである。

【柱穴】壁際に5基検出された。径16～45cmで、床面からの深さは18～38cmである。

【周溝】拡張後の住居の東西壁直下を幅12～25cm、深さ3～19cmの周溝が巡る。拡張前の住居では周溝は検出されなかった。

【土坑】2基検出された。SI02内 SK01はカマド東側に位置する。長軸59cm、短軸52cmの楕円形を呈し、深さは34cmである。堆積土にはローム粒や焼土粒が混入し、人為堆積と考えられる。SI02内 SK02は調査区際に位置するため規模・平面形は不明である。拡張前の住居に伴うものである。

【出土遺物】住居 (SI02) から出土した土器の総重量は4.58kgで、内訳は土師器4.18kg、須恵器0.39kg、縄文土器0.005kgである。土師器杯 (3・4)、甕 (5～7・9～11)、小甕 (12～14)、須恵器杯 (15)、大甕 (16) を図示した。5～7、9～11はカマド芯材として使用されたものが含まれている。15は刻書が施された須恵器杯底部片である。カマド周辺及び床面から土師器・須恵器の他に、磨石 (17・18)・砥石 (19)・敲石 (20) も出土している。17は欠損しているが、残存長15cm、重さ2kg弱の大型の磨石である。断面形は方形を呈すると考えられ、2面に使用が認められた。石材は安山岩である。19の砥石はもとは扁平な楕円形と考えられるが、欠損面も使用され、使用面は4面となっている。いずれの面も使い込まれており、使用により平坦になっている。また、調査区際の床面直上では土師器甕 (12) が潰れた状態で出土した。

#### 【外周溝 - SD02・SK11】

【平面形・規模】SD02が本住居跡に伴う外周溝である。住居の東-北-西側を囲うように構築されていると考えられるが、調査区際に位置するため検出されたのは末端部のみである。検出された長さは東側 (SD02①) が3.3m、西側 (SD02②) が0.9mである。それぞれの規模は、東側が幅57～75cm、深さ10～27cm、西側が幅80～90cm、深さ10～20cmである。底面はほぼ平坦で、北から南に向かって傾斜している。西側末端部にはSK11が検出され、外周溝に付属する土坑の可能性がある。SK11は長軸164cm、短軸161cmの楕円形を呈する。深さは55cmである。堆積土は黒色土と黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

【出土遺物】外周溝 (SD02) から出土した土師器の重量は0.008kgで、図示し得る遺物はなかった。これに付属するSK11から出土した土器の総重量は0.25kg、内訳は土師器0.19kg、須恵器0.05kg、縄文土器0.01kgで、底面直上から土師器甕 (8) が出土している。

#### 【排水溝 - SD03】

【平面形・規模】SD03が本住居跡に伴う排水溝である。住居南東隅から東に向かって直線的に延びる溝跡で、末端は調査区外に延びる。検出できた長さは8.4mで、幅25～40cm、深さは5～17cmである。底面はほぼ平坦で、西から東に向かって傾斜している。

【出土遺物】排水溝 (SD03) から出土した土師器の重量は0.32kgで、土師器小甕 (21・22) が覆土から出土している。

#### 【掘立柱建物跡 - SB01】

【平面形・規模】住居のカマド方向、南側に位置する。SP19・21～26・28で構成される掘立柱建物跡で、

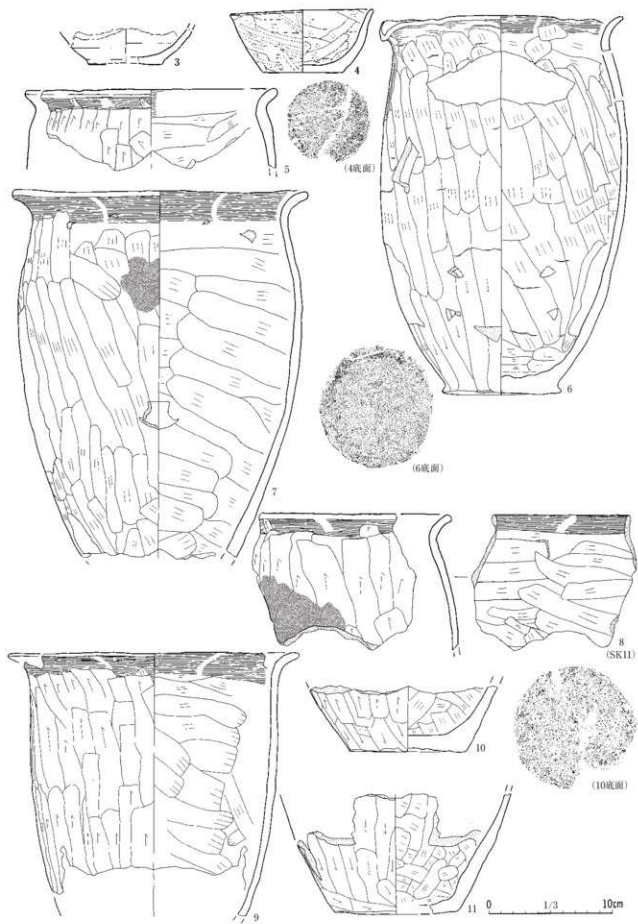


图8 第2号建物跡出土遺物(1)

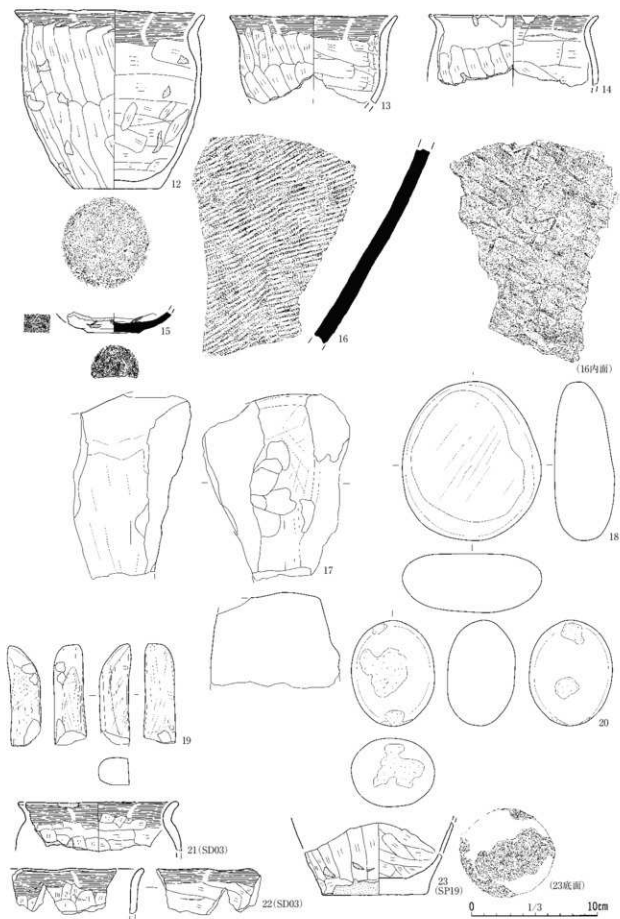


図9 第2号建物跡出土遺物(2)



桁行2間、梁行2間である。桁行総長は4.3m、梁行総長は3.7mである。柱穴の掘り方は径35～60cmの円形または楕円形で、深さは18～45cmである。SP21・22・23では柱痕が確認された。

【出土遺物】SP19第1層からは土師器甕(23)が出土している。

【小結】外周溝と排水溝・掘立柱建物跡が付属する住居跡である。床面が2枚検出され、拡張された住居跡であることがわかった。(田中)

### 第3号竪穴住居跡(SI03、図10)

【概要】標高約36.9mの丘陵上に位置する。調査区際に位置し、北西壁のみ検出された。

【位置・確認】1-52グリッドに位置し、第V層上面で確認した。

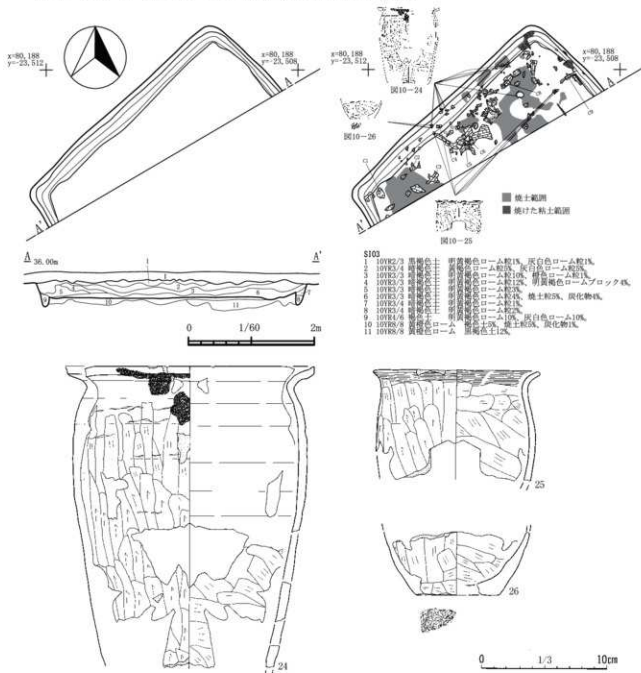


図10 第3号竪穴住居跡と出土遺物

[平面形・規模] 北西壁4.0mで、平面形は方形を呈すると考えられる。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、第3層以下にはローム粒を中量含む。第1・2層は自然堆積、これら以下は人為堆積と考えられる。床面ほぼ全面に焼土と炭化材が検出された。

[壁・床面] 壁高は13～21cmで、壁は開きながら立ち上がる。床は黒褐色土などが混入するロームで構築され、床面はほぼ平坦である。

[カマド・柱穴] 検出されなかった。

[周溝] 幅12～26cm、深さ2～16cmの周溝が巡る。

[出土遺物] 出土した土師器の重量は0.74kgで、床面及び覆土で検出された焼土や炭化材に混じって出土した。覆土から出土した土師器甕(24)、小甕(25・26)を図示した。

**【結】** 焼失住居である。炭化材の樹種同定を行った結果、アスナロが2点、クリが7点であった。このうち1点は年代測定を行い、886AD-984ADという結果が得られた(第4章第2節参照)。(田中)

## (2) 土坑

農道1号で検出された土坑は11基である。SK11はSI02に付属すると考えられるため第2号建物跡の項で記載している。これ以外の10基のうち、調査区西側で検出されたSK01～07は堆積土や堆積状況、出土遺物などから縄文時代の土坑と考えられ、調査区東側で検出されたSK08～10は平安時代のもと考えられる。

### 第1号土坑 (SK01、図11)

[位置・確認] 1-99グリッドに位置し、標高は約35.4mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸174cm、短軸151cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは70cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、ローム粒や炭化物が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] フラスコ状を呈し、底面はほぼ平坦である。底面南側にはピットが検出された。ピットは長軸41cm、短軸36cmの楕円形を呈し、深さは40cmである。ピット堆積土上位から縄文土器胴部下半が倒れた状態で出土した。

[出土遺物] 出土した縄文土器の重量は0.64kgである。縄文時代後期後半の粗製深鉢(27)がピット覆土から出土した。器表面に炭化物が濃密に付着している。土坑堆積土から石槍の未製品と考えられる剥片石器(28)が1点出土した。上部を欠損するため平面形はほぼ三角形である。背面は礫面が残存し、右下縁辺に調整が加えられるのみであるが、腹面全体は大きな剥離で調整されている。

### 第2号土坑 (SK02、図11)

[位置・確認] 1-98グリッドに位置し、標高は約35.3mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸69cm、短軸61cmのやや歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは30cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、暗褐色土やローム粒が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は中央がやや凹んでいる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

### 第3号土坑 (SK03、図11)

[位置・確認] 1-98・99グリッドに位置し、標高は約35.4mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸100cm、短軸87cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは60cmである。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土が混在し、壁の崩落土が見られる。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面中央が凹む。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第4号土坑 (SK04、図11)

[位置・確認] 1-111グリッドに位置し、標高は約34.3mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長辺121cm、短辺117cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは30cmである。

[堆積土] 暗褐色土と褐色土が混在する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。

[出土遺物] 土器は出土しなかったが、覆土から石核(29)が出土した。長さ35mm、幅28mmと小型で、厚さは19mmと厚みがある。両面とも剥離が加えられるが刃部は作り出されておらず、剥片を剥ぎ取り終わった残核と考えられる。

#### 第5号土坑 (SK05、図11)

[位置・確認] 1-106・107グリッドに位置し、標高は約34.9mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸153cm、短軸140cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは19cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は部分的に起伏が見られるが、中央が緩やかに凹む形態である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第6号土坑 (SK06、図11)

[位置・確認] 1-113・114グリッドに位置し、標高は約33.7mである。第Ⅳ～Ⅴ層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際位置するため、土坑南東半のみ検出した。検出された部分での長軸は109cmで、直径約110cmの円形を呈すると推測される。検出面からの深さは35cmである。

[堆積土] 黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土が混在し、ローム粒やロームブロックが中量混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 西壁は袋状を呈するが、それ以外の壁は開きながら立ち上がる。底面は東側に向かってやや傾斜するが、ほぼ平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の総重量は0.02kgで、内訳は土師器0.009kg、縄文土器0.01kgである。また、覆土から剥片(30)も出土した。長さ30mm、幅18mm、厚さ8mmの小型の剥片で、背面は被熱による剥落が見られる。

#### 第7号土坑 (SK07、図11)

[位置・確認] 1-114グリッドに位置し、標高は約33.6mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸71cm、短軸66cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは47cmである。

[堆積土] ローム粒やロームブロックが混入する暗褐色土を主体とし、底面直上には黄褐色土が堆積する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 南東壁を除き、壁はオーバーハンクス、袋状となる。底面にはわずかな起伏が見られるものの、ほぼ平坦である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。



#### 第8号土坑 (SK08、図11)

〔位置・確認〕 1-71グリッドに位置し、標高は約35.7mである。第V層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 長軸162cm、短軸133cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは45cmである。

〔堆積土〕 黒褐色土と暗褐色土を主体とする。第2層には白頭山苦小牧火山灰と考えられる火山灰が混入する。第6層は暗褐色土や粘土が混入するローム層で埋戻し土と考えられるが、第1～5層は自然堆積と考えられる。なお火山灰分析の結果、第1・2層は白頭山苦小牧火山灰、第3層は白頭山苦小牧火山灰と再堆積した十和田八戸火山灰の混合と同定された(第4章第1節参照)。

〔壁・底面〕 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏が激しい。

〔出土遺物〕 覆土から出土した土師器の重量は0.04kgである。

#### 第9号土坑 (SK09、図11)

〔位置・確認〕 1-106グリッドに位置し、標高は約34.9mである。第V層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 長軸102cm、短軸97cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは16cmである。

〔堆積土〕 褐色土が混入する暗褐色土と、褐色土が混在する。自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕 壁は開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

#### 第10号土坑 (SK10、図11)

〔位置・確認〕 1-105グリッドに位置し、標高は約35.0mである。第V層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 長軸84cm、短軸70cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは18cmである。

〔堆積土〕 褐色土の単層である。

〔壁・底面〕 壁は開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿状である。

〔出土遺物〕 遺物は出土しなかった。

(田中)

### (3) 溝跡

農道1号で検出された溝跡は3条であるが、このうちSD02・03はSI02に伴うため第2号建物跡の項で記載している。

#### 第1号溝跡 (SD01、図12・13)

〔位置・確認〕 1-98～104グリッドに位置し標高は約35.0～35.5mである。第IV層上面で確認した。

〔平面形・規模〕 蛇行しながら北東-南西方向に延びる溝跡である。北東端は調査区外に延び、検出できた長さは32.6mである。検出できた部分での幅は49～107cmであるが、概ね60～80cmである。検出面からの深さは6～41cmであるが、概ね20～30cm前後である。

〔堆積土〕 斜面上位では暗褐色土、斜面下位では褐色土が主体で、白頭山苦小牧火山灰が混入する。自然堆積と考えられる。なお火山灰分析の結果、4カ所から採取したサンプルのうち、サンプル1・2は白頭山苦小牧火山灰と十和田a火山灰、サンプル3は再堆積した十和田八戸火山灰、サンプル4は白頭山苦小牧火山灰と同定された(第4章第1節参照)。

〔壁・底面〕 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏があるが、北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。

〔出土遺物〕 覆土から出土した土師の総重量は1.36kgで、内訳は土師器1.25kg、縄文土器0.11kgである。

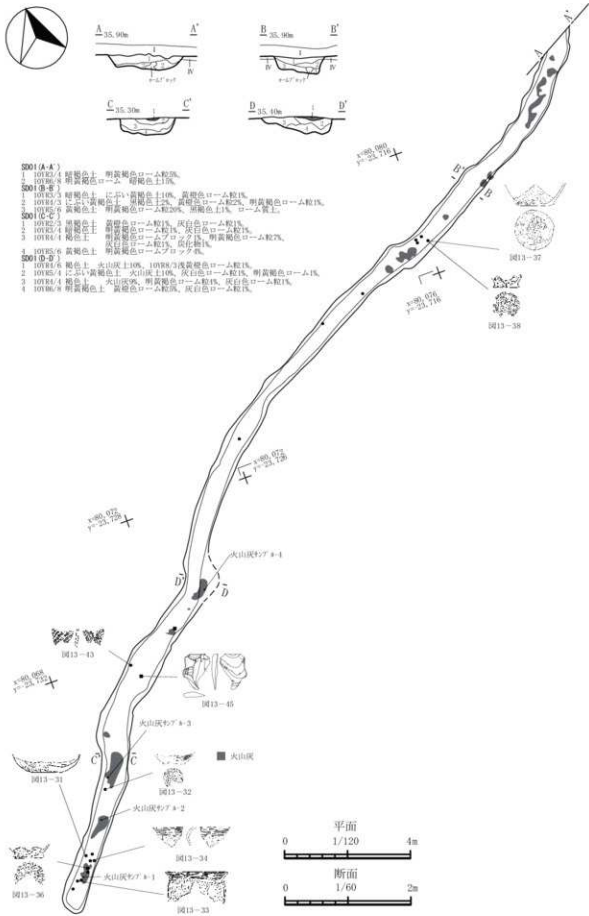


図12 第1号溝跡

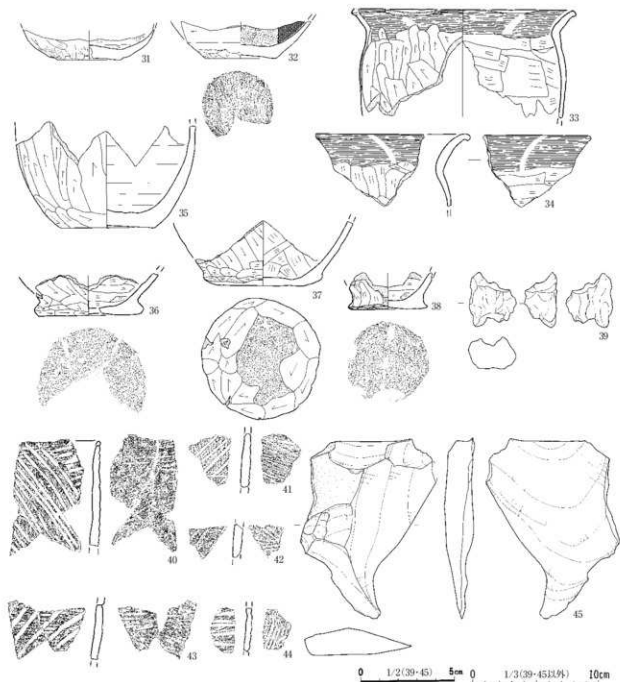


図13 第1号溝跡出土遺物

そのうち覆土から土師器器坏 (31・32)、壳類 (33～38)、焼成粘土塊 (39)、縄文早期深鉢破片 (40～44)、剥片 (45) を図示した。45は長さ97mmの大型の剥片で二次調整は認められない。(田中)

#### (4) 掘立柱建物跡・ピット

農道1号では28基のピットが検出され、このうち8基は第2号建物跡に付属する第1号掘立柱建物跡を構成するものである。この掘立柱建物跡の詳細は、建物跡の項に記載している。ここではこれ以外の主なピットについて取り上げる。個々のピットの詳細については、表3の計測表を参照されたい。

##### 第3号ピット (SP03、図14)

[位置・確認] 1-111グリッドに位置し、標高は約34.4mである。第V層上面で確認した。

表3 農道1号SP計測表

SP 番号	グリッド	位置		標高 (m)	規模(cm)			備考
		X	Y		長軸	短軸	深さ	
1	1-99	80.076	-23.709	35.3	32	24	34	
2	1-98	80.079	-23.706	35.3	41	20	50	
3	1-111	80.045	-23.762	34.4	43	43	49	図14
4	1-111	80.043	-23.763	34.3	41	36	53	
5	1-118	80.031	-23.795	32.5	42	42	1.29	
6	1-116	80.036	-23.784	33.1	78	56	47	
7	1-69	80.152	-23.581	35.6	50	34	44	図14
8	1-69	80.150	-23.582	35.6	51	41	38	図14
9	1-72	80.143	-23.597	35.7	25	20	43	
10	1-72	80.142	-23.597	35.8	22	20	38	
11	1-72	80.144	-23.595	35.8	28	22	52	
12	1-72	80.143	-23.594	35.8	24	19	50	
13	1-72	80.142	-23.594	35.8	27	23	64	
14	1-72	80.142	-23.595	35.8	34	20	47	

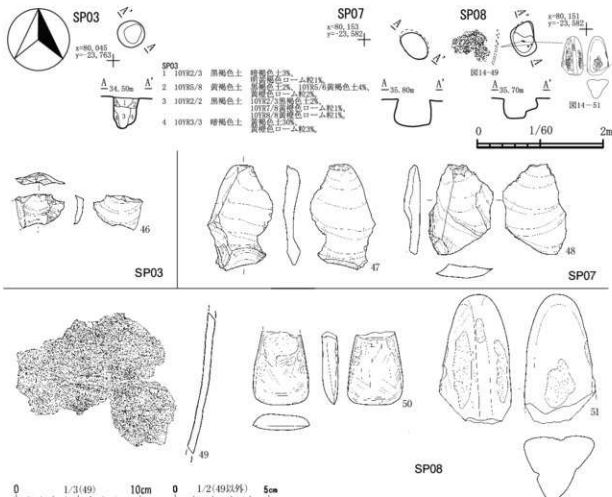


図14 ビット出土遺物

〔平面形・規模〕直径43cmの円形を呈する。検出面からの深さは49cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱状が確認された。

〔堆積土〕黒褐色土を主体とする。

〔出土遺物〕覆土から長さ19mm、幅27mm、厚さ7mmの小型剥片(46)が出土した。

#### 第7号ビット (SP07、図14)

〔位置・確認〕1-69グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第V層上面で確認した。本遺構の2.6m南西にはSP08が検出された。



[平面形・規模] 長軸50cm、短軸34cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは44cmで、壁はオーバーハングし、袋状を呈する。

[出土遺物] 覆土から剥片(47)と二次加工のある剥片(48)が出土した。48は縁辺に連続した微細彫離が認められ、使用痕跡と考えられる。

#### 第8号ピット (SP08、図14)

[位置・確認] 1-69グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第V層上面で確認した。本遺構の2m北西にはSR01が検出された。

[平面形・規模] 長軸51cm、短軸41cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは38cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北壁は袋状となる。

[出土遺物] 覆土から縄文後期と思われる深鉢破片(49)、小型の磨製石斧(50)、敲石(51)が出土している。磨製石斧は刃部破片で、残存長は3.9cmである。基部付近には敲打痕が見られるものの、器面全体が丁寧に磨かれている。石材は緑色岩である。敲石は断面三角形の安山岩を素材とし、平坦な3面及び側面を使用している。(田中)

#### (5) 溝状土坑

農道1号では4基の溝状土坑が検出された。1基は調査区西側の縄文時代の土坑が検出された部分の東に位置するが、他の3基は調査区ほぼ中央に位置する谷地形東側の丘陵上で検出された。いずれも遺物は出土しなかった。

#### 第1号溝状土坑 (SV01、図15)

[位置・確認] 1-92・93グリッドに位置し、標高は約34.0mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸289cm、短軸34cmの溝状である。主軸方位はN-64°-Eである。検出面からの深さは70cmである。

[堆積土] 明褐色土およびローム粒が混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 長軸方向の壁は袋状で、短軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がり、I字状である。底面は起伏がある。

#### 第2号溝状土坑 (SV02、図15)

[位置・確認] 1-73・74グリッドに位置し、標高は約35.8mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸328cm、短軸36cmの溝状である。主軸方位はN-76°-Eである。検出面からの深さは92cmである。

[堆積土] 褐色～黒色土が混在し、ローム粒またはロームブロックが混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 長軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がるが下端が幾分広がっている。短軸方向の壁は開きながら立ち上がり、V字状である。底面は緩やかな起伏がある。

#### 第3号溝状土坑 (SV03、図15)

[位置・確認] 1-69グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、東半のみ検出された。検出された長軸は87cm、短軸は20cmである。主軸方位はN-86°-Eと推測される。検出面からの深さは77cmである。

[堆積土] ロームブロック・ローム粒が混入する黒褐色土を主体とする。堆積土は全体的に締まりが

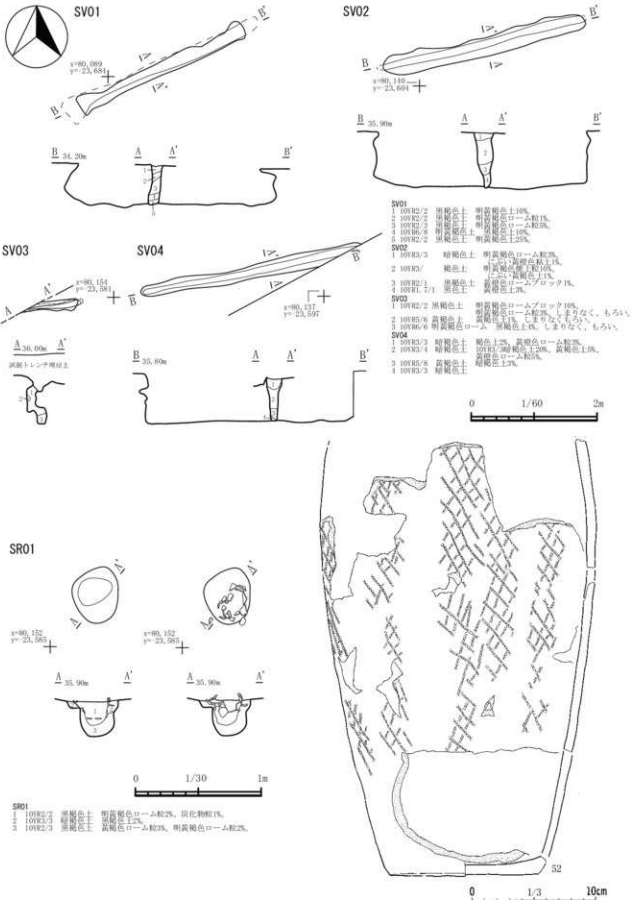


図15 溝状土坑・埋設土器

なく、もろい。

[壁・底面] 長軸方向の壁は袋状を呈し、短軸方向の壁は根による攪乱の影響を受けたためか、クラック状を呈する。

#### 第4号溝状土坑 (SV04、図15)

[位置・確認] 1-73グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、東端は調査区外に延びる。検出された長軸は356cm、短軸は27cmで溝状を呈する。主軸方位はN-78°-Eである。検出面からの深さは83cmである。

[堆積土] ローム粒が混入する暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 長軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がり、短軸方向の壁もほぼ垂直に立ち上がり、I字状である。底面は部分的に起伏があるものの、全体的にはほぼ平坦である。 (田中)

### (6) 埋設土器

#### 第1号埋設土器 (SR01、図15)

[位置・確認] 1-69グリッドに位置し、標高は約35.8mである。第V層上面で確認した。土器は、掘り方南東寄りに正立状態で埋設されていた。

[平面形・規模] 掘り方は長軸41cm、短軸38cmの楕円形を呈する。深さは33cmである。

[堆積土] 土器内堆積土はローム粒と炭化物が混入する黒褐色土で、掘り方は黒褐色土主体である。

[出土遺物] 埋設土器は縄文時代後期の深鉢 (52) で、網目状絡条体を帯状に縦回転施文されている。 (田中)

## 2 遺構外出土遺物 (図16・17)

遺構外出土遺物のうち図示したのは、縄文時代の土器 (53～78)・石器類 (81～96) と平安時代の遺物 (79・80) である。なお、農道1号の遺構外からは、縄文土器1.7kg、土師器0.6kg、須恵器0.1kg、その他0.02kg、合計2.4kgの土器類が出土した。

縄文時代の土器は、早期のムシリI式と思われる53～72、前期末葉の73～76、後期前葉の十腰内I式の77・78がある。早期の土器は、内外面ともに貝殻条痕で器面調整を行っており、外面には斜行する多重沈線を施すものである。53～55・58・59など沈線で幾何学的文様をなすものや、56・57の刺突文が施文されるものもある。70・71は同一個体と思われるミニチュア深鉢形土器の底部付近破片で、平底をなしている。72の沈線は、粘土がめくれあがって微隆起線状の様相を呈している。

縄文時代の石器は、石鎌 (82)、石鎌未製品 (83)、石槍末製品 (83)、石錐 (84)、不定形石器 (85～94)、磨石 (95)、石製品 (96) がある。

平安時代の遺物は、土師器坏底部片 (79) と鉢破片 (80) を掲載した。 (神)

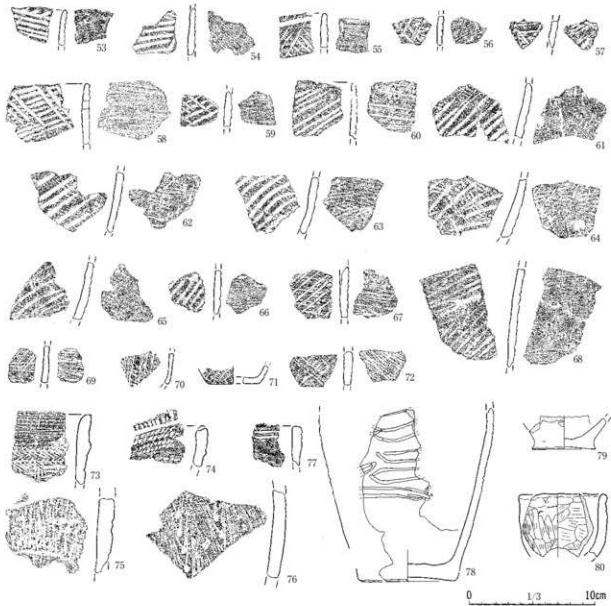


図16 遺構外出土遺物 (1)



图17 遺構外出土遺物 (2)

## 3 遺物観察表

表4 農道1号出土土器類 観察表

国庫 番号	遺物 番号	遺構名	出土位置	種類	器種	部位	計測(cm)		外周調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (備考調整)	
							口径 底径	器高				
6	1	壁穴 S101	床面P5-7-11	土師器	土師器	口縁部	(136)	-	(32)	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ	
6	2	1壁穴 S101	覆土	土師器	土師器	口縁部	-	-	(20)	オヤエ、ユビナデ	ユビナデ、オヤエ	
8	3	2壁物 S102	船庫	土師器	土師器	底部	-	(6.0)	(2.8)	ロタロ	ロタロ	
8	4	2壁物 S102	PSK02H-前P5-69、PSK02 前P5-70	土師器	土師器	口縁部	11.4	6.3	5.1	ヘラナデ、ミガキ ナデ	ナデ	
8	5	2壁物 S102	カマドP3、SDX01覆土	土師器	土師器	口縁部	(198)	-	(6.5)	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ、ヨコナデ	
8	6	2壁物 S102	カマドP30-32-35-36-44-45 カマド芯材P53-57-59-60 前P5-75 カマド敷土P49、覆土	土師器	土師器	底部	(19.1)	9.6	30.3	輪彫痕、ヨコナデ、 ヘラナデ、ヘラナデ	輪彫痕、ヘラナデ、ユ ビナデ	
8	7	2壁物 S102	カマドP43、カマド芯材 P51-52	土師器	土師器	体部上半	23.6	-	(29.8)	ヨコナデ、ヘラナデ、 化粧船土付着	ナデ、ヨコナデ	
8	8	2壁物 SK11	瓦面直上	土師器	土師器	口縁部	-	-	(10.9)	ヨコナデ、ヘラナデ、 化粧船土付着	ヘラナデ、ヨコナデ	
8	9	2壁物 S102	P2-6-11、カマドP17-18-21、 30-34-35-45-46、 カマドP49、62	土師器	土師器	体部上半	(23.2)	-	(21.8)	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ、ヨコナデ	
8	10	2壁物 S102	カマド芯材P54	土師器	土師器	底部	-	9.3	(5.2)	ヘラナデ	ユビナデ	
8	11	2壁物 S102	カマド芯材P25-33-36	土師器	土師器	底部	-	(9.8)	(9.6)	ヘラナデ	ユビナデ	
9	12	2壁物 S102	床面直上P16	土師器	土師器	口縁部	1.49	7.0	1.4	ヨコナデ、ヘラナデ、 ヘラナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	
9	13	2壁物 S102	カマドP27	土師器	土師器	口縁部	(13.1)	-	(7.0)	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ、ヨコナデ	
9	14	2壁物 内SK01	覆土P48	土師器	土師器	口縁部	(13.6)	-	(5.7)	輪彫痕、ヘラナデ (厚底により不明)	輪彫痕、ヘラナデ、ヨ コナデ	
9	15	2壁物 S102	覆土	土師器	土師器	底部	-	4.0	(1.6)	ロタロ、器蓋、 火打き器	ロタロ、火打き器	
9	16	2壁物 S102	P1	土師器	土師器	口縁部	-	-	(17.5)	両子皿	両子皿	
9	21	2壁物 SD03	覆土	土師器	土師器	口縁部	(12.8)	-	(4.0)	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ、ヨコナデ	
9	22	2壁物 SD03	覆土	土師器	土師器	口縁部	-	-	(3.7)	輪彫痕、ヨコナデ、 ヘラナデ	輪彫痕、ナデ、ヨコ ナデ	
9	25	2壁物 SP19	1壁P1	土師器	土師器	底部	-	(8.1)	(5.8)	ヘラナデ	ユビナデ	
10	24	3壁穴 S103	覆土上層P2-8-13-11-15- 16-22-23-31	土師器	土師器	体部上半	(20.0)	-	(24.2)	輪彫痕、ロタロ、ヘラ ナデ、ヘラナデ、道 徳物付着	ロタロ、ナデ	
10	25	3壁穴 S103	覆土上層P1-7-17、覆土	土師器	土師器	体部上半	13.4	-	(8.9)	ヨコナデ、ヘラナデ、 ヘラナデ	ナデ、ヨコナデ	
10	26	3壁穴 S103	覆土上層P8-9、覆土	土師器	土師器	底部	-	(6.8)	(5.1)	ヘラナデ	ナデ	
11	27	土坑 SK01	内P4層P1	縄文土師器	縄文土師器	体部下半	-	8.0	15.2	上縁部刻、上縁部刻	ナデ	
13	32	溝跡 SD01	覆土P10	土師器	土師器	口縁部	-	5.6	(2.5)	ナデ	ナデ	
13	33	溝跡 SD01	覆土P9	土師器	土師器	底部	-	6.0	(3.0)	輪彫痕、ロタロ、 ヘラナデ	ミガキ、器蓋処理 跡	
13	34	溝跡 SD01	覆土P16	土師器	土師器	口縁部	(17.6)	-	(8.6)	ヨコナデ、ヘラナデ	輪彫痕、ヘラナデ、ヨ コナデ	
13	34	溝跡 SD01	覆土P13	土師器	土師器	口縁部	-	-	(5.8)	ヨコナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	
13	35	溝跡 SD01	覆土	土師器	土師器	底部	-	7.6	(8.5)	ヘラナデ	ロタロ	
13	36	溝跡 SD01	覆土P14、覆土、1-104覆土、 遺構外1-103 I層	土師器	土師器	底部	-	8.2	(3.3)	ヘラナデ	ナデ	
13	37	溝跡 SD01	覆土P8、1-101覆土	土師器	土師器	底部	-	9.4	(5.2)	ヘラナデ、ヘラナデ	ヘラナデ	
13	38	溝跡 SD01	覆土P8	土師器	土師器	口縁部	-	6.2	(2.9)	ヘラナデ	ヘラナデ	
13	40	溝跡 SD01	1-104覆土、 遺構外1-104 I層	縄文土師器	縄文土師器	口縁部	-	-	(8.5)	赤根、沈函	オヤエ、赤根	
13	41	溝跡 SD01	1-103覆土	縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(4.2)	赤根、沈函	赤根	
13	42	溝跡 SD01	覆土	縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(2.7)	赤根、沈函	赤根	
13	43	溝跡 SD01	覆土P1、 遺構外1-103 I層	縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(4.3)	赤根、沈函	赤根	
13	44	溝跡 SD01	1-104覆土	縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(3.5)	赤根、沈函	赤根	
14	49	ビト 土器	SP08 覆土P1-2	縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(11.1)	子母	平滑なナデ	
15	52	解説 土器	SR01 覆土P1-2-3-4	縄文土師器	縄文土師器	体部下半	-	11.8	(3.8)	単輪器全体断面(L)	平滑なナデ	
16	53	遺構外 遺構外1-108 I層		縄文土師器	縄文土師器	口縁部	-	-	(2.8)	沈函	赤根	
16	54	遺構外 遺構外1-107 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(3.3)	沈函	赤根	
16	55	遺構外 遺構外1-107 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(2.8)	赤根、沈函	赤根	
16	56	遺構外 遺構外1-103 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(2.3)	赤根、沈函、斜交	赤根	
16	57	遺構外 遺構外1-104 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(2.3)	赤根、沈函、斜交	赤根	
16	58	遺構外 遺構外1-103 I層		縄文土師器	縄文土師器	口縁部	-	-	(4.3)	沈函	赤根	
16	59	遺構外 遺構外1-104 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(2.3)	沈函	赤根	
16	60	遺構外 遺構外1-117 I層		縄文土師器	縄文土師器	口縁部?	-	-	(4.6)	赤根、沈函	赤根	
16	61	遺構外 遺構外1-104 I層、1-104 II層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(4.4)	赤根、沈函	赤根	
16	62	遺構外 遺構外1-104 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(4.3)	赤根、沈函	赤根	
16	63	遺構外 遺構外1-103 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(4.6)	赤根、沈函	赤根	
16	64	遺構外 遺構外1-103 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部下半	-	-	(4.8)	赤根、沈函	赤根	
16	65	遺構外 遺構外1-104 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部下半	-	-	(4.6)	赤根、沈函	赤根	
16	66	遺構外 遺構外1-103 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(5.3)	赤根、沈函	赤根	
16	67	遺構外 遺構外1-102 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(4.1)	赤根、沈函	赤根	
16	68	遺構外 遺構外1-104 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(7.9)	赤根、沈函	赤根、化粧物付着	
16	69	遺構外 遺構外1-104 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(2.9)	赤根、沈函	赤根	
16	70	遺構外 遺構外1-109 I層		縄文土師器	縄文土師器	口縁部下半	-	-	(2.5)	赤根、沈函	ナデ	
16	71	遺構外 遺構外1-108 I層		縄文土師器	縄文土師器	口縁部	-	-	(4.0)	(1.4)	赤根、沈函	ナデ
16	72	遺構外 遺構外1-102 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(2.7)	赤根、沈函(微縁部刻)	赤根	
16	73	遺構外 遺構外1-8 I層		縄文土師器	縄文土師器	口縁部	-	-	(5.6)	口縁部-単輪器全体断面 L層、前縁部1種 (LR-皿)、 側面-皿目	ミガキ	
16	74	遺構外 遺構外1-57 I層		縄文土師器	縄文土師器	口縁部	-	-	(3.1)	口縁部-輪彫痕付着 口縁部-片側周縁部	ナデ	
16	75	遺構外 遺構外1-108 I層		縄文土師器	縄文土師器	底部	-	-	(6.0)	単輪器全体断面(L)	ナデ	

図版 番号	遺物 番号	遺物種	遺物名	出土位置	種類	器種	部位	計測(cm)			外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (成内調整)
								口徑	底径	器高			
16	76	遺物外	遺物外	1-771層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(7.0)	早稲跡全体第1A組 (区上)	ミヤキ	植物繊維微量 縄文面肌後平 縄文瓦葺直置
16	77	遺物外	遺物外	1-1171層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.1)	沈面	-	-
16	78	遺物外	遺物外	1-911層、 1-117層高	縄文土器	深鉢	体部下平	-	(8.0)	(13.8)	沈面	-	十層内1式
16	79	遺物外	遺物外	1-1141層	1層器	鉢	底蓋	-	3.0	2.7	ロケロロ	ロケロロ	回転赤褐色
16	80	遺物外	遺物外	1層	1層器	鉢	体部下平	(6.8)	-	5.1	輪郭直。オサエ、ナゲ、 ナゲ	ナゲ	-

表5 農道1号出土石器・石製品・土製品 観察表

図版 番号	遺物 番号	遺物種	遺物名	出土位置	種類	器種	石質	計測(mm)			重さ(g)	備考
								長さ	幅	厚さ		
9	17	2層物	S302	オサドS5	石器	磨石	安山岩	150	119	94	1960	欠損。
9	18	2層物	S302	オサドS1	石器	磨石	安山岩	129	112	49	853.9	欠損。
9	19	2層物	S302	オサドS2	石器	磨石	安山岩	81	34	26	49.2	欠損。
9	20	2層物	S302	成器S4	石器	磨石	花崗閃緑岩	85	66	55	455.7	欠損。
11	28	土坑	SK01	甕土	石器	石鏝未製品?	珩質頁岩	51	45	22	34	欠損。
11	29	土坑	SK04	甕土	石器	石鏝?	珩質頁岩	35	28	19	14.9	緑染遺れ。
11	30	土坑	SK06	甕土	石器	酒片	珩質頁岩	30	18	8	2.4	焼熱。
13	39	遺跡	SC01	甕土	土製品	焼成粘土塊	-	29	25	17	7.1	
13	45	遺跡	SD01	甕土S1	石器	酒片	珩質頁岩	97	72	16	71.6	
14	46	ビット	SP03	甕土	石器	酒片	珩質頁岩	19	27	7	1.9	欠損。
14	47	ビット	SP07	甕土	石器	酒片	珩質頁岩	57	36	9	31	
14	48	ビット	SP07	甕土	石器	二次加工のある 酒片	珩質頁岩	48	34	9	9.3	
14	50	ビット	SP08	甕土	石器	磨石片	緑色頁岩	39	30	9	17.1	ミニチュア。刃部残存。欠損。
14	51	ビット	SP08	甕土S2	石器	磨石	安山岩	110	57	51	284.8	欠損。
17	81	遺物外	甕瓦	1-77	石器	石鏝	珩質頁岩	50	18	6	3.7	有赤凸条。欠損。
17	82	遺物外	遺物外	1-1041層	石器	石鏝未製品?	珩質頁岩	30	23	6	1.9	表面焼熱。
17	83	遺物外	遺物外	1-1011層	石器	石鏝未製品	珩質頁岩	33	29	9	8.8	欠損。
17	84	遺物外	遺物外	1-1041層	石器	石鏝	玉髄	23	20	9	1.9	欠損。
17	85	遺物外	遺物外	1-931層	石器	不定形石器 (磨石?)	頁岩	26	39	7	11.4	断面残存。
17	86	遺物外	甕瓦	1-69	石器	不定形石器 (磨石?)	珩質頁岩	38	41	13	8.6	
17	87	遺物外	遺物外	1-1071層	石器	不定形石器 (磨石?)	珩質頁岩	29	38	10	8.9	
17	88	遺物外	遺物外	1-1071層	石器	不定形石器 (磨石?)	珩質頁岩	31	37	11	12.6	欠損。
17	89	遺物外	遺物外	1-1071層	石器	不定形石器 (磨石?)	凝灰岩	75	34	17	36.8	欠損。
17	90	遺物外	遺物外	1-1011層	石器	不定形石器 (磨石?)	珩質頁岩	30	28	15	16.4	
17	91	遺物外	甕瓦	1-118	石器	不定形石器 (磨石?)	珩質頁岩	57	36	19	31.2	未製品の可能性あり。
17	92	遺物外	甕瓦(柳)	1-103甕土	石器	不定形石器 (磨石?)	珩質頁岩	93	46	17	98.1	石鏝未製品の可能性あり。
17	93	遺物外	遺物外	1-1061層	石器	不定形石器 (磨石?)	珩質頁岩	47	29	15	14.9	断面残存。
17	94	遺物外	遺物外	1-1041層	石器	不定形石器 (使用前酒片?)	珩質頁岩	27	29	13	8.7	
17	95	遺物外	遺物外	1-1101層	石器	磨石	安山岩	104	56	51	420.1	側面磨り。
17	96	遺物外	遺物外	1-73	石製品	石製品	チャート	26	18	12	6.2	全面磨き。

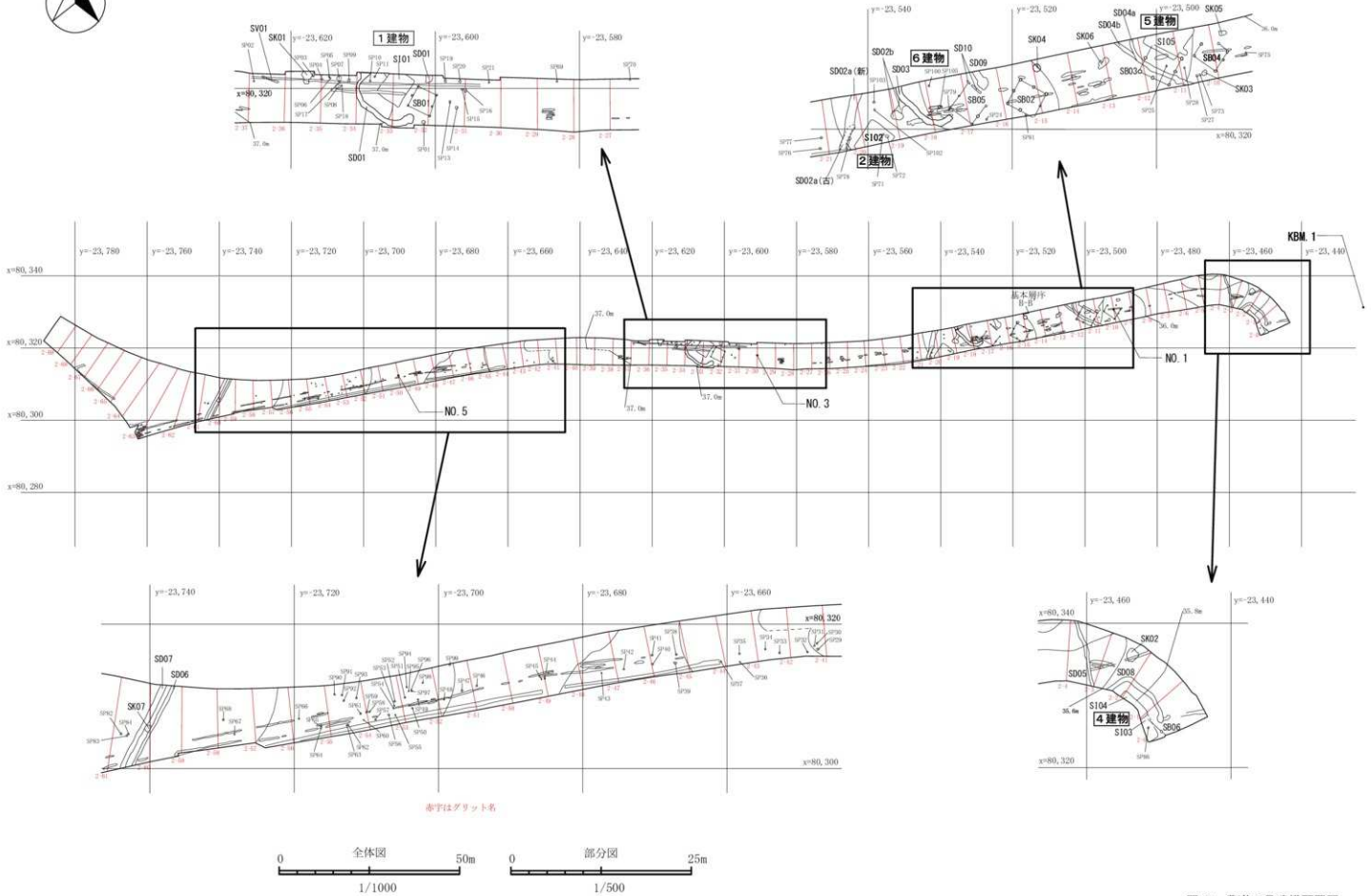


図18 農道2号遺構配置図



## 第2節 農道2号

### 1 検出遺構

農道2号調査区は農道8号調査区の南にある沢を挟んで反対側に位置する。この沢は調査区東端部の北側から始まり、農道8号調査区の西端を通り、吉野田新溜池へと流れ込む。

農道2号で検出された遺構は堅穴住居跡6軒、土坑7基、溝跡13条、掘立柱建物跡6棟、溝状土坑1基、ピット92基である。このうち堅穴住居跡や掘立柱建物跡、溝跡（外周溝）などでセットと考えられるものは5軒で、そう考えると建物跡5棟、堅穴住居跡1軒、土坑7基、溝跡3条、掘立柱建物跡2棟、溝状土坑1基、ピット92基という遺構の構成となる。これらのうち、建物跡と掘立柱建物跡は軸が概ね南東方向に一致している。調査区内では、2-9～20グリッド付近に建物跡がまとまる箇所がある。また、2-60グリッド付近には併走する溝跡が見られる。その他、近代以降とみられる轍や佃溝の跡や時期不明の小ピットが検出されたが、それらについては遺構配置図に位置を図示するにとどめる。以下では古代以前の遺構についてセット関係と見られる遺構毎に記述を行う。（茅野）

#### （1）建物跡・堅穴住居跡

##### 第1号建物跡（SI01、SD01、SB01、図19・20）

【概要】調査区中央部、2-32グリッド付近に位置する。近年の耕作により第IV層まで削平されており、第V層で確認した。SI01・SD01・SB01で構成される。

##### 【堅穴住居跡 - SI01】

【平面形・規模】平面形は長辺4.35m、短辺3.5mの長方形を呈し、住居の軸方向はN-122°-Eである。

【堆積土】第II層を主体とした黒褐色土が自然堆積している。

【床面及び施設】削平のため床面を平面的に確認できず、調査区にかかる断面でその一部分が確認できた。壁際に小規模な柱穴を7基確認した。カマドは現存しない。

【出土遺物】土師器0.03kgが出土したが、図示できる遺物はなかった。

##### 【外周溝 - SD01】

【平面形・規模】SI01の周りを囲むようにC字状に配置され、南東側で開口する。幅は約70cm、確認面からの深さは25～40cmであるが、開口部側端部では約50cmと土坑状にやや深くなる部分がある。

【堆積土】底面直上には第V層のブロックと黒色土が混在しやや硬くなった土層が約10cmの厚さで堆積している。この土層の上面が使用時の底面と考えられる。最終的に第II層が自然堆積している。

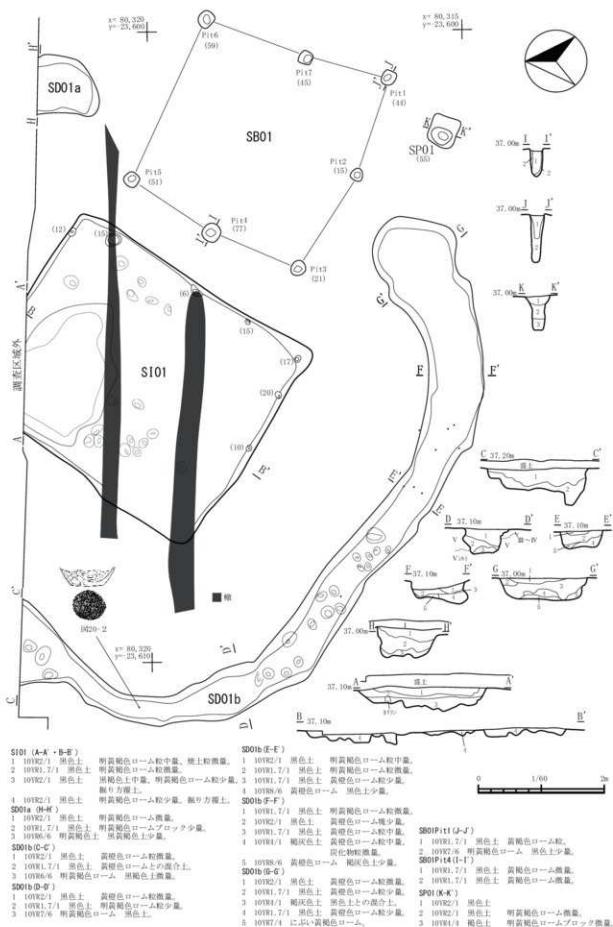
【底面及び施設】底面には掘削時の跡痕が2列みられる部分がある。

【出土遺物】出土土器の総重量は0.49kgで、内訳は土師器0.33kg、縄文土器0.16kgである。そのうち、1・2に土師器長胴甕を図示した。1は輪積み成形後、胴部内外面はヘラナデが、口縁部内外面は横位のナデが施される。口縁部は緩く屈曲している。

##### 【掘立柱建物跡 - SB01】

【平面形・規模】7基の柱穴で構成され、梁間2間×桁間2間のほぼ方形を呈する。柱間は梁方向が約1.5m、桁方向は北側に間柱が無く、南側は約1.6mとなる。

【堆積土】柱痕が検出されたものがあり、柱の太さが10～15cmと推定される。



SI01 (A-A'・B-B')

- 1 10YK2/1 黒色土 明黄褐色ローム粒中量、焼土粒微量。
- 2 10YR1.7/1 赤色土 明黄褐色ローム粒微量。
- 3 10YK2/1 黒色土 黒褐色土中量、明黄褐色ローム粒少量。
- 4 10YK2/1 黒色土 明黄褐色ローム粒少量、瓶り方面上。

SD01a (H-H')

- 1 10YK2/1 黒色土 明黄褐色ローム微量。
- 2 10YR1.7/1 赤色土 明黄褐色ロームブロック少量。
- 3 10YR5.6 明黄褐色土 黒黄褐色土少量。

SD01b (C-C')

- 1 10YK2/1 黒色土 黄褐色ローム粒微量。
- 2 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム土の混合土。
- 3 10YR5.6 明黄褐色ローム 黒褐色土微量。

SD01b (D-D')

- 1 10YK2/1 黒色土 黄褐色ローム粒微量。
- 2 10YR1.7/1 赤色土 明黄褐色ローム粒少量。
- 3 10YR7/6 明黄褐色ローム 黒色土。

SD01b (E-E')

- 1 10YK2/1 黒色土 明黄褐色ローム粒中量。
- 2 10YR1.7/1 赤色土 明黄褐色ローム粒微量。
- 3 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム粒少量。
- 4 10YR5.6 黄褐色ローム 赤色土少量。

SD01b (F-F')

- 1 10YR1.7/1 赤色土 明黄褐色ローム粒微量。
- 2 10YK2/1 黒色土 黄褐色ローム粒少量。
- 3 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム粒中量。
- 4 10YR4/1 褐色土 黄褐色ローム粒中量、炭化物粒微量。

SD01b (G-G')

- 1 10YK2/1 黒色土 黄褐色ローム粒微量。
- 2 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム粒少量。
- 3 10YR4/1 褐色土 黒色土との混合土。

SD01b (H-H')

- 1 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム少量。
- 2 10YK2/1 黒色土 明黄褐色ローム微量。
- 3 10YR4/1 褐色土 明黄褐色ロームブロック微量。

SP01 (I-I')

- 1 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム粒。
- 2 10YK2/6 明黄褐色ローム 赤色土少量。

SP01 (J-J')

- 1 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム微量。
- 2 10YR1.7/1 赤色土 黄褐色ローム微量。

SP01 (K-K')

- 1 10YK2/1 黒色土 明黄褐色ローム微量。
- 2 10YK2/1 黒色土 明黄褐色ローム微量。
- 3 10YR4/1 褐色土 明黄褐色ロームブロック微量。

図19 第1号建物跡

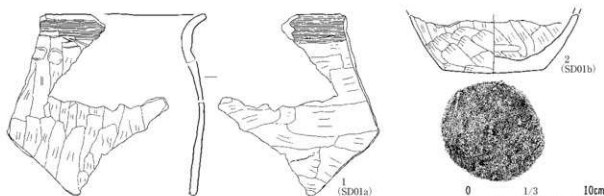


図20 第1号建物跡出土遺物

【小結】上面の削平により火山灰の有無等時期決定の要素に欠けるが、外周溝出土遺物の特徴などから、平安時代（10世紀前～中葉）の建物跡であると考えられる。（茅野）

#### 第2号建物跡（SI02（新）・（古）、SD02a・02b、図21・22）

【概要】調査区中央部、2-19グリッド付近に位置する。上面が耕作により削平されており、第V層で確認した。付近にSD02a・02bが存在し、SD02aとSD02bの土坑部分がSI02と共に建物跡を構成すると考えられる。

##### 【堅穴住居跡 - SI02（新）・（古）】

【平面形・規模】平面形は長辺4.6m、短辺4.0mの長方形を呈する。南側約半分が調査区外に伸びる。

【堆積土】調査区壁面では2枚の床面が想定された。

【床面及び施設】削平のため上位の床面は平面的に確認できなかった。下位の床面は掘り方に第V層と黒色土を混合した土層を充填して構築されている。壁際には腰板の痕跡が約5cmの幅で確認され、その下位からは掘り方検出時に壁溝を確認した。

【出土遺物】出土土器の総重量は0.05kgで、内訳は土師器0.03kg、縄文土器0.02kgである。そのうち土師器広口壺と思われる破片（3）を図示した。3は外面にナデ・ケズリ、内面にミガキ調整を施すもので、第6号建物跡SD09出土遺物（図32-50・51）、SK04出土遺物（図33-52）と同一個体の可能性がある。また床面から採取した土壌を水洗選別した結果、タデ科種子が検出された（第4章第3節参照）。

##### 【外周溝 - SD02a（新）・02a（古）】

【平面形・規模】北北東から南南西へ走る。幅は80～120cmで、農道中央付近で弱く屈曲することから作り替えられたものと考えられ、新・古の2時期が想定される。

【堆積土】底面直上には第V層の塊と黒色土が混在した土層が見られる。この土層直上が機能時の底面と考えられる。上位の堆積土中には白頭山苦小牧火山灰が検出された。

【底面及び施設】底面には掘削時の動痕が見えられた。

【出土遺物】土器などの遺物は出土しなかったが、堆積土から採取した土壌を水洗選別したところイネ・サンショウ・ブドウ科・ミズキ属・モクレン属の種子が検出された（第4章第3節参照）。

##### 【外周溝 - SD02b】

【平面形・規模】短い溝状の部分と土坑状の部分からなるが、溝状の部分は風倒木痕の可能性が有る。土坑状部分は開口部1.85×1.25m、底面1.5×1.3m、深さ約50cmの不整な円形を呈する。

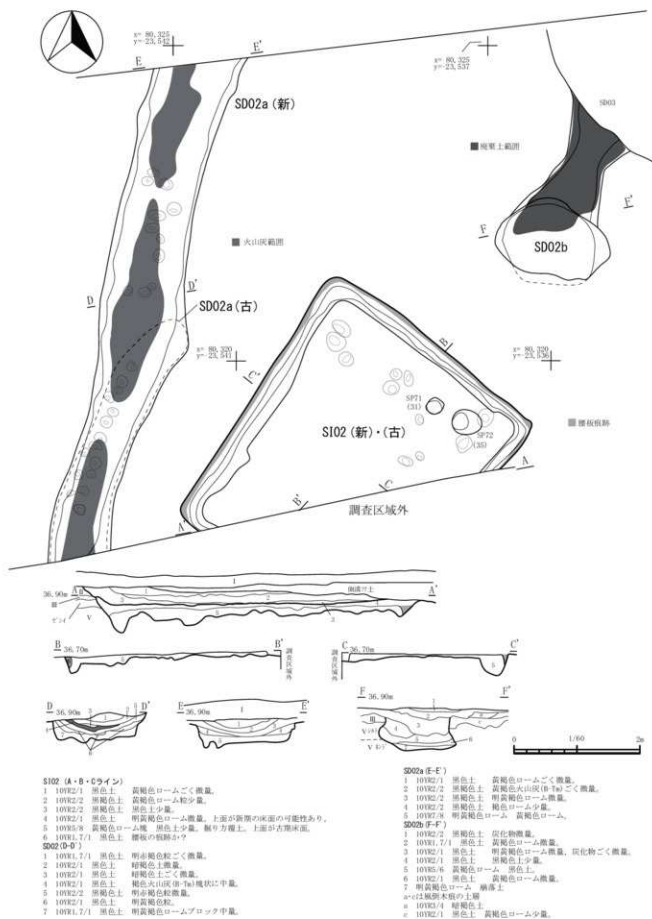


図21 第2号建物跡



図22 第2号建物跡出土遺物

【堆積土】底面近くに第V層流入土又は廃棄土がやや厚く堆積し、上位に第II層が自然堆積している。  
 【出土遺物】出土土器の総重量は0.18kgで、内訳は土師器0.10kg、縄文土器0.08kgである。そのうち土師器甕口縁部（4）、縄文時代後期の深鉢形土器片（5・6）を図示した。

【小結】古期と新期の2時期が想定できる。古期はSI02（古）とSD02a南半分・SD02bで構成され、新期はSI02（新）とSD02a全体で構成される可能性がある。新期のSD02aには堆積土中に白頭山苦小牧火山灰が堆積するため、廃絶時期は10世紀中葉以前と考えられる。（茅野）

### 第3号竪穴住居跡（SI03、図23・24）

【概要】調査区東端部、2-0グリッド付近に位置する。SI04確認時に一緒に確認した。SI04と重複関係にあると考えられ、本遺構が古い可能性が高い。

【平面形・規模】暗渠や耕作による削平がひどく、正確な平面形は不明であるが、1辺3m強の方形である可能性がある。

【堆積土】第II層黒褐色土に第V層バミスを多く含む人為的廃棄土が主体。南西側で廃棄された焼土と土師器片がまとまって出土した部分がある。

【床面及び施設】床面はほぼ平坦である。付属施設などは不明である。

【出土遺物】SI03で出土した土器の総重量は0.85kgで、内訳は土師器0.52kg、縄文土器0.33kgである。そのうち南側の調査区壁面付近の堆積土中位から出土した。土師器坏（7～11）を図示した。これらは土器焼成時に生じる破裂剥片の特徴を持つものが多く、器種はロクロ成形による坏が多い。従って、これらの遺物は付近で焼成された土師器坏の失敗品の一部が廃棄されたものと考えられる。その付近で検出した廃棄された焼土を持ち帰り水洗選別したところ、イネ・アワ・ヒエ属・キビ属・タデ科の種子が検出された（第4章第3節参照）。特にイネの数量が多い。

【小結】平安時代の遺構であることは間違いないが、竪穴住居跡であるかどうかは不明である。（茅野）

### 第4号建物跡（SI04、SD08、SB06、図23・24）

【概要】調査区東端部、2-1グリッド付近に位置する。南西側半分以上が調査区外に伸びる。SB06付近は特に攪乱が激しい。第IV～V層で確認した。SI04・SD08・SB06で構成される。

【竪穴住居跡 - SI04】

【平面形・規模】平面形は1辺4.5m程度の方形と推定される。確認面からの深さは約45cmである。

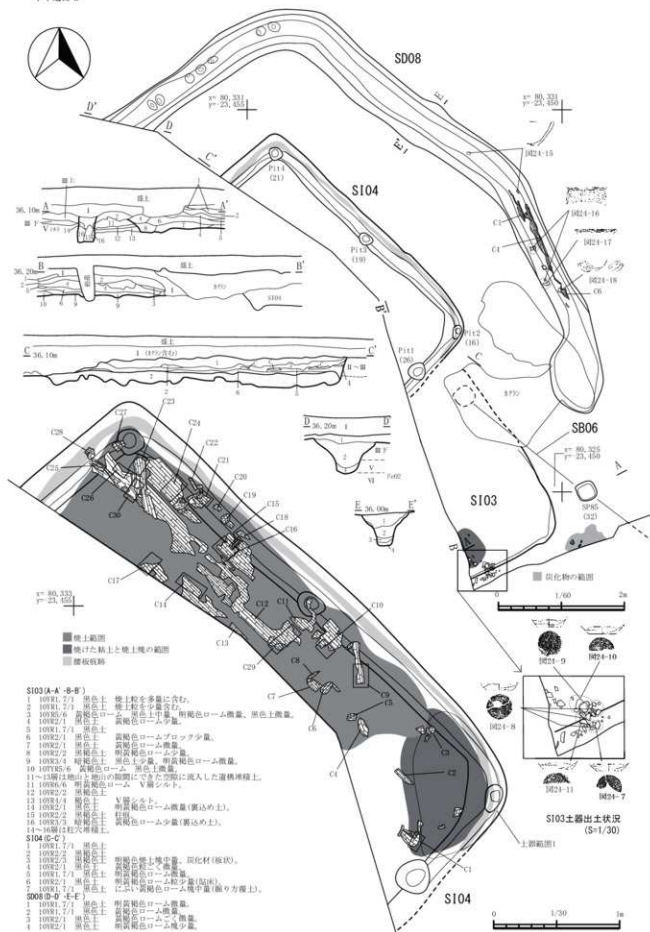


図23 第3号竪穴住居跡・第4号建物跡

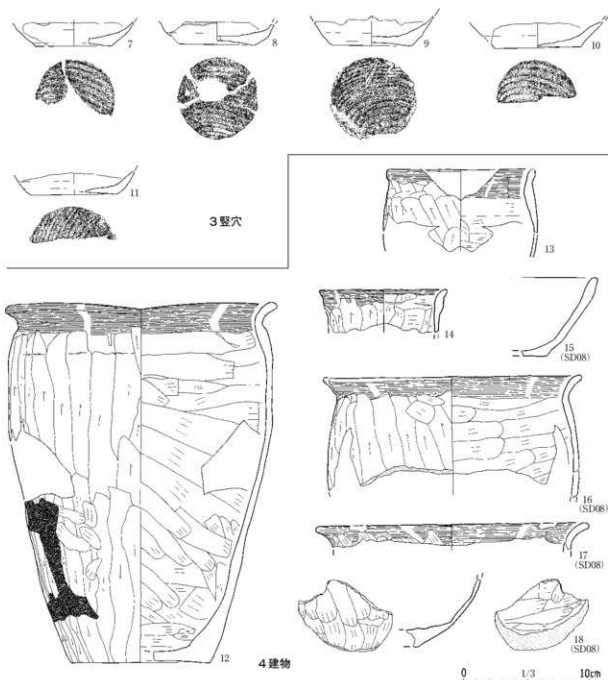


図24 第3号竪穴住居跡・第4号建物跡出土遺物

【堆積土】 堆積土中に焼土と炭化材を多量に検出した。焼失住居とみられる。焼土はほぼ全面に見られたが、北東端には焼けた粘土が多くまとまり、この部分に関してはカマド由来の焼土と考えられる。炭化材は焼土の直下から検出された。焼土の上位には第Ⅱ層黒色土が堆積している。

【床面及び施設】 床面は掘り方に充填した土層で構築されており、平坦である。壁際には腰板の痕跡が5cm弱の幅で見られ、その下位には掘り方精査時に壁溝が巡るのを確認した。柱穴は4基発見され、Pit 1が主柱穴、Pit 2～4が壁柱穴と考えられる。

【出土遺物】 SI04からは大量の炭化材に混じて土師器1.51kg、縄文土器0.01kg、の総重量1.52kgが出土した。南東隅付近で土師器甕(12)、小甕(13・14)などがまとまって出土している。12は土師器長胴甕である。体部上半に輪積み成形の後、体部外面にケズリ、内面にヘラナデ、口縁部内外面には

横位のナデが施される。炭化材は殆どが板状で、壁に沿って検出された。検出状況からは上屋のどの部位のものかは判断できない。材の樹種はクリとアサダが顕著であった。炭化材の直下の土壌を水洗選別した結果、キハダ属・イネ・アワの種子が検出された（第4章第3節参照）。

【外周溝 - SD08】

〔平面形・規模〕 SI04を囲み、南東側に開口している。平面形は所々に弱い屈曲を持っている。幅は約70cmで深さは約40～60cmである。開口部側端部で土坑状に広がる部分が見られる。

〔堆積土〕 第Ⅱ層黒色土の自然堆積を基本とする。

〔底面及び施設〕 底面には掘削時の鋤痕が見られ、その上位には第Ⅴ層と黒色土が混合した土層が見られる。使用時の機能面はこの土層の上面である。

〔出土遺物〕 出土した土師器の重量は0.48kgで、炭化材の下部から出土したものが多く、そのうち土師器坏（15）、甕（16・17）、埴の可能性のある土器片（18）を図示した。なお東側の一部で検出された炭化材は、樹種はクリとアサダでありSI04と同様である（第4章第2節参照）。

【掘立柱建物跡 - SB06】

〔平面形・規模〕 柱穴が1基発見されただけであるため、詳細は不明であるが、検出位置から見て掘立柱建物跡を構成するものと判断した。

【小結】 SI04から検出した炭化材の AMS 法年代測定結果（第4章第2節参照）から、10世紀中葉から後半にかけての遺構と考えられる。（茅野）

第5号建物跡（SI05、SD04a・b、SB04、図25～30）

【概要】 調査区東側部、2-10グリッド付近に位置する。西側約半分が調査区外に伸びる。第Ⅳ～Ⅴ層で確認した。SI05・SD04・SB04で構成される。また、SK03も本遺構に関連する可能性がある。

【竪穴住居跡 - SI05】

〔平面形・規模〕 平面形は1辺約5.1mの方形であり、カマドを基調にした軸方向はN-119°-Eである。確認面からの深さは約50cmである。

〔堆積土〕 第Ⅱ層を母材とし、二次的な攪拌を受けた暗褐色の土層が主体となる。

〔床面及び施設〕 床面は掘り方に充填した土層により構築され平坦である。南側壁際では腰板の痕跡と考えられる幅約10～20cmの土層が確認でき、その直下には掘り方精査時に壁溝を発見した。柱穴は9基検出した。Pit 1～3が主柱穴と考えられ、そのほかは壁柱穴と考えられる。

〔カマド〕 南東壁南寄りで見出した。住居跡壁から舌状に約90cm張り出す掘り方の上に、白色系粘土を用いて燃焼部から煙道部を構築している。壁溝はカマド構築時に埋められている。火床面は燃焼部の端部付近に存在し、火床面の奥側端部には土師器甕底部付近を転用した支脚が2箇所に据えられている（20・21）。

〔出土遺物〕 出土土器の総重量は16.51kgで、内訳は土師器16.5kg、須恵器0.01kgである。土師器長胴甕を主体とし、土師器坏は少ない。土師器坏（19）、甕（20～29・31～36）、小甕（30・37～40）、壺・広口壺（41～44）、土玉（45）を図示した。遺物は住居焼失直後に廃棄されたものと焼失時に床面に置かれていたものがあり、27・38・40が床面出土である。19はロクロ整形で底部外面に糸切り痕が無調整で残る。長胴甕は体部中位がふくらみを持ち、口縁部が屈曲する形状が主体である。輪積み成



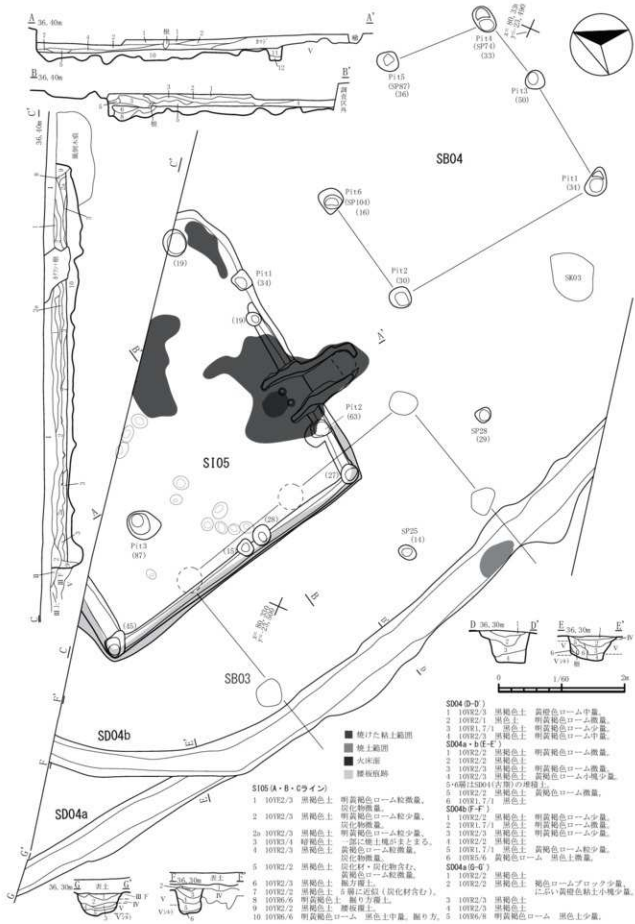


図25 第5号建物跡(1)

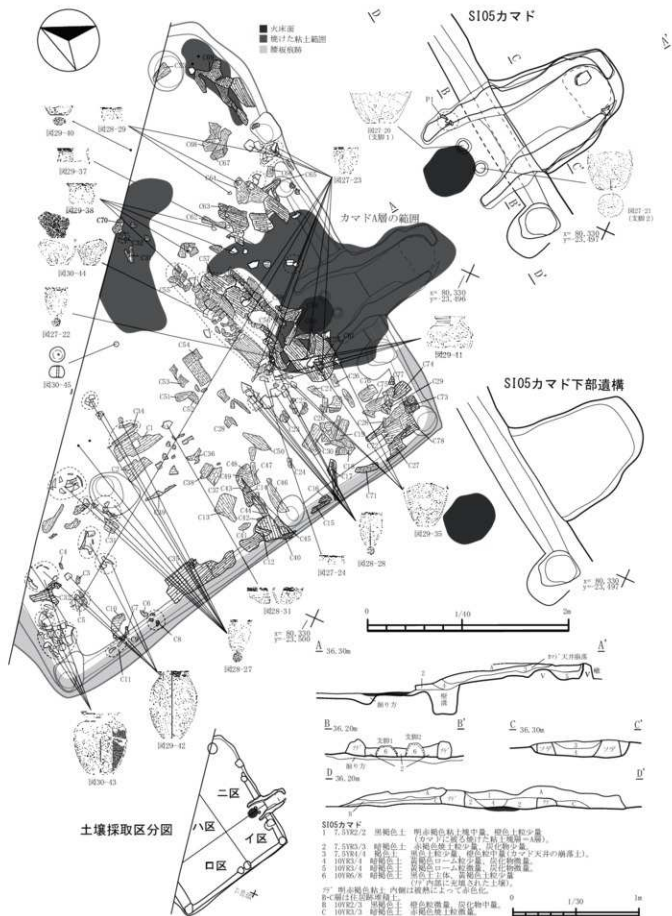


図26 第5号建物跡(2)

S105カマド

- 1 土5V2/2 黒褐色土 明赤褐色粘土層中層、棕色土粒少量、(カマド)に粘土敷けた粘土層(A層)。
- 2 土5V2/3 暗褐色土 赤褐色土、粘土粒少量、(カマド)天井の積層上。
- 3 土5V2/4 暗褐色土 黒色土粒少量、棕色粘土層(カマド天井の積層上)。
- 4 10V2/1 暗褐色土 黒褐色土、粘土粒少量、(カマド)天井の積層上。
- 5 10V2/2 暗褐色土 黒褐色土、粘土粒少量、(カマド)天井の積層上。
- 6 10V2/3 暗褐色土 黒褐色土、粘土粒少量、(カマド)天井の積層上。
- 7 10V2/4 暗褐色土 黒褐色土、粘土粒少量、(カマド)天井の積層上。
- 8 10V2/5 暗褐色土 明赤褐色粘土層中層、棕色土粒少量、(カマド)に粘土敷けた粘土層(A層)。
- 9 10V2/6 暗褐色土 明赤褐色粘土層中層、棕色土粒少量、(カマド)に粘土敷けた粘土層(A層)。
- 10 10V2/7 暗褐色土 明赤褐色粘土層中層、棕色土粒少量、(カマド)に粘土敷けた粘土層(A層)。

土壌採取区分図

- 二区  
ハ区  
イ区  
口区

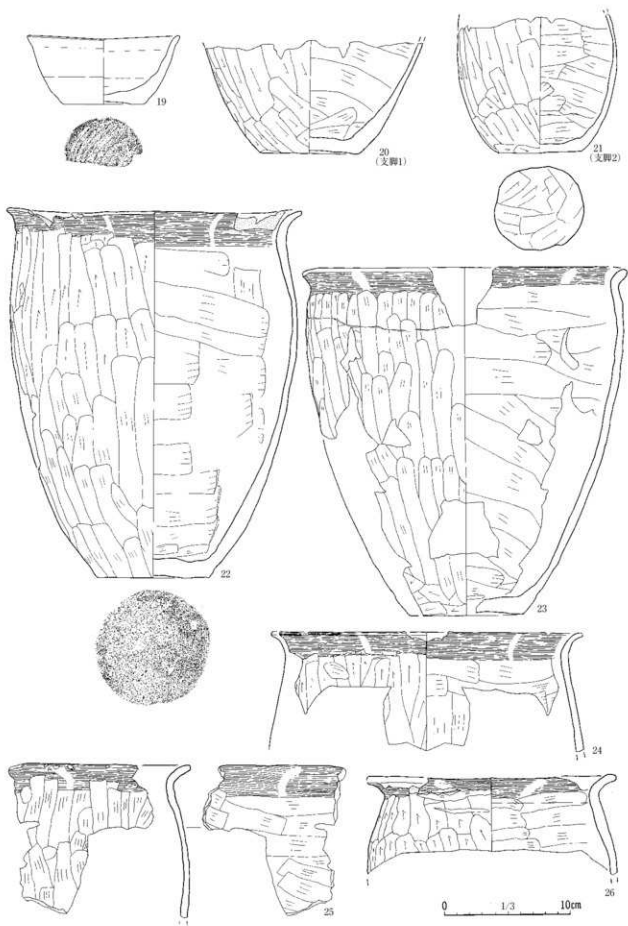


图27 第5号建物跡出土遺物 (1)

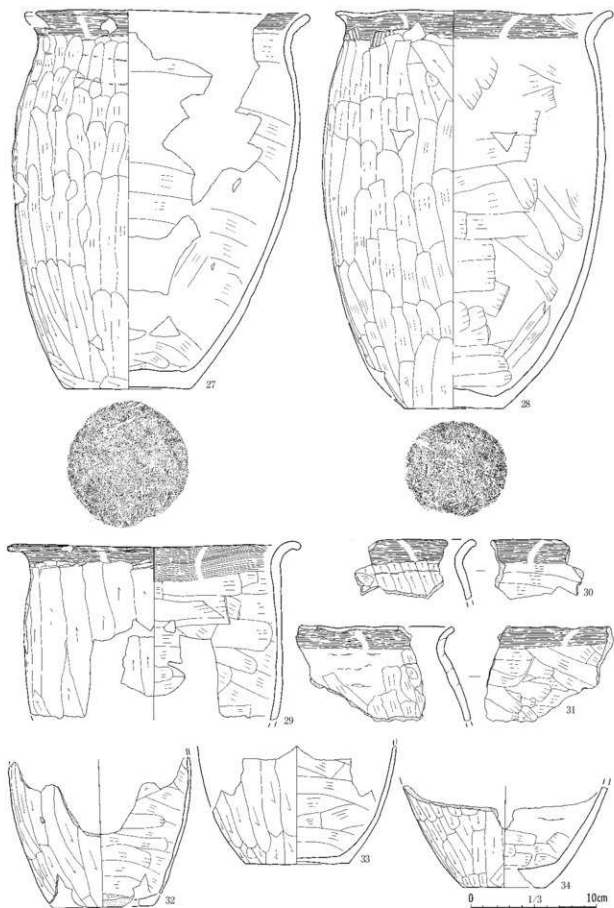


图28 第5号建物跡出土遺物(2)

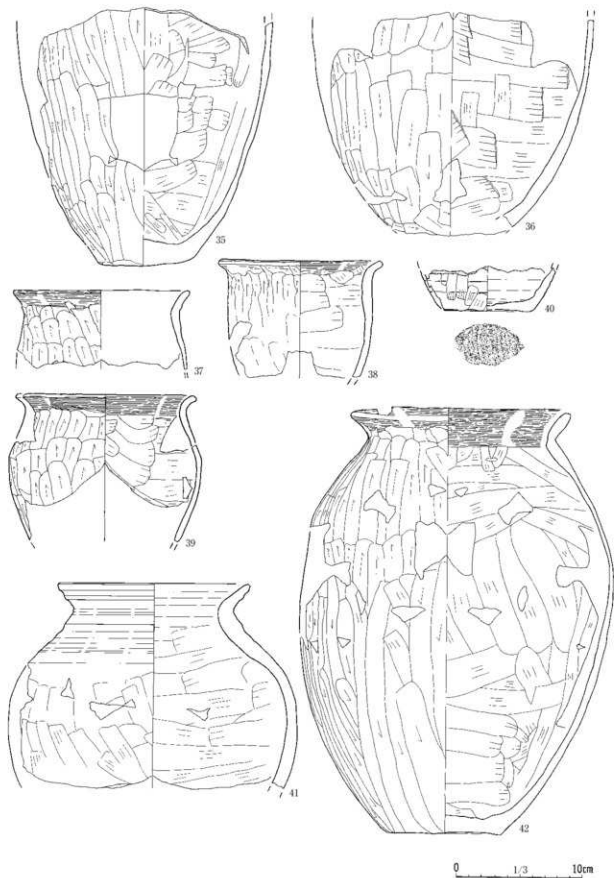


图29 第5号建物跡出土遺物(3)

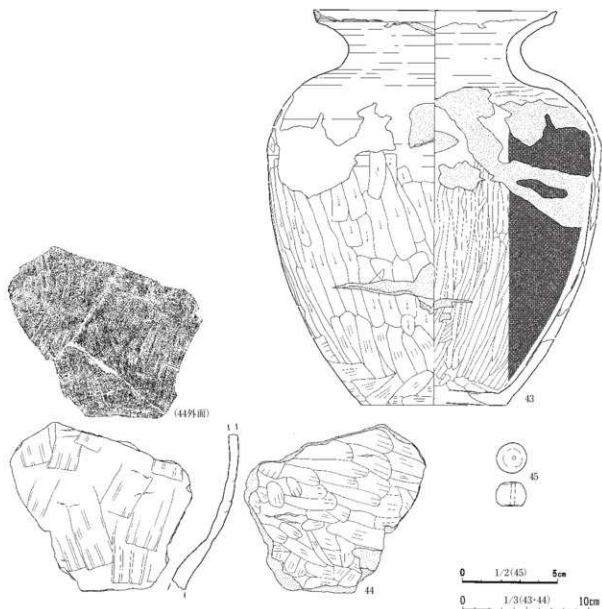


図30 第5号建物跡出土遺物(4)

形の後、外面に縦位のケズリ、内面に横位のヘラナデ、口縁部内外面にナデが施される。小型甕も同様の製作法が主体である。壺は4点出土し、41と43はロクロ成形の後体部下外面に縦位のケズリ、内面に横位のヘラナデが施される。43については最終的に内面にミガキと、黒色処理が施される。これらは形状からみて須恵器の広口壺を写したものと考えられる。これに対し、42は長胴甕の口縁部が狭くなった形状であり、甕と壺の中間的な形状である。製作技術も長胴甕の技術を用いて製作されている。44は外面に叩き目があり、内面にオサエ・ナデ調整される胴部下半片である。内面に凹凸が強く残っていることから広口壺と思われるが、球胴甕の可能性もある。45は床面直上から出土した土玉で、直径1.6cm、厚さ1.4cmで下端は平坦である。外面はミガキが施され、黒色処理されている。

また堆積土中からは土師器などの遺物の他、焼土と多量の炭化材・炭化種子が検出された。炭化材の樹種はクリが多く、その他コナラ属コナラ節・モクレン属・サクラ属・ハリギリ・ブナ属・オニグルミ・スギ・アサダ・カエデ属・トネリコ属シオジ節などが同定された(第4章第2節参照)。炭化種子は多量のイネと少量のアワ・キビと微量のタデ科が検出された(第4章第3節参照)。特にアワ・

キビは土師器(42)の内部土壌からセットで検出されており、そこにイネが含まれないため、器に入れて保管されていたと考えられる。

**【外周溝 - SD04a・04b】**

**【平面形・規模】** 大半が調査区外に存在するため全体形は不明であるが、おそらく南東側に開口していると思われる。SD04a・04bが存在し、SD04aが古い。元々直線状のSD04aを、SI05構築時に外周溝として利用するためSD04bを掘削したと考えられる。幅は約50cmで深さは約50cmである。

**【堆積土】** 最上位には第V層バミスが多く混じった土層が堆積しているが、人為的な廃棄土かどうか不明である。

**【底面及び施設】** 底面には掘削時の跡痕が見られる。

**【出土遺物】** 出土土器の総重量は0.07kgで、内訳は土師器0.03kg、縄文土器0.04kgである。図示できる遺物は出土しなかった。

**【掘立柱建物跡 - SB04】**

**【平面形・規模】** 梁行2間(3m)×桁行2間(3.6m)の方形を呈し6本の柱穴で構成されるが、北側角と東側の間柱を欠く。梁間は不均等であり、1.1mと2mがみられる。

**【小結】** SI05出土材の伐採年代はウィグルマッチング法により10世紀前半代と推定された(第4章第2節参照)。また、出土遺物は土師器長胴甕主体で土師器坏が極端に少ない。また、須恵器が皆無であることも特徴的である。須恵器の出土がないため遺物から詳細な年代を推定できないが、年代測定の結果を援用すると本遺構は10世紀前半代に構築されたと考えられる。(茅野)

**第6号建物跡 (SD03・09・10、SB05、図31・32)**

**【概要】** 調査区東側、2-17グリッド付近に位置する。北側約半分が調査区外に伸びる。第IV～V層で確認した。SD03・SD09・SD10・SB05で構成される。外周溝の範囲内であると想定された堅穴住居跡は、慎重に精査をしたが検出されなかった。

**【外周溝 - SD03】**

**【平面形・規模】** 大半が調査区外に存在するため全体形は不明である。南東側に開口し、幅約70～80cm、深さは約40cmである。SD02bと重複し、本遺構が新しい。なお、SD09とは同一の溝跡である可能性が高い。

**【堆積土】** 最上位に第II層主体の黒色土が自然堆積している。

**【底面及び施設】** 底面には掘削時の跡痕が見られる。

**【出土遺物】** 出土土器の総重量は0.12kgで、内訳は土師器0.04kg、縄文土器0.08kgである。覆土中から出土した土師器坏(46)を図示した。

**【外周溝 - SD09】**

**【平面形・規模】** 位置から見てSD03の東側端部であると考えられる。先端部が直径1.5mの円形土坑状に深くなっている。溝部の幅は約90cmである。

**【堆積土】** 第II層の黒色土が主体で概ね人為堆積と見られる。土坑部分の堆積土中位より上層からは土師器等がややまとまって出土しているが、出土層位からみて遺構廃絶時あるいはそれ以降に廃棄された可能性が高い。





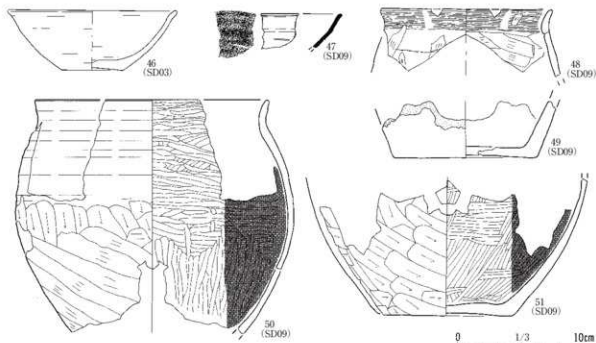


図32 第6号建物跡出土遺物

【底面及び施設】底面には掘削時の動痕が見られるが、土坑部分には見られない。

【出土遺物】出土土器の総重量は1.03kgで、内訳は土師器0.92kg、須恵器0.01kg、縄文土器0.1kgである。溝先端部の土坑状部分の上位から中位にかけて土師器・須恵器などが出土した。47は須恵器坏、48は土師器小甕、49は縄文土器深鉢底部片である。50・51は同一個体の広口壺である。ロク口成形後、体部外面下半に縦位・斜位のケズリが施され、内面下位は縦位の、上半は横位のミガキが施されている。

#### 【掘立柱建物跡 - SB05】

【平面形・規模】梁行2間（3.1m）×桁行1間（3.7m）の長方形を呈する。梁間は不均等で、1.8mと1.3mがある。

#### 【その他の施設 - SD10】

【平面形・規模】直線状の浅い溝跡で、第IV層で断続的に確認した。位置から見てSB05の一部である可能性がある。遺物は出土しなかった。

【小結】重複関係にあるSD02bが風倒木である可能性があるため、このことから年代を推定することはできないが、出土遺物の特徴から平安時代の遺構であると推定される。（茅野）

## (2) 土坑

土坑は7基検出され、縄文時代と思われるものが1基（SK07）で、他は平安時代のもと思われる。

### 第1号土坑（SK01、図33）

〔位置・確認〕調査区中央部、2-35グリッドに位置する。調査区際で一部分を確認した。溝跡の可能性もある。上位を耕作等で削平されている。

〔平面形・規模・底面〕平面形は不正形を呈し、最大幅が約1.5m、最小幅が約70cmである。確認面からの深さは約15cmである。

〔堆積土〕第Ⅱ層主体の黒色土に第Ⅴ層のバミスが少量混じる。自然堆積と考えられる。

〔出土遺物・遺構の年代〕出土遺物はなく、遺構の年代も不明である。

### 第2号土坑（SK02、図33）

〔位置・確認〕調査区東端部付近、2-2グリッドに位置する。第Ⅳ層で確認した。

〔平面形・規模・底面〕平面形は隅丸の方形の南西壁が弧状にふくらむような形を呈する。規模は長軸1.7m、短軸1.52mである。確認面からの掘り方底面までの深さは23cmである。底面は掘り方を充填した土層を平坦に仕上げしており、掘り方の厚さは10～15cmである。

〔堆積土〕覆土上位では黒褐色土が、覆土下位では焼土・炭化材を含む黒色土が堆積していた。

〔出土遺物〕堆積土中から焼土・炭化材・土師器甕0.31kgが出土した。土師器甕の破裂剥片は細片ばかりで図示し得る資料がなかったため、図33内に写真を示すに止めた。底面直上には炭化材が出土し、その直上に焼土層が形成されている。底面が被熱した痕跡は確認できなかったが、上面に存在する焼土の下面は弱く還元しているのが確認できた。炭化材の樹種はアサダ・クリ・オニグルミが確認できた（第4章第2節参照）。さらに炭化材を年代測定にかけた結果、8世紀代の年代値を得た（第4章第2節参照）が、出土遺物の特徴からは9世紀末～10世紀前半と考えられるため、古材を燃料として使用したことが考えられる。

〔遺構の年代・用途〕本遺構は出土遺物の特徴から平安時代に構築・使用された土坑と考えられる。また、用途としては土師器甕の破裂剥片及び焼土・炭化材の出土状況から土師器甕を焼成した土坑の可能性が高い。

### 第3号土坑（SK03、図33）

〔位置・確認〕調査区東側、2-10グリッドに位置する。第Ⅴ層で確認した。本遺構はSI05等第5号建物跡とセットで存在していた可能性がある。

〔平面形・規模・底面〕平面形は不正な円形で、長軸90cm、短軸70cm、深さ5cmを計る。確認面には灰と炭化物の広がり確認できた。底面は、第Ⅴ層を掘削しほぼ平坦である。

〔堆積土〕ローム粒をふくむ黒色土が堆積しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。

〔出土遺物・遺構の年代〕遺物は出土していないが、堆積土の状況から平安時代の遺構であると推定される。

### 第4号土坑（SK04、図33）

〔位置・確認〕調査区中央やや東寄り、2-14グリッドに位置する。第Ⅴ層で確認した。

〔平面形・規模・底面〕平面形は直径約1.1mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約1.25mである。

底面は第Ⅳ層を掘り込みほぼ平坦である。

[堆積土] 堆積土2層中に白頭山苦小牧火山灰が堆積している。7・8層は地山ブロックを含み、水平方向にラミナ状の堆積が見られ、かつ湿り気を帯びる。これは自然堆積する前段階に開口したままの状態で開催された際、底面に水がたまっていた事を示すと思われる。

[出土遺物・遺構の年代] 出土土器の総重量は0.17kgで、内訳は土師器0.1kg、縄文土器0.07kgである。52は第6号建物跡SD09出土遺物、第2号建物跡SI02出土遺物と同一個体と思われる土師器壺片で、53・54は縄文時代後期の深鉢形土器である。火山灰の低位から土師器片等が出土しているが、細片のため時期は不明である。

[遺構の年代と用途] また堆積土中に白頭山苦小牧火山灰（同定では十和田八戸火山灰の再堆積、第4章第1節参照）が確認されたことから、10世紀中葉以前に廃絶された遺構で、用途は井戸跡であると考えられる。

#### 第5号土坑（SK05、図33）

[位置・確認] 調査区東側、2-9グリッドに位置する。第Ⅴ層で確認した。

[平面形・規模・底面] 平面形は不正形で、長軸1m、短軸50cm、深さ35cmを計る。底面は、第Ⅴ層を掘削し凹凸が見られる。

[堆積土] ローム粒をわずかに含む黒褐色土が堆積しており、人為堆積と考えられる。

[出土遺物・遺構の年代] 遺物は出土していないが、堆積土の状況から平安時代の遺構であると推定される。

#### 第6号土坑（SK06、図33）

[位置・確認] 調査区東側、2-13グリッドに位置する。第Ⅴ層で確認した。

[平面形・規模・底面] 平面形は不正形で、長軸1.9m、短軸90cm、深さ30cmを計る。底面は、第Ⅴ層を掘削し凹凸が見られる。

[堆積土] ローム粒を微量含む黒褐色土が主体的に堆積している。

[出土遺物・遺構の年代] 遺物は出土していないが、堆積土の状況から平安時代の遺構であると推定される。

#### 第7号土坑（SK07、図34）

[位置・確認] 調査区西側、2-59グリッドに位置する。SD06・07（古代）と重複し、本遺構がもっとも古い。第Ⅴ層で確認した。

[平面形・規模・底面] 平面形は円形で、断面はフラスコ状を呈する。底面直径約1.2m、深さ30cmを計る。底面は、第Ⅴ～Ⅵ層を掘削しほぼ平坦である。

[堆積土] 堆積土はⅢ層黒色土の自然堆積である。

[出土遺物・遺構の年代] 出土遺物はない。帰属時期は不明であるが堆積土の様子から、縄文時代の可能性がある。(茅野)

### (3) 溝跡

溝跡は13条検出され、そのうち10条（SD01、SD02a（新）・02a（古）・02b、SD08、SD04a・04b、SD03・09・10）は建物跡の外周溝として機能するものと考えられ、各建物跡の項にて記載してある。

ここでは、単独の溝跡として検出されたSD05・06・07の3条について以下に記述する。

**第5号溝跡** (SD05、図34)

[位置・確認] 調査区東側、2-3グリッドに位置する。第Ⅳ層で確認した。

[平面形・規模] 幅40～60cmで、北北西→南南東に調査区を横断している。深さは約50cmで、調査区壁面では第Ⅲ層を掘り込んで構築されている。

[堆積土] 堆積土は第Ⅱ層黒色土主体で自然堆積土である。

[出土遺物・遺構の時期] 出土した土師器の重量は0.14kgである。堆積土中から出土した土師器(55)を図示した。出土遺物や堆積土の状況から本遺構は平安時代に構築された可能性が高い。

**第6号溝跡** (SD06、図34)

[位置・確認] 調査区西側、2-59グリッドに位置する。第Ⅴ層で確認した。SK07と重複し本遺構が新しい。また、西側直近にSD07が併走する。

[平面形・規模] 幅40～50cmで、北北東→南南西に調査区を横断している。深さは約40cmである。

[堆積土] 堆積土は第Ⅱ層黒色土主体で自然堆積土である。

[出土遺物・遺構の時期] 遺物は出土しなかった。堆積土の状況から本遺構は平安時代に構築された可能性が高い。

**第7号溝跡** (SD07、図34)

[位置・確認] 調査区西側、2-59グリッドに位置する。第Ⅴ層で確認した。SK07と重複し本遺構が新しい。また、東側直近にSD06が併走する。

[平面形・規模] 幅80cmで、北北東→南南西に調査区を横断している。深さは約50cmである。

[堆積土] 堆積土は第Ⅱ層黒色土主体で自然堆積土である。

[出土遺物・遺構の時期] 遺物は出土しなかった。堆積土の状況から本遺構は平安時代に構築された可能性が高い。

(茅野)

(4) 掘立柱建物跡・ピット

農道2号からは104基のピットが検出され、そのうち12基は掘立柱建物跡に組み込まれており、単独ピットは92基である。各ピットの位置は図18の遺構配置図に、個々の計測値は表6に示してある。ここでは単独の構造物である第2・3号掘立柱建物跡について以下に記述する。

**第2号掘立柱建物跡** (SB02、図35)

[位置・確認] 調査区東側、2-15グリッドに位置する。西側に第6号建物跡が位置する。

[平面形・規模] 梁行2間×桁行2間のほぼ方形を呈する。南東角の柱穴が調査区外に存在すると考えられ、7本の柱穴で構成される。梁間は1.8m、桁間は2mで統一され、軸方向はN-118°-Eである。

[遺構の時期] 遺構の軸の傾きや平面形式などから平安時代の建物跡と考えられる。

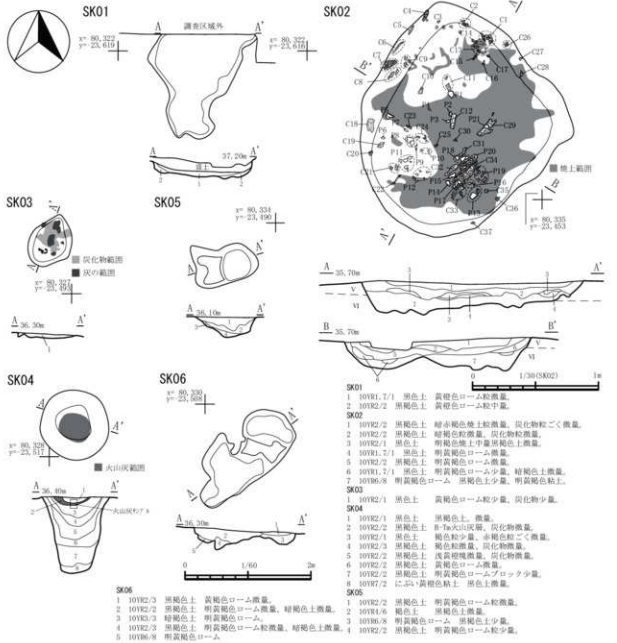
**第3号掘立柱建物跡** (SB03、図35)

[位置・確認] 調査区東側、2-11グリッドに位置する。SI05と重複し、本遺構が古いと考えられる。

[平面形・規模] 梁行2間×桁行2間のほぼ方形を呈する。6本の柱穴で構成される。梁間は2m、桁間は2.3mで統一され、軸方向はN-117°-Eである。

[遺構の時期] 遺構の軸の傾きや平面形式などから平安時代の建物跡と考えられる。

(茅野)



農道2号SK02焼破裂片

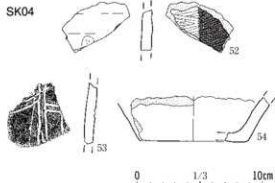


図33 土坑と出土遺物

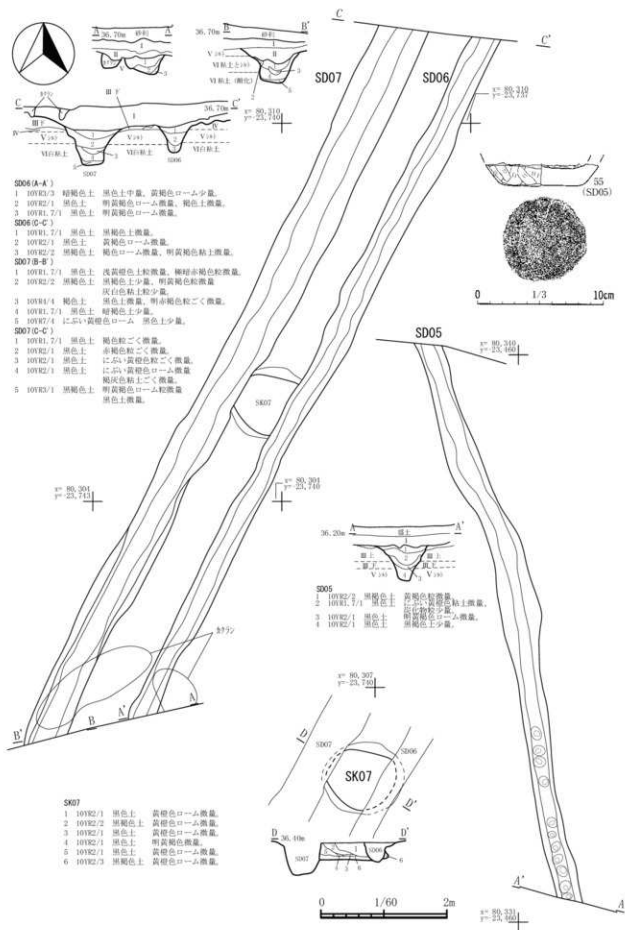


図34 第7号土坑・第5・6・7号溝跡と出土遺物

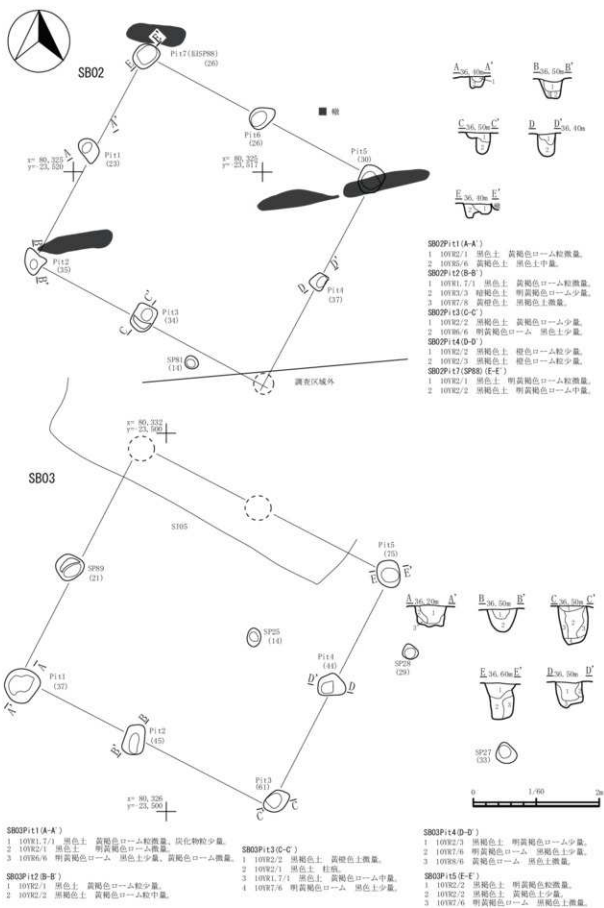


図35 掘立柱建物跡

表6 農道2号SP計測表

SP 番号	グリッド	位置		標高 (m)	規模(cm)			備考
		X	Y		長軸	短軸	深さ	
1	2-32	80315	-23601	37.0	49	45	55	
2	2-36	80320	-23624	37.0	22	20	8	
3	2-35	80321	-23616	37.0	25	21	10	
4	2-34	80321	-23645	37.0	36	25	19	
5	2-34	80321	-23644	37.0	19	17	8	
6	2-34	80321	-23644	36.9	22	19	5	
7	2-34	80321	-23613	37.0	66	60	28	
8	2-34	80330	-23613	37.0	62	61	27	
9	2-34	80330	-23611	36.9	40	35	19	
10	2-33	80330	-23608	37.0	25	20	20	
11	2-33	80321	-23608	36.9	27	23	—	
12	—	—	—	—	—	—	—	欠番
13	2-31	80317	-23597	37.0	40	22	3	
14	2-31	80317	-23596	36.9	40	39	—	
15	2-31	80319	-23596	37.0	33	30	20	
16	2-30	80319	-23595	37.0	61	39	14	
17	2-34	80320	-23613	36.9	29	28	26	
18	2-34	80320	-23612	36.9	25	18	13	
19	2-31	80320	-23598	36.9	34	28	13	
20	2-31	80320	-23596	36.9	33	32	17	
21	2-30	80320	-23592	36.8	23	21	10	
22	2-16	80323	-23523	36.4	28	27	41	SB05
23	2-16	80321	-23524	36.4	44	37	51	SB05
24	2-16	80321	-23523	36.4	29	25	16	
25	2-11	80328	-23498	36.2	30	23	14	
26	2-16	80320	-23525	36.4	21	20	25	SB05
27	2-10	80327	-23494	36.2	33	30	33	
28	2-10	80328	-23495	36.2	36	24	29	
29	2-41	80316	-23647	36.8	36	25	24	
30	2-41	80317	-23647	36.8	30	22	12	
31	2-41	80316	-23647	36.8	25	20	10	
32	2-41	80316	-23648	36.7	25	24	23	
33	2-42	80315	-23652	36.8	27	23	19	
34	2-42	80316	-23654	36.7	22	20	41	
35	2-43	80315	-23658	36.7	28	26	15	
36	2-43	80314	-23658	36.6	23	18	9	
37	2-44	80314	-23660	36.6	33	28	28	
38	2-45	80315	-23666	36.6	26	25	13	
39	2-45	80314	-23666	36.6	46	26	13	
40	2-45	80314	-23670	36.5	28	24	27	
41	2-45	80314	-23670	36.5	29	28	11	
42	2-46	80313	-23674	36.4	25	24	14	
43	2-47	80313	-23677	36.4	18	17	12	
44	2-48	80312	-23685	36.3	24	20	28	
45	2-49	80312	-23685	36.3	23	15	13	
46	2-50	80311	-23694	36.3	27	26	17	
47	2-51	80310	-23696	36.3	30	23	24	
48	2-51	80308	-23699	36.3	21	20	17	
49	2-52	80309	-23702	36.3	23	20	14	
50	2-52	80309	-23703	36.3	22	18	19	
51	2-52	80309	-23704	36.3	28	19	16	
52	2-53	80309	-23706	36.3	28	21	14	
53	2-53	80308	-23706	36.3	22	18	12	

SP 番号	グリッド	位置		標高 (m)	規模(cm)			備考
		X	Y		長軸	短軸	深さ	
54	2-53	80308	-23706	36.3	24	23	19	
55	2-53	80307	-23705	36.2	19	17	9	
56	2-53	80307	-23706	36.3	27	25	13	
57	2-53	80306	-23708	36.3	24	20	22	
58	2-53	80307	-23709	36.4	22	20	8	
59	2-53	80307	-23709	36.4	32	23	14	
60	2-54	80306	-23710	36.4	30	15	13	
61	2-54	80307	-23710	36.4	28	24	15	
62	2-54	80305	-23712	36.4	24	19	13	
63	2-54	80305	-23712	36.4	20	19	12	
64	2-55	80305	-23716	36.4	22	21	17	
65	2-55	80305	-23716	36.4	31	23	22	
66	2-55	80306	-23719	36.4	21	20	17	
67	2-57	80304	-23728	36.4	30	17	10	
68	2-57	80306	-23729	36.4	25	24	15	
69	2-28	80320	-23582	36.8	22	21	10	
70	2-26	80321	-23572	06.9 (21)	019 (01)			
71	2-19	80319	-23537	36.6	29	28	31	
72	2-19	80318	-23537	36.6	48	40	35	
73	2-10	80327	-23493	36.2	36	25	39	
74	2-9	80330	-23490	36.2	44	31	33	SB04 P04
75	2-9	80330	-23487	36.1	21	18	18	
76	2-21	80317	-23546	36.9	40	27	19	
77	2-21	80318	-23546	36.8	32	31	18	
78	2-20	80318	-23542	36.7	38	33	16	
79	2-17	80322	-23528	36.5	25	23	22	
80	2-17	80322	-23528	36.5	24	22	27	SB05
81	2-15	80321	-23517	36.4	23	20	14	
82	2-60	80304	-23743	36.3	30	29	21	
83	2-60	80304	-23743	36.3	28	27	20	
84	2-60	80304	-23742	36.3	30	20	11	
85	2-0	80324	-23449	35.9	37	28	32	SB06
86	2-0	80325	-23451	35.8	31	23	16	
87	2-9	80331	-23491	36.1	35	32	36	SB04 P05
88	2-11	80326	-23518	36.3	41	35	26	SB02 P07
89	2-54	80329	-23501	36.2	42	40	21	SB03
90	2-54	80310	-23714	36.4	25	18	16	
91	2-54	80310	-23713	36.4	21	20	13	
92	2-54	80309	-23713	36.3	28	24	19	
93	2-54	80309	-23711	36.3	26	23	16	
94	2-52	80311	-23704	36.2	19	18	12	
95	2-52	80310	-23704	36.2	23	15	14	
96	2-52	80310	-23703	36.2	19	17	20	
97	2-52	80310	-23703	36.2	24	12	11	
98	2-52	80311	-23702	36.2	23	16	13	
99	2-51	80314	-23698	06.11 (20)	020 (22)	011		
100	2-17	80325	-23531	36.4	23	22	18	
101	2-17	80324	-23527	36.5	25	22	43	SB05
102	2-19	80322	-23538	36.6	28	23	18	
103	2-19	80323	-23538	36.6	35	30	14	
104	2-10	80331	-23493	36.1	37	35	16	SB04 P06
105	2-17	80322	-23529	36.6	56	44	32	



## (5) 溝状土坑

## 第1号溝状土坑 (SV01、図36)

[位置・確認] 調査区中央部、2-36グリッドに位置する。第V層で確認した。

[平面形・規模・底面] 平面形は長楕円形である。開口部の長軸2.25m、短軸25cmを計る。底面は、第V～VI層を掘削しほぼ平坦である。

[堆積土] 堆積土は第III層黒色土と第V層バミスの混合土で、自然堆積である。

[出土遺物・遺構の時期] 出土遺物はない。詳細な帰属時期は不明であるが堆積土の様子と形状から縄文時代のおとし穴と考えられる。

(茅野)

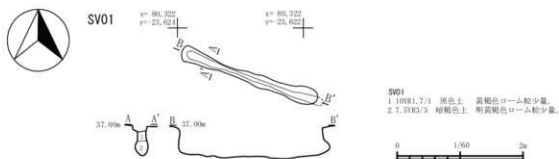


図36 第1号溝状土坑

## 2 遺構外出土遺物 (図37)

農道2号の遺構外からは縄文土器0.5kg、土師器0.3kg、須恵器0.3kg、合計1.1kgの土器類が出土した。平安時代の土器が主であり、縄文土器が少量混じる。56～60は縄文後期前葉の土器である。深鉢形土器とみられ、外面にはやや太めで断面が丸い沈線が描かれている。60は図上復原した小型の壺形土器である。外面には二本一組の沈線の間にLRが回転施文されている。61は須恵器環である。口口整形が施され、外面にはヘラ書きが見られる。

(茅野)

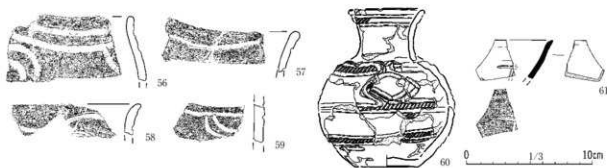


図37 遺構外出土遺物

### 3 遺物観察表

表7 農道2号出土土器類 観察表

図録 番号	遺物 番号	遺物名	出土位置	種類	器種	部位	寸法(mm)			外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (底面調整)	
							口径	底径	器高				
20	1	1建物	SD01a 2階	土器器	甕	口縁部	-	-	(14)	ヨコナテ, オヤヒ, ヘラナテ	ヘラナテ, ヨコナテ		
20	2	1建物	SD01b 1階壁	土器器	甕	底部	-	-	81	(14)	ヘラナテ	ヘラナテ	ヘラナテ
22	3	2建物	SD02 掘り方	土器器	広口壺?	胴部	-	-	(48)	ナデ, ヘラケズリ	ミヅキ	図25-50, 図35-1 土器類	
22	4	2建物	SD02b 掘上	土器器	甕	口縁部	-	-	(70)	ヨコナテ, ヘラケズリ	ユビナテ, ヨコナテ		
22	5	2建物	SD02b 掘上	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(33)	沈線	平面凸ナテ	土器内1式 土器内1式	
22	6	3建物	SD03 掘上	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(51)	沈線	平面凸ナテ	土器内1式 土器内1式	
24	7	3建物	SD03 掘上F1内	土器器	杯	底部	-	-	(61)	ロクロ	内面磨面	磨上赤切	
24	8	3建物	SD03 掘上F2内	土器器	杯	底部	-	-	(60)	ロクロ	内面磨面	磨上赤切	
24	9	3建物	SD03 掘上F3内	土器器	杯	底部	-	-	(65)	ロクロ	内面磨面	磨上赤切	
24	10	3建物	SD03 掘上F7内	土器器	杯	底部	-	-	(69)	ロクロ	内面磨面	磨上赤切	
24	11	3建物	SD03 掘上F7内	土器器	杯	底部	-	-	(69)	ロクロ	内面磨面	磨上赤切	
24	12	4建物	SD04 土器掘削1床面	土器器	甕	略定形	(24)	(112)	25.8	輪彫痕, ヨコナテ, ヘラケズリ, ナデ, 黒色付着物	ユビナテ, ヘラナテ, ヨコナテ	ヘラナテ	
24	13	4建物	SD04 土器掘削1床面, 覆瓦層上	土器器	小甕	口縁部	(117)	-	(73)	ヨコナテ, ヘラケズリ	ヨコナテ, ヨコナテ		
24	14	4建物	SD04 土器掘削1床面	土器器	小甕	口縁部	(103)	-	(36)	ヨコナテ, ヘラケズリ	輪彫痕, ナテ, ヨコナテ		
24	15	4建物	SD08 2階P1-2	土器器	杯	略定形	-	-	(63)	ロクロ	ヨコナテ	図25-50, 図35-1 土器類	
24	16	4建物	SD08 2階P3-5, 覆上	土器器	甕	口縁部	(206)	-	(98)	ヨコナテ, ヘラケズリ, ナテ	ナテ, ヨコナテ		
24	17	4建物	SD08 2階P3-5, 覆上	土器器	甕	口縁部	(207)	-	(21)	ヨコナテ, ヘラナテ	ヨコナテ		
24	18	4建物	SD08 2階P7	土器器	甕?	底部	-	-	(54)	ヘラナテ	ヨコナテ		
27	19	5建物	SD05 カマドP2-4層, P6P7内	土器器	略定形	胴部	320	(64)	30.5	ロクロ	口クロ	磨上赤切	
27	20	5建物	SD05 カマド2層支脚1	土器器	甕	底部	-	-	80	ヘラケズリ	ユビナテ, ナテ	ヘラケズリ	
27	21	5建物	SD05 カマド2層支脚2	土器器	甕	底部	-	-	(112)	ヘラケズリ	ヘラケズリ, ナテ	ヘラケズリ	
27	22	5建物	SD05 2階P8, カマド上面, カマド支脚, カマド右2-4層, 覆上	土器器	甕	略定形	(235)	90	29.4	ヨコナテ, ヘラケズリ, ヘラナテ	ナテ, ヘラナテ, ヨコナテ	砂流, ヘラナテ	
27	23	5建物	SD05 2階P9, カマド上面, カマド支脚, カマド右2-4層, 覆上	土器器	甕	略定形	(25.9)	(91)	(27)	輪彫痕, ヨコナテ, ヘラナテ	ナテ, ヨコナテ		
27	24	5建物	SD05 2階P4, カマド上面	土器器	甕	口縁部	(24.8)	-	(96)	ヨコナテ, ヘラケズリ, ナテ	ヘラナテ, ヨコナテ		
27	25	5建物	SD05 カマド左側P1, P4層上, 覆上	土器器	甕	口縁部	-	-	(122)	ヨコナテ, ヘラナテ	ナテ, ヨコナテ		
27	26	5建物	SD05 カマド2層, カマド右2-4層	土器器	甕	口縁部	19.8	-	(80)	ヨコナテ, ヘラケズリ, ナテ	ナテ, ヨコナテ		
28	27	5建物	SD05 断面P9a, 2階P2-3, カマド右2-7-8-9, 2-3層P1, 3層, 3層, 覆上	土器器	甕	略定形	22.9	9.9	30.0	輪彫痕, ヨコナテ, ヘラナテ, ヘラケズリ	ナテ, ヨコナテ	ヘラナテ	
28	28	5建物	SD05 2階P36-43-46, 覆上	土器器	甕	略定形	(22.1)	7.8	31.6	ヨコナテ, ヘラケズリ, ヘラナテ	ユビナテ, ヘラナテ	砂流, ヘラナテ	
28	29	5建物	SD05 2階P18, P21-22, 覆上	土器器	甕	体部上半	(235)	-	(142)	ヨコナテ, ヘラケズリ	ヘラナテ, ヨコナテ		
28	30	5建物	SD05 カマド煉瓦し, 覆上	土器器	小甕	口縁部	-	-	(48)	輪彫痕, ヨコナテ, ヘラケズリ	ナテ, ヨコナテ		
28	31	5建物	SD05 2階P5	土器器	甕	口縁部	-	-	(75)	輪彫痕, ヨコナテ, ヘラナテ	ヘラナテ, ヨコナテ		
28	32	5建物	SD05 2階P17-17, カマド2層, カマド右2-4層, P6P7内	土器器	甕	体部下半	-	-	(83)	ヘラケズリ	ヘラケズリ		
28	33	5建物	SD05 2階P5	土器器	甕	体部下半	-	-	80	ヘラケズリ	ユビナテ, ナテ	オヤヒ, ナテ	
28	34	5建物	SD05 カマド煉瓦し	土器器	甕	体部下半	-	-	(66)	ヘラケズリ	ナテ	砂流	
28	35	5建物	SD05 2階P35-46, 2-4層P35-34, カマド2層, 覆上	土器器	甕	体部下半	-	-	(195)	ヘラケズリ	ナテ, ユビナテ	砂流, ヘラケズリ	
28	36	5建物	SD05 カマド上面, カマド右2-4層, 覆上	土器器	甕	胴部下半	-	-	(167)	-	ヘラケズリ	ユビナテ, ヘラナテ	
28	37	5建物	SD05 2階P25	土器器	小甕	口縁部	(140)	-	(63)	ヨコナテ, ヘラケズリ	(調整による不明)		
28	38	5建物	SD05 断面P6, 2階P24-28, 2-4層P26, 覆上	土器器	甕	体部上半	(22.9)	-	(93)	ヨコナテ, ヘラケズリ	ナテ, ヨコナテ		
28	39	5建物	SD05 カマド上面, カマド右2-4層	土器器	小甕	体部上半	(142)	-	(117)	ヨコナテ, ヘラケズリ	ヘラナテ, ヨコナテ		
28	40	5建物	SD05 断面P63, 覆上	土器器	小甕	底部	-	-	(70)	ロクロ, ナテ	ロクロ	磨上赤切	
28	41	5建物	SD05 2階P33-34-46, 2-4層P25-34, 覆上	土器器	甕	体部上半	(150)	-	(164)	ロクロ, ナテ	ロクロ, ナテ		
28	42	5建物	SD05 2階P10-11-12-13-16, 覆上	土器器	広口壺?	略定形	17.4	90	33.7	ヨコナテ, ヘラケズリ, ヘラナテ	ナテ, ユビナテ	ヘラナテ	
30	43	5建物	SD05 2階P12-14, 2-3層P49-30	土器器	甕	略定形	9.5	11.7	31.5	ロクロ, ナテ, ミヅキ, 黒色付着物, 黒色付着物(人による?)	ナテ, ヨコナテ	ナテ, 沈線, 土器類調査	
30	44	5建物	SD05 2階P29, カマド上面	土器器	壺?	胴部下半	-	-	(125)	明玉目	土器類調査		
32	46	6建物	SD03 掘上	土器器	杯	略定形	(336)	(50)	4.8	ロクロ	ロクロ	図25-50, 図35-1 土器類	
32	47	6建物	SD09 掘上1層	粗意器	深鉢	口縁部	-	-	(28)	ロクロ, 磨面	ナテ		
32	48	6建物	SD09 掘上1層P3-6	土器器	小甕	口縁部	(37)	-	(54)	輪彫痕, ヨコナテ, ナテ	輪彫痕, ヘラナテ, ナテ, ヨコナテ		
32	49	6建物	SD09 掘上1層P7	縄文土器	深鉢	底部	-	-	(114)	(文様なし)	ナテ	縄文風器?	
32	50	6建物	SD09 掘上1層P4+10-12-14, 下層P26, 覆上	土器器	広口壺	体部上半	(106)	-	(187)	ロクロ, ヘラケズリ, ヘラナテ	ミヅキ	図25-50, 図35-1 土器類	
32	51	6建物	SD09 掘上1層P5-8-15, 下層P25, 覆上	土器器	広口壺	体部下半	-	-	(109)	(110)	ヘラケズリ	ミヅキ	
32	52	SK	SK04 掘上	土器器	口縁部	胴部	-	-	(33)	ロクロ, ナテ	ミヅキ, 黒色処理	図25-50, 図35-1 土器類	
32	53	SK	SK04 掘上	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(48)	沈線	ナテ	土器内1式	
32	54	SK	SK04 掘上	縄文土器	深鉢	底部	-	-	(86)	(無文)	平面凸ナテ	土器内1式	
32	55	SK05	SD05 掘上	土器器	甕	底部	-	-	66	(18)	ヘラナテ	ユビナテ	
37	56	遺物外	遺物外 2-19日-1層目	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(51)	沈線	ナテ	砂流, ヘラナテ	
37	57	遺物外	遺物外 2-17日-1層目	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(37)	沈線	ナテ		
37	58	遺物外	遺物外 2-19日-1層目	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(25)	沈線	ナテ		
37	59	遺物外	遺物外 2-6日-1層目	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(51)	沈線	ナテ		
37	60	遺物外	遺物外 2-4日-1層目	縄文土器	甕	略定形	(60)	(50)	(128)	L.R.線, 沈線, 磨り, 磨りし	ナテ	土器内1式, 同土器内1式	
37	61	遺物外	遺物外 2-13日-1層目	粗意器	深鉢	口縁部	-	-	(31)	ロクロ, 磨面	ロクロ		

表8 農道2号出土土製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	遺物種	遺物名	出土位置	種類	器種	石質	寸法(mm)			備考	
								長さ	幅	厚さ		
30	45	5建物	SD05	断面P9a	土製品	土玉	-	16	16	14	3.5	黒色

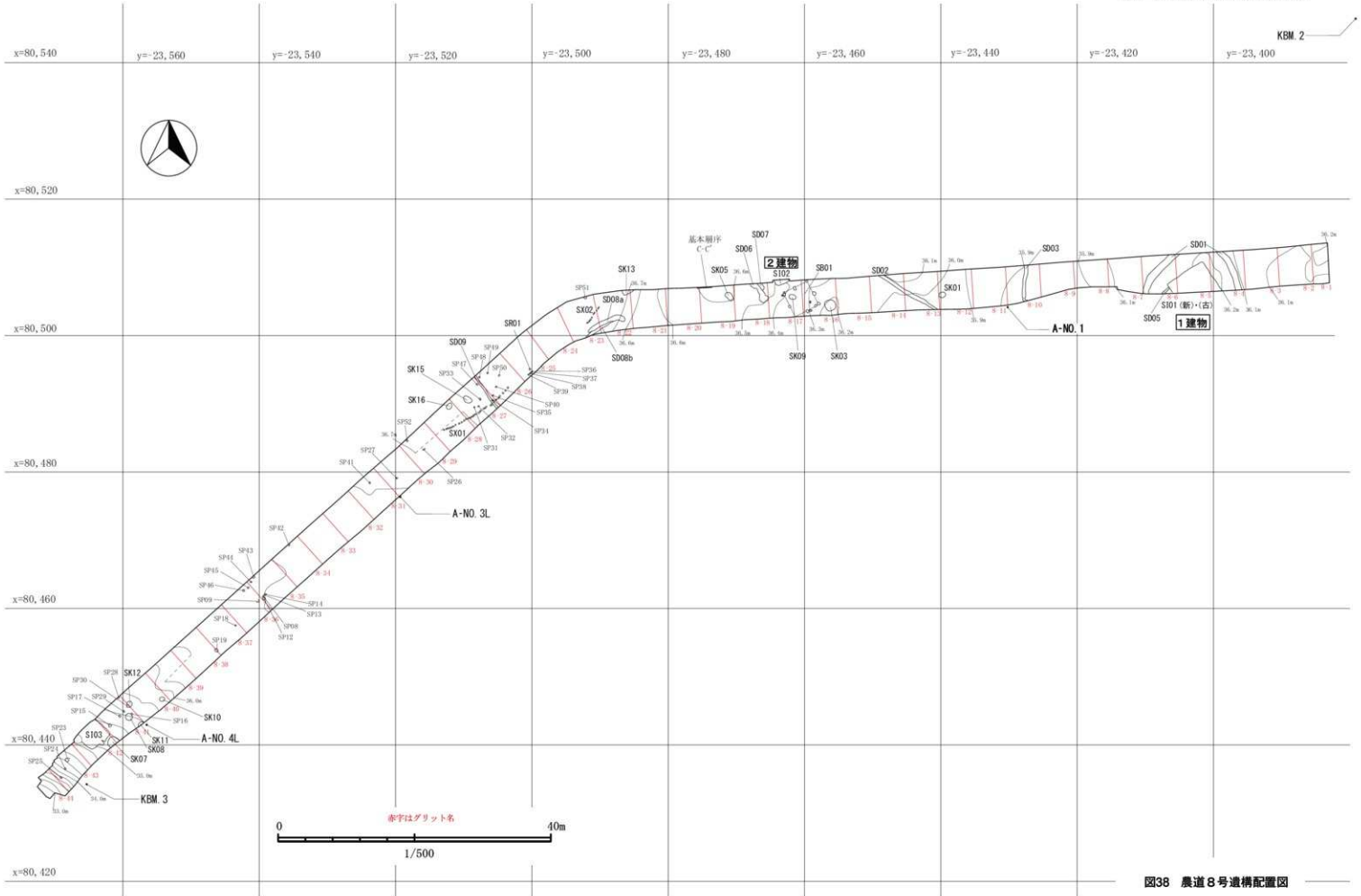


図38 農道8号遺構配置図

## 第3節 農道8号

農道8号で検出された遺構は、堅穴住居跡4軒（拡張含む）、土坑12基、溝跡9条、掘立柱建物跡1棟、ピット列2条、ピット42基、埋設土器1基である。このうち、堅穴住居跡と掘立柱建物跡や溝跡（外周溝）、土坑などセットと考えられる建物跡は3棟ある。その場合、検出遺構の構成は建物跡3棟、単独の堅穴住居跡1軒、土坑12基、溝跡5条、ピット列2条、ピット42基、埋設土器1基となる。

(田中)

### 1 検出遺構

#### (1) 建物跡・堅穴住居跡

農道8号で検出された堅穴住居跡は4軒（拡張含む）で、いずれも平安時代のものである。調査区東側～中央部の標高約36.0～36.5mの平坦地で3軒（SI01（新）・（古）、SI02）検出され、調査区西端の標高約35.0mの南西斜面で1軒（SI03）検出された。平坦地で検出されたSI01a・b、SI02は外周溝が付属する建物跡で、SI02には掘立柱建物跡も付属している。

#### 第1号建物跡（SI01（新）・（古）、SD01・05、図39～41）

【概要】標高約36.2mの平坦地に位置する。調査区際に位置し、住居北半のみ検出された。

【堅穴住居跡 - SI01（新）・（古）】

【位置・確認】8 - 4 ~ 6 グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。

【平面形・規模】北西壁は6.3mで、平面形は方形を呈すると考えられる。

【堆積土】住居の北東半の床面を焼けた粘土が覆い、その下から炭化材が検出された。壁際では、炭化した板材は壁に垂直方向に出土し、これに横方向の炭化材が組み合わされる状況が見られた。このことから、北東壁が住居内に倒れ込んで、壁材などの建築材をバックしたと推測される。

【壁・床面】壁高は12～40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は黒色土が混入するロームで構築され、床面はほぼ平坦である。

【カマド】検出されなかった。

【柱穴】Pit 1・2が主柱穴、Pit 5～9・11～13・16が壁柱穴と考えられる。Pit 1・2は住居中央北壁寄りに位置し、平面形はどちらも楕円形で、規模はPit 1が長軸40cm・短軸24cm・深さ36cm、Pit 2が長軸66cm・短軸34cm・深さ32cmである。どちらも掘り方を有する。Pit 3も位置的には主柱穴の可能性はあるが、深さ5cmと浅い。Pit 5～9・11～13・16は壁際に位置し、長軸12～23cmと小規模であるが、深さは27～41cmとかなり深い。

【周溝】幅2～4cm、深さ23～35cmの周溝が巡る。かなり幅が狭く、下端はわずか1～2cm程度であるため、固化できなかった。床の構築土を取り除いたところ、幅11～30cm、深さ11～30cmの掘り方が検出され、掘り方に壁材を据えた後に埋め戻して固定したものと推測される。北東壁の0.5m内側と南西壁の0.4m内側にも周溝掘り方が検出され、拡張が行われたと考えられる。

【ピット】Pit 3・4・10・14・15の5基検出され、平面形や規模はそれぞれ異なっている。

【出土遺物】住居から出土した土器の総重量は4.87kgで、内訳は土師器4.13kg、須恵器0.6kg、縄文土器0.14kgである。土師器ミニチュア鉢（1・2）、甕（3～6）、広口壺（7）、壺（8）、須恵器壺（9）、

羽口 (10・11)、棒状鉄製品 (12)、砥石 (13)、磨石 (14) が出土した。1・9が床面直上、他は覆土からの出土である。7は内面にミガキ調整と黒色処理を施す広口壺で、外面は上半がロクロ、下半がヘラケズリ調整される。須恵器壺 (9) の底外面には菊花状調整が施されている。砥石 (13) は楕円形の扁平な礫の片面を砥面としている。磨石 (14) は厚みのある半円形の安山岩礫を素材とし、片面及び側面を磨りに使用し、端部と側面を敲きに使用している。側面は敲きの後に磨られており、敲石として使用した後に磨石として使用したと考えられる。羽口は外周溝の覆土からも出土した (10・11・24～26)。10は羽口の末端部分で被熱は見られない。11・25・26は溶着滓が付着し、還元による黒色化が認められる。いずれも小破片のため、大きさや形態など詳細は不明であるが、26は断面に屈曲が見られることからカマボコ型と推測され、25は断面円形で、かなり細いものであったと推測される。

【外周溝 - SD01】SD01が本住居跡に伴う外周溝である。住居跡の南西 - 北西 - 北東を囲うように構築されているが、調査区際に位置するため、検出されたのは住居の北西側と北東側のみである。検出された長さは西側 (SD01①) が7.3m、東側 (SD01②) が6.3mである。それぞれの規模は、西側が幅82～116cm、深さ64～72cm、東側が幅79～96cm、深さ60～77cmである。どちらの溝跡底面も緩やかな起伏があるものの、概ね北から南に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は黒褐色土を主体とする。上層にはローム粒やロームブロックが中量混入し、底面付近ではローム粒や焼土・炭化材が多く混入する部分もある。SD01②北側の調査区際では須恵器甕の破片がまがまがて廃棄されていた。この下層からは焼土や炭化材が検出され、アワ・キビなどの炭化種子が大量に出土した。SD01①南側の調査区際からも焼土と炭化材が検出された。

【出土遺物】外周溝の覆土から出土した土器の総重量は3.36kgで、内訳は土師器2.6kg、須恵器0.7kg、縄文土器0.06kgである。土師器杯 (15)、ミニチュア鉢 (16)、甕 (17～19)、小甕 (20)、須恵器杯 (21)、壺 (22)、甕 (23)、羽口 (24～26)、円盤状土製品 (27) を図示した。須恵器杯 (21)、壺 (22) について胎土分析による産地同定を行ったところ、杯 (21) は特定できなかったが、壺 (22) は五所川原産との結果を得た (第4章第5節参照)。27は土師器甕胴部片を円盤状に整形したものである。

【排水溝 - SD05】SD05が本住居跡に伴う排水溝である。住居南西壁から南西方向へ直線的に調査区外まで延びる。検出できた長さは1.1m、幅は22～32cm、深さは37～48cmである。底面はほぼ平坦で、北東から南西に向かって緩やかに傾斜している。排水溝から遺物は出土しなかった。

【小結】外周溝と排水溝を伴う住居跡である。住居部分は焼けており、床面から出土した炭化材の樹種同定を行った結果、アスナロ6点、トネリコ属シオジ節2点、クリ1点、針葉樹2点という結果であった。また、外周溝から出土した炭化材はクリ7点、アスナロ2点、トネリコ属シオジ節1点と判明した。住居と外周溝では樹種は共通するものの、住居ではアスナロが多く、外周溝ではクリが多いというやや異なる結果が得られた。また、住居出土の炭化材1点、外周溝出土の炭化種子の年代測定を行い、住居の炭化材は893AD - 988AD、外周溝の種子は855AD - 972AD という結果が得られた (第4章第2節参照)。住居床面と外周溝の炭化材及び炭化種子が出土した土壌を採取し水洗選別を行った。住居床面からはイネ・アサガが検出され、外周溝堆積土からはイネ・オオムギ・アワ・キビ・タデ科の炭化種子が検出され、特にアワ・キビは大量に検出され、アワは10,000粒以上、キビは20,000粒以上であった (第4章第3節参照)。

(田中)



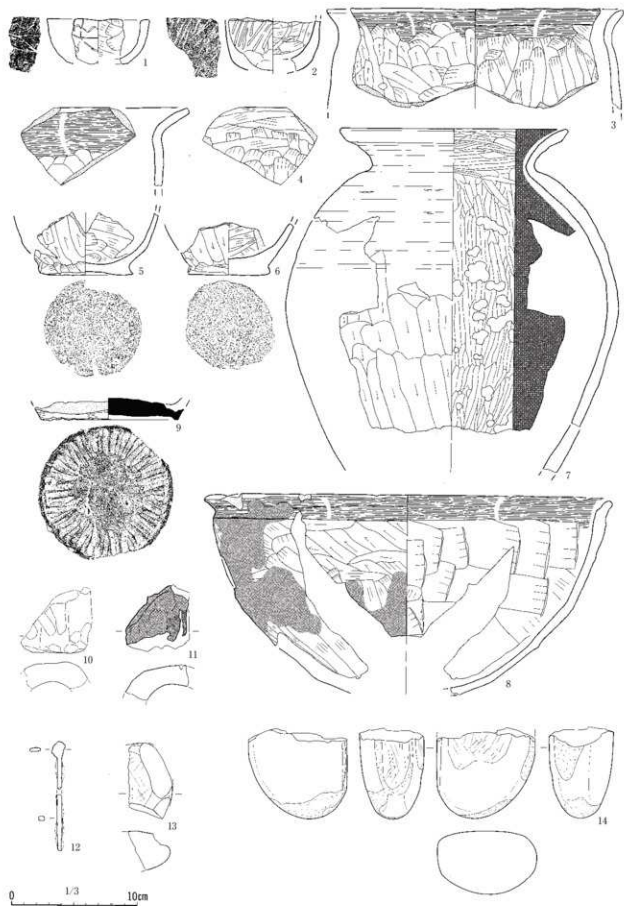


图40 第1号建物跡出土遺物(1)

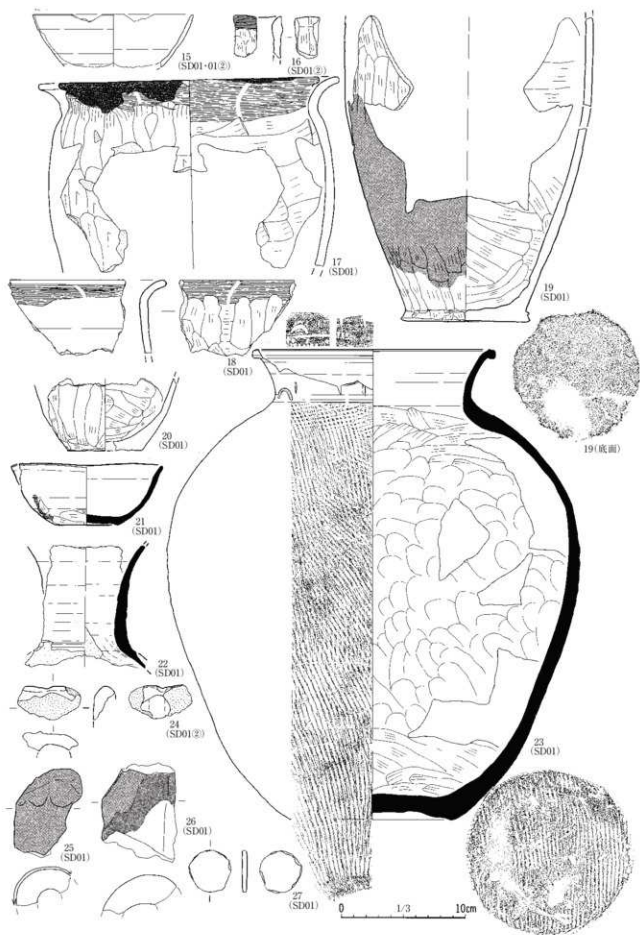


图41 第1号建物跡出土遺物(2)



## 第2号建物跡 (SI02、SD06-07、SB01、遺物集中範囲、図42・43)

【概要】標高約36.4mの平坦地に位置する。調査区際に位置し、南壁のみ検出された。

### 【竪穴住居跡 - SI02】

【位置・確認】8-16～18グリッドに位置し、第Ⅱ層で確認した。

【平面形・規模】南壁2.0mで、平面形は方形を呈する。

【堆積土】ローム粒が少量混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

【壁・床面】壁高は11～33cmで、壁は開きながら立ち上がる。床はロームブロックが混入する黒色土で構築され、床面は起伏がある。

【カマド】南壁東寄りに位置し、残存状況は悪く、袖と火床面の一部分が検出されたのみである。袖は粘土で構築されている。火床面は不整形を呈すると考えられ、にぶい赤褐色に赤変していた。煙道は半地下式と推測されるが明確に確認できなかった。

【柱穴・周溝】柱穴・ピットは検出されなかった。周溝は、幅7～28cm、深さ11～22cmである。

【出土遺物】住居から出土した土器の総重量は0.96kgで、内訳は土師器0.93kg、縄文土器0.03kgである。そのうち土師器小甕(28～32)、甕(33)を図示し、28はカマド支脚として使用されたものである。33は、第2号建物跡(SI02、遺物集中範囲)、SK09、SD02から出土した土師器甕(図43-40、図46-50、図48-56)と同一個体で、遺構間接合した。しかし、農道8号から出土した条痕状沈線を施文する土器は複数個体あることも確認できている。条痕状の沈線は数条単位で施文されているものもあるが、1条ずつ施文されるものも少なくない。横位方向には施文されず、縦位もしくは斜位方向へ無造作に施文されていて格子状もしくは矢羽根状をイメージして施文している可能性があるが、粗雑である。肉眼で観察した限り、胎土には砂礫を少量混入し土師器のものと同様に思えるが、条痕状沈線を有する土師器甕(図48-56)について胎土分析による産地同定を行ったところ瀬谷子産との結果(第4章第5節参照)が出ている。製作技法及び器形は、頸部にはヨコナデが施され(図46-50)、胴部下半は凹凸がなく直線的に底部へつながっていて、底外面は砂底(40)となっている。調査当初は擦文土器かと思っていたが、胎土・器形・整形技法・文様構成など、擦文土器の典型的な特徴とはかけ離れている。したがってこの土器は、擦文土器をイメージして作製した可能性はあるが、基本的に在地の人間が普通の土師器甕をつくり、それに条痕状の沈線を施文したものでないか、との結論に現状で達している。類似した資料は、つがる市石上神社遺跡や青森市三内遺跡などから出土している。

【外周溝 - SD06・07】SD06・07が本住居跡に伴う外周溝である。SD07からSD06に作り替えたと考えられるが、明確な新田は不明である。SD06末端部から鍛造剥片や鉄滓等が出土し、当初はSK04として遺物の取り上げを行ったが、外周溝に接続することが判明したため欠番とした。住居跡の西-北側を囲うように構築されていると考えられるが、調査区際に位置するため、検出されたのは西側末端部のみである。検出された長さはSD06が3.3m、SD07が1.2mである。SD06は幅48～130cm、深さ8～35cmで、末端部で幅が広がり浅くなっている。底面には起伏があって末端部以外では概ね南から北に向かって傾斜している。堆積土は黒色土を主体とし、底面付近にはロームが多く混入する。

【出土遺物】外周溝覆土から出土した土器の総重量は0.46kgで、内訳は土師器0.35kg、縄文土器0.11kgである。そのうちSD06から出土した土師器甕(34・35)、小甕(36)、台石(37)を図示した。37は外面に鉄が付着した台石の破片で、外周溝末端部から出土している。小破片のため、当初の大きさ・



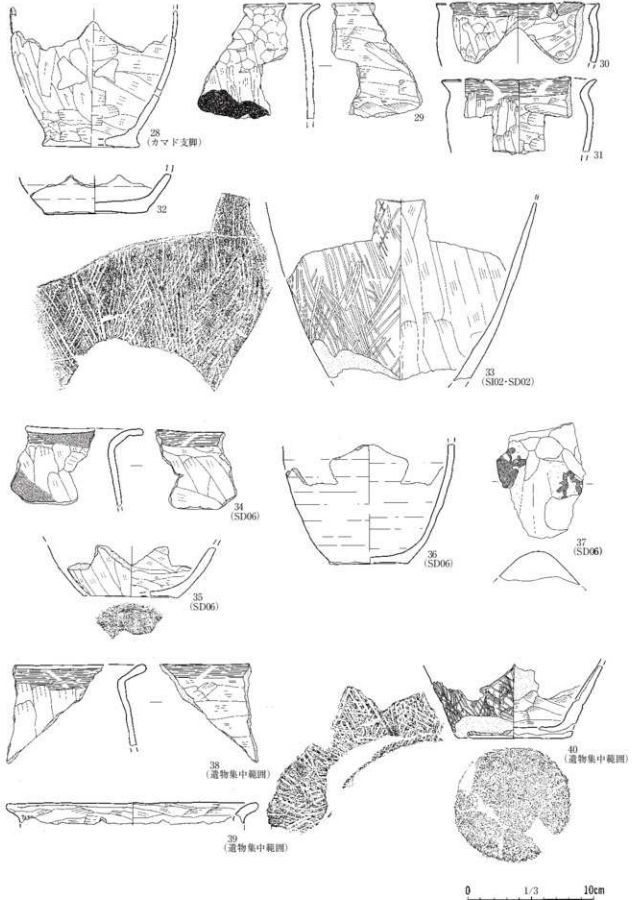


図43 第2号建物跡出土遺物

形態等は不明であるが、2面に敲打痕と鉄の付着が認められる。石材はデイサイトである。また、鉄滓や鍛造剥片も外周溝末端部から出土しており、重量にして鉄滓は3,254.9g、鍛造剥片は29.7g出土した。鉄滓は小型のものが多く、中には小さく打ち割られたものもあった。住居に伴うと考えられる遺物集中範囲でも鉄滓と鍛造剥片が出土しており、外周溝に廃棄した可能性が考えられる。

【掘立柱建物跡-SB01】住居のカマド方向、南側に位置する。SP01～05・10・11・21・22で構成され、桁行2間、梁行2間である。桁行、梁行ともに総長は3.7mである。柱穴の掘り方は径25～58cmの円形または楕円形で、深さは32～57cmである。SP01・02・04で柱痕が確認された。

【その他の施設】住居跡南側の第Ⅱ層上面で、長軸51cm、短軸47cmの不整形範囲で焼土が検出され、住居に伴う屋外炉の可能性もある。さらに、焼土の南側では第Ⅱ層上面で長軸約80cm、短軸約58cmの楕円形の範囲で土師器片や鉄滓・鍛造剥片が集中して出土した。当初はSK06として遺物の取り上げ等を行ったが、プランも壁の立ち上がりも明確にとらえられなかったため、遺物集中範囲とした。出土した土師器の重量は0.65kgで、土師器甕(38～40)を図示した。40は、第2号建物跡(SI02・遺物集中範囲)、SK09、SD02から出土した土師器甕(図43-33、図46-50、図48-56)と同一個体で、遺構間接合している。この土器の特徴等は第2号建物跡(SI02)出土遺物の項に記載してある。鉄滓・鍛造剥片はそれぞれ87.2g、11.6gが出土し、外周溝同様鉄滓は小型のものが多く、中には小さく打ち割られたものもあった。

【小結】外周溝と掘立柱建物跡が付属する住居跡である。調査区際に位置するため、住居部分は南壁が検出されたのみで、詳細は不明である。外周溝堆積土及び遺物集中範囲からは鉄滓や鍛造剥片が出土し、鍛冶に関連するものと考えられる。(田中)

### 第3号竪穴住居跡(SI03、図44)

【概要】標高約34.8～35.3mの西斜面に位置する。調査区際に位置し、南東半のみ検出された。

【位置・確認】8-42グリッドに位置し、第Ⅴ層上面で確認した。

【平面形・規模】南東壁は3.7mで、平面形は方形を呈する。

【堆積土】黒褐色土を主体とし、第9層には白頭山苦小牧火山灰が自然堆積する。なお火山灰分析の結果、第9層は白頭山苦小牧火山灰を主体とする層層であってその下部に十和田a火山灰と十和田八戸火山灰の混合土が堆積する、との結果を得た(第4章第1節参照)。

【壁・床面】壁高は35～84cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は第Ⅵ層をそのまま床面とする部分と暗褐色土が混入するロームで構築される部分がある。床面はほぼ平坦である。

【カマド・柱穴・周溝】検出されなかった。

【その他の施設】南東壁中央に、出入り口と考えられる施設が住居東隅と南東壁中央の2カ所検出された。住居東隅のものは、住居の隅を長さ1.5m、幅76～84cm、深さ1～33cmの溝状に掘り込み、この底面に長軸31～42cm、深さ8～17cmの楕円形の掘り込みを連続して並べた階段状の施設である。南東壁に位置するものは、住居外に0.4m延びた幅47～60cm、深さ3～32cmの溝状の掘り込みの底面に段差を有するものである。

【出土遺物】覆土から出土した土器の総重量は0.62kgで、内訳は土師器0.006kg、須恵器0.07kg、縄文土器0.54kgである。図示し得る平安時代の遺物はなく、土器片僅2点(41・42)を図示した。

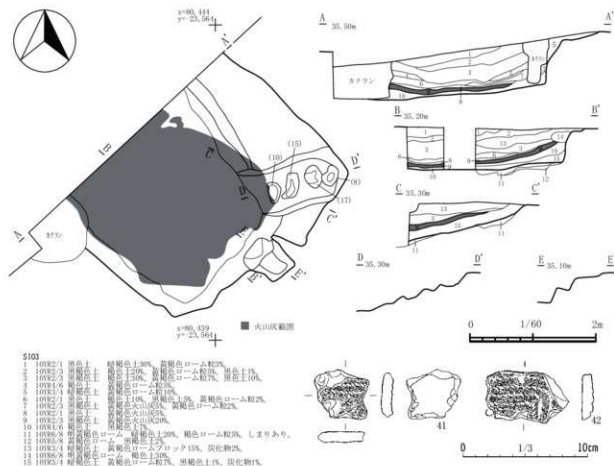


図44 第3号竪穴住居跡と出土遺物

【小結】他の住居跡に比べ、掘り込みが深く、出入り口と考えられる施設が構築されている。カマドが検出されなかったことから、竪穴遺構の可能性も考えられる。 (田中)

## (2) 土坑

農道8号で検出された土坑は12基である。時期不明なものもあるが、多くは平安時代のもと考えられる。縄文時代のもと考えられるのはSK08・10・12の3基で、いずれも調査南西端の標高約35.4～36.0mの南西斜面に構築されている。SK04はSD06の末端部であることが判明し、SK02・06・14は調査段階あるいは整理段階において土坑ではないと判断されたことから、欠番とした。

### 第1号土坑 (SK01、図45)

【位置・確認】8-12グリッドに位置し、標高は約36.0mである。第Ⅱ層で確認した。

【平面形・規模】長軸101cm、短軸81cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは16cmである。

【堆積土】黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

【壁・底面】壁は開きながら立ち上がり、断面は皿状を呈する。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

### 第3号土坑 (SK03、図45・46)

【位置・確認】8-16グリッドに位置し、標高は約36.3mである。第Ⅱ層で確認した。

【平面形・規模】長辺160cm、短辺157cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは73cmである。

[堆積土] 黒色土を主体とする。全体的に黒褐色土とローム粒が混入し、第2・6・7層ではローム粒の混入がやや多い。自然堆積と考えられる。第8・9層は掘り方と考えられる。

[壁・底面] 土坑東側では壁は開きながら立ち上がるが、西側では袋状を呈する。底面には起伏がある。掘り方底面からピットが3基検出された。

[出土遺物] 覆土及び掘り方から出土した土器の総重量は1.9kgで、内訳は土師器1.8kg、須恵器0.1kgである。そのうち、土師器甕(43・44)、小甕(45～47)、須恵器坏(48)を図示した。43は掘り方から出土した土師器甕で、他は覆土中層より上部から出土したものである。

#### 第5号土坑 (SK05、図45)

[位置・確認] 8-19グリッドに位置し、標高は約36.6mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸147cm、短軸92cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは14cmである。

[堆積土] 黒褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面には緩やかな起伏があるが、ほぼ平坦である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第7号土坑 (SK07、図45・46)

[位置・確認] 8-41・42グリッドに位置し、標高は約35.0mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際位置するため、北西半のみ検出した。直径約170cmの円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは80cmである。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土が混在し、第3層には白頭山苦小牧火山灰がブロック状に堆積し、自然堆積と考えられる。火山灰分析では第3層は白頭山苦小牧火山灰、その上位は白頭山苦小牧火山灰と十和田a火山灰の混合層、その下位は再堆積した十和田八戸火山灰との結果を得た(第4章第1節参照)。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 底面直上及び覆土から出土した土器の総重量は0.23kgで、内訳は土師器0.12kg、須恵器0.03kg、縄文土器0.08kgである。そのうち、覆土上層から出土した土師器甕(49)を図示した。

#### 第8号土坑 (SK08、図45・46)

[位置・確認] 8-41グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SP16と重複し、本土坑が新しい。

[平面形・規模] 直径100cmの円形を呈する。検出面からの深さは57cmである。

[堆積土] 底面直上の第5層は黒褐色土が混入する褐色土で人為堆積の可能性があるが、それより上層は黒色～暗褐色土で、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がるが、壁中央がやや括れる。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した縄文土器の重量は0.02kgで、図示し得る遺物はなかった。

#### 第9号土坑 (SK09、図45)

[位置・確認] 8-17グリッドに位置し、標高は約36.3mである。第II層で確認した。

[平面形・規模] 長軸102cm、短軸69cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは19cmである。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土が混在し自然堆積と考えられる。堆積土中には焼土や炭化物が混入する。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。

[出土遺物] 底面出土土器の総重量は0.08kgで、内訳は土師器0.04kg、縄文土器0.04kgである。底面出土の土師器甕(50)は、第2号建物跡、SD02出土土器と遺構間接合しており、図43-33・40、図48-56とも同一個体である可能性が高い。この土器の特徴等は第2号建物跡(SI02)出土遺物の項に記載してある。

#### 第10号土坑 (SK10、図45)

[位置・確認] 8-40グリッドに位置し、標高は約35.8mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸78cm、短軸66cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは36cmである。

[堆積土] 褐色土を主体とし、人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第11号土坑 (SK11、図45)

[位置・確認] 8-41グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第IV～V層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、北西半のみ検出した。検出された部分での長軸は97cmで、楕円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは41cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面には起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した縄文土器の重量は0.02kgで、図示し得る遺物はなかった。

#### 第12号土坑 (SK12、図45)

[位置・確認] 8-40グリッドに位置し、標高は約35.8mである。第V層上面で確認した。

[重複] SP30と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 長軸85cm、短軸74cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは46cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は平坦である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第13号土坑 (SK13、図45・46)

[位置・確認] 8-21・22グリッドに位置し、標高は約36.7mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、南東半のみ検出した。検出された長辺は166cmで、方形または長方形を呈すると推測される。検出面からの深さは24cmである。

[堆積土] 黒色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の総重量は0.25kgで、内訳は土師器0.17kg、縄文土器0.08kgである。覆土上層から出土した土師器甕(51)、ミニチュア鉢(52)を図示した。

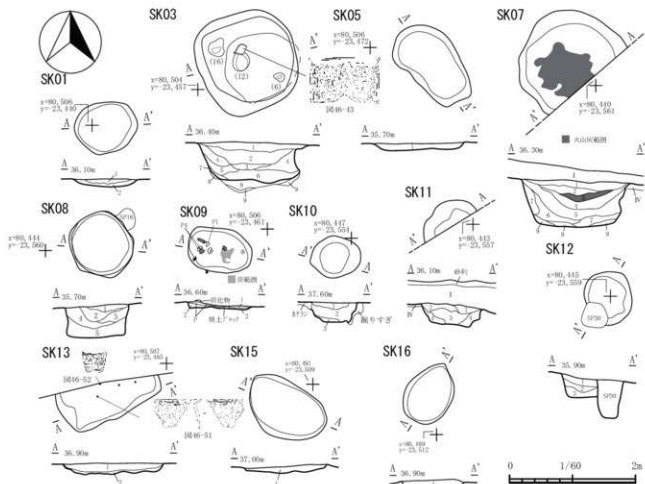
#### 第15号土坑 (SK15、図45)

[位置・確認] 8-27グリッドに位置し、標高は約36.7mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸136cm、短軸89cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは15cmである。

[堆積土] 黒褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。



- SK01**  
 1 10YR2/3 黒褐色土 褐色土2%, にぶい黄褐色土1%  
 2 10YR2/2 黒褐色土 褐色土18%, 10YR6/1にぶい黄褐色ローム粒2%, 10YR7/4にぶい黄褐色ローム粒1%
- SK03**  
 1 10YR2/1 黒色土 黒褐色土2%, 明黄褐色ローム粒2%, 明褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 2 10YR2/1 黒色土 黒褐色土15%, 明黄褐色ローム粒7%, 明褐色ローム粒2%, 炭化物3%  
 3 10YR2/1 黒色土 黒褐色土10%, 黄褐色ローム粒2%, 明黄褐色ローム粒2%, 炭化物5%, ややもろい  
 4 10YR2/1 黒色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒7%, 褐色ローム粒2%, 黄褐色ローム粒1%, 炭化物5%  
 5 10YR2/1 黒色土 黒褐色土25%, 明褐色ロームブロック2%, 明黄褐色ローム粒1%  
 6 10YR2/1 黒色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%, 明褐色ローム粒1%, 黄褐色ロームブロック2%  
 7 10YR2/2 黒褐色土 黒褐色土2%, 黄褐色ローム粒10%  
 8 10YR6/6 明黄褐色ローム 黄褐色土10%, 黄褐色ローム粒10%, 洗黄褐色ローム粒5%  
 9 10YR6/6 明黄褐色ローム 洗黄褐色土10%, 黄褐色ローム粒7%, 硬土粒1%
- SK05**  
 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR2/2黒褐色土10%, 暗褐色土10%, 黄褐色ローム粒3%, 明黄褐色ローム粒2%, 炭化物1%  
 2 10YR3/3 暗褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色ローム粒1%  
 3 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土3%, 褐色土10%, 黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 4 10YR2/2 暗褐色土 白粘土大粒状20%, 黒色土10%, 炭化物1%  
 5 10YR2/2 暗褐色土 白粘土大粒状15%, 明黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 6 10YR3/3 暗褐色土 10YR3/4暗褐色土10%, 黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 7 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土20%, 黄褐色ローム粒1%  
 8 10YR3/6 暗褐色土 暗褐色土10%, 黄褐色ローム粒7%  
 9 10YR5/6 黄褐色土 暗褐色土1%, 灰白色土2%  
 10 10YR3/4 暗褐色土 明黄褐色土2%, 黄褐色ローム粒1%
- SK07**  
 1 10YR2/3 黒褐色土 10YR2/2黒褐色土10%, 暗褐色土10%, 黄褐色ローム粒1%, 洗黄褐色ローム粒1%  
 2 10YR2/1 黒色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒1%, 洗黄褐色ローム粒1%  
 3 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土20%, 明褐色ローム粒1%  
 4 10YR2/3 暗褐色土 黒色土2%, 褐色土3%, 明黄褐色ローム粒1%  
 5 10YR1/6 褐色土 黒褐色土30%, 黄褐色ローム粒20%, 明黄褐色ロームブロック2%, 炭化物1%
- SK08**  
 1 10YR2/3 黒褐色土 黒色土10%, 黄褐色ローム粒1%, 洗黄褐色ローム粒1%  
 2 10YR2/1 黒色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒1%, 洗黄褐色ローム粒1%  
 3 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土20%, 明褐色ローム粒1%  
 4 10YR2/3 暗褐色土 黒色土2%, 褐色土3%, 明黄褐色ローム粒1%  
 5 10YR1/6 褐色土 黒褐色土30%, 黄褐色ローム粒20%, 明黄褐色ロームブロック2%, 炭化物1%
- SK09**  
 1 10YR2/2 黒褐色土 黒褐色土10%, 褐色ローム粒2%, 硬土粒2%  
 2 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色土2%, 明黄褐色ローム粒3%, 褐色ローム粒2%
- SK10**  
 1 10YR2/4 暗褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 2 10YR3/4 暗褐色土 褐色土20%, 明黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 3 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒10%, 明褐色ローム粒1%, 炭化物1%
- SK11**  
 1 10YR3/4 暗褐色土 明黄褐色ローム粒3%, 灰白色ローム粒1%, しまりあり  
 2 10YR3/4 暗褐色土 明黄褐色ローム粒3%, しまりあり  
 3 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色ローム粒3%, 明黄褐色ロームブロック1%, 明黄褐色ローム粒1%, しまりあり  
 4 10YR1/6 褐色土 黄褐色ローム粒1%, 黄褐色ロームブロック1%, 明黄褐色ローム粒1%, 明黄褐色ロームブロック1%, しまりあり
- SK12**  
 1 10YR2/2 黒褐色土 褐色土3%, 黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 2 10YR1/6 褐色土 黒褐色土2%, 黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%  
 3 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒1%, 明黄褐色ローム粒1%, 炭化物1%
- SK13**  
 1 10YR2/1 黒色土 黒褐色土2%, 黄褐色ローム粒1%, 炭化物3%  
 2 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒3%, 黄褐色ロームブロック10%
- SK15**  
 1 10YR2/2 黒褐色土 明黄褐色ロームブロック2%, 明褐色ロームブロック1%, 黄褐色ローム粒2%  
 2 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒3%, 黄褐色ロームブロック10%
- SK16**  
 1 10YR1.7/1 黒色土 黄褐色ローム粒3%

図45 土坑



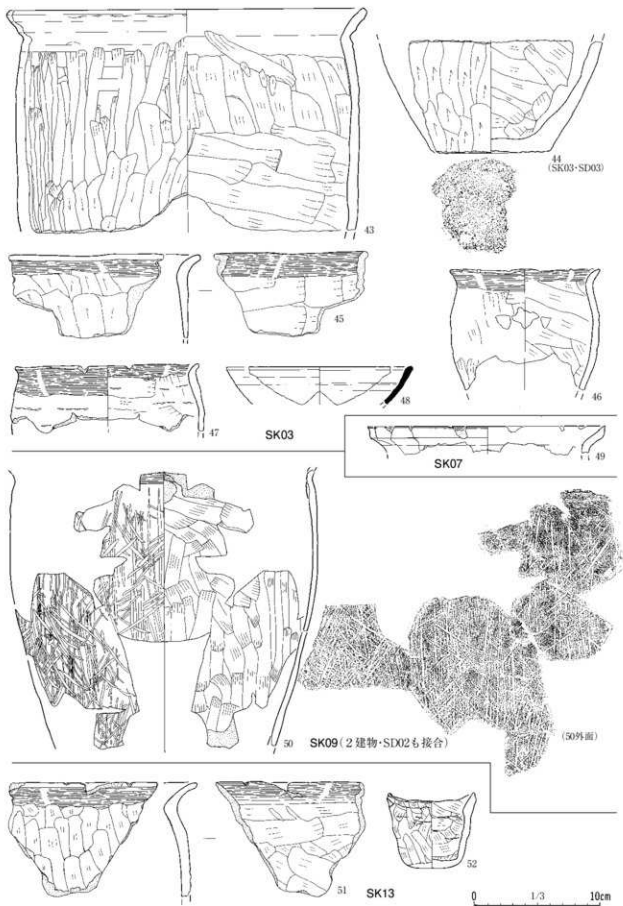


图46 土坑出土遺物

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

#### 第16号土坑 (SK16、図45)

【位置・確認】8-28グリッドに位置し、標高は約367mである。第V層上面で確認した。

【平面形・規模】長軸102cm、短軸74cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは12cmである。

【堆積土】黒色土の単層である。

【壁・底面】壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏が見られる部分もあるが、ほぼ平坦である。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

(田中)

### (3) 溝跡

農道8号で検出された溝跡は9条で、このうちSD01・05はSI01に伴う外周溝・排水溝、SD06・07はSI02に伴う外周溝であるため、それぞれの建物跡の項で記載している。ここでは単独の溝跡である5条について記述する。なおSD04は調査段階で遺構ではないと判断されたため、欠番とした。

#### 第2号溝跡 (SD02、図47・48)

【位置・確認】8-13・14グリッドに位置し、標高は約36.0～36.4mである。第IV層上面で確認した。

【平面形・規模】調査区を北西-南東方向に横切る直線状の溝跡で、検出された長さは9.8mである。幅は32～60cm、検出面からの深さは22～47cmである。

【堆積土】ローム粒が混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

【壁・底面】壁は開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北西から南東に向かって傾斜している。

【出土遺物】覆土から出土した土器の総重量は1.21kgで、内訳は土師器1.17kg、須恵器0.04kgである。覆土から散発的に土師器が出土しているが、北西端でまとまって出土した。そのうち、土師器坏(53・54)、甕(図46-50、55～57)、須恵器鉢(58)、台石?(59)を図示した。図46-50、56は、第2号建物跡(SI02、遺物集中範囲)、SK09から出土した土師器甕(図43-33・40、図46-50)と同一個体で、遺構間接合している。この土器の特徴等は第2号建物跡(SI02)出土遺物の項に記載してある。なお、条痕状沈線を有するこの土師器甕(56)について胎土分析による産地同定を行ったところ、瀬谷子産との結果を得た(第4章第5節参照)。須恵器鉢(58)は頸部に刻書が施されている。台石(59)は厚さ1.6cmの板状で、もとは方形であったと考えられる。両面に敲打痕が見られ、部分的に黒く変色している。

#### 第3号溝跡 (SD03、図47)

【位置・確認】8-10グリッドに位置し、標高は約35.9～36.1mである。第II層上面で確認した。

【平面形・規模】調査区を南北方向に横切る直線状の溝跡で、検出できた長さは5.2mである。幅39～53cmで、検出面からの深さは20～39cmである。

【堆積土】混入物の少ない黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

【壁・底面】壁は開きながら立ち上がり、底面中央部が凹む。底面は北から南に向かって傾斜している。

【出土遺物】覆土から出土した土器の総重量は0.25kgで、内訳は土師器0.23kg、縄文土器0.02kgである。図示し得る資料はなかった。

#### 第8号a・b溝跡 (SD08a・b、図47・48)

【位置・確認】8-22・23グリッドに位置し、標高は約36.5～36.7mである。第IV層上面で確認した。



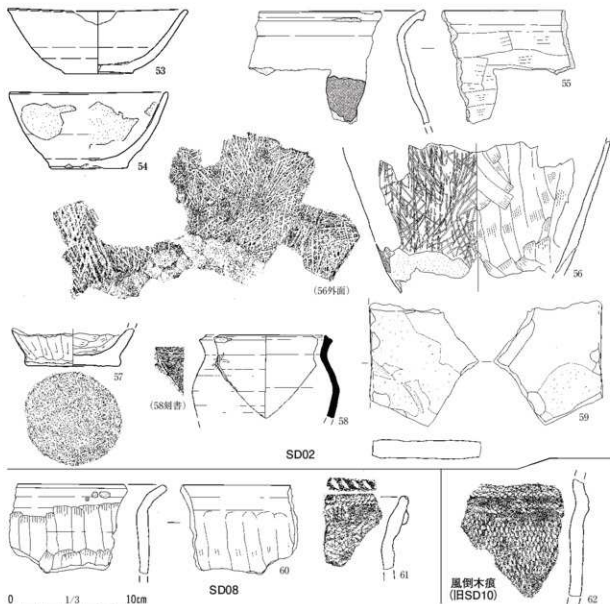


図48 溝跡出土遺物

確認当初は1条の溝跡と考えていたが、土層断面B-B'では重複が認められ、新しい溝跡を第8a号、古い溝跡を第8b号とした。

[平面形・規模] 第8a号は弧状を呈する溝跡で、長さ6.0m、幅63～73cmである。検出面からの深さは30～50cmである。第8b号は調査区間に位置するため、東端のみ検出された。検出された長さは4.8mで、幅47cmの直線状の溝跡である。検出面からの深さは40～49cmである。

[堆積土] 第8a号はローム粒が混入する黒色土を主体とするが、第3層は黒色土を混入するローム層で人為堆積と考えられる。第8b号は黒褐色土を主体とする。

[壁・底面] どちらの溝跡も壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の重量は0.08kgである。図示したのは土師器甕(60)、縄文時代前期末葉の深鉢土器片(61)である。

**第9号溝跡 (SD09、図47)**

[位置・確認] 8-26-27グリッドに位置し、標高は約36.6～36.7mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SX01と重複し、本溝跡が新しく、SP34より古い。

[平面形・規模]調査区を北西-南東方向に横切る直線状の溝跡である。検出された長さは5.6mである。幅は23～35cm、検出面からの深さは8～28cmである。

[堆積土] 混入物の少ない黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏があるが、北西から南東に向かって傾斜している。

[出土遺物] 覆土から出土した縄文土器の重量は0.04kgで、図示し得る資料はなかった。(田中)

#### (4) 掘立柱建物跡・ピット列・ピット

農道8号で検出されたピットは52基であるが、このうち10基が第2号建物跡に付属する第1号掘立柱建物跡を構成するものである。この掘立柱建物跡の詳細は建物跡の項で記載しており、単独ピットである42基の詳細については表11の計測表にまとめた。農道8号では、これらのピットのほかにピット列が2列(SX01・02、図49)検出された。この2列のピット列は約15m離れているが、SX01北東端の延長線上にSX02が位置しており、同一のものである可能性も考えられる。明確な構築時期は不明だが、SX01周辺で埋設土器が検出され、ピット列周辺から縄文土器が出土していることなどから縄文時代の可能性もある。

##### 第1号ピット列(SX01、図49)

[位置・確認] 8-26～28グリッドに位置し、標高約36.6～36.7mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模]32基のピットが緩やかな弧状に並び、長さは8.6mを計る。ピットの規模は径13～34cm、検出面からの深さは14～39cmである。個々のピットは図中の計測表を参照されたい。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] Pit24とPit26の覆土から出土した縄文土器の重量は0.054kgだが、図示し得なかった。

表11 農道8号SP計測表

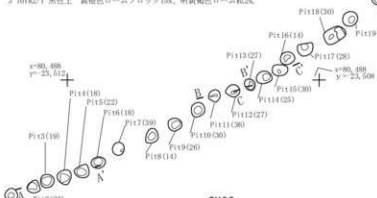
SP 番号	グリッド	位置		標高 (m)	規模(cm)			備考
		X	Y		長軸	短軸	深さ	
1	8-16	80.501	-23.457	36.2	48	35	50	SB01
2	8-16	80.501	-23.458	36.2	49	26	43	SB01
3	8-16	80.505	-23.458	36.2	58	47	44	SB01
4	8-16	80.503	-23.459	36.3	47	34	57	SB01
5	8-16	80.507	-23.459	36.3	(33)	30	48	SB01
6	8-16	80.503	-23.458	36.3	42	25	47	SB01
7	8-16	80.504	-23.459	36.3	32	21	17	
8	8-35	80.461	-23.539	36.4	(23)	(21)	25	
9	8-36	80.460	-23.540	36.4	(37)	(29)	49	
10	8-17	80.504	-23.461	36.3	42	38	40	SB01
11	8-17	80.506	-23.461	36.3	52	26	49	SB01
12	8-35	80.461	-23.539	36.4	41	31	68	
13	8-35	80.461	-23.539	36.4	(25)	20	22	
14	8-35	80.461	-23.538	36.4	27	23	30	
15	8-41	80.442	-23.561	35.4	51	39	60	
16	8-41	80.444	-23.558	35.6	(31)	(23)	19	
17	8-41	80.444	-23.560	35.5	37	30	57	
18	8-37	80.457	-23.543	36.3	20	18	32	
19	8-37	80.453	-23.546	36.3	55	43	95	
20	8-17	80.505	-23.463	36.4	26	16	35	
21	8-17	80.505	-23.462	36.4	42	35	61	SB01
22	8-17	80.506	-23.462	36.4	(25)	25	32	SB01
23	8-43	80.437	-23.567	34.4	58	53	57	
24	8-43	80.436	-23.568	34.2	27	26	38	
25	8-43	80.435	-23.568	33.8	35	25	39	
26	8-29	80.487	-23.515	36.7	43	24	20	
27	8-30	80.483	-23.519	36.7	28	21	16	
28	8-41	80.446	-23.560	35.9	(30)	(11)	55	
29	8-41	80.444	-23.559	35.7	32	25	29	
30	8-41	80.445	-23.559	35.8	40	39	61	
31	8-27	80.489	-23.508	36.7	20	19	11	
32	8-27	80.489	-23.507	36.7	26	17	12	
33	8-27	80.490	-23.507	36.7	34	27	29	
34	8-27	80.490	-23.505	36.7	27	20	32	
35	8-26	80.491	-23.505	36.7	22	19	29	
36	8-25	80.494	-23.499	36.7	17	15	11	
37	8-25	80.494	-23.500	36.7	17	14	20	
38	8-25	80.494	-23.500	36.7	19	17	17	
39	8-25	80.494	-23.500	36.7	22	18	17	
40	8-26	80.492	-23.505	36.7	26	21	9	
41	8-31	80.482	-23.524	36.7	28	23	29	
42	8-34	80.469	-23.535	36.5	30	(15)	12	
43	8-35	80.464	-23.540	36.5	42	(27)	45	
44	8-35	80.463	-23.541	36.5	27	21	29	
45	8-36	80.462	-23.541	36.5	31	24	30	
46	8-36	80.462	-23.542	36.4	34	32	64	
47	8-27	80.492	-23.507	36.7	29	27	28	
48	8-26	80.493	-23.507	36.7	25	24	11	
49	8-26	80.494	-23.506	36.7	24	21	26	
50	8-26	80.494	-23.504	36.7	26	(22)	16	
51	8-23	80.505	-23.491	36.7	39	(30)	17	
52	8-29	80.484	-23.518	36.7	30	26	29	



SX01



- SX01 (A-A')**
- 1 10/82/1 埋込土 黄褐色ローム粒10%
  - 2 10/82/2 埋込土 黄褐色ローム粒2%
  - 3 10/82/3 埋込土 黄褐色ローム粒2%
- SX01 (B-B')**
- 1 10/82/1 埋込土 明黄褐色ローム粒10%
  - 2 10/82/2 埋込土 明黄褐色ロームブロック8%、明黄褐色ローム粒2%
- SX01 (C-C')**
- 1 10/82/1 埋込土 明黄褐色ローム粒7%
  - 2 10/82/2 埋込土 黄褐色土20%、黄褐色ローム粒10%
  - 3 10/82/3 埋込土 黄褐色ロームブロック18%、明黄褐色ローム粒2%



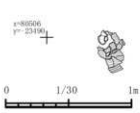
**表10 SX02ピット計測表**

Pit 番号	規模(cm)		
	長軸	短軸	深さ
1	11	9	9
2	18	14	19
3	28	18	11
4	26	20	20
5	15	15	16
6	18	16	10
7	23	13	17
8	20	16	7
9	18	13	7
10	22	16	7
11	13	11	7

表9 SX01ピット計測表

Pit 番号	規模(cm)		
	長軸	短軸	深さ
1	20	19	28
2	20	18	23
3	22	21	19
4	23	22	18
5	22	20	22
6	22	18	18
7	20	18	20
8	23	19	14
9	22	20	26
10	22	22	20
11	18	18	26
12	20	19	27
13	18	17	27
14	24	19	25
15	25	18	20
16	22	20	14
17	25	19	17
18	34	23	20
19	24	23	27
20	24	23	12
21	22	15	6
22	13	11	7
23	22	21	16
24	24	23	21
25	26	18	23
26	20	17	28
27	17	14	10
28	23	22	25
29	28	22	24
30	28	24	24
31	21	17	16
32	27	23	19

SX02



P2土器出土状況

SX01・02遺構配置図



図49 ピット列

## 第2号ピット列 (SX02、図49)

[位置・確認] 8-22・23グリッドに位置し、標高は約36.7mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 11基のピットがほぼ一直線上に並び、長さは3.0mを計る。ピットの規模は径11~28cm、検出面からの深さは7~20cmである。個々のピットについては図中の計測表を参照されたい。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする。

[出土遺物] 本遺構の北東側遺構外から円筒下層d2式土器(図51-75・76)が出土しており、当該時期の可能性ある。(田中)

## (5) 埋設土器

## 第1号埋設土器 (SR01、図50)

[位置・確認] 8-25グリッドに位置し、標高は約36.7mである。第II~III層上面で確認した。土器は掘り方はほぼ中央に正立状態で埋設されていた。

[平面形・規模] 掘り方は長軸28cm、短軸23cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmである。

[堆積土] 土器内堆積土・掘り方堆積土ともに黒色土を主体とするが、掘り方堆積土の方がローム粒を多く含む。

[出土遺物] 埋設されていた土器(63)は、縄文時代前期円筒下層d2式の深鉢形土器である。(田中)

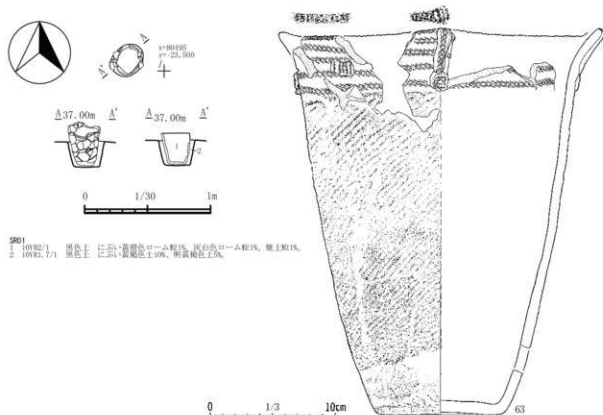


図50 第1号埋設土器

## 2 遺構外の出土遺物 (図51～54)

遺構外出土遺物のうち図示したのは、縄文時代の遺物 (64～149) と平安時代の遺物 (150～160) である。なお農道8号の遺構外からは、縄文土器65.3kg、土師器5.1kg、須恵器0.6kg、合計71.0kgの土器類が出土した。

縄文時代の遺物は、土器 (64～100)、石器 (101～114)、土製品 (115～146)、石製品 (147～149) がある。土器は、前期後葉の円筒下層c式土器 (64)、前期末葉から中期初頭の円筒下層d式から円筒上層a式前後のもの (65～91)、中期後半のもの (92～94)、後期後半と思われるもの (95～98)、晩期のもの (99・100) がある。前期末葉から中期初頭のもの、口縁部に平行する無節縄文原体の側面圧痕を主文様 (77～82) とし、波状口縁波頂部から垂下する粘土紐の貼り付けがみられるもの (77・78) もある。83・84は同一個体で口唇は押圧によって小波状をなし、文様は縦走する条痕状の沈線によって施文されている。91は台付き土器の台部破片で、透かし穴が施されている。中期後半のものは、口縁に沿って粘土紐の貼り付けを施すもの (92・93)、橋状突起を有するもの (94) がある。後期後半のものはいずれも粗製土器で、95・96の口唇部は面取りしている。晩期のものは大洞B式期の鉢胴部片 (99)、大洞C1式土器の注口土器注口部 (100) がある。100の接合面には、赤色顔料が付着している。石器は、石鏃 (101～103)、石槍 (104)、石匙 (105・106)、不定形石器 (108～111)、磨石 (112・113)、敲石 (114) がある。土製品は動物を模した可能性がある土製品 (115)、円盤状土製品 (116～123)、土器片鏢 (124～146) があり、石製品は石製円盤 (107)、石製品 (147～149) がある。比較的多く出土した土器片鏢は、土器の割れ口や口縁突起の挟りを利用しつつ、人為的に挟りを1～3カ所加えて、2点絡め (124～134)、3点絡め (135～137)、4点絡め (138～146) としたものと想定できる。土器破片の周縁には磨りや敲きで整形しているものもみられる。土器自体の帰属時期は、縄文時代前期・中期のものが多くが後期のもの (145) もある。したがって土器破片を鏢 (おもり) に加工したのは縄文時代後期 (十腰内I式期) 以降と考えられるが、本農道ではそれ以降平安時代になるまでまとまった遺構は検出されないことから、平安時代に鏢 (おもり) に加工し使用した可能性が考えられる。須恵器破片である155には挟りはないが周縁に敲打がみられることから、土器片を整形して鏢 (おもり) として使用したことが想定できる資料であり、平安時代に土器片鏢を使用した可能性は十分考えられる。また、1建物 (SD01) から土師器壺破片を円形に加工した円盤状土製品 (図41-27) も出土しており、土器片利用の時期について再考の余地がある。

平安時代の遺物は、土師器の坏 (150)、ミニチュア鉢 (151・152)、甕 (153)、須恵器の坏 (154～156)、鉢 (157)、壺 (158)、土鈴 (159)、土玉 (160) がある。土師器の152、須恵器の154・156・158には焼成後に施された刻書があり、155の周縁には敲打がみられることから鏢として使用された可能性がある。159は土鈴の棒状柄部で、上部に貫通孔がある。 (神)





图51 遺構外出土遺物 (1)

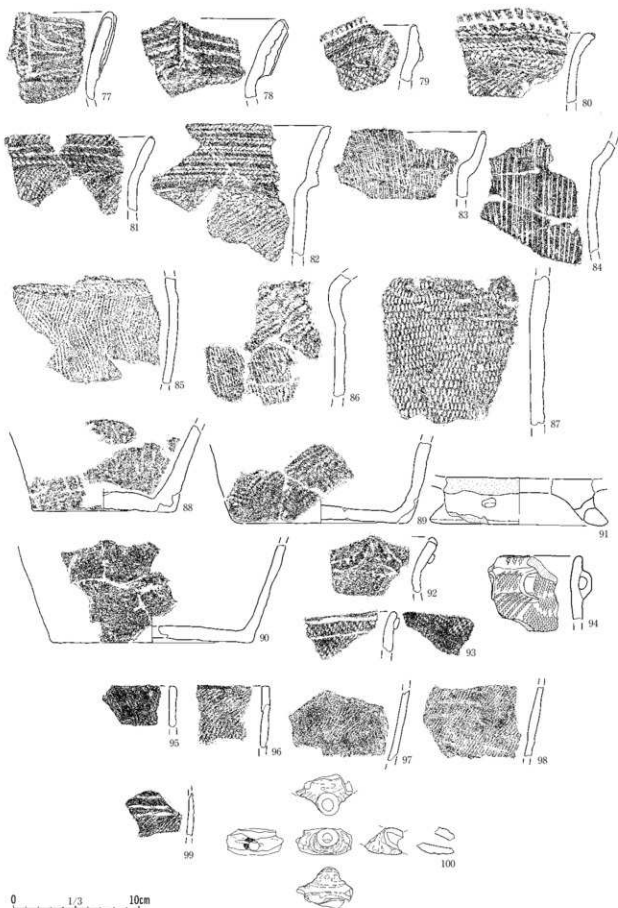


图52 遺構外出土遺物(2)



図53 遺構外出土遺物 (3)



图54 遺構外出土遺物(4)

## 3 遺物観察表

表12 農道8号出土土器類 観察表

図録番号	遺物番号	遺構名	出土位置	種類	器種	部位	計測(cm)		外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (検出調整)		
							口径	高さ					
40	1	建物	S301 床面直上P10	土師器	1ニチュア鉢	体部上半	8(3)	-	3(6)	ナデ, ぬね	ナデ		
40	2	1建物	S301 覆土	土師器	1ニチュア鉢	体部下半	-	-	4(3)	ハケ目?, オヤエ	ナデ		
40	3	1建物	S301 覆土, コガウさん畑表	土師器	土師部	底	2(8)	-	8(6)	ヨコナデ, ヘラケズリ, ヘラナデ	ナデ, ヨコナデ		
40	4	1建物	S301 焼土層P1	土師器	甕	口縁部	-	-	16(2)	オヤエ, ヨコナデ	ナデ		
40	5	1建物	S301 覆土	土師器	甕	底部	-	-	7(6)	ヘラケズリ, ナデ	ヘラナデ		
40	6	1建物	S301 覆土	土師器	甕	底部	-	-	6(2)	ヘラケズリ, ナデ	ユビナデ		
40	7	1建物	S301 覆土, SK09直上中層P6-6-7-8-9-10-11-12-13-14-15-16-17-18-19-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30-31-32-33-34-35-36-37-38-39-40-41-42-43-44-45-46-47-48-49-50-51-52-53-54-55-56-57	土師器	甕	口縁部	8(1)	-	2(4)	輪ね, ロクロ, ヘラケズリ, ヘラナデ, 化粧貼土付着	1ガキ, 黒色点状, ハケ目	厚肌・ハネ多い	
40	8	1建物	S301 覆土	土師器	甕	体部上半	3(2)	-	1(5)	ヘラケズリ, ヘラナデ, ヨコナデ, 化粧貼土付着	ヘラナデ, ヨコナデ		
40	9	1建物	S301 焼土層P2, 焼土直上P1, 覆土	灰土器	甕	底部	-	-	1(1)	ナデ	ユビナデ	菊花文	
41	15	1建物	SD01 覆土中層P13, 下層土	土師器	杯	体部上半	1(3)	-	4(2)	ロクロ	ロクロ		
41	16	1建物	SD01 覆土	土師器	1ニチュア鉢	体部上半	-	-	3(3)	ヨコナデ, ナデ	ナデ		
41	17	1建物	SD01 覆土中層P17-39-50-56-72	土師器	甕	体部上半	2(4)	-	1(5)	ヨコナデ, ヘラケズリ, ヘラナデ, 黒色付着物	輪ね, ヘラナデ, ヨコナデ, 黒色付着物		
41	18	1建物	SD01 覆土中層P5	土師器	甕	口縁部	-	-	6(6)	ロクロ?, ヨコナデ	ナデ, ヨコナデ		
41	19	1建物	SD01 覆土中層P25-46-66-67-94-96, 覆土中層, 遺構P8-4土層	土師器	甕	体部下半	-	-	10(2)	ヘラナデ, 化粧貼土付着	ナデ	磨肌	
41	20	1建物	SD01 覆土上層P11	土師器	小甕	体部下半	-	-	6(6)	ヘラナデ	ナデ	オヤエ	
41	21	1建物	SD01 覆土中層P14	灰土器	小 碗形	底	1(2)	5(4)	4(6)	ロクロ, ナデ, 火だすき痕	ロクロ	回転糸切, 胎土分析No1	
41	22	1建物	SD01 覆土中層P1	灰土器	長卵形	底部	0(2)	-	0(6)	ロクロ	ロクロ, ナデ	胎土分析No2	
41	23	1建物	SD01 覆土中層P6-15-16-18-20-24-27-29-33-37-42-43-44-50-59-60-63-64-65-68-70-71-73-74-78-80-83-85-92-95-96	灰土器	甕	略定形	1(8)	1(3)	3(7)	ロクロ, 鳴き目, 輪ね	ロクロ, オヤエ, ナデ	鳴き目	
43	28	2建物	S302 カマド瓦面P4(支脚)	土師器	小甕	体部下半	-	-	7(8)	1(10)	ヘラケズリ, ナデ	ナデ	磨肌
43	29	2建物	S302 覆土	土師器	小甕	口縁部	-	-	9(2)	輪ね, ヘラナデ, オヤエ	ヘラナデ, ヨコナデ		
43	30	2建物	S302 覆土	土師器	小甕	口縁部	-	-	4(9)	ヨコナデ, 輪ね, ヘラナデ	ナデ, ヨコナデ		
43	31	2建物	S302 覆土P3-5	土師器	小甕	口縁部	-	-	6(1)	ヨコナデ, ヘラナデ	ナデ, ヨコナデ		
43	32	2建物	S302 覆土P2	土師器	小甕	底部	-	-	8(6)	1(3)	ロクロ	回転糸切	
43	33	2建物	S302 覆土P2, SK02-3層P24, 8-17土層	土師器	甕	胴部下半	-	-	1(4)	糸痕状沈着	ナデ, ユビナデ	遺構間結合	
43	34	2建物	SD06 (E1 SK04) 礎礎面P10-15	土師器	甕	口縁部	-	-	6(1)	ヨコナデ, ナデ, 化粧貼土付着	ヨコナデ, ナデ?		
43	35	2建物	SD06 (E1 SK04) 礎礎面P3	土師器	甕	底部	-	-	7(6)	4(1)	ヘラナデ	ナデ	磨肌
43	36	2建物	SD06 (E1 SK04) 覆土, 礎礎面P4-3-6-7-18	土師器	小甕	体部下半	-	-	6(2)	9(5)	ロクロ	ロクロ	回転糸切
43	38	2建物	遺物箱中層組(E1 SK06) 覆土P21	土師器	甕	口縁部	-	-	7(9)	輪ね, ヨコナデ, ヘラナデ	ナデ, ヨコナデ		
43	39	2建物	遺物箱中層組(E1 SK06) 覆土P21-29	土師器	甕	口縁部	2(0)	-	1(8)	ヘラナデ?	ヘラナデ?		
43	40	2建物	遺物箱中層組(E1 SK06) 覆土P2-4-10-11-21-23-27-30	土師器	甕	底部	-	-	9(2)	5(9)	糸痕状沈着	ユビナデ	磨肌, 図録50と同一體?
46	43	土坑	SK03 9層P1	土師器	甕	体部上半	2(4)	-	1(7)	ヨコナデ, ヘラケズリ, ヘラナデ	ロクロ, ヘラナデ		
46	44	土坑	SK03 3層	土師器	甕	体部下半	-	-	9(6)	ヘラケズリ	ナデ	磨肌	
46	45	土坑	SK03 3層	土師器	小甕	口縁部	-	-	6(7)	ヨコナデ, ヘラケズリ	ヘラナデ, ヨコナデ		
46	46	土坑	SK03 覆土中層, 覆土上層	土師器	小甕	体部上半	3(2)	-	9(7)	ヨコナデ, ナデ, 全体の点着	ナデ, ヨコナデ		
46	47	土坑	SK03 3層	土師器	小甕	口縁部	1(4)	-	5(4)	輪ね, ヨコナデ	輪ね, ナデ, ヨコナデ(厚減により不明確)		
46	48	土坑	SK03 覆土	灰土器	杯	口縁部	1(5)	-	5(3)	ロクロ	ロクロ		
46	49	土坑	SK07 覆土上層	土師器	甕	口縁部	1(9)	-	2(2)	ロクロ	ロクロ		
46	50	土坑	SK09 瓦面P1-4, SK02-3層P9-22-23, 2建物遺物箱中層組P1-3-6-9-13-16, 遺構P8-17土層, 遺構P8-18土層	土師器	甕	胴部上半	2(4)	-	2(2)	ヨコナデ, 糸痕状沈着	ナデ	遺構間結合	
46	51	土坑	SK13 覆土上層P3	土師器	甕	口縁部	-	-	9(1)	ヨコナデ, ヘラナデ	ヘラナデ, ヨコナデ		
46	52	土坑	SK13 覆土上層P4	土師器	1ニチュア鉢	略定形	6(8)	4(1)	6(6)	輪ね, オヤエ, ナデ	輪ね, オヤエ, ユビナデ	オヤエ	
48	53	溝跡	SD02 1層P12, 3層P6, 遺構P8-13土層	土師器	杯	略定形	1(4)	5(6)	5(2)	ロクロ	ロクロ	磨肌糸切	

国規 番号	道標種 番号	道標名	出土位置	機製	器種	部位	計測(cm)			外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (坑内調整)
							口径	底径	器高			
48	54	講跡 SD02	3層P21	土師器	坏	略定形	(12.6)	(5.9)	(6.2)	ロクロロ	ロクロロ	調整の為4-7号 内外面共調整多し。
48	55	講跡 SD02	1層P15,3層P11	土師器	甕	口縁部	-	-	(9.1)	輪削筋,ロクロ, 化粧粘土付着	ロクロロ,ヘラナデ	
48	56	講跡 SD02	SD02-覆土P1-18-20-21,覆 土,2層物(遺物集中範囲) P1-22-18-21,覆土	土師器	甕	胴部	-	-	(11.9)	委直沈線	ナデ	遺構同様否。 胎土分析No.10, 図3の1と同一致体?
48	57	講跡 SD02	3層P1	土師器	甕	底部	-	7.4	(3.0)	ヘラナデ?	輪削筋,ユビナデ	底直
48	58	講跡 SD02	3層 P6	知忠器	鉢	体部上半	9.6	-	(6.6)	ロクロロ,削筋	ロクロロ	
48	60	講跡 SD08	覆土	土師器	甕	口縁部	-	-	(7.15)	ロクロロ,ヘラナデ	ロクロロ,ナデ	
48	61	講跡 SD08	覆土	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.9)	口縁-胎土和泥り付け, 口縁面圧痕, 胎土及横筋。 胎土和泥	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量
48	62	遺構外 風間本 (25010)	覆土	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(9.4)	口縁上横筋面圧痕 胴部-多輪筋全体回転	丁穿金1号キ	内面下部C式?
50	63	埋設 土器	S801	縄文土器	深鉢	略定形	(25.6)	100	30.95	口縁-口縁縦筋-横 筋-口縁筋り付 着。胎土和泥り 胴部-胎土和泥り 横筋文(L.R.L.R),縄 筋文(縦筋-横筋)	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量含む
51	64	遺構外 遺構外	8-41 覆瓦	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.35)	口縁上横筋面圧痕 口縁上横筋面圧痕	調整	内面下部C式。上部 片鉢の可能性有(口 縁筋のみ)。植物繊維 少量
51	65	遺構外 遺構外	8-24 覆瓦	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.0)	口縁上横筋回転 口縁縦筋交差,横突, 多輪筋全体第1 期?口縁面圧痕 胴部上横筋回転	1号キ	内面上部a1式。 植物繊維多量
51	66	遺構外 遺構外	8-21 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.9)	口縁上横筋 口縁筋上縁筋り付 着。胎土和泥り 全体第1期(胎 土和泥り)口縁 面圧痕,胎土 和泥り	1号キ	内面上部a1式?
51	67	遺構外 遺構外	8-20 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.3)	口縁-多輪筋全体第1 期(口縁面圧 痕,横突)	1号キ	内面上部a1式。 植物繊維少量
51	68	遺構外 遺構外	8-21 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.9)	口縁上横筋 口縁-多輪筋全体第1 期(口縁面圧痕)	1号キ	内面上部a1式?
51	69	遺構外 遺構外	8-29 II層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.4)	口縁-横突 口縁縦筋交差並行面 圧痕,横突 胴部-胎土和泥り	1号キ	内面上部a1式。 植物繊維少量
51	70	遺構外 遺構外	8-23 覆瓦	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.9)	口縁筋上縁筋り付 着。胎土和泥り 胴部上横筋? 胴部上横筋?	1号キ	内面上部a1式。 土器片鉢(口縁筋のみ) 植物繊維少量
51	71	遺構外 遺構外	8-20 IIb層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.4)	縦筋筋り付け(横筋?) 胎土和泥り	1号キ	内面上部a1式。 植物繊維少量
51	72	遺構外 遺構外	8-20 IIa層, 8-20 IIb層	縄文土器	深鉢	口縁部	(40.2)	-	(1395)	口縁-多輪筋面圧痕 口縁-多輪筋面圧痕,膝 帯,横突 胴部上横筋。 胎土和泥り	1号キ	内面下部C式?
51	73	遺構外 遺構外	8-21 IIa層	縄文土器	深鉢	体部上半	(30.5)	-	(35.0)	口縁上横筋回転 口縁上横筋面圧痕 胴部上横筋 (胎土和泥り)	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量含む
51	74	遺構外 遺構外	8-21 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(8.4)	口縁上横筋面圧痕 口縁上横筋面圧痕 胴部上横筋	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量
51	75	遺構外 遺構外	8-23 II層P2	縄文土器	深鉢	体部上半	-	-	(18.1)	口縁上横筋面圧痕 口縁上横筋面圧痕 胴部-胎土和泥り第1 期(胎土和泥り)	1号キ	内面下部C式。 植物繊維多量。 図3-76と同一致体?
51	76	遺構外 遺構外	8-23 II層P2	縄文土器	深鉢	底部	-	(9.6)	(7.7)	L.R.跡回転?	ナデ	内面下部C式? 植物繊維少量。 図3-75と同一致体?
52	77	遺構外 遺構外	8-20 IIb層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(7.1)	口縁-横突 口縁縦筋交差帯-横 筋?胎土和泥り 胎土和泥り 胴部-胎土和泥り 胴部-多輪筋全体第1 期(L.R)回転	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量
52	78	遺構外 遺構外	8-29 II層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.3)	口縁上横筋 口縁縦筋交差帯 胎土和泥り	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量
52	79	遺構外 遺構外	8-30 II層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.6)	口縁-胎土和泥り 口縁筋上縁筋り付 着。胎土和泥り 胴部-胎土和泥り	1号キ	内面下部C式?
52	80	遺構外 遺構外	8-21 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.7)	口縁上横筋面圧痕 口縁上横筋面圧痕 胴部上横筋	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量
52	81	遺構外 遺構外	8-22 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(6.0)	口縁上横筋面圧痕 口縁上横筋面圧痕 胴部上横筋	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量
52	82	遺構外 遺構外	8-22 覆瓦	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(10.0)	口縁筋上横筋面圧痕 胴部上横筋,縄筋回転	1号キ	内面下部C式。 植物繊維少量 図3-84と同一致体。 植物繊維少量含む。 内面下部C式?
52	83	遺構外 遺構外	8-20 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.3)	口縁-胎土 口縁-胎土	1号キ	

図例番号	遺物種別	遺構名	出土位置	種類	器種	部位	計測(cm)			外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (底面調整)
							口径	底径	器高			
52	84	遺構外	遺構外 8-20 IIb層	縄文土器	深鉢	腹部	-	-	(9.0)	素焼	1.5ギキ	底面に上向き一筋目、植物繊維少量含む。内径下部拡大?
52	85	遺構外	遺構外 8-20 IIb層	縄文土器	深鉢	腹部	-	-	(8.5)	口縁上縁面圧痕 胴部半輪筋全体第1 組(上)同様	1.5ギキ	内径下部拡大式、植物繊維少量
52	86	遺構外	遺構外 8-24 II層	縄文土器	深鉢	腹部	-	-	(9.8)	胴部上縁面(0段多量) 半輪筋全体第1組(天) 輪筋同様	種々1.5ギキ	縄文前期後半、植物繊維多量、内径下部拡大?
52	87	遺構外	遺構外 8-20 IIa層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(12.0)	多輪筋全体	ナデ	植物繊維多量
52	88	遺構外	遺構外 8-16 II層 8-17 II層	縄文土器	深鉢	底部	-	-	(11.6)	RL同様	ナデ	縄文前期末、植物繊維多量
52	89	遺構外	遺構外 8-35 II層	縄文土器	深鉢	底部	-	-	(14.0)	結果線1種(LR-RL)	1.5ギキ	縄文前期末~中期初、植物繊維少量
52	90	遺構外	遺構外 8-20 IIb層	縄文土器	深鉢	底部	-	-	(7.8)	無文	ナデ	縄文前期、植物繊維少量
52	91	遺構外	遺構外 8-20 IIa層	縄文土器	台付土器	上部	-	-	(11.2)	無文	無文	縄文前期、台部に貫通孔有、植物繊維少量含む
52	92	遺構外	遺構外 8-28 IIa層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.5)	口縁部上縁面(片付、上縁)	ナデ	縄文中期後半?
52	93	遺構外	遺構外 8-13 II層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.2)	口縁部上縁面(片付、口縁部上縁)	RL焼	縄文中期後半?
52	94	遺構外	遺構外 8-21 II層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(5.1)	底文突起、上縁	ナデ	縄文中期後半?
52	95	遺構外	遺構外 8-40 II層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(3.3)	素焼	ナデ	口縁面取り 縄文前期後半
52	96	遺構外	遺構外 8-38 I層	縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	(4.9)	LR焼	ナデ	口縁面取り 縄文前期後半
52	97	遺構外	遺構外 規尺8.7 I層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.8)	LR焼	ナデ	縄文前期後半
52	98	遺構外	遺構外 規尺8.7 I層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	(5.8)	LR焼	ナデ	縄文前期後半
52	99	遺構外	遺構外 8-38 II層	縄文土器	鉢	胴部	-	-	(3.45)	LR底文線	ナデ	太田式? 縁面に糸状飾付
52	100	遺構外	遺構外 8-38 焼丸	縄文土器	口付土器	口付部	-	-	(2.2)	沈泥、1.5ギキ	ナデ	太田式? 縁面に糸状飾付
54	150	遺構外	遺構外 8-42 II層	土師器	杯	体部上半	(12.8)	-	(4.55)	ロクロ	ロクロ	
54	151	遺構外	遺構外 8-20 IIb層	土師器	ニニユウア鉢	体部上半	(3.2)	-	(2.9)	ナデ、オヤセ	ナデ	
54	152	遺構外	遺構外 8-12 I層	土師器	ニニユウア鉢	胴部	-	-	(3.65)	ナデ、ヘラナデ	ナデ	重底3.3g
54	153	遺構外	遺構外 8-6 II層	土師器	美	口縁部	-	-	(6.7)	ロクロ	ロクロ	
54	154	遺構外	遺構外 8-17 II層、8-19 IIa層	粗面器	杯	体部上半	(14.6)	-	(3.7)	ロクロ、粗面	ロクロ	粗面
54	155	遺構外	遺構外 コガマズ丸型灰探	粗面器	杯	底部	-	-	(5.8)	ロクロ、火たすき痕	ロクロ	ヘラナリ、 縁部部に線打有?
54	156	遺構外	遺構外 8-18 IIa層	粗面器	杯	胴部	-	-	(2.3)	ロクロ、粗面、 火たすき痕	ロクロ	
54	157	遺構外	遺構外 8-6 II層	粗面器	鉢	口縁部	(10.2)	-	(3.7)	ロクロ	ロクロ	
54	158	遺構外	遺構外 8-6 II層	粗面器	蓋?	胴部	-	-	(3.1)	ロクロ、ヘラナデ、 粗面	ロクロ	

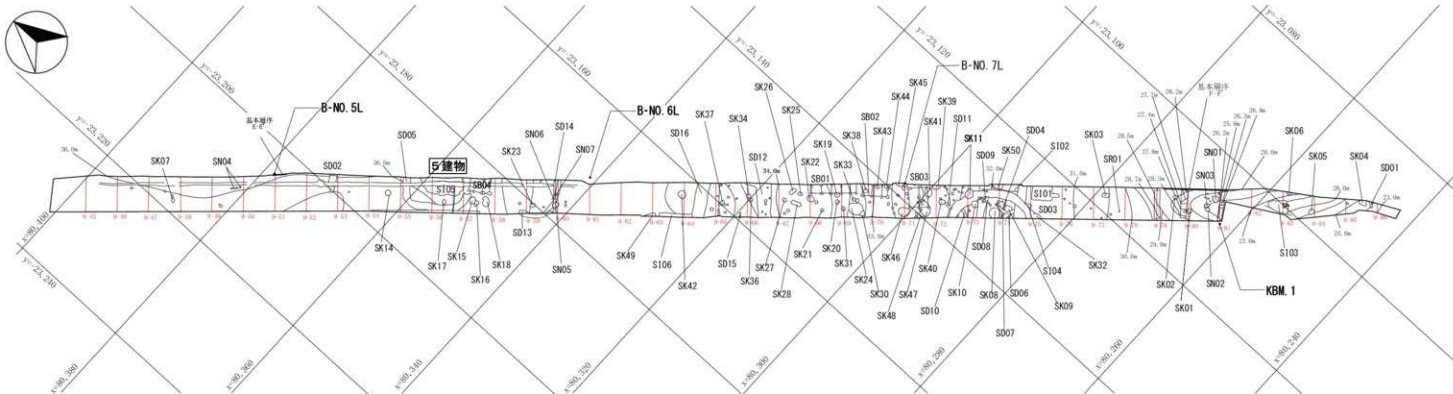
表13 農道8号 出土石器・石製品・土製品・金属製品 観察表

図例番号	遺物種別	遺構名	出土位置	種類	器種	石質	計測(mm)			長さ	高さ	備考
							長さ	幅	厚さ			
40	10	1建物	S101 覆土	土製品	銅口	-	81	85	34	1496	先端部、並走付着者。	
40	11	1建物	S101 覆土	土製品	銅口	-	54	51	27	454	未端部、最上。	
40	12	1建物	S101 覆土	鉄製品	棒状鉄製品	-	87	11	4	47	釘?	
40	13	1建物	S101 覆土	石器	砥石	アゲサイト	31	36	31	55.8	欠損。	
40	14	1建物	S101 床面直上SI	石器	磨石	安山岩	73	79	57	443.8	磨部に線打痕、欠損。	
41	24	1建物	S001 覆土	土製品	銅口	-	27	30	17	16.6		
41	25	1建物	S001 覆土中層	土製品	銅口	-	71	51	29	77.6	先端部、並走付着者、最上。	
41	26	1建物	S001 覆土中層	土製品	銅口	-	80	61	31	113.5	先端部、並走付着者。	
41	27	1建物	S001 覆土	土製品	円筒状土製品	-	33	34	5	5.2	胴部、土師器片を円形に加工(外→ヘラナデ、内→ナデ)	
43	37	2建物	S006 確認WS1	石器	台石	アゲサイト	94	73	27	182.3	鉄付着、欠損、厚80.4。	
44	41	2洞穴	S103 覆土下層	土製品	土師片鉢	-	39	43	10	14.6	口縁部、3点詰め、内径下部拡大式土器片を使用(外→口縁-L1線面圧痕、胴部-L1線、内→1ギキ)	
44	42	2洞穴	S103 覆土下層	土製品	土師片鉢	-	41	67	10	26.6	胴部、磨部有、あり。2点詰め、植物繊維少量、内径下部拡大式土器片を使用(外→口縁-L1線面圧痕、胴部-L1線、内→1.5ギキ)	
48	59	遺跡	S002 3層跡	石器	台石?	アゲサイト	101	88	16	189.2	黒色物質付着。	
53	101	遺構外	遺構外 8-25 IIb層	石器	石鏃	珪質頁岩	33	18	5	2.1	無事凸基、欠損。	
53	102	遺構外	遺構外 8-29覆土	石器	石鏃	珪質頁岩	24	11	6	0.6	有事凸基、欠損。	
53	103	遺構外	遺構外 8-29 IIa層	石器	石鏃	珪質頁岩	32	16	6	1.4	有事凸基、未製品、欠損、焼熱。	
53	104	遺構外	遺構外 8-10 IIa層	石器	石鏃	珪質頁岩	39	28	12	10.4	欠損。	
53	105	遺構外	遺構外 8-19 IIa層	石器	石鏃	珪質頁岩	44	25	10	7.6	欠損。	
53	106	遺構外	遺構外 8-20 IIb層	石器	石鏃	珪質頁岩	51	40	13	25.8	欠損。	
53	107	遺構外	遺構外 8-20 IIa層	石器	石鏃片鏃	珪質頁岩	58	19	11	10.2	縁面打ち欠き、部分的に磨り、欠損。	
53	108	遺構外	遺構外 8-24覆土	石器	不定形石器(磨石)	珪質頁岩	68	38	14	25.6	縁面に残存、縁面磨れ。	
53	109	遺構外	遺構外 8-20 IIb層	石器	不定形石器(磨石)	珪質頁岩	54	32	17	32.5		
53	110	遺構外	遺構外 8-20 IIa層	石器	不定形石器(磨石)	珪質頁岩	37	21	10	7.6	縁面に残存。	
53	111	遺構外	遺構外 8-15 I層	石器	不定形石器(磨石)	珪質頁岩	45	55	26	45		

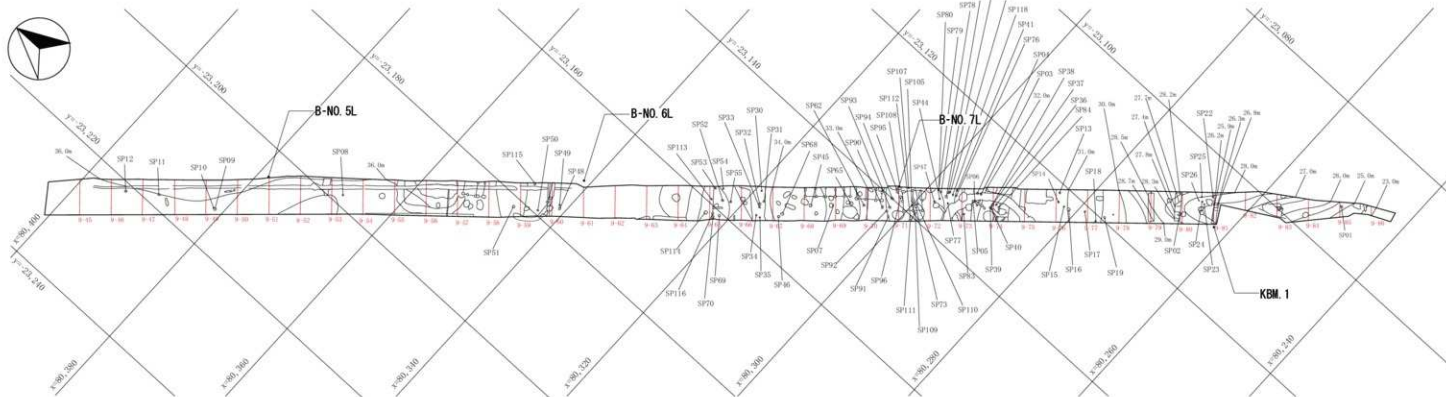
探検番号	遺物番号	遺物種	遺物名	出土位置	種類	部様	石質	計測(mm)			長さ (g)	備考
								長さ	幅	厚さ		
53	112	遺構外	遺構外	8-21a層	石器	磨石	安山岩	135	79	70	6908	磨縁磨き。
53	113	遺構外	遺構外	8-18a層	石器	磨石	安山岩	34	30	32	385	
53	114	遺構外	遺構外	8-21a層	石器	磨石	安山岩	128	73	55	4508	
53	115	遺構外	遺構外	8-14f層	土製品	動物骨土製品	-	36	30	18	14.8	胴部・四角欠損。
53	117	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	円盤状土製品	-	56	62	14	55.8	胴部・中央部穿孔未貫通。同縁部磨打。未製品。縄文中期?土器片を使用(外-結束第1種[1R-1],内-ナナ)
53	118	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	円盤状土製品	-	44	44	1	15.3	胴部・中央部穿孔未貫通。同縁部磨打。未製品。縄文前-中期土器片を使用(外-1段縁,内-ナナ)
53	119	遺構外	遺構外	8-21a層	土製品	円盤状土製品	-	36	32	7	7.4	胴部・内面中央部穿孔未貫通。同縁部磨打。植物繊維微量。縄文前-中期土器片を使用(外-1段縁,内-ナナ)
53	120	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	円盤状土製品	-	48	49	8	17.7	底部・未製品?。土器片挿の可能性がある。底部破片使用。縄文前-中期土器片を使用(外-ナナ,直訳清楚有,内-ナナ)
53	121	遺構外	遺構外	8-35d層	土製品	円盤状土製品	-	49	52	9	18.9	胴部・未製品。同縁部磨打。縄文前期土器片を使用(外-1段縁?,内-ナナ)
53	122	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	円盤状土製品	-	55	48	11	27.4	胴部・同縁部磨打。植物繊維微量。縄文前期土器片を使用(外-結束第1種[1R-1],内-ミガキ)
53	123	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	円盤状土製品	-	65	57	10	44.1	胴部・未製品。同縁部磨打。植物繊維微量。縄文前-中期土器片を使用(外-1段縁,内-ミガキ)
54	124	遺構外	遺構外	8-20b層	土製品	土器片挿	-	27	43	10	9.7	胴部・決り跡着。2点始め。縄文前期土器片を使用(外-不明,内-ミガキ)
54	125	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	32	39	10	9.6	胴部・2点始め。縄文中期土器片を使用(外-結束第1種? [1R-1],内-直訳の急多量)
54	126	遺構外	遺構外	8-39d層	土製品	土器片挿	-	42	72	11	27.4	胴部・同縁部有。2点始め。縄文前-中期土器片を使用(外-1段縁,内-ミガキ)
54	127	遺構外	遺構外	8-42e層	土製品	土器片挿	-	45	43	11	19.9	胴部・決り跡着。2点始め。植物繊維少量。縄文前期土器片を使用(外-多輪輪条体1期[1R-1],内-ミガキ)
54	128	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	51	43	8	17.0	胴部・決り跡着。2点始め。植物繊維少量。縄文前期土器片を使用(外-多輪輪条体1期[1R-1],内-ミガキ)
54	129	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	50	38	10	19.1	胴部・決り跡着。2点始め。縄文前期土器片を使用(外-多輪輪条体1期,内-ナナ)
54	130	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	58	43	16	40.1	底部・2点始め。植物繊維中量。縄文前期土器の底部破片を使用(外-ナナ,内-ナナ)
54	131	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	50	32	11	17.1	胴部・2点始め。植物繊維少量。縄文前期土器片を使用(外-多輪輪条体1期,内-ミガキ)
54	132	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	64	44	12	28.6	胴部・決り跡着。2点始め。植物繊維微量。縄文中期土器片を使用(外-結束第1種[1R-1],内-ナナ)
54	133	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	49	39	10	16.4	胴部・決り跡着。2点始め。植物繊維微量。縄文前-中期土器片を使用(外-直訳より不明,内-ナナ)
54	134	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	33	73	20	40.2	底部・決り跡着。2点始め。縄文前-中期土器の底部破片を使用(外-ナナ,内-ナナ)
54	135	遺構外	産丸	8-19	土製品	土器片挿	-	47	43	13	20.2	胴部・同縁部スリ。決り跡着。2点始め。縄文前期土器片を使用(外-多輪輪条体,内-直訳がナ)
54	136	遺構外	産丸	8-20	土製品	土器片挿	-	44	54	12	18.1	口縁部・口縁突起の決り着。決り跡着。2点始め。縄文前期土器片を使用(口縁下部欠損)。外-直訳1段縁1輪-1面磨打直訳段多量?,内-ナナ)
54	137	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	40	42	13	16.0	胴部・2点始め。縄文前-中期土器の底部破片を使用(外-1段縁段多量?),内-ナナ)
54	138	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	59	39	10	11.8	胴部・決り跡着。2点始め。植物繊維微量。縄文前期土器の底部破片を使用(外-多輪輪条体1期[1R-1],内-ミガキ)
54	139	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	41	44	9	14.9	胴部・決り跡着。2点始め。植物繊維少量。縄文前期土器の底部破片を使用(外-結束第1種[1R-1],内-直訳がナ)
54	140	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	43	40	9	15.7	胴部・面磨スリ。ナナ。2点始め。縄文中期土器片を使用(外-1段縁,内-ミガキ)
54	141	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	65	41	9	17.0	胴部・決り跡着。2点始め。植物繊維微量。縄文前期土器片を使用(外-1段縁,内-ミガキ)
54	142	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	36	44	10	26.6	胴部・同縁部磨打。決り跡着。2点始め。縄文中期土器片を使用(外-1段縁?,内-直訳がナ)
54	143	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	37	52	12	26.8	胴部・2点始め。植物繊維中量。縄文前期土器前-中期初土器片を使用(外-1段縁,内-ミガキ)
54	144	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	57	51	12	27.5	胴部・決り跡着。2点始め。縄文前期土器前-中期初土器片を使用(外-1段縁(段多量),内-直訳)
54	145	遺構外	遺構外	8-20f層	土製品	土器片挿	-	60	67	10	45.2	胴部・決り跡着。2点始め。10層内1式土器片を使用(外-1段縁,内-ミガキ)
54	146	遺構外	遺構外	8-20a層	土製品	土器片挿	-	36	45	14	33.6	底部・2点始め。植物繊維少量。縄文前期土器前-中期初土器片を使用(外-ナナ,内-ナナ,スリット有)
54	147	遺構外	遺構外	8-15f層	石製品	石製品	土質	23	19	10	6.7	全面磨き。
54	148	遺構外	遺構外	8-18a層	石製品	石製品	凝灰岩	46	31	16	29.2	全面磨き。
54	149	遺構外	遺構外	8-15f層	石製品	石製品	凝灰岩	57	55	10	35.6	方形。欠損。
54	150	遺構外	遺構外	8-6f層	土器	土器	土質	48	21	18	17.1	輪部のみ。
54	160	遺構外	遺構外	8-16a層	土製品	土玉	-	18	17	13	3	



主要遺構の遺構配置図



ピット遺構配置図



## 第4節 農道9号

農道9号で検出された遺構は、堅穴住居跡6軒、土坑46基、溝跡16条、掘立柱建物跡4棟、ピット83基、焼土遺構7基である。このうち、堅穴住居跡と掘立柱建物跡や溝跡（外周溝）などセットと考えられる建物跡は1棟である。そう考えた場合、検出遺構の構成は建物跡1棟、単独の堅穴住居跡5軒、土坑46基、溝跡15条、掘立柱建物跡3棟、ピット83基、焼土遺構7基となる。（田中）

### 1 検出遺構

#### (1) 建物跡・堅穴住居跡

農道9号で検出された堅穴住居跡は6軒で、いずれも平安時代のものである。3軒は標高約30.5～31.0mの南斜面に立地するが、1軒は溜池に面する標高約26.5mの急斜面に、2軒は標高約34.5～35.5mの平坦部に位置する。外周溝と掘立柱建物跡が付属する建物跡は1棟（第5号建物跡）のみで、他は単独の堅穴住居跡である。

#### 第1号堅穴住居跡（SI01、図56～58）

【概要】標高約30.6～30.8mの南斜面に位置する。調査区際に位置し、南西半のみ検出された。

【位置・確認】9～75グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。

【平面形・規模】南西壁は3.3mで、平面形は方形を呈すると考えられる。

【堆積土】黒褐色土と暗褐色土を主体とし、ローム粒が混入する。第4層中には白頭山苦小牧火山灰が混入していた。自然堆積と考えられる。なお火山灰分析の結果、試料採取地点によって白頭山苦小牧火山灰の純層である地点と、白頭山苦小牧火山灰及び十和田a火山灰の混合層となっている地点があるとの結果を得た（第4章第1節参照）。

【壁・床面】壁高は15～43cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床はロームと粘土が混入する黒褐色土で構築され、床面はほぼ平坦である。

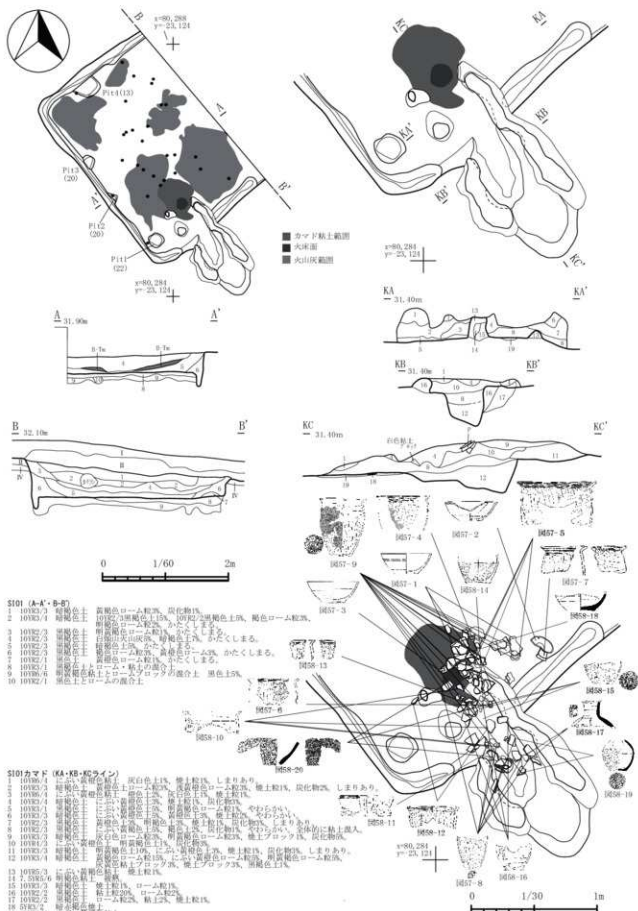
【カマド】南壁西側に位置し、残存状況は良好で、袖・煙道・火床面が残存していた。袖は粘土で構築され、周辺からは土師器片が多く出土し、芯材に用いられたものと考えられる。火床面は粘土上に構築されており、径20cmの円形を呈し、暗赤褐色に赤変していた。煙道は半地下式で、住居外に1.1m延びる。床面と同一の高さまで掘り込んだ後埋め戻して煙道底面としている。煙道底面は煙出しに向かって緩やかに上昇する。カマドの主軸方位はN-145°-Eである。

【柱穴】4基のピットが検出されたが、柱穴とは考えられない。

【周溝】幅8～22cm、深さ6～35cmの周溝が巡る。

【ピット】ピットは4基検出され、いずれも壁際に位置する。

【出土遺物】出土した土器の総重量は6.99kgで、内訳は土師器5.75kg、須恵器1.23kg、縄文土器0.01kgである。遺物はカマド周辺から密集して出土しており、床面からの出土も多い。そのうち、土師器甕（1～3）、甕（4～12）、小甕（13～16）、須恵器壺（17～19）、甕（20）を図示した。土師器甕は手づくね・ロクロとも混在し、法量も各種ある。須恵器18・20について胎土分析産地同定を行ったところ、18は不明、20は五所川原産との結果を得た（第4章第5節参照）。



- S101 (A-A'・B-B')**
- 1 10193/3 埴輪色土 黄褐色ローム軟土、炭化物1%
  - 2 10193/4 埴輪色土 10192/3黄褐色土15%、10192/2黄褐色土5%、褐色ローム軟土、
  - 3 10192/2 埴輪色土 黄褐色ローム軟土、かたくしめる。
  - 4 10192/3 埴輪色土 黄褐色ローム軟土、かたくしめる。
  - 5 10192/2 埴輪色土 黄褐色ローム軟土、かたくしめる。
  - 6 10192/2 埴輪色土 黄褐色ローム軟土、黄褐色ローム2%、かたくしめる。
  - 7 10192/1 埴輪色土 黄褐色ローム軟土、かたくしめる。
  - 8 10192/1 埴輪色土 黄褐色ローム軟土、かたくしめる。
  - 9 10193/6 埴輪色土 黄褐色粘土とロームブロックの混合土 黒色土5%
  - 10 10192/1 埴輪色土とロームの混合土。

- S101カマド (KA・KB・KCライン)**
- 1 10193/4 埴輪色土 灰白色土1%、埴輪土1%、黄褐色ローム軟土、黒土較1%、炭化物2%、しりりあり。
  - 2 10193/3 埴輪色土 灰白色土1%、埴輪土1%、黄褐色ローム軟土、黒土較1%、炭化物2%、しりりあり。
  - 3 10193/4 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 4 10193/4 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 5 10193/1 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 6 10193/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 7 10193/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 8 10193/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 9 10193/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 10 10191/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 11 10193/3 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 12 10193/1 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 13 10193/3 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 14 2 5195/6 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 15 10193/3 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 16 10192/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 17 10192/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 18 5193/2 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、
  - 19 10193/1 埴輪色土 黄褐色土12%、灰白色土1%、炭化物1%、

図56 第1号竪穴住居跡

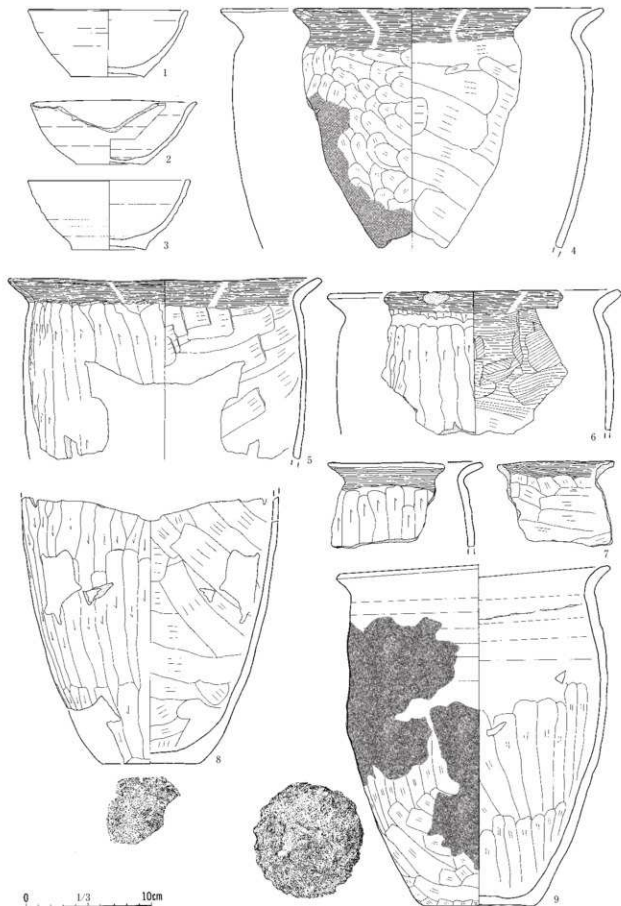


图57 第1号竖穴住居跡出土遺物(1)

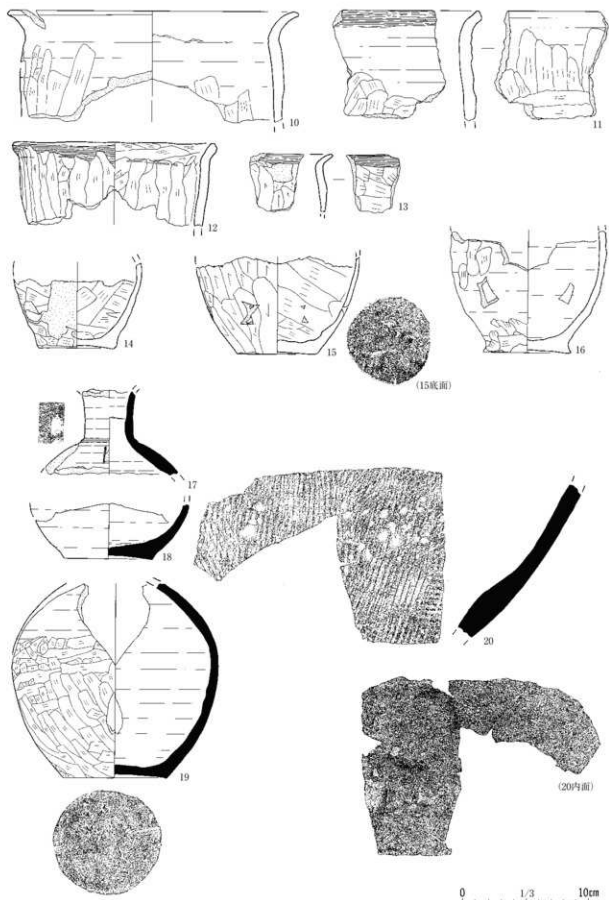


图58 第1号竖穴住居跡出土遺物(2)

【**小結**】床面上の土壌を採取し水洗選別を行ったところ、イネ・コムギ・アワ・キビの炭化種子が検出された（第4章第3節参照）。(田中)

### 第2号竪穴住居跡 (SI02、図59)

【**概要**】標高約31.0～31.3mの南斜面に位置する。調査区際位置し、南西壁のみ検出された。

【**位置・確認**】9-73・74グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。

【**重複**】SK50と重複し、本住居跡は土坑よりも新しい。

【**平面形・規模**】南西壁4.1mで、平面形は方形を呈すると考えられる。

【**堆積土**】黒褐色土を主体とする。第3層以下にはローム粒・ロームブロック・炭化物・焼土が混入し、人為堆積と考えられるが、第3層より上は混入物が少なく自然堆積と考えられる。床面上に焼土と炭化物が広がり、特に住居北側に集中している。

【**壁・床面**】壁高は0～35cmで、壁は開きながら立ち上がる。床は粘土やローム粒が混入する黒褐色土と暗褐色土で構築されている。住居北側は床下にSK50があるため、床面が沈み南から北に向かって傾斜している。

【**カマド**】南東壁西側に位置する。袖・火床面・煙道が残存するが、北東側は調査区外である。残存状況はあまり良くない。袖は地山を掘り残して構築されている。火床面は直径26cmの円形を呈すると推測され、明赤褐色に赤変していた。煙道は半地下式で、住居外に0.5m延びる。煙道底面は煙出しに向かって若干下降する。カマドの主軸方位はN-138°-Eである。

【**柱穴**】検出されなかった。

【**周溝**】幅6～21cm、深さ8～29cmの周溝が巡る。

【**ピット**】南西壁中央に1基検出された。

【**出土遺物**】出土した土器の総重量は0.55kgで、内訳は土師器0.54kg、縄文土器0.01kgである。そのうち土師器壘3点(21～23)を図示した。21・22は覆土から、23は床面からの出土である。

【**小結**】焼失住居である。炭化材の樹種同定を行ったところ、5点すべてクリと判明した。このうち1点の年代測定を行い、764AD～875ADという結果が得られた（第4章第2節参照）。また、床面上の土壌を採取し水洗選別を行ったところ、イネ・アワ・ヒエ属・タデ科・ミズキ属の炭化種子が検出された（第4章第3節参照）。(田中)

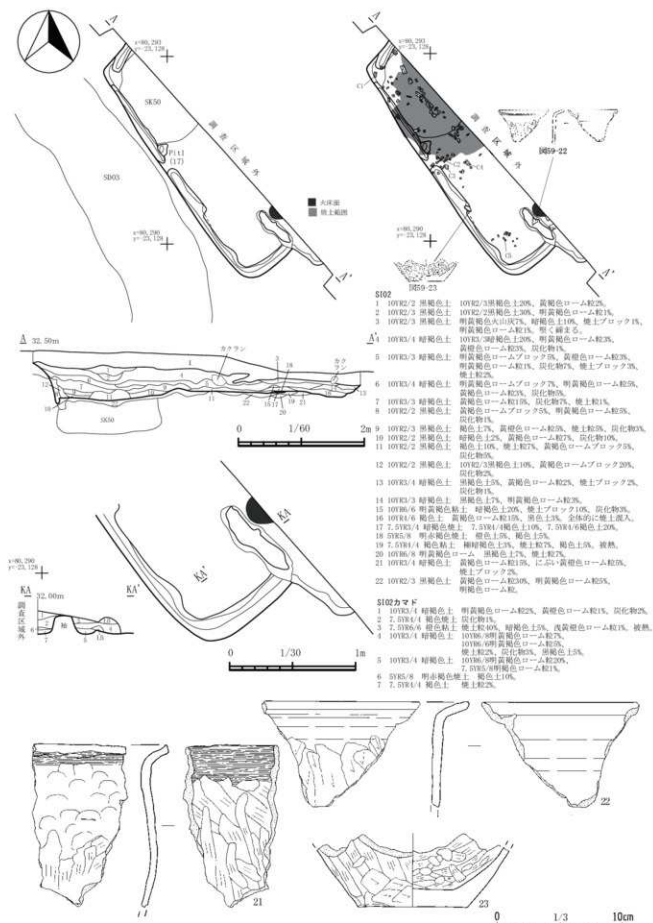
### 第3号竪穴住居跡 (SI03、図60・61)

【**概要**】標高約26.3～27.0mの南斜面に位置する。調査区際位置し、住居東半のみが検出された。

【**位置・確認**】9-82・83グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。

【**平面形・規模**】北東壁2.8mである。南東壁はカマドの両側で段差があり、カマド部分突出する形態を呈するが、平面形は概ね方形と考えられる。北東壁には半円形の張り出しが付属し、住居外に0.2m張り出している。

【**堆積土**】黒褐色土を主体とし、ローム粒・焼土粒・炭化物が少量混入する。第1層には白頭山苦小牧火山灰が混入していた。自然堆積と考えられる。なお火山灰分析の結果、白頭山苦小牧火山灰及び十和田A火山灰の混合層と、白頭山苦小牧火山灰と再堆積した十和田八戸火山灰の混合層であるとの



- S102**
- 1 10YR2/2 黒褐色土
  - 2 10YR2/3 黒褐色土
  - 3 10YR2/3 黒褐色土
  - 4 10YR3/4 暗褐色土
  - 5 10YR3/3 暗褐色土
  - 6 10YR3/4 暗褐色土
  - 7 10YR3/3 暗褐色土
  - 8 10YR2/2 黒褐色土
  - 9 10YR2/3 暗褐色土
  - 10 10YR2/2 黒褐色土
  - 11 10YR2/2 黒褐色土
  - 12 10YR2/2 黒褐色土
  - 13 10YR3/4 暗褐色土
  - 14 10YR3/3 暗褐色土
  - 15 10YR6/6 明黄褐色土
  - 16 10YR4/6 褐色土
  - 17 7.5YR3/4 暗褐色土
  - 18 5YR5/8 明赤褐色土
  - 19 7.5YR4/4 褐色土
  - 20 10YR6/8 明黄褐色土
  - 21 10YR2/3 暗褐色土
  - 22 10YR2/3 暗褐色土
- S102カマド**
- 1 10YR3/4 暗褐色土
  - 2 7.5YR4/4 褐色土
  - 3 7.5YR5/6 褐色土
  - 4 10YR3/4 暗褐色土
  - 5 10YR3/4 暗褐色土
  - 6 5YR5/8 明赤褐色土
  - 7 7.5YR4/4 褐色土
- 10YR2/3 黒褐色土20%, 黄褐色ローム粒2%,  
 10YR2/2 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒1%,  
 明黄褐色火山灰7%, 暗褐色土10%, 焼土ブロック1%,  
 明黄褐色ローム粒1%, 堅く締まる。  
 10YR2/3 暗褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%,  
 黄褐色ローム粒25%, 炭化物0%,  
 明黄褐色ロームブロック2%, 黄褐色ローム粒2%,  
 明黄褐色ローム粒1%, 炭化物7%, 焼土ブロック2%,  
 焼土粒2%,  
 明黄褐色ロームブロック7%, 明黄褐色ローム粒5%,  
 黄褐色ローム粒3%, 炭化物5%,  
 黄褐色ローム粒1%, 炭化物7%, 焼土粒1%,  
 黄褐色ロームブロック5%, 明黄褐色ローム粒2%,  
 炭化物1%,  
 褐色土7%, 黄褐色ローム粒2%, 焼土粒2%, 炭化物3%,  
 暗褐色土2%, 黄褐色ローム粒7%, 炭化物10%,  
 褐色土10%, 焼土粒7%, 黄褐色ロームブロック2%,  
 炭化物5%,  
 10YR2/3 暗褐色土10%, 黄褐色ロームブロック20%,  
 炭化物2%,  
 明褐色土5%, 黄褐色ローム粒2%, 焼土ブロック2%,  
 炭化物1%,  
 黒褐色土7%, 明黄褐色ローム粒2%,  
 10YR6/6 明黄褐色土, 焼土ブロック10%, 炭化物2%,  
 10YR4/6 褐色土, 黄褐色ローム粒10%, 赤土3%, 全体に焼土混入,  
 7.5YR3/4 暗褐色土, 7.5YR4/6 褐色土20%,  
 18 5YR5/8 明赤褐色土, 褐色土2%, 褐色土5%,  
 19 7.5YR4/4 褐色土, 暗褐色土2%, 焼土粒7%, 褐色土2%, 炭化物,  
 20 10YR6/8 明黄褐色ローム, 黒褐色土7%, 焼土粒7%,  
 黄褐色ローム粒1%, にぎり黄褐色ローム粒2%,  
 焼土ブロック2%,  
 黄褐色ローム粒20%, 明黄褐色ローム粒5%,  
 明褐色ローム粒,

図59 第2号型穴住居跡と出土遺物

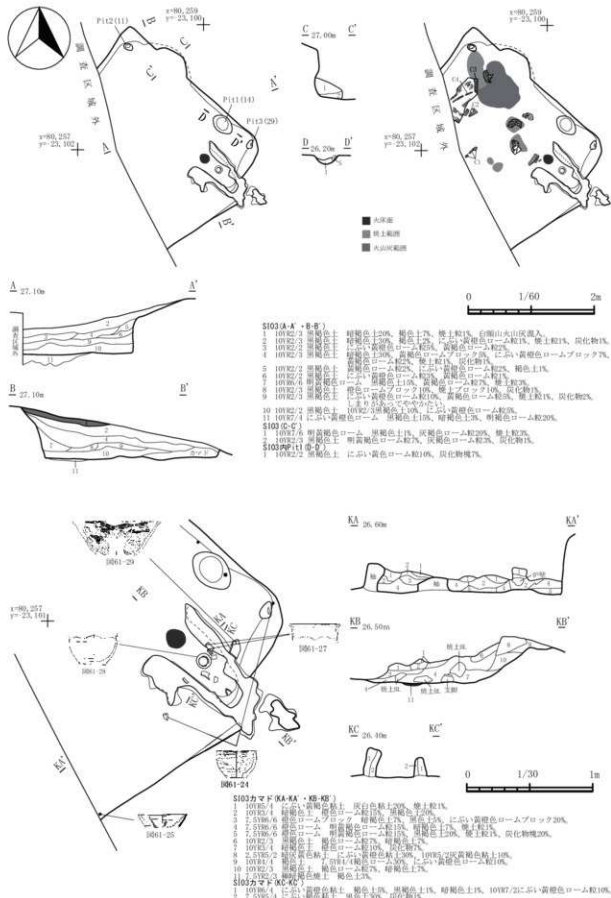


図60 第3号竪穴住居跡



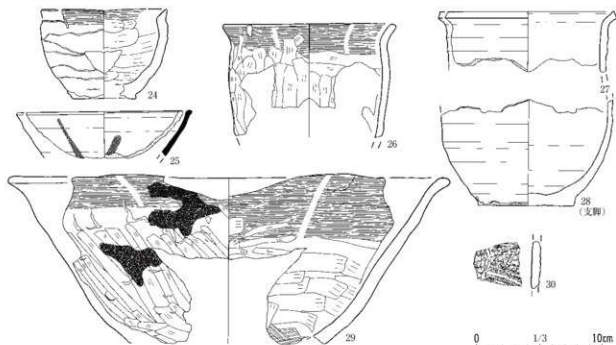


図61 第3号竪穴住居跡出土遺物

結果を得た(第4章第1節参照)。また、住居北西側では床面上から炭化物が検出されている。

〔壁・床面〕 壁高は7～81cmで、壁は40cmほど垂直に立ち上がり、大きく開く。張り出し部分では壁は袋状を呈する。床は第Ⅵ層をそのまま床面としている部分と黒褐色土を混入するロームで構築される部分がある。床面はほぼ平坦である。

〔カマド〕 南壁東側に位置し、袖・煙道部・火床面が残存していた。袖は粘土で構築されている。火床面は直径30cmの円形を呈し、極暗褐色に赤変していた。火床面より30cm奥には支脚の土師器杯が伏せて据えられていた。煙道は半地下式で、住居外に0.5m延びる。煙道底面は煙出しに向かって上昇する。カマドの主軸方位はN-132°-Eである。

〔柱穴〕 ビットが3基検出されたが、いずれも浅く、柱穴とは考えられない。

〔周溝〕 検出されなかった。

〔ビット〕 東壁際に3基検出された。Pit 1は長軸36cm、短軸26cmの楕円形を呈し、深さは14cmである。堆積土中から礫が出土している。

〔出土遺物〕 出土した土器の総重量は1.6kgで、内訳は土師器1.37kg、須恵器0.02kg、縄文土器0.21kgである。そのうち図示したのは、土師器鉢(24)、小甕(26～28)、埴(29)、須恵器杯(25)、縄文時代中期後葉の深鉢土器片(30)である。28は支脚としてカマドに設置されていたもので、24・25は床面から、26・27・29・30は覆土から出土した。

【小結】 床面から出土した炭化材の樹種同定を行ったところ、コナラ属コナラ節1点、ハリギリ1点、カエデ属2点と判明した。クリやアスナロが主体的である他の住居の様相とはやや異なっており、建築材ではない可能性も考えられる。このうち1点は年代測定を行い、859AD-980ADという結果が得られた(第4章第2節参照)。また、床面上の土壌を採取し水洗選別を行ったところ、アワ・ベニバナ・タデ科・ミズキ属の炭化種子が検出された(第4章第3節参照)。(田中)

## 第4号竪穴住居跡 (SI04、図62)

【概要】標高約30.9～31.1mの南斜面に位置する。調査区際に位置し南東半のみ検出された。

【位置・確認】9～74グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。

【重複】SD03・04と重複し、本住居跡はSD03より古く、SD04より新しい。

【平面形・規模】壁は重複により部分的にしか残存しないが、北西～南東方向は2.6mを測る。平面形は方形または長方形を呈すると考えられる。

【堆積土】ロームを中量含む褐色土と黄褐色土を主体とする。黒褐色土や暗褐色土も堆積するが、ロームを含んでおり、人為堆積と考えられる。

【壁・床面】壁高は1～37cmで、壁は開きながら立ち上がる。床は第V層をそのまま床面とする部分とロームで床面を構築している部分がある。床面は緩やかな起伏があるが、概ね平坦である。

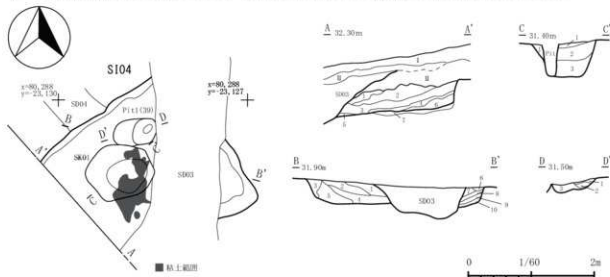
【カマド】検出されなかった。

【柱穴】ピットが1基検出されたが、柱穴とは考えられない。

【周溝】検出されなかった。

【土坑】住居中央に1基 (SI04内SK01) 検出された。長軸110cm、短軸89cmのやや不整な楕円形を呈し、深さは55cmで、ロームで埋め戻されていた。

【ピット】南壁寄りに1基検出された。長軸71cm、短軸43cmの楕円形を呈し、深さは39cmである。



## SI04 (A-A')

- 1 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色ローム粒10%、明褐色ローム粒2%、焼土ブロック2%、焼土粒2%、炭化物3%。  
 2 10YR4/6 暗褐色土 暗褐色ローム粒10%、明褐色ローム粒2%、焼土粒2%、炭化物2%。  
 3 10YR4/4 暗褐色土 暗褐色土30%、黄褐色ローム粒10%、明褐色ローム粒2%、明黄褐色ローム粒5%、焼土ブロック2%、炭化物2%。  
 4 10YR5/3 暗褐色土 暗褐色土20%、明褐色ローム粒10%、焼土ブロック2%、炭化物1%。  
 5 10YR5/4 暗褐色土 暗褐色土20%、明褐色ローム粒10%、炭化物2%、黄褐色土粒1%、炭化物1%。  
 6 10YR5/6 暗褐色土 暗褐色土10%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒2%、炭化物1%。  
 7 10YR5/8 暗褐色土 明褐色土10%、明褐色ローム粒2%、明褐色土7%、赤色土3%、灰白色粘土3%、焼土ブロック1%。

## SI04 (B-B')

- 1 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土30%、黄褐色ローム粒2%、黄褐色ロームブロック2%、黄褐色ローム粒2%、炭化物1%。  
 2 10YR4/4 暗褐色土 暗褐色土20%、黄褐色ローム粒2%。  
 3 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土20%、黄褐色ロームブロック2%。  
 4 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土20%、黄褐色ロームブロック2%。  
 5 10YR4/4 暗褐色土 暗褐色土20%、黄褐色ローム粒2%、黄褐色ローム粒2%。  
 6 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土20%、黄褐色ローム粒2%。  
 7 10YR3/4 暗褐色土 暗褐色土20%、明褐色ロームブロック2%、焼土粒2%。  
 8 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土20%、明褐色ローム粒2%。  
 9 10YR4/6 暗褐色土 暗褐色土20%、焼土粒2%、明褐色土3%。  
 10 10YR5/6 黄褐色ローム 黄褐色ローム粒10%。

## SI04/SK01 (C-C')

- 1 10YR5/6 黄褐色ローム 10YR7/8黄褐色ローム粒15%、10YR8/6黄褐色ローム粒15%、明黄褐色ローム粒10%、にぶい黄褐色ローム粒15%、赤色土3%、焼土粒2%、焼土ブロック2%。  
 2 10YR5/6 暗褐色ローム 暗褐色土20%、明褐色ロームブロック2%、灰白色粘土1%、焼土粒2%、赤色土2%。  
 3 10YR4/4 暗褐色ローム 黄褐色ローム粒20%、にぶい黄褐色ローム粒15%、明褐色ローム粒2%、赤色土3%、焼土ブロック2%、炭化物1%。

## SI04/P1 (D-D')

- 1 10YR7/8 明黄褐色ローム 明褐色土20%、黄褐色ローム粒2%、炭化物2%。  
 2 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土20%、明褐色ローム粒2%、明褐色土20%、黄褐色ローム粒2%。  
 3 10YR2/3 暗褐色土 暗褐色土20%、明褐色ローム粒2%、明褐色土20%、黄褐色ローム粒2%。

図62 第4号竪穴住居跡

【出土遺物】 出土した須恵器の重量は0.02kgで、図示し得る遺物はなかった。

【**小結**】 調査区際に位置し、重複により部分的な検出である。他の住居跡に比べ規模が小さく、カマドも検出されなかったことから、竪穴遺構の可能性も考えられる。(田中)

#### 第5号建物跡 (SI05、SD05、SB04、図63・64)

【**概要**】 標高約35.3mの平坦地に位置する。周囲の削平により、掘り方のみ検出された。住居部分は掘り方範囲も明瞭ではなかったが、外周溝と掘立柱建物跡が検出されたことから住居跡とした。調査区際に位置するため南西半のみ検出された。

##### 【**竪穴住居跡 - SI05**】

【**位置・確認**】 9-55～57グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。

【**平面形・規模**】 掘り方範囲は不整形で、北西-南東方向6.8mを測る。

【**堆積土**】 掘り方埋土のみが検出された。ローム粒やロームブロックを混入する黒色土を主体とする。

【**壁・床面**】 検出されなかった。

【**カマド・周溝**】 検出されなかった。

【**柱穴**】 Pit 1 が検出され、長軸56cm、短軸53cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは23cmである。

【**出土遺物**】 住居跡から遺物は出土しなかった。

【**外周溝 - SD05**】 SD05が本住居跡に伴う外周溝で、西半のみ検出された。住居の西-北側を巡る。検出された長さは14.9mで、環状を呈すると考えられる。幅は80～128cm、深さは8～42cmである。部分的に掘り方を有する。

【**堆積土**】 堆積土は黒色土・暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。白頭山苦小牧火山灰が堆積していた。なお火山灰分析の結果、白頭山苦小牧火山灰と再堆積した十和田八戸火山灰であるとの結果を得た（第4章第1節参照）。

【**出土遺物**】 外周溝から出土した土器の総重量は1.71kgで、内訳は土師器1.68kg、須恵器0.03kgである。溝の南西部分から比較的まとまって遺物が出土した。図示したのは土師器ミニチュア鉢(31)、甕(32・33)、須恵器杯(34)、砥石(35)で、31・32は底面直上から、他は覆土からの出土である。35の砥石は扁平な楕円形の流紋岩を素材とする。中央部を砥面としており、使用により凹んでいる。

【**掘立柱建物跡 - SB04**】 住居の南側に位置し、SP27～29・64・81・82・117で構成される。西半のみ検出された。桁行2間、梁行1間以上の建物跡で、桁行総長3.2m、梁行総長2.1m以上を測る。柱穴の掘り方は径31～52cmの円形または楕円形で、深さは25～50cmである。SP28では柱痕が確認された。ピットから遺物は出土しなかった。

【**小結**】 外周溝と掘立柱建物跡が付属する住居跡と考えられるが、周囲の削平により住居部分は掘り方だけの検出であった。(田中)

#### 第6号竪穴住居跡 (SI06、図65)

【**概要**】 標高約34.5～34.7mの平坦地に位置する。調査区際に位置し北東壁の一部のみ検出された。

【**位置・確認**】 9-63・64グリッドに位置し、第IV層上面で確認した。SD16と重複し、溝跡に接続する可能性も考えられたが、床面に高低差が認められることから住居跡とした。

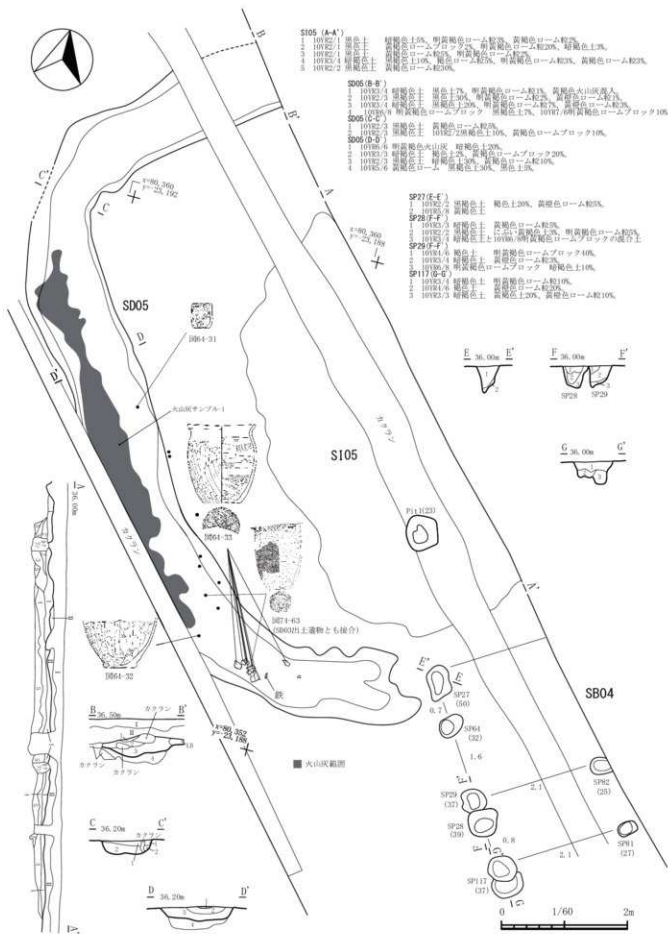


図63 第5号建物跡

- S105 (A-A')
- 1 10192/1 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色ローム粒2%
  - 2 10192/2 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒20%, 黄褐色土2%
  - 3 10192/3 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒1%
  - 4 10192/4 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土2%
  - 5 10192/5 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%

- S205 (B-B')
- 1 10193/1 黒褐色土 黒褐色土7%, 明黄褐色ローム粒1%, 黄褐色火山灰層入
  - 2 10193/2 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土2%
  - 3 10193/3 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土2%
  - 4 10193/4 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土2%

- S305 (C-C')
- 1 10194/1 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 2 10194/2 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%

- S405 (D-D')
- 1 10195/1 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 2 10195/2 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 3 10195/3 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 4 10195/4 黒褐色土 黒褐色土20%, 明黄褐色ローム粒2%

- SP27 (E-E')
- 1 10192/2 黒褐色土 黒褐色土20%, 黄褐色ローム粒5%
  - 2 10192/3 黒褐色土 黒褐色土20%

- SP28 (F-F')
- 1 10193/3 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 2 10193/4 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%

- SP29 (G-G')
- 1 10194/4 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 2 10194/5 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%

- SP117 (H-H')
- 1 10194/1 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 2 10194/2 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%
  - 3 10194/3 黒褐色土 黒褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%

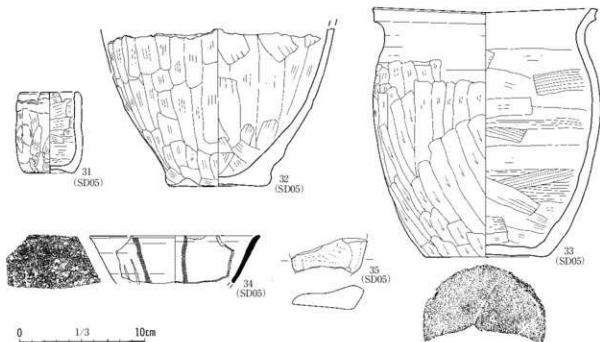


図64 第5号建物跡出土遺物

〔重複〕 SD16と重複し、本住居跡が古い。

〔平面形・規模〕 検出された北東壁は5.3mで、平面形は方形を呈すると考えられる。

〔堆積土〕 黒褐色土と暗褐色土が混在し、全体的にローム粒や粘土が中量混入する。人為堆積である。

〔壁・床面〕 壁高は32～66cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は黒色土や暗褐色土とローム粒・ロームブロックの混合土で構築されている。床面は起伏がある。

〔カマド・柱穴・周溝〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 出土した土師器の重量は0.05kgで、図示し得る遺物はなかった。

〔小結〕 大部分が調査区外に位置するため一部分のみの調査で、詳細は不明である。 (田中)

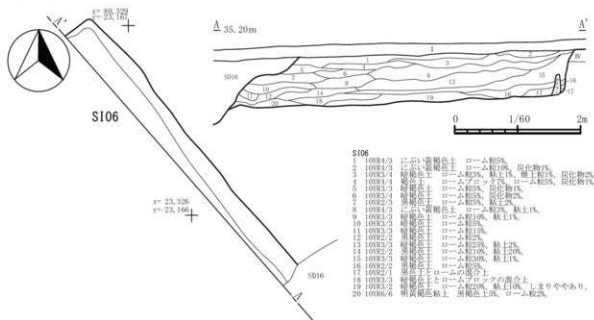


図65 第6号竪穴住居跡

## (2) 土坑

農道9号で検出された土坑は46基である。時期不明なものもあるが、多くは平安時代のもと考えられる。検出層位や堆積土などから縄文時代のもと考えられるのはSK02・03・05・06の4基で、42基が平安時代のもと思われる。SK29はSP117に変更し、SK12・13・29・35は調査段階あるいは整理段階において土坑ではないと判断されたもので、欠番とした。

**第1号土坑** (SK01、図66)

[位置・確認] 9-79-80グリッドに位置し、標高は約28.9mである。第Ⅲ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸84cm、短軸74cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは24cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、断面は皿状を呈する。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の総重量は0.03kg、内訳は土師器0.02kg、須恵器0.01kgで、図示できなかった。

**第2号土坑** (SK02、図66)

[位置・確認] 9-79グリッドに位置し、標高は約29.2mである。第Ⅲ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸76cm、短軸65cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは16cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、第3層には焼土が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、断面は皿状を呈する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第3号土坑** (SK03、図66)

[位置・確認] 9-77グリッドに位置し、標高は約30.6mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸115cm、短軸77cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは50cmである。

[堆積土] ロームブロックを含む黒褐色土を主体とする。底面直上の第5層はロームブロック層である。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第4号土坑** (SK04、図66)

[位置・確認] 9-85グリッドに位置し、標高は約24.9mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、西半のみ検出された。歪な方形を呈すると考えられ、西壁は126cmである。検出面からの深さは37cmである。

[堆積土] ロームブロックが混入する黄褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面はかなり起伏があり、北から南に向かって傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第5号土坑** (SK05、図66)

[位置・確認] 9-83グリッドに位置し、標高は約25.7mである。第Ⅲ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸104cm、短軸80cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは67cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 土坑南西側では壁は開きながら立ち上がるが、北東側ではオーバーハングし、袋状を呈する。

底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した縄文土器の重量は0.03kgで、図示できなかった。

#### 第6号土坑 (SK06、図66)

[位置・確認] 9-83グリッドに位置し、標高は約27.1mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置し、南西半のみ検出された。直径約80cmの円形を呈すると推測される。検出面からの深さは63cmである。

[堆積土] 黒褐色土と黒色土が混在する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南西側の壁はオーバーハングし袋状となる。底面は中央部が凹む揺鉢状である。

[出土遺物] 出土した縄文土器の重量は0.03kgで、覆土から出土したが、図示できなかった。

#### 第7号土坑 (SK07、図66)

[位置・確認] 9-47グリッドに位置し、標高は約36.0mである。第Ⅴ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸127cm、短軸43cmの溝状を呈する。検出面からの深さは16cmである。

[堆積土] 黒色土の単層である。堆積土は堅く締まり、粘性がある。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、断面は半円状を呈する。

[出土遺物] 土器は出土しなかった。底面から炭化物が出土した。炭化物には一部未炭化の部分があり、新しい時期の土坑の可能性もある。

#### 第8号土坑 (SK08、図66)

[位置・確認] 9-73・74グリッドに位置し、標高は約31.8mである。第Ⅴ層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、南西部は検出されなかった。楕円形を呈すると考えられ、検出された長軸は177cmである。検出面からの深さは75cmである。

[堆積土] 黒褐色土と黒色土を主体とする。底面付近の壁際では壁崩落土の粘土層と黒褐色土の互層となっており、これは自然堆積と考えられるが、これを掘り返した痕跡が見られる。第1～4層と第7層以下の堆積土にはローム粒が多く混入し、これらは人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。

[出土遺物] 出土した土器の重量は0.03kgである。底面から甕が出土したが、図示できなかった。

#### 第9号土坑 (SK09、図66)

[位置・確認] 9-74グリッドに位置し、標高は約31.8mである。第Ⅴ層上面で確認した。

[重複] SD04と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 長軸114cm、短軸100cmの隅丸方形に近い楕円形を呈する。検出面からの深さは47cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、全体的に黄褐色土や黄橙色土が混入する。人為堆積と考えられる。堆積土全体に締まりがある。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は揺鉢状である。底面の南側に長軸32cm、短軸27cmの楕円形ピットがあり、底面からの深さは23cmである。

[出土遺物] 出土した土器の重量は0.007kgで、覆土から甕が出土したが、図示できなかった。

#### 第10号土坑 (SK10、図66)

[位置・確認] 9-73グリッドに位置し、標高は約32.1mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SD03と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 長軸108cm、短軸97cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは35cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする。第1層はロームブロックが混入し人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 出土した土器の総重量は0.04kgで、内訳は土師器0.03kg、須恵器0.01kgである。覆土から出土したが、図示できなかった。

#### 第11号土坑 (SK11、図66・70)

[位置・確認] 9-72-73グリッドに位置し、標高は約32.2mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SD03と重複する。本土坑は溝跡の掘り方を掘り込んで構築されているが、溝跡埋没以前に埋没している。

[平面形・規模] 長軸155cm、短軸130cmの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは66cmである。

[堆積土] ローム粒が混入する黒褐色土を主体とする。堆積土下層は人為堆積、上層は自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は概ね平坦である。底面に貼り付くような状況で白色粘土が検出された。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.03kgで、覆土下層から環(36)が出土している。

#### 第14号土坑 (SK14、図66)

[位置・確認] 9-54グリッドに位置し、標高は約36.1mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸93cm、短軸87cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは16cmである。

[堆積土] 黒色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第15号土坑 (SK15、図67・70)

[位置・確認] 9-57グリッドに位置し、標高は約35.9mである。第V層上面で確認した。

[重複] SK16と重複し、本土坑が新しい。

[平面形・規模] 長軸117cm、短軸100cmのやや歪な楕円形を呈し、検出面からの深さは32cmである。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土が混在し、全体的にローム粒が混入する。第2層は黒褐色土と白頭山苦小牧火山灰の混合土で、第3・4層にも火山灰が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は起伏がある。

[出土遺物] 底面直上及び覆土から出土した土器の総重量は0.33kgで、内訳は土師器0.27kg、須恵器0.06kgである。覆土出土の土師器環(37)、甕(38)、底面直上出土の須恵器環(39)を図示した。

#### 第16号土坑 (SK16、図67・70)

[位置・確認] 9-57グリッドに位置し、標高は約35.9mである。第V層上面で確認した。

[重複] SK15と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 歪な楕円形を呈し、長軸は100cmを測る。重複により短軸は不明である。検出面からの深さは30cmである。



[堆積土] 黒褐色土を主体とする。第2層は人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏が激しい。

[出土遺物] 底面直上及び覆土から出土した土器の総重量は0.09kgで、内訳は土師器0.08kg、須恵器0.01kgである。そのうち土師器甕(40・41)を図示した。

#### 第17号土坑 (SK17、図67)

[位置・確認] 9-56グリッドに位置し、標高は約36.0mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸82cm、短軸60cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは26cmである。

[堆積土] ロームが混入する黒褐色土と暗褐色土を主体とする。第3層は黒色土が混入するロームブロック層で人為堆積と考えられるが、上層は自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.003kgで、図示できなかった。

#### 第18号土坑 (SK18、図67)

[位置・確認] 9-57グリッドに位置し、標高は約36.9mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸155cm、短軸109cmの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは39cmである。

[堆積土] ローム粒が混入する暗褐色土を主体とする。第3層にはロームブロックが多く混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は起伏が激しい。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第19号土坑 (SK19、図67・70)

[位置・確認] 9-68グリッドに位置し、標高は約33.4mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 直径78cmの歪な円形を呈する。検出面からの深さは24cmである。

[堆積土] 黒褐色土とロームブロックが混入する暗褐色土が混在する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は部分的に起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.02kgで、土師器坏(42)を図示した。

#### 第20号土坑 (SK20、図67)

[位置・確認] 9-68グリッドに位置し、標高は約33.4mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SP07と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 長軸78cm、短軸55cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは27cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第21号土坑 (SK21、図67)

[位置・確認] 9-68グリッドに位置し、標高は約33.6mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸54cm、短軸49cmの不整な円形を呈する。検出面からの深さは26cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、底面直上には暗褐色土とロームブロックの混合土が堆積する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は部分的に起伏があるが、概ね平坦である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第22号土坑 (SK22、図67)

[位置・確認] 9-67・68グリッドに位置し、標高は約33.8mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸122cm、短軸93cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは36cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.02kgで、図示できなかった。

#### 第23号土坑 (SK23、図67)

[位置・確認] 9-59グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸86cm、短軸65cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは20cmである。

[堆積土] ロームが混入する黒褐色土と暗褐色土が混在する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、断面は皿状を呈する。底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.003kgで、図示できなかった。

#### 第24号土坑 (SK24、図67・70)

[位置・確認] 9-69グリッドに位置し、標高は約33.3mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SK30と重複し、本土坑が新しい。

[平面形・規模] 長軸232cm、短軸193cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは81cmである。

[堆積土] 第5層は暗褐色土が混入する黒褐色土で、第II層に由来する自然堆積土と考えられる。この層の上下はローム粒やロームブロックが多く混入し、人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 土坑南東側では壁は開きながら立ち上がるが、北西側では壁はオーバーハングし、袋状となる。底面は緩やかな起伏があるものの、概ね平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の総重量は1.87kgで、内訳は土師器1.76kg、須恵器0.03kg、縄文土器0.08kgである。そのうち土師器坏(43)、ミニチュア鉢(44)、小甕(45・49)、甕(46～48)、壺(50)、縄文晩期深鉢片(51)を図示した。

#### 第25号土坑 (SK25、図67)

[位置・確認] 9-67グリッドに位置し、標高は約33.9mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸74cm、短軸52cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは26cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.07kgで、図示できなかった。

#### 第26号土坑 (SK26、図67)

[位置・確認] 9-67グリッドに位置し、標高は約33.9mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸126cm、短軸70cmの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは23cmである。

[堆積土] 褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第27号土坑 (SK27、図68)

[位置・確認] 9-67グリッドに位置し、標高は約33.9mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸75cm、短軸55cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは30cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.007kgで、図示できなかった。

#### 第28号土坑 (SK28、図68・70)

[位置・確認] 9-67グリッドに位置し、標高は約33.9mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸173cm、短軸71cmの中央が括れた楕円形を呈する。検出面からの深さは32cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする。堆積土下層はロームが混入し人為堆積の可能性があるが、最上層は自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は土師器0.2kg、須恵器0.2kgである。これら以外に覆土から土玉(52)が出土した。直径約2cm、長さ2.9cmの俵型で、他から出土している土玉に比べ大型である。

#### 第30号土坑 (SK30、図67・70)

[位置・確認] 9-69グリッドに位置し、標高は約33.1mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[重複] SK24と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 楕円形を呈すると考えられる。重複により規模は不明であるが、検出された短軸は100cmである。検出面からの深さは25cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.01kgで、土師器甕(53)を図示した。

#### 第31号土坑 (SK31、図68)

[位置・確認] 9-69グリッドに位置し、標高は約33.4mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸70cm、短軸52cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは19cmである。

[堆積土] 暗褐色土と褐色土が混在する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は播鉢状である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第32号土坑 (SK32、図68)

[位置・確認] 9-75グリッドに位置し、標高は約31.4mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[重複] SD03と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 重複により、平面形・規模は不明である。検出面からの深さは43cmである。

[堆積土] ロームが混入する黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第33号土坑 (SK33、図68)

[位置・確認] 9-69グリッドに位置し、標高は約33.2mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[平面形・規模] 直径58cmの方形に近い円形を呈する。検出面からの深さは25cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は平坦であるが、南西から北東に向かって傾斜している。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.006kgで、図示できなかった。

#### 第34号土坑 (SK34、図68)

[位置・確認] 9-65-66グリッドに位置し、標高は約34.2mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸77cm、短軸57cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは23cmである。

[堆積土] ロームが混入する暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は、土師器0.003kg、須恵器0.009kgで、図示できなかった。

#### 第36号土坑 (SK36、図68)

[位置・確認] 9-66グリッドに位置し、標高は約34.2mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸59cm、短軸55cmの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは21cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、底面にはロームブロックが堆積する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第37号土坑 (SK37、図68)

[位置・確認] 9-65グリッドに位置し、標高は約34.3mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 試掘のトレンチにより南西半が欠失し、検出できた長軸は67cmを測る。検出面からの深さは26cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、底面にはロームが堆積する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.009kgで、図示できなかった。

#### 第38号土坑 (SK38、図68)

[位置・確認] 9-69グリッドに位置し、標高は約33.1mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸75cm、短軸72cmの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは17cmである。

[堆積土] ローム粒が多く混入する暗褐色土を主体とし、人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第39号土坑 (SK39、図68)

[位置・確認] 9-71-72グリッドに位置し、標高は約32.6mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置し、南西半のみ検出された。円形あるいは楕円形を呈すると考えられ、検出された長軸は140cmである。検出面からの深さは83cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、全体的にローム粒が混入する。第6層は人為堆積の可能性があるが、これより上層は自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は挿鉢状を呈する。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.03kgで、図示できなかった。

#### 第40号土坑 (SK40、図68)

[位置・確認] 9-72グリッドに位置し、標高は約32.4mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[重複] SD11と重複し、本土坑が新しい。

[平面形・規模] 長軸93cm、短軸82cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは40cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、全体的にローム粒が混入する。第2層は人為堆積の可能性がある。

[壁・底面] 西壁は開きながら立ち上がるが、東壁はオーバーハンクス、袋状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の重量は土師器0.008kg、須恵器0.01kgで、図示できなかった。

#### 第41号土坑 (SK41、図68・70)

[位置・確認] 9-71グリッドに位置し、標高は約32.7mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[重複] SB03を構成するSP102・103と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 長辺144cm、短辺111cmの隅丸方形を呈する。検出面からの深さは41cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、第3層以下にはローム粒やロームブロックが多く混入する。人為堆積の可能性が考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の重量は須恵器0.006kg、縄文土器0.1kgである。縄文前期末葉～中期初頭の深鉢片(54)が出土した。

#### 第42号土坑 (SK42、図68)

[位置・確認] 9-63-64グリッドに位置し、標高は約34.7mである。第Ⅱ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸129cm、短軸118cmの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは16cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする。第1層には粘土や焼土が混入する。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は緩やかな起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第43号土坑 (SK43、図69)

[位置・確認] 9-70グリッドに位置し、標高は約33.0mである。第Ⅴ層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸83cm、短軸49cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは31cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第44号土坑 (SK44、図69)

[位置・確認] 9-70グリッドに位置し、標高は約33.0mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[重複] SB02と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 調査区際りに位置し、南西半のみ検出された。方形または長方形を呈すると考えられ、検出された南西壁は81cmである。検出面からの深さは25cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏があり、北西から南東に向かって傾斜している。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第45号土坑 (SK45、図69・70)

[位置・確認] 9-70グリッドに位置し、標高は約32.9mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際位置し、南西半のみ検出された。円形あるいは楕円形を呈すると考えられ、検出された長軸は146cmを測る。検出面からの深さは120cmである。

[堆積土] 黒色土と黒褐色土を主体とする。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は掘鉢状である。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は0.03kgである。そのうち土師器環(55)を図示した。

#### 第46号土坑 (SK46、図69・70)

[位置・確認] 9-70-71グリッドに位置し、標高は約32.8mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 長軸189cm、短軸143cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは94cmである。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土が混在する。第3層は第II層に由来するもので、自然堆積と考えられる。第3層の上下層にはローム粒やロームブロックが多く混入し、人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がるが、中央がやや括れる。底面は平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した土師器の重量は、土師器0.08kg、須恵器0.001kgである。そのうち土師器小壺(56)を図示した。

#### 第47号土坑 (SK47、図69)

[位置・確認] 9-71グリッドに位置し、標高は約32.6mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SK48、SB03と重複する。本土坑はSK48より新しく、掘立柱建物跡より古い。

[平面形・規模] 長軸256cm、短軸173cmの歪な楕円形を呈する。検出面からの深さは102cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、混入物が少なく、全体的に締まりがある。壁際には崩落土と考えられるにふい黄褐色土が見られる。自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は掘鉢状である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第48号土坑 (SK48、図69)

[位置・確認] 9-71グリッドに位置し、標高は約32.6mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SK47と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 重複により、平面形・規模は不明である。検出面からの深さは44cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする。第1・3層にはロームが多く混入し人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第49号土坑 (SK49、図69)

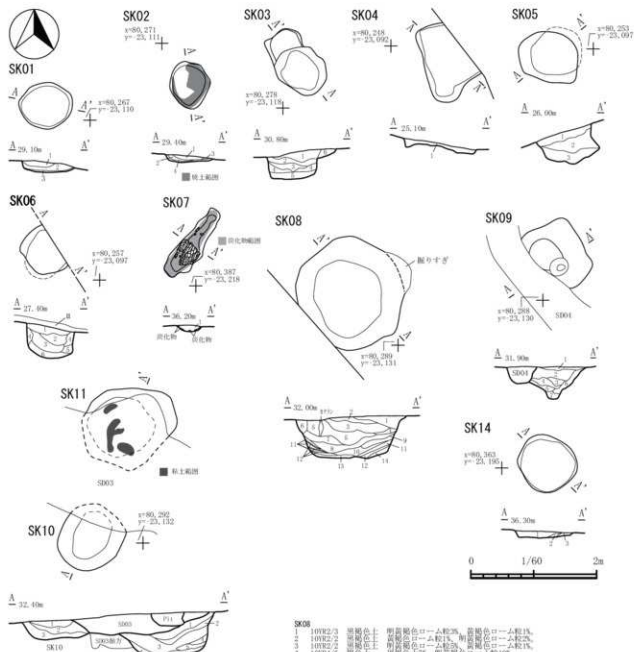
[位置・確認] 9-62-63グリッドに位置し、標高は約34.9mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置し、北東半のみ検出された。楕円形あるいは歪な隅丸方形を呈する可能性がある。検出された長軸は195cmを測る。検出面からの深さは71cmである。

[堆積土] ローム粒やロームブロックが混入する暗褐色土を主体とする。底面直上にはロームブロックが堆積しており、人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は緩やかな起伏がある。

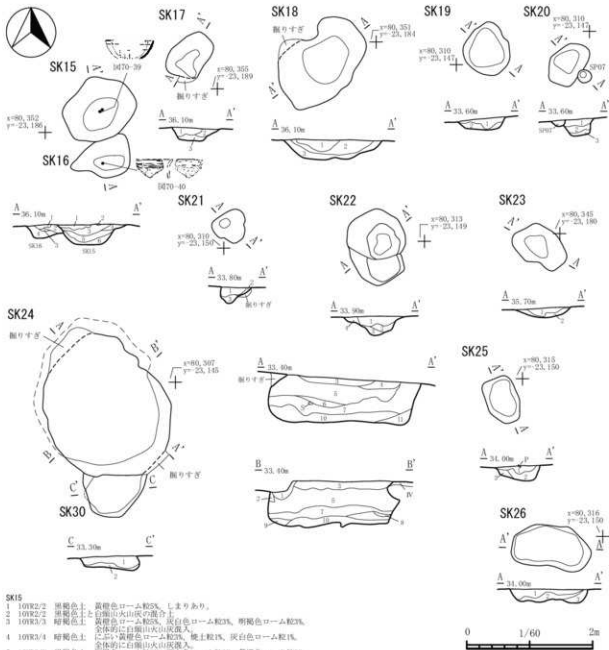
[出土遺物] 遺物は出土しなかった。



- SK01**
- 1 10YR2/2 黒色土
  - 2 10YR2/2 黒色土
  - 3 10YR1/7.1 黒色土
- SK02**
- 1 10YR2/2 黒色土
  - 2 10YR2/2 黒色土
  - 3 10YR1/7.1 黒色土
  - 4 10YR2/1 黒色土
- SK03**
- 1 10YR2/2 黒色土
  - 2 10YR2/2 黒色土
  - 3 10YR2/2 黒色土
  - 4 10YR2/2 黒色土
  - 5 10YR2/8 黒色土
  - 6 10YR2/4 黒色土
- SK04**
- 1 10YR5/6 黄褐色土
- SK05**
- 1 10YR2/1 黒色土
  - 2 10YR2/2 黒色土
  - 3 10YR2/3 黒色土
- SK06**
- 1 10YR2/2 黒色土
  - 2 10YR2/2 黒色土
  - 3 10YR2/1 黒色土
  - 4 10YR2/6 黒色土
  - 5 10YR6/6 黄褐色土
  - 6 10YR1/7.1 黒色土
- SK07**
- 1 10YR2/7.1 黒色土

- SK08**
- 1 10YR2/3 黄褐色土
  - 2 10YR2/2 黄褐色土
  - 3 10YR2/2 黄褐色土
  - 4 10YR2/1 黄褐色土
  - 5 10YR2/1 黄褐色土
  - 6 10YR2/1 黄褐色土
  - 7 10YR2/1 黄褐色土
  - 8 10YR2/1 黄褐色土
  - 9 10YR2/1 黄褐色土
  - 10 10YR2/1 黄褐色土
  - 11 10YR2/1 黄褐色土
  - 12 10YR2/1 黄褐色土
  - 13 10YR2/1 黄褐色土
  - 14 10YR2/1 黄褐色土
- SK09**
- 1 10YR2/1 黄褐色土
  - 2 10YR2/1 黄褐色土
  - 3 10YR2/1 黄褐色土
  - 4 10YR2/1 黄褐色土
  - 5 10YR2/1 黄褐色土
  - 6 10YR2/1 黄褐色土
  - 7 10YR2/1 黄褐色土
  - 8 10YR2/1 黄褐色土
  - 9 10YR2/1 黄褐色土
  - 10 10YR2/1 黄褐色土
  - 11 10YR2/1 黄褐色土
  - 12 10YR2/1 黄褐色土
  - 13 10YR2/1 黄褐色土
  - 14 10YR2/1 黄褐色土
- SK10**
- 1 10YR2/2 黒色土
  - 2 10YR2/2 黒色土
  - 3 10YR2/2 黒色土
  - 4 10YR2/2 黒色土
  - 5 10YR2/2 黒色土
  - 6 10YR2/2 黒色土
  - 7 10YR2/2 黒色土
  - 8 10YR2/2 黒色土
  - 9 10YR2/2 黒色土
  - 10 10YR2/2 黒色土
  - 11 10YR2/2 黒色土
  - 12 10YR2/2 黒色土
  - 13 10YR2/2 黒色土
  - 14 10YR2/2 黒色土
- SK11**
- 1 10YR2/1 黄褐色土
  - 2 10YR2/2 黄褐色土
  - 3 10YR2/3 黄褐色土
  - 4 10YR2/4 黄褐色土
  - 5 10YR2/5 黄褐色土
  - 6 10YR2/6 黄褐色土
  - 7 10YR2/7 黄褐色土
  - 8 10YR2/8 黄褐色土
  - 9 10YR2/9 黄褐色土
  - 10 10YR2/10 黄褐色土
  - 11 10YR2/11 黄褐色土
  - 12 10YR2/12 黄褐色土
  - 13 10YR2/13 黄褐色土
  - 14 10YR2/14 黄褐色土
- SK12**
- 1 10YR2/3 黄褐色土
  - 2 10YR2/3 黄褐色土
  - 3 10YR2/2 黄褐色土
- SK13**
- 1 10YR2/3 黄褐色土
  - 2 10YR2/3 黄褐色土
  - 3 10YR2/2 黄褐色土
- SK14**
- 1 10YR1/7.1 黒色土
  - 2 10YR4/4 黄褐色土
  - 3 10YR2/3 黄褐色土

図66 土坑 (1)



## SK15

- 1 10YK2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒5%、しまりあり。
- 2 10YK2/2 黒褐色土 白濁山火山灰の混入土。
- 3 10YK3/3 暗褐色土 灰褐色ローム粒5%、灰白色ローム粒3%、明褐色ローム粒3%、全体的に白濁山火山灰混入。
- 4 10YK3/4 暗褐色土 同上。黄褐色ローム粒2%、焼土粒1%、灰白色ローム粒1%、全体的に白濁山火山灰混入。
- 5 10YK2/3 黒褐色土 明褐色ローム粒2%、灰白色ローム粒3%、黄褐色ローム粒3%。
- 6 10YK3/4 暗褐色土 明褐色土5%。

## SK16

- 1 10YK3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒5%、灰白色ローム粒1%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 暗褐色土30%、灰白色ローム粒1%。
- 3 10YK3/3 暗褐色土 暗褐色土1%、炭化物粒1%。
- 4 10YK2/3 暗褐色土 黄褐色土2%、炭化物粒。

## SK17

- 1 10YK2/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒10%、黄褐色ローム粒5%。
- 2 10YK3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒20%。
- 3 10YK3/6 黄褐色ロームブロック 黒色土15%。

## SK18

- 1 10YK3/3 暗褐色土 黒褐色土20%、黄褐色ローム粒2%、黄褐色ローム粒2%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 黒褐色土30%、黄褐色ローム粒10%、黄褐色ローム粒1%。
- 3 10YK3/4 暗褐色土 黒褐色土5%、黄褐色ロームブロック40%。

## SK19

- 1 10YK2/3 暗褐色土 暗褐色土30%、明褐色ローム粒10%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 暗褐色土15%。

## SK20

- 1 10YK2/3 暗褐色土 明褐色ローム粒2%、炭化物粒1%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%、炭化物粒1%。
- 3 10YK3/6 黄褐色ロームブロック 黒色土15%。

## SK21

- 1 10YK2/2 暗褐色土 明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK2/3 暗褐色土 明褐色ローム粒10%。
- 3 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒20%、黒褐色土7%。
- 4 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒7%、黒色土1%。
- 5 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%、黒色土1%。

## SK22

- 1 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK2/3 暗褐色土 明褐色ローム粒10%。
- 3 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%。
- 4 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒20%、黒褐色土7%。

## SK23

- 1 10YK2/3 暗褐色土 明褐色ローム粒7%、黒色土1%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%、黒色土1%。

## SK24

- 1 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%。
- 3 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%。
- 4 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒20%、黒褐色土7%。

## SK25

- 1 10YK2/3 暗褐色土 明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%。
- 3 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%。
- 4 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%、黄褐色ロームブロック3%。

## SK26

- 1 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%、黒色土2%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%、黒色土2%。
- 3 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%、黒色土15%。
- 4 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%、黒色土13%。

## SK24

- 1 10YK3/4 暗褐色土 黒褐色土120%、黒色土1%、10YK6/6明褐色ローム粒20%、10YK3/6明褐色ロームブロック30%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK3/3 暗褐色土 黒色土1%、黄褐色ローム粒2%。
- 3 10YK3/3 暗褐色土 明褐色ローム粒1%、黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%。
- 4 10YK3/6 黄褐色ロームブロック 明褐色ローム粒1%、黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%、炭化物粒2%。
- 5 10YK2/2 暗褐色土 黒褐色土10%、明褐色ローム粒2%、焼土粒1%、炭化物粒。
- 6 10YK3/4 暗褐色土 黒褐色土10%、10YK6/6明褐色土粒上3%、10YK3/6明褐色ロームブロック10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%、焼土粒1%、炭化物粒。
- 7 10YK3/4 暗褐色土 黒色土1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 8 10YK3/6 明褐色ロームブロック 明褐色ローム粒1%、黒色土1%。
- 9 10YK2/3 暗褐色土 黒色土20%、明褐色ローム粒10%、黄褐色ローム粒3%、明褐色ローム粒1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 10 10YK2/3 暗褐色土 黒褐色土130%、10YK6/6明褐色ロームブロック10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 11 10YK3/4 暗褐色土 黒色土1%、明褐色ローム粒10%、黄褐色ロームブロック3%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。

## SK25

- 1 10YK3/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒20%、明褐色ローム粒10%、黒褐色土1%、黒色土1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%、10YK3/6明褐色ロームブロック30%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK3/3 暗褐色土 黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%。
- 3 10YK3/3 暗褐色土 明褐色ローム粒1%、黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%。
- 4 10YK3/6 黄褐色ロームブロック 明褐色ローム粒1%、黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%、炭化物粒2%。
- 5 10YK2/2 暗褐色土 黒褐色土10%、明褐色ローム粒2%、焼土粒1%、炭化物粒。
- 6 10YK3/4 暗褐色土 黒褐色土10%、10YK6/6明褐色土粒上3%、10YK3/6明褐色ロームブロック10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%、焼土粒1%、炭化物粒。
- 7 10YK3/4 暗褐色土 黒色土1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 8 10YK3/6 明褐色ロームブロック 明褐色ローム粒1%、黒色土1%。
- 9 10YK2/3 暗褐色土 黒色土20%、明褐色ローム粒10%、黄褐色ローム粒3%、明褐色ローム粒1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 10 10YK2/3 暗褐色土 黒褐色土130%、10YK6/6明褐色ロームブロック10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 11 10YK3/4 暗褐色土 黒色土1%、明褐色ローム粒10%、黄褐色ロームブロック3%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。

## SK26

- 1 10YK3/4 暗褐色土 黄褐色ローム粒20%、明褐色ローム粒10%、黒褐色土1%、黒色土1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%、10YK3/6明褐色ロームブロック30%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK3/3 暗褐色土 黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%。
- 3 10YK3/3 暗褐色土 明褐色ローム粒1%、黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%。
- 4 10YK3/6 黄褐色ロームブロック 明褐色ローム粒1%、黒褐色土1%、黒色土1%、黄褐色ローム粒2%、明褐色ローム粒1%、炭化物粒2%。
- 5 10YK2/2 暗褐色土 黒褐色土10%、明褐色ローム粒2%、焼土粒1%、炭化物粒。
- 6 10YK3/4 暗褐色土 黒褐色土10%、10YK6/6明褐色土粒上3%、10YK3/6明褐色ロームブロック10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%、焼土粒1%、炭化物粒。
- 7 10YK3/4 暗褐色土 黒色土1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 8 10YK3/6 明褐色ロームブロック 明褐色ローム粒1%、黒色土1%。
- 9 10YK2/3 暗褐色土 黒色土20%、明褐色ローム粒10%、黄褐色ローム粒3%、明褐色ローム粒1%、10YK6/6明褐色ローム粒10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 10 10YK2/3 暗褐色土 黒褐色土130%、10YK6/6明褐色ロームブロック10%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。
- 11 10YK3/4 暗褐色土 黒色土1%、明褐色ローム粒10%、黄褐色ロームブロック3%、10YK3/6明褐色ローム粒2%。

## SK27

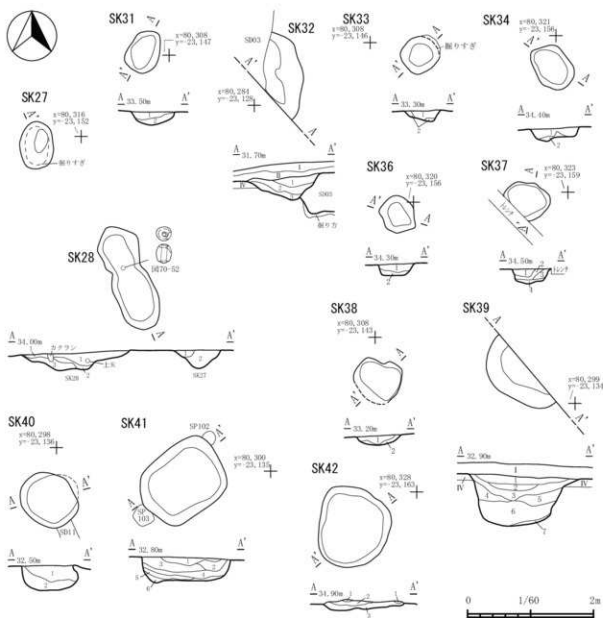
- 1 10YK3/4 暗褐色土 10YK3/4暗褐色土30%、褐色土7%、黒褐色土2%、明褐色ローム粒2%。
- 2 10YK3/4 暗褐色土 明褐色ローム粒2%。
- 3 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%、黒色土15%。
- 4 10YK4/4 暗褐色土 明褐色ローム粒10%、黒色土13%。

## SK28

- 1 10YK2/3 暗褐色土 褐色土30%、黄褐色ロームブロック3%、明褐色ローム粒1%、炭化物粒1%。
- 2 10YK4/4 暗褐色土 褐色土1%。

図67 土坑 (2)





- SK27**  
 1 10182/3 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 炭化物2%,  
 2 10182/3 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 炭化物1%,  
**SK28**  
 1 10192/3 黒褐色土 緑褐色土15%, 褐色土1%, 明黄褐色ローム粒3%,  
 2 10184/4 褐色土 明黄褐色ロームブロック2%,  
 3 10182/4 緑褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 褐色土15%,  
 褐色土10%,  
**SK31**  
 1 10193/4 緑褐色土 褐色土30%, 黄褐色ロームブロック10%,  
 2 10184/4 緑褐色土 明黄褐色ローム粒30%, 褐色土15%,  
**SK32**  
 1 10192/3 黒褐色土 褐色土30%, 10186/8明黄褐色ローム粒5%,  
 2 10192/3 黒褐色土 緑褐色土30%, 明黄褐色ローム粒7%,  
 明黄褐色ロームブロック2%, 炭化物2%,  
 3 10182/3 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%,  
 黄褐色ローム粒2%, 明褐色ローム粒2%,  
**SK33**  
 1 10182/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒5%, 黄土粒1%, しまりあり,  
 2 10182/2 黒褐色土 明黄褐色土20%, しまりあり,  
**SK34**  
 1 10193/4 緑褐色土 黄褐色ロームブロック2%, 黄褐色ローム粒5%,  
 2 10184/4 緑褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 炭化物2%, しまりあり,  
**SK36**  
 1 10182/2 黒褐色土 黄褐色ロームブロック1%, 黄褐色ローム粒7%,  
 2 10182/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒2%, 炭化物1%, しまりあり,  
**SK37**  
 1 10182/3 黒褐色土 黄褐色ローム粒2%, 炭化物1%, しまりあり,  
 2 10182/3 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 炭化物1%, しまりあり,  
**SK38**  
 1 10183/4 緑褐色土 褐色土15%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色ローム粒1%,  
 2 10186/8 明黄褐色ローム 褐色土10%, 炭化物1%,  
**SK39**  
 1 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色ローム粒10%,  
 2 10182/2 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 10186/9明黄褐色ローム粒2%,  
 3 10182/2 黒褐色土 褐色土2%, 明黄褐色ローム粒5%, 黄褐色土1%, 明黄褐色ローム粒2%,  
 4 10182/2 黒褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 10186/9明黄褐色ローム粒2%,  
 5 10182/2 黒褐色土 褐色土1%, 明黄褐色ローム粒2%, 明黄褐色ローム粒1%,  
 6 10182/2 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%, 明黄褐色ローム粒2%,  
 7 10186/9 明黄褐色ローム 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%, 明黄褐色ローム粒2%,  
**SK40**  
 1 10192/2 黒褐色土 10182/3黒褐色土20%, 褐色土2%, 黄褐色ローム粒5%,  
 2 10182/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒2%,  
**SK41**  
 1 10193/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 2 10182/2 黒褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 3 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 4 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 5 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 6 10186/8 明黄褐色ローム 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
**SK42**  
 1 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 2 10182/2 黒褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 3 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 4 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 5 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 6 10186/8 明黄褐色ローム 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,

- SK38**  
 1 10183/4 緑褐色土 明黄褐色ローム粒20%, 炭化物1%,  
 2 10186/8 明黄褐色ローム 褐色土10%, 炭化物1%,  
**SK39**  
 1 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 10186/9明黄褐色ローム粒10%,  
 2 10182/2 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 10186/9明黄褐色ローム粒2%,  
 3 10182/2 黒褐色土 褐色土2%, 10186/9明黄褐色ローム粒2%, 10186/9明黄褐色ローム粒2%,  
 4 10182/2 黒褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 10186/9明黄褐色ローム粒2%,  
 5 10182/2 黒褐色土 褐色土1%, 明黄褐色ローム粒2%, 明黄褐色ローム粒1%,  
 6 10182/2 黒褐色土 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%, 明黄褐色ローム粒2%,  
 7 10181/7 黒褐色土 明黄褐色ロームブロック2%, 明黄褐色ローム粒2%, 明黄褐色ローム粒2%,  
**SK40**  
 1 10192/2 黒褐色土 10182/3黒褐色土20%, 褐色土2%, 黄褐色ローム粒5%,  
 2 10182/2 黒褐色土 黄褐色ローム粒2%,  
 3 10182/2 黒褐色土 10182/3黒褐色土20%, 褐色土2%, 明黄褐色ロームブロック2%,  
 明黄褐色ローム粒2%, 炭化物2%, しまりあり,  
**SK41**  
 1 10193/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 2 10182/2 黒褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 3 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 4 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 5 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 6 10186/8 明黄褐色ローム 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
**SK42**  
 1 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 2 10182/2 黒褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 3 10183/4 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 4 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 5 10182/3 緑褐色土 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,  
 6 10186/8 明黄褐色ローム 褐色土10%, 明黄褐色ローム粒2%, 黄褐色土1%,

図68 土坑 (3)



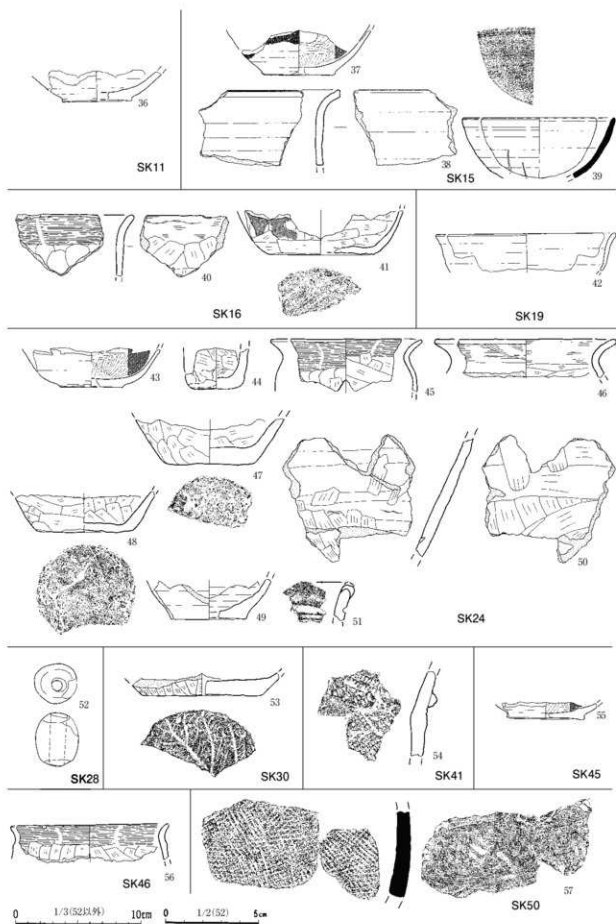


图70 土坑出土遺物

**第50号土坑 (SK50、図69・70)**

[位置・確認] 9-73・74グリッドに位置し、標高は約31.6mである。SI02の掘り方を除去したところ、確認された。

[重複] SI02と重複し、本土坑が古い。

[平面形・規模] 調査区際位置し、南西半のみ検出された。直径約160cmの円形を呈すると推測される。検出面からの深さは57cmである。

[堆積土] 黒褐色土を主体とし、ローム粒やロームブロックが混入する。人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁はオーバーハンクし袋状を呈する。底面は平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した須恵器の重量は0.1kgである。そのうち須恵器甕(57)を図示した。(田中)

**(3) 溝跡**

農道9号で検出された溝跡は16条で、SD05はSI05の外周溝であるため建物跡の項に記載している。ここではその他の15条について以下に記述する。なおSD03は円形周溝で、SD12とSD16は同一の方形周溝をなすものと思われる。

**第1号溝跡 (SD01、図71)**

[位置・確認] 9-85グリッドに位置し、標高は約24.7～24.3mである。第V層上面で確認した。

[平面形・規模] 北東-南西方向に伸びる直線状の溝跡で、調査区際位置するため南西端のみ検出された。検出された長さは1.1mで、幅は30～45cmである。検出面からの深さは4～17cmである。

[堆積土] 褐色土の単層である。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏があり、北東から南西に向かって傾斜する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第2号溝跡 (SD02、図71)**

[位置・確認] 9-52グリッドに位置し、標高は約36.1mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 北東-南西方向に伸びる直線状の溝跡で、調査区際位置するため南西端のみ検出された。長さは28m、幅は117cm前後でほぼ一定である。検出面からの深さは7～29cmである。

[堆積土] 混入物の少ない黒色土と黒褐色土を主体とする。第4・5層は黒色土を混入する黄褐色ローム層で掘り方も考えられるが、第4層上面は平坦ではない。これより上層は自然堆積と考えられ、第2層には白頭山苦小牧火山灰が堆積していた。なお火山灰分析の結果、白頭山苦小牧火山灰と再堆積した十和田八戸火山灰の混合土であるとの結果を得た(第4章第1節参照)。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は北東から南西に向かって傾斜する。底面には掘削痕が見られる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第3号溝跡 (SD03、図72・74)**

[位置・確認] 9-72～75グリッドに位置し標高は約30.8～31.7mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SI04、SK10・11・32、SD08・09・10・11と重複する。本溝跡はSI04・SK10より新しく、SK32より古い。SK11は本溝跡の掘り方を壊して構築されているが、本溝跡の埋没以前に埋没している。また、溝跡との新旧は明確ではないが、本溝跡とSD08・11が交わる部分に白頭山火山灰が堆積し、

SD09・10が交わる部分には白頭山火山灰が堆積していないことから、本溝跡はSD08・11より新しく、SD09・10より古い可能性がある。

[平面形・規模] 半円形の溝跡で、規模が大きいため検出できたのは溝跡の北東半のみである。検出された長さ15.6m、幅102～173cmである。検出面からの深さは19～82cmであるが、概ね40～80cmである。環状を呈する可能性があり、推定される直径は外径約15.2m、内径約12.8mである。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とし、部分的にローム粒が混入する。自然堆積と考えられる。本溝跡の北半では、白頭山苫小牧火山灰が北側から溝跡に流れ込むように堆積していた。なお、火山灰分析の結果、白頭山苫小牧火山灰と再堆積した十和田八戸火山灰の混合土であるとの結果を得た(第4章第1節参照)。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏があるが概ね平坦で、底面は北東部が最も高く、西と南に向かって緩やかに傾斜する。

[出土遺物] 底面・覆土から出土した土器の総重量は5.09kgで、内訳は土師器4.48kg、須恵器0.59kg、縄文土器0.02kgである。そのうち図示したのは、土師器杯(58・59)、壺?(60)、ミニチュア鉢(61)、

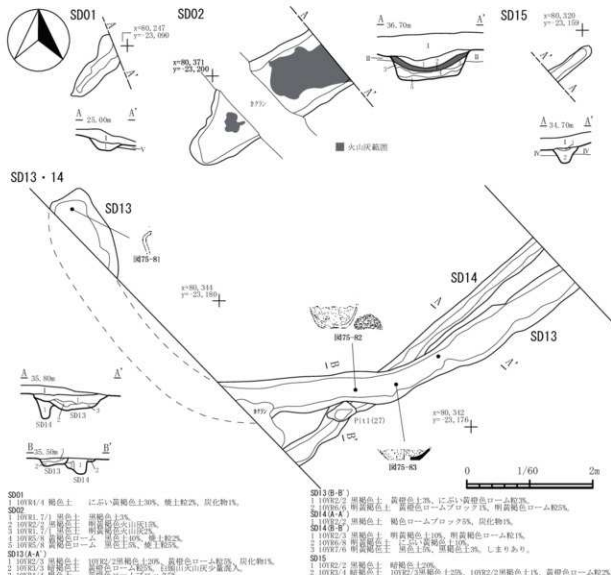


図71 溝跡(1)



甕 (62～64)、小甕 (65・66)、ミニチュア壺 (67)、須恵器環 (68～72)、石製品 (73・74) である。溝跡北西側の調査区際では、底面直上から土師器甕 (63) が潰れた状態で出土した。須恵器の69底外面と70外面には刻書があり、72は胎土分析による産地同定によって海老沢産?との結果を得た(第4章第5節参照)。73・74は覆土上層と底面直上からそれぞれ出土した、全面が磨かれた小碟である。

#### 第4号溝跡 (SD04、図72・75)

[位置・確認] 9-74グリッドに位置し、標高は約31.7～31.8mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SI04・SK09と重複し、本溝跡はSK09より新しく、SI04より古い。

[平面形・規模] 重複により北端のみ検出された。検出できた長さは3.0mで、幅37～63cmの弧状を呈する。検出面からの深さは18～31cmである。

[堆積土] ロームブロックが混入する暗褐色土を主体とし、人為堆積と考えられる。

[壁・底面] 西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁は開きながら立ち上がる。底面は部分的に起伏があるがほぼ平坦で、北から南に向かって傾斜する。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の総重量は0.2kgで、内訳は土師器0.16kg、須恵器0.02kg、縄文土器0.02kgである。そのうち土師器壺 (75)、甕 (76)、縄文深鉢 (77) を図示した。

#### 第6号溝跡 (SD06、図72)

[位置・確認] 9-74グリッドに位置し、標高は約31.1mである。第IV層上面で確認した。本溝跡の約1m北側には、本溝跡とほぼ平行するSD07が検出された。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、東端のみ検出された。検出された長さは0.8mで、幅15～24cmの直線状を呈する。検出面からの深さは3～7cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面には起伏がある。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第7号溝跡 (SD07、図72)

[位置・確認] 9-74グリッドに位置し、標高は約31.1mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、東端のみ検出された。検出された長さは0.85mで、幅15～22cmの直線状を呈する。検出面からの深さは4～9cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は起伏があり、西から東に向かって傾斜する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第8号溝跡 (SD08、図72)

[位置・確認] 9-73グリッドに位置し、標高は約31.3～31.4mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SD03・09と重複するが、新旧は明確ではない。本溝跡とSD03が交わる部分に白頭山苦小牧火山灰が堆積していることから、本溝跡がSD03より古い可能性がある。

[平面形・規模] 重複により南端のみ検出された。検出された長さは2.1mで、幅13～32cmの直線状の溝跡である。検出面からの深さは1～10cmである。

[堆積土] 土層断面図を作成できなかったため、不明である。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は緩やかな起伏があり、北から南に向かって傾斜する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第9号溝跡 (SD09、図72)

[位置・確認] 9-73グリッドに位置し、標高は約31.3mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SD03・08と重複するが、新旧は明確ではない。本溝跡とSD03が交わる部分には白頭山苦小牧火山灰が堆積していないことから、本溝跡がSD03より新しい可能性がある。

[平面形・規模] 重複により西端のみ検出された。検出された長さは1.2mで、幅15～22cmの蛇行する溝跡である。検出面からの深さは1～9cmである。

[堆積土] 土層断面図を作成できなかったため、不明である。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面には緩やかな起伏があり、西から東に向かって傾斜する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第10号溝跡 (SD10、図72)

[位置・確認] 9-72グリッドに位置し、標高は約31.6mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SD03と重複する。新旧は明確ではないが、本溝跡とSD03が交わる部分には白頭山苦小牧火山灰が堆積していないことから、本溝跡が新しい可能性がある。

[平面形・規模] 調査区際位置しSD03と重複するため、検出されたのは部分的で、検出された長さは1.4mで、幅31～50cmのやや湾曲する溝跡である。検出面からの深さは4～13cmである。

[堆積土] 黒褐色土と褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は工具痕により起伏が激しいが、概ね南から北に向かって傾斜する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第11号溝跡 (SD11、図72)

[位置・確認] 9-72グリッドに位置し、標高は約31.7mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SK40・SD03と重複する。本溝跡はSK40より古い。SD03との新旧は明確ではないが、2条の溝跡が交わる部分には白頭山苦小牧火山灰が堆積しており、本溝跡が古い可能性がある。

[平面形・規模] 重複により検出されたのは部分的で、検出された長さは1.5mで、幅19～40cmの緩やかに湾曲する溝跡である。検出面からの深さは9～16cmである。

[堆積土] 混入物の少ない黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は工具痕により起伏が激しいが、概ね北から南に向かって傾斜する。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第12号溝跡 (SD12、図73・75)

[位置・確認] 9-66グリッドに位置し、標高は約33.3～33.5mである。第IV層上面で確認した。本溝跡とSD16は平行で、平面形・規模等もほぼ同一である。本溝跡は北東端で上端が北西方向に屈曲しており、SD16に接続して方形周溝を呈する可能性が高い。

[平面形・規模] 幅182～242cmの直線状の溝跡で、調査区を北東-南西方向に横切る。両端は調査区外に延び、検出できた長さは5.3mである。検出面からの深さは89～107cmである。

[堆積土] 暗褐色土と褐色土を主体とし、全体的にローム粒・ロームブロックを混入する。人為堆積





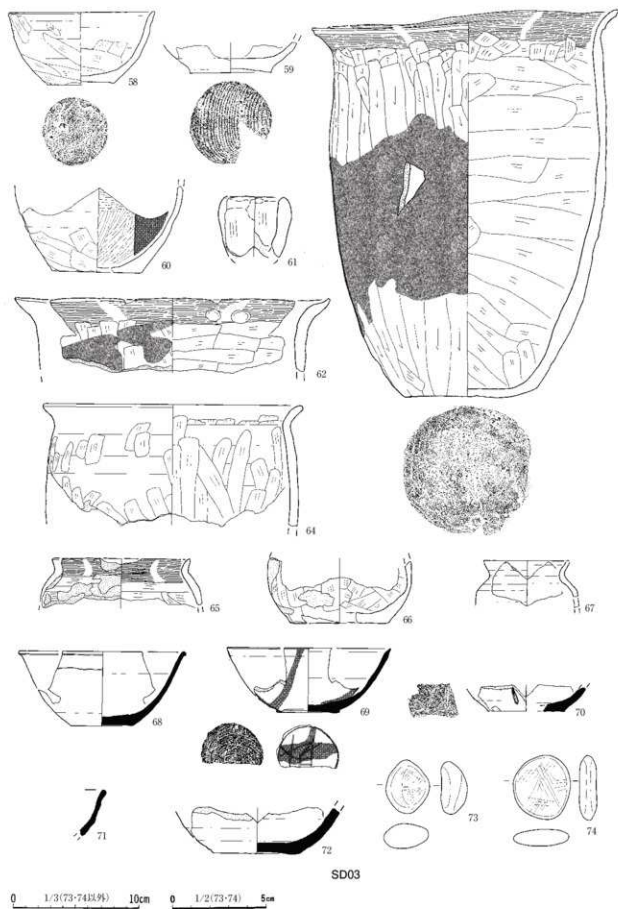


図74 溝跡出土遺物(1)

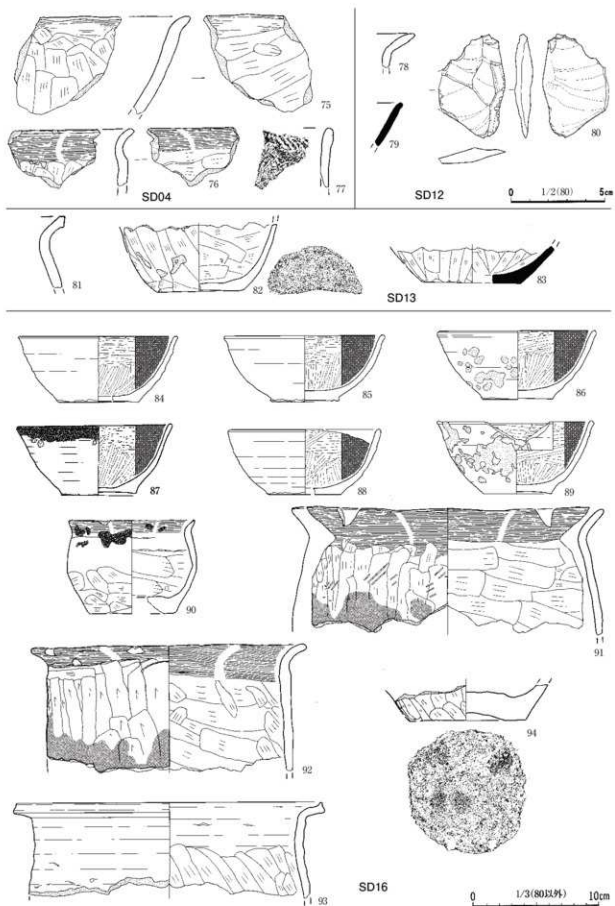


图75 溝跡出土遺物 (2)

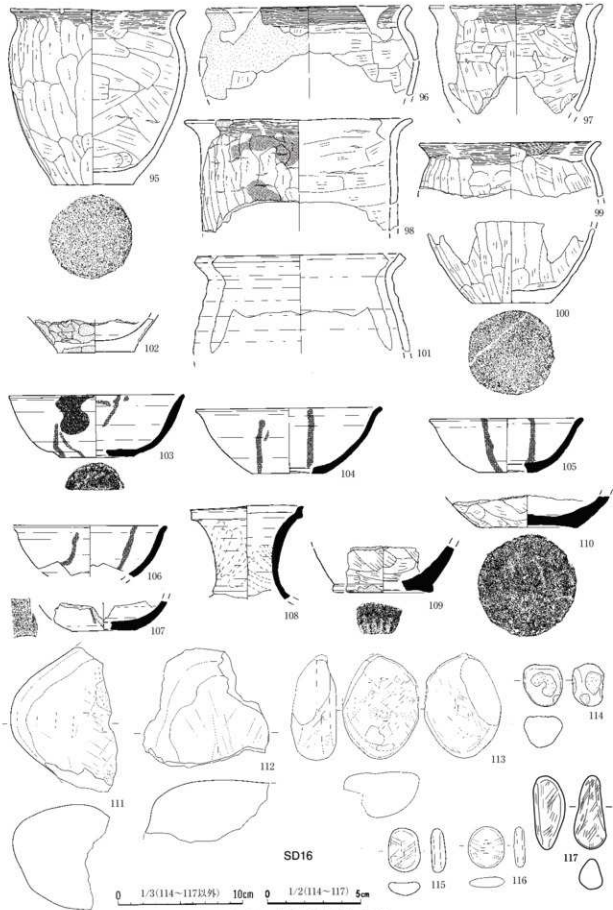


図76 溝跡出土遺物 (3)

と自然堆積を何回か繰り返していると考えられる。土層断面 D - D' 底面付近では水による堆積が見られる。

[壁・底面] 壁は底面付近ではほぼ垂直に立ち上がるが、壁上位は大きく開く。南西端では壁は開きながら立ち上がる。底面は部分的に起伏が見られるものの概ね平坦である。

[出土遺物] 覆土から出土した土器の総重量は0.84kgで、内訳は土師器0.83kg、須恵器0.01kgである。土師器甕 (78)、須恵器杯 (79)、二次加工のある剥片 (80) を図示した。

#### 第13号溝跡 (SD13、図71・75)

[位置・確認] 9-58～60グリッドに位置し標高は約34.8～35.7mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SD14と重複し、本溝跡が新しい。

[平面形・規模] 調査区をほぼ東西方向に横切り、北方向に湾曲する溝跡である。西側が一旦調査区外に延び、長さは10.3mである。幅は40～63cmである。検出面からの深さは1～24cmである。

[堆積土] ローム粒やロームブロックが混入する暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がる。底面は工具痕により起伏があり、西から東に向かって傾斜している。底面には掘削痕が見られる。

[出土遺物] 底面直上及び覆土から出土した土器の総重量0.28kg、内訳は土師器0.21kg、須恵器0.07kgである。そのうち土師器甕 (81・82)、須恵器壺 (83) を図示した。

#### 第14号溝跡 (SD14、図71)

[位置・確認] 9-59グリッドに位置し、標高は約34.9～35.4mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SD13と重複し、本溝跡が古い。

[平面形・規模] 調査区を北東-南西方向に横切る直線状の溝跡である。検出された長さは5.2mで、幅は22～40cmである。検出面からの深さは2～23cmである。

[堆積土] ローム粒やロームブロックが混入する暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は工具痕により起伏があり、南西から北東に向かって傾斜する。

[出土遺物] 底面直上及び覆土から出土した土器の総重量0.28kgで、内訳は土師器0.21kg、須恵器0.07kgである。図示し得る資料はなかった。

#### 第15号溝跡 (SD15、図71)

[位置・確認] 9-65グリッドに位置し、標高は約33.5～33.6mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 北東-南西方向に延びる直線状の溝跡で、調査区際に位置するため北東端のみ検出された。検出された長さは0.8mで、幅は19～24cmとほぼ一定である。検出面からの深さは7～13cmである。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、底面は緩やかな起伏があるが、ほぼ平坦である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

#### 第16号溝跡 (SD16、図73・75・76)

[位置・確認] 9-64グリッドに位置し、標高は約33.6～33.8mである。第IV層上面で確認した。本溝跡とSD12は平行で、平面形・規模等から同一の溝跡で方形周溝をなす可能性もある。

[重複] SI06と重複し、本溝跡が新しい。

[平面形・規模] 幅191～201cmの直線状の溝跡で、調査区を北東-南西方向に横切る。両端は調査区外に延び、検出できた長さは5.5mである。検出面からの深さは76～86cmである。

[堆積土] 黒褐色土と暗褐色土を主体とする。ローム粒・ロームブロックを多量に混入する層とほとんど混入物を含まない層とが混在しており、自然堆積と人為堆積を何回か繰り返したと考えられる。本溝跡の北西端では火山灰が検出され、火山灰分析の結果、白頭山苦小牧火山灰及び再堆積した十和田八戸火山灰が含まれているとの結果を得た(第4章第5節参照)。

[壁・底面] 壁は開きながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は緩やかな起伏があり、南西から北東に向かって傾斜する。

[出土遺物] 堆積土中～下層にかけて土師器・須恵器・礫石器などが大量に廃棄されていた。覆土から出土した土器の総重量は6.72kgで、内訳は土師器6.02kg、須恵器0.7kgである。そのうち、土師器(84～89)、鉢(90)、甕(91～94、98～102)、小甕(95・97)、須恵器(103～107)、壺(108～110)、台石(111・112)、擦痕のある礫(113)、石製品(114～117)を図示した。土師器は6点(84～89)とも内面黒色処理を施したもので、鉢(90)は輪積痕を残している。土師器甕は輪積み・ロクロともにあり、須恵器は壺底面には菊花状調整(109)を施すものがある。土師器と須恵器は、それぞれまとまりを持って出土しているように看取される。台石2点(111・112)はどちらも破片のためもの大きさは不明であるが、礫の一面を磨りや敲きに使用している。石材は安山岩である。全面が磨かれた小礫4点(114～117)は、石材は凝灰岩が主で、他に石英も含まれる。(田中)

#### (4) 掘立柱建物跡・ピット

農道9号では118基のピットが検出され、このうち35基は掘立柱建物跡4棟を構成するものであった。掘立柱建物跡の多くは調査終了後の遺構配置図を元に復元したもので、SB04は堅穴住居跡に付属するものである。これについては建物跡の項に記載し、ここでは単独の掘立柱建物跡3棟について記述する。掘立柱建物跡は調査区ほぼ中央のSD03とSD12に挟まれた区域に位置する。この区域には堅穴住居跡や溝跡はなく、掘立柱建物跡・ピットのほかに土坑が多く検出された。掘立柱建物跡は軸方向をほぼ同じくすることからほぼ同時期のものと推測され、他の平安時代の堅穴住居跡やSI05の掘立柱建物跡(SB04)と軸方向がほぼ同じことから、平安時代に属すると考えられる。図中に柱間距離と( )内に柱穴の深さを示した。柱間距離はm、柱穴の深さはcmで表している。

併せて単独のピットから出土した遺物についても記載する。

##### 第1号掘立柱建物跡(SB01、図77)

[位置・確認] 9-68-69グリッドに位置し、標高は約32.5～33.1mである。第IV層上面で確認した。

[平面形・規模] 調査区際位置するため、建物跡の南西半のみ検出された。SP56～61・63・66・67・71・72・74の12基の柱穴で構成される建物跡である。検出されたのは、5間×1間以上の建物跡で、桁行総長7.1m、梁行総長1.3m以上である。軸方向はN-43°-Wである。

[柱穴] 掘り方は径24～40cmの円形あるいは楕円形を呈する。検出面からの深さは15～39cmである。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

##### 第2号掘立柱建物跡(SB02、図77)

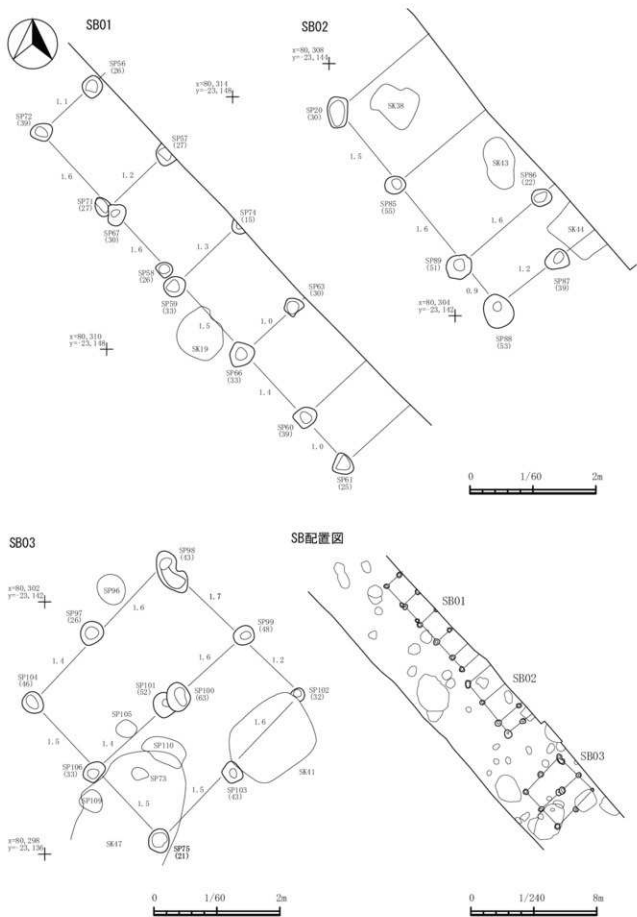


图77 掘立柱建物跡

[位置・確認] 9-69-70グリッドに位置し、標高は約32.2～32.5mである。第IV層上面で確認した。

[重複] SK38・43・44と重複するが、直接的な新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 調査区際に位置するため、建物跡の南西半のみ検出された。SP20・85～89の6基の柱穴で構成される建物跡である。検出されたのは、3間×1間以上の建物跡で、桁行総長4.0m、梁行総長1.6m以上である。軸方向はN-39°-Wである。

[柱穴] 掘り方は径33～55cmの円形あるいは楕円形を呈する。検出面からの深さは22～55cmである。

[出土遺物] SP89から土師器が0.002kg出土したが、図示できなかった。

表14 農道9号SP計測表

SP番号	グリッド	位置		規模 (cm)			備考	
		X	Y	長軸	短軸	深さ		
1	9-85	80249	-23092	27.0	44	31	24	
2	9-79	80267	-23110	29.7	57	25	21	
3	9-73	80292	-23129	32.2	34	30	38	
4	9-73	80293	-23130	32.2	37	35	30	
5	9-73	80293	-23131	32.2	(34)	(32)	32	
6	9-73	80292	-23131	32.2	(31)	(31)	21	
7	9-68	80310	-23147	34.8	21	20	10	
8	9-53	80367	-23198	36.8	29	19	20	
9	9-49	80381	-23213	36.8	(46)	(38)	19	
10	9-49	80381	-23213	36.8	(30)	(24)	7	
11	9-47	80389	-23217	36.7	38	30	31	
12	9-46	80393	-23220	36.6	39	35	35	
13	9-76	80283	-23121	32.0	28	25	16	
14	9-76	80283	-23122	32.0	32	27	11	
15	9-76	80281	-23122	31.8	28	23	27	
16	9-76	80280	-23122	31.8	52	47	15	
17	9-76	80278	-23120	31.5	27	22	13	
18	9-77	80275	-23120	31.4	25	22	27	
19	9-77	80275	-23119	31.3	34	29	22	
20	9-69	80306	-23143	33.2	50	33	30	SB02
21	9-72	80269	-23133	32.4	47	38	67	
22	9-80	80265	-23105	28.7	27	26	12	
23	9-80	80265	-23107	28.5	19	16	9	
24	9-80	80266	-23107	28.6	28	23	15	
25	9-80	80266	-23106	28.8	20	19	18	
26	9-80	80266	-23107	28.7	20	11	7	
27	9-57	80353	-23185	35.9	52	35	50	SB04
28	9-57	80351	-23183	35.9	46	44	39	SB04
29	9-57	80352	-23184	35.9	(39)	(35)	37	SB04
30	9-66	80319	-23152	34.0	24	22	19	
31	9-66	80317	-23153	34.2	29	27	13	
32	9-66	80317	-23154	34.2	42	39	24	
33	9-66	80317	-23155	34.2	29	28	12	
34	9-66	80317	-23156	34.1	24	21	27	
35	9-66	80316	-23156	34.1	25	22	14	
36	9-74	80290	-23129	31.9	30	26	16	
37	9-73	80290	-23129	31.9	38	33	40	
38	9-79	80290	-23130	31.9	30	21	25	
39	9-73	80290	-23130	32.0	26	25	17	
40	9-73	80290	-23130	31.9	25	20	21	
41	9-72	80296	-23132	32.3	26	23	21	
42	9-72	80296	-23132	32.4	28	25	22	
43	9-72	80296	-23133	32.4	31	29	16	
44	9-72	80297	-23134	32.4	26	22	25	
45	9-68	80311	-23149	33.7	49	48	21	
46	9-67	80314	-23154	34.0	43	35	10	
47	9-72	80297	-23135	32.5	35	30	21	
48	9-60	80340	-23176	34.4	43	29	21	
49	9-60	80341	-23176	35.1	28	25	12	
50	9-59	80343	-23179	35.4	30	21	13	
51	9-58	80346	-23181	35.7	42	40	23	
52	9-63	80322	-23158	34.4	40	31	27	
53	9-65	80324	-23157	34.4	26	26	25	
54	9-65	80323	-23156	34.3	23	20	16	
55	9-65	80321	-23157	34.3	34	30	42	
56	9-68	80314	-23148	33.8	32	30	26	SB01
57	9-68	80312	-23146	33.7	(33)	(19)	27	SB01
58	9-68	80311	-23146	33.6	24	23	26	SB01
59	9-68	80310	-23146	33.6	34	31	33	SB01

SP番号	グリッド	位置		規模 (cm)			備考	
		X	Y	長軸	短軸	深さ		
60	9-69	80308	-23144	33.3	34	30	39	SB01
61	9-69	80308	-23144	33.2	32	30	25	SB01
62	9-69	80305	-23143	33.1	36	31	19	
63	9-68	80310	-23144	33.3	26	22	30	SB01
64	9-57	80353	-23184	36.6	41	27	32	SB04
65	9-69	80307	-23144	33.2	60	53	19	
66	9-68	80309	-23145	33.4	40	36	33	SB01
67	9-68	80312	-23147	33.7	(34)	(26)	33	SB01
68	9-67	80314	-23153	34.0	44	41	23	
69	9-65	80321	-23160	34.3	35	33	30	
70	9-65	80321	-23161	34.5	32	32	22	
71	9-68	80312	-23147	33.7	(31)	(26)	27	SB01
72	9-68	80313	-23148	33.8	32	28	39	SB01
73	9-71	80299	-23138	32.7	22	19	22	
74	9-68	80311	-23145	33.5	(29)	(13)	15	SB01
75	9-71	80298	-23138	32.7	39	32	21	SB03
76	9-72	80295	-23132	32.3	34	25	22	
77	9-72	80295	-23134	32.4	32	21	9	
78	9-72	80297	-23133	32.3	31	25	23	
79	9-72	80296	-23133	32.4	24	19	15	
80	9-72	80346	-23176	32.4	(24)	(12)	14	
81	9-57	80352	-23181	35.8	31	20	27	SB04
82	9-57	80353	-23183	35.9	(29)	(29)	25	SB04
83	9-73	80292	-23134	32.2	29	25	40	
84	9-71	80289	-23129	31.8	36	27	32	
85	9-69	80305	-23142	32.1	33	28	55	SB02
86	9-70	80305	-23140	32.9	33	28	22	SB02
87	9-70	80303	-23140	32.9	39	32	39	SB02
88	9-70	80303	-23141	32.9	55	46	53	SB02
89	9-70	80304	-23141	33.3	45	37	51	SB02
90	9-70	80303	-23141	33.0	47	32	31	
91	9-70	80301	-23142	32.9	35	27	16	
92	9-70	80302	-23141	32.9	33	31	19	
93	9-70	80302	-23141	33.9	46	32	33	
94	9-70	80302	-23139	32.8	51	33	21	
95	9-70	80302	-23138	32.8	66	39	36	
96	9-71	80301	-23138	32.8	51	43	22	
97	9-71	80301	-23139	32.8	38	34	26	SB03
98	9-71	80302	-23137	32.8	75	30	43	SB03
99	9-71	80301	-23136	32.7	33	31	48	SB03
100	9-71	80300	-23137	32.7	43	35	63	SB03
101	9-71	80300	-23137	32.7	(40)	(26)	32	SB03
102	9-71	80300	-23135	32.7	(19)	(17)	32	SB03
103	9-71	80299	-23136	32.7	31	29	43	SB03
104	9-71	80300	-23104	32.8	36	32	46	SB03
105	9-71	80299	-23138	32.7	31	27	20	
106	9-71	80299	-23139	32.7	37	25	33	SB03
107	9-71	79302	-23136	32.7	(27)	(16)	13	
108	9-71	80302	-23137	32.8	(62)	(34)	113	
109	9-71	80298	-23139	32.7	36	33	46	
110	9-71	80299	-23137	32.5	70	41	58	
111	9-71	80298	-23140	33.4	45	27	37	
112	9-71	80298	-23139	33.2	60	38	67	
113	9-65	80324	-23159	34.4	24	20	10	
114	9-64	80323	-23161	34.5	36	31	27	
115	9-59	80346	-23176	35.6	(31)	(30)	70	
116	9-65	80322	-23160	34.5	31	29	51	
117	9-57	80351	-23183	35.9	66	50	37	SB04
118	9-72	80296	-23132	32.3	27	20	26	



**第3号掘立柱建物跡 (SB03、図77・78)**

[位置・確認] 9-71グリッドに位置し、標高は約32.0～32.1mである。第Ⅳ層上面で確認した。

[重複] SK41・47と重複し、本建物跡が新しい。

[平面形・規模] SP75・97～104・106の10基のピットで構成される建物跡である。2間×2間の建物跡で、桁行総長3.1m、梁行総長3.0mである。軸方向はN-43°-Wである。

[柱穴] 掘り方は径31～75cmの円形あるいは楕円形を呈する。検出面からの深さは21～63cmである。

[出土遺物] 土器類は、SP98から土師器0.03kgが、SP99から土師器0.03kgが出土した。図示したのは、SP99出土の土師器小甕(118)と、SP100出土の敲石(119)である。119は扁平な安山岩の礫の片面中央部に敲打痕が見られ、周囲は黒く変色している。

**ピット出土遺物 (図78)**

9-73グリッドに位置するSP37の覆土からは土師器甕(120)が出土した。9-72グリッドに位置するSP78の覆土からは、土玉が1点(121)出土した。直径1.6cm、長さ2.7cmの紡錘型に近い形態である。

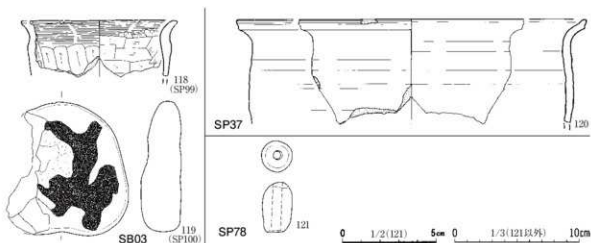


図78 掘立・ピット出土遺物

**(5) 焼土遺構 (図79)**

農道9号で検出された焼土遺構は7基である。SN01～03は調査区南側の斜面の第Ⅲ層上面で、SN04～07は調査区北側の平坦地で第Ⅱ層上面で検出された。検出層位から、前者は縄文時代、後者は平安時代かそれ以降のものと考えられる。

**第1号焼土遺構 (SN01、図79)**

9-80グリッドに位置し、標高は約28.0mである。第Ⅲ層上面で確認し、本焼土遺構の約1m西側にはSN02・03が検出された。規模は長軸109cm、短軸101cmの不整形を呈する。堆積土は褐色焼土を主体とし、遺物は出土しなかった。

**第2号焼土遺構 (SN02、図79)**

9-80グリッドに位置し、標高は約28.2mである。第Ⅲ層上面で確認し、SN03と重複し本遺構が新しい。規模は長軸79cm、短軸66cmの不整形を呈する。堆積土は黒褐色土と焼土の混合土の単層で、縄文土器が0.06kg出土したが図示できなかった。

**第3号焼土遺構 (SN03、図79)**

9-80グリッドに位置し、標高は約28.2mである。第Ⅲ層上面で確認し、SN02と重複し本遺構が古い。

規模は長軸90cm、短軸64cmのやや歪な楕円形を呈する。堆積土は黄褐色焼土を主体とし、縄文土器が0.01kg出土したが図示できなかった。

#### 第4号焼土遺構 (SN04、図79)

9-49グリッドに位置し、標高は約36.1mである。第Ⅱ層上面で確認した。規模は長軸172cm、短軸33cmの不整形を呈する。堆積土は褐色焼土を主体とし、遺物は出土しなかった。

#### 第5号焼土遺構 (SN05、図79)

9-59・60グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第Ⅱ層上面で確認し、本遺構の約1m北東側にはSN06・07が検出された。SD13・14と重複し、本遺構が新しい。規模は長軸102cm、短軸90cmの楕円形を呈する。堆積土は黒褐色土と焼土の混合土の単層で、遺物は出土しなかった。

#### 第6号焼土遺構 (SN06、図79)

9-59グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第Ⅱ層上面で確認した。SD14と重複し、本遺構が新しい。規模は長軸42cm、短軸31cmの楕円形を呈する。堆積土は明褐色焼土を主体とし、土師器が0.005kgしたが図示できなかった。

#### 第7号焼土遺構 (SN07、図79)

9-59グリッドに位置し、標高は約35.6mである。第Ⅱ層上面で確認し、SD13・14と重複し本遺構が新しい。規模は長軸71cm、短軸38cmの楕円形を呈する。堆積土は黒色土と焼土の混合土の単層で、遺物は出土しなかった。

(田中)

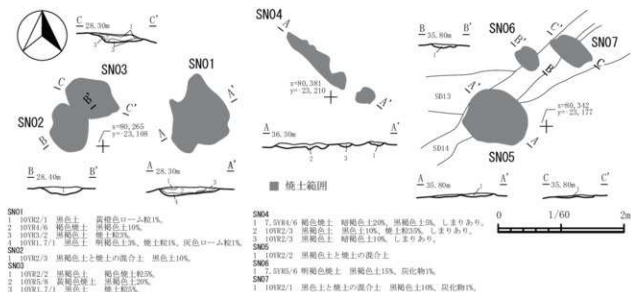


図79 焼土遺構

## 2 遺構外の出土遺物 (図80～82)

遺構外出土遺物のうち図示したのは、縄文時代の遺物 (122～152) と平安時代の遺物 (153～175) である。なお農道9号の遺構外からは縄文土器9.5kg、土師器11.4kg、須恵器1.1kg、現代陶磁器等0.3kg、合計22.3kgの土器類が出土した。

縄文時代の遺物は、土器・土製品類 (122～145) と石器 (146～152) がある。土器・土製品類は、前期末葉から中期初頭の円筒下層d式土器から円筒上層a式土器のもの (122～131)、中期中葉の円



图80 遺構外出土遺物(1)

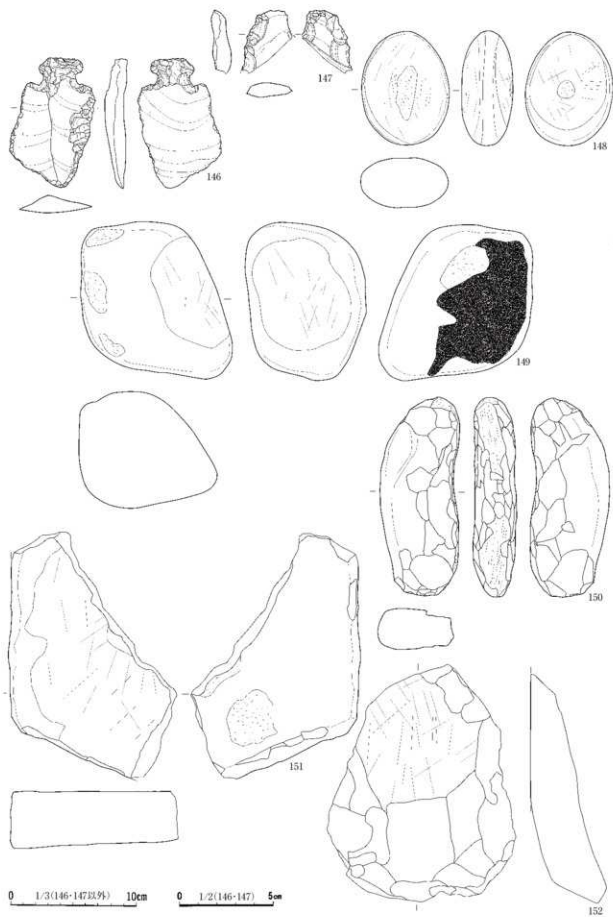


図81 遺構外出土遺物(2)

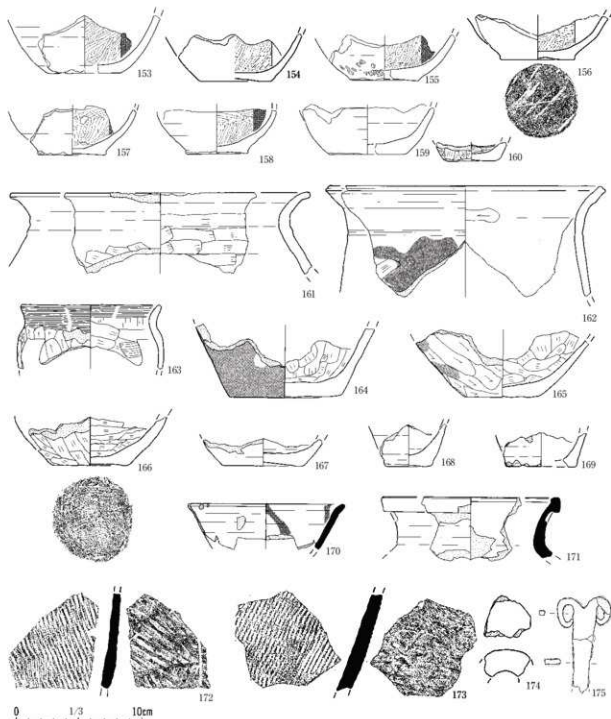


図82 遺構外出土遺物(3)

筒上層 d 式土器 (132～135)、中期後葉の円筒上層 e 式土器 (136～139)、後期の土器 (140・141・143)、晩期の土器 (142)、円筒上層 d 式土器片を加工した土器片鉢 (144)、中期頃の土器片を加工した貫通孔を有する円盤状土製品 (145) がある。石器は石匙 (146)、不定形石器 (147)、磨・敲石 (148・149)、半円状扁平打製石器 (150)、台石 (151・152) がある。

平安時代の遺物は、土師器の坏 (153～159)、鉢 (160)、甕類 (161～167)、ミニチュア甕 (168・169)、須恵器の坏 (170)、壺 (171)、甕 (172・173)、支脚 (174)、錫杖状鉄製品 (175) がある。土師器坏の154・156は、黒色処理したものの二次被熱によって黒色が飛んだ状態となっている。(神)

## 3 遺物観察表

表15 農道9号出土土器類 観察表

図録番号	遺物番号	遺構名	出土位置	種類	器種	部位	計測(cm)		外周調整(文様)	内周調整(文様)	備考 (成面調整)	
							口径	器高				
57	1	1聖穴 S01	カマド床面P23-30、 床面P21	土師器	杯	碗定形	129	60	5.3	ロクロ	ロクロ	回転赤切
57	2	1聖穴 S01	カマド床面P28	土師器	杯	碗定形	113.5	5.4	5.0	ロクロ	ロクロ	回転赤切、口縁欠
57	3	1聖穴 S01	床面P20	土師器	杯	碗定形	13.00	6.0	5.6	ロクロ	ロクロ	回転赤切
57	4	1聖穴 S01	カマド床面PA	土師器	甕	体部上半	30.5	—	(19.2)	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヨコナデ	北照粘土
57	5	1聖穴 S01	カマド床面P24-32、36-40	土師器	甕	体部上半	25.0	—	(14.5)	ヘラケズリ、ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	北照粘土
57	6	1聖穴 S01	床面P16	土師器	甕	体部上半	23.0	—	(11.5)	輪轡柄、ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ハタ目、ヨコナデ	
57	7	1聖穴 S01	床面P28	土師器	甕	口縁部	—	—	(6.8)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヨコナデ	
57	8	1聖穴 S01	カマド床面P3-4、5-9、18、カマド床面P5、遺構9974土層	土師器	甕	体部下半	—	(7.7)	(21.3)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	砂肌、ヘラケズリ
57	9	1聖穴 S01	カマド床面P21-23、25-26、29-31、35-36、37、カマド床面P4-18、床面P25-26、14、覆土層	土師器	甕	定形	21.5	8.9	27.2	ロクロ、ヘラケズリ、炭化物付着	輪轡柄、ロクロ、ユビナデ	砂肌、ナデ
58	10	1聖穴 S01	カマド床面P8-9、19、カマド床面P10	土師器	甕	口縁部	23.3	—	(8.9)	ロクロ、ナデ	輪轡柄、ロクロ、ナデ	
58	11	1聖穴 S01	カマド床面P9	土師器	甕	口縁部	—	—	(8.8)	ロクロ、ナデ、	ナデ、ナデ	
58	12	1聖穴 S01	床面P10-11、覆土下層	土師器	甕	口縁部	16.0	—	(6.2)	輪轡柄、ヨコナデ、ナデ	輪轡柄、ナデ	
58	13	1聖穴 S01	床面P17	土師器	小甕	口縁部	—	—	(4.7)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヨコナデ	
58	14	1聖穴 S01	カマド床面P14	土師器	小甕	底部	—	6.2	6.9	(表面滑石)ナデ?	ナデ	ナデ
58	15	1聖穴 S01	カマド床面P14-15-42	土師器	小甕	底部	—	6.4	(7.8)	ヘラケズリ	ナデ	砂肌、ヘラケズリ
58	16	1聖穴 S01	床面P17、床面P13-14、覆土下層	土師器	小甕	体部下半	—	7.0	(9.8)	ロクロ、ナデ	ロクロ	回転赤切
58	17	1聖穴 S01	床面前上P5	須恵器	甕	腹部	—	—	(6.8)	ロクロ、襷帯、新書	輪轡柄、ロクロ	
58	18	1聖穴 S01	床面P21	須恵器	甕	底部	—	7.2	4.4	ロクロ	ロクロ	回転赤切、敷土分析No4
58	19	1聖穴 S01	床面P2	須恵器	甕	体部下半	—	8.4	(15.5)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ
58	20	1聖穴 S01	床面P15-18、床面前上P5、敷土層、SD03974覆土層	須恵器	甕	胴部	—	—	(14.5)	あて貝類、火ツケ痕	ナデ	敷土分析No3
59	21	2聖穴 S02	カマド床面	土師器	甕	口縁部	—	—	(13.0)	輪轡柄、ヨコナデ、ナデ、オヤエ	ナデ、ヨコナデ	
59	22	2聖穴 S02	カマド床面P2	土師器	甕	口縁部	—	—	(8.4)	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ	
59	23	2聖穴 S02	床面P1	土師器	甕	底部	—	—	(8.2)	ヘラケズリ、ヘラケズリ	ナデ、オヤエ	ナデ
61	24	3聖穴 S03	床面P10、覆土P5	土師器	鉢	碗定形	10.0	(5.0)	(7.2)	輪轡柄、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	オヤエ
61	25	3聖穴 S03	床面P1	須恵器	杯	口縁部	14.0	—	(5.6)	ロクロ、火だき直	ロクロ、火だき直	回転赤切
61	26	3聖穴 S03	覆土上層	土師器	小甕	体部上半	(13.4)	—	(9.2)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヨコナデ	
61	27	3聖穴 S03	カマド床面P10	土師器	小甕	口縁部	(14.0)	—	(4.8)	ロクロ	ロクロ	
61	28	3聖穴 S03	穴床面支脚	土師器	小甕	体部下半	—	7.2	(8.5)	ロクロ	ロクロ	回転赤切
61	29	3聖穴 S03	覆土P4、前蓋土	土師器	甕	体部上半	(35.4)	—	(13.45)	輪轡柄、ヨコナデ、ヘラケズリ、黒色物質付着	ナデ、ヨコナデ、ハタ目	
61	30	3聖穴 S03	覆土上層	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	(3.8)	1原焼、沈濁		F000136-138と同一器体、内周上縁c式
64	31	5聖物 SD05	床面前上P4	土師器	深鉢	碗定形	5.0	4.0	6.5	輪轡柄、オヤエ、ナデ	ナデ	ナデ、オヤエ
64	32	5聖物 SD05	床面前上P10、95007?	土師器	甕	体部下半	—	(8.0)	(12.6)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヘラケズリ
64	33	5聖物 SD05	955覆土P12-20、956覆土	土師器	甕	碗定形	18.1	(9.8)	20.0	ロクロ、ヘラケズリ、ヘラケズリ	ロクロ、ハタ目、ナデ	砂肌
64	34	5聖物 SD05	9557ナク土中層	須恵器	杯	口縁部	(13.6)	—	(3.8)	ロクロ、火だき直、新書	ロクロ、火だき直	回転赤切より表面滑石
70	36	土塊 SK11	覆土下層	土師器	杯	底部	—	(5.5)	(2.5)	ロクロ	ロクロ	回転赤切
70	37	土塊 SK15	覆土上層	土師器	杯	底部	—	(5.4)	(3.6)	ロクロ、黒色物質付着	ミナギ、黒色処理	回転赤切
70	38	土塊 SK15	覆土上層	土師器	甕	口縁部	—	—	(6.0)	ロクロ	ロクロ	
70	39	土塊 SK15	床面前上P1	須恵器	杯	体部上半	(12.0)	—	(4.85)	ロクロ、新書?	ロクロ	
70	40	土塊 SK16	床面前上P1	土師器	甕	口縁部	—	—	(4.9)	オヤエ、ヨコナデ	輪轡柄、ナデ	内周滑石
70	41	土塊 SK16	覆土上層	土師器	甕	底部	—	—	(8.6)	ヘラケズリ、炭化物付着	ナデ	砂肌、ヘラケズリ
70	42	土塊 SK19	覆土上層	土師器	杯	口縁部	(14.4)	—	(5.0)	ロクロ	ロクロ	回転赤切
70	43	土塊 SK24	覆土上層、覆土上層	土師器	杯	底部	—	(5.0)	(3.0)	ロクロ	ミナギ、黒色処理	回転赤切
70	44	土塊 SK24	覆土上層、遺構9974目録	土師器	深鉢	底部	—	(3.8)	(3.2)	ナデ	ナデ	ナデ
70	45	土塊 SK24	覆土上層	土師器	深鉢	口縁部	(12.0)	—	(4.2)	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヨコナデ	
70	46	土塊 SK24	覆土上層	土師器	深鉢	口縁部	(14.4)	—	(3.05)	輪轡柄、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	
70	47	土塊 SK24	覆土下層	土師器	甕	底部	—	(7.4)	(3.2)	ヘラケズリ?	オヤエ、ユビナデ?	砂肌
70	48	土塊 SK24	覆土上層	土師器	甕	底部	—	(8.0)	(3.1)	ヘラケズリ	ナデ	砂肌、ヘラケズリ
70	49	土塊 SK24	覆土上層	土師器	小甕	底部	—	(6.1)	(3.3)	ロクロ	ロクロ	回転赤切
70	50	土塊 SK24	覆土上層	土師器	甕	胴部	—	—	(9.9)	輪轡柄、ロクロ、ヘラケズリ	ナデ	
70	51	土塊 SK24	覆土上層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(3.1)	沈濁	平滑ナデ	口縁突起、縄文陶器新書
70	53	土塊 SK30	覆土上層	土師器	甕	底部	—	(19.6)	(1.8)	ヘラケズリ	ユビナデ	木炭灰
70	54	土塊 SK41	覆土上層	縄文土器	深鉢	底部	—	—	(6.9)	口縁内縁面付着、襷帯、輪轡柄付着、輪轡柄	ナデ	縄文前期末-中期初頭
70	55	土塊 SK45	覆土上層	土師器	杯	底部	—	(3.0)	(1.2)	ロクロ	ロクロ	回転赤切
70	56	土塊 SK46	覆土上層、遺構9974目録	土師器	小甕	口縁部	(12.0)	—	(6.8)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヨコナデ	
70	57	土塊 SK50	覆土上層、遺構9972目録	須恵器	甕	胴部	—	—	(3.0)	あて貝類	あて貝類、ユビナデ	
74	58	講読 SD03	974覆土上層	土師器	杯	碗定形	11.7	5.5	5.8	ロクロ、ヘラケズリ	ロクロ、ナデ	砂肌赤切、ナデ
74	59	講読 SD03	972覆土上層、973覆土上層、遺構9973目録	土師器	杯	底部	—	6.6	(4.2)	ロクロ	ロクロ	砂肌赤切
74	60	講読 SD03	972覆土上層	土師器	甕?	体部下半	—	(7.0)	(7.1)	ロクロ、ナデ	ミナギ、黒色処理	ナデ?、襷帯により表面滑石(火ツケナデ?)
74	61	講読 SD03	971床面前上P1	土師器	深鉢	体部上半	4.6	—	(4.8)	オヤエ	ナデ	
74	62	講読 SD03	覆土中層、遺構9972目録	土師器	甕	口縁部	(25.2)	—	(6.0)	ヨコナデ、ヘラケズリ、炭化物付着	ユビナデ、ユビナデ、ヨコナデ	

国鉄 番号	遺構 番号	遺構名	出土位置	種類	器種	部位	計測(cm)			外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (底面調整)
							口径	底径	器高			
74	63	遺跡 SD03	SK03-971 取面直上 P2-4-6-7-8、971 覆土、SD06 表土(覆土)上層P3、SK03-9 55 覆土P16	土師器	甕	底部	24.5	100	31.0	ヨコナデ、ヘラケズリ、 炭化物付着	ナデ、ヨコナデ	砂肌、ヘラナデ
74	64	遺跡 SD03	覆土中層、973 覆土、遺構P4	土師器	甕	体部上半	(206)	—	(98)	ロクロ、ナデ	ロクロ、ナデ	
74	65	遺跡 SD03	974 覆土上層	土師器	小甕	口縁部	(11.0)	—	(3.7)	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ヨコナデ	
74	66	遺跡 SD03	973 覆土上層	土師器	小甕	底部	—	(8.0)	(3.25)	ヘラナデ	ナデ	砂肌
74	67	遺跡 SD03	973 覆土上層	土師器	小甕	体部上半	—	—	(3.5)	ロクロ	ロクロ	
74	68	遺跡 SD03	973 覆土下層、 972 覆土上層	灰芯器	杯	略定形	(13.0)	5.0	6.0	輪削痕、ロクロ	ロクロ	回転糸切
74	69	遺跡 SD03	974 覆土上層	灰芯器	杯	略定形	(13.2)	(4.8)	(5.2)	ロクロ、火だき直	ロクロ、火だき直	回転糸切、眉書
74	70	遺跡 SD03	973 覆土上層	灰芯器	杯	底部	—	(6.2)	(2.15)	ロクロ、眉書	ロクロ	回転糸切
74	71	遺跡 SD03	974 覆土上層	灰芯器	杯	口縁部	—	—	(3.7)	ロクロ	ロクロ	
74	72	遺跡 SD03	973 覆土上層	灰芯器	杯	体部下平	—	(7.0)	(3.7)	ロクロ	ロクロ	回転糸切、胎土分析 No.5、胎土の可定 性有り
75	75	遺跡 SD04	覆土上層	土師器	甕	口縁部	—	—	(7.8)	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ、ヨコナデ	
75	76	遺跡 SD04	覆土上層	土師器	甕	口縁部	—	—	(4.7)	ヨコナデ、ヘラナデ	ナデ、ヨコナデ	
75	77	遺跡 SD04	覆土上層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.8)	口縁上縁面片状 彫部上縁、灰肌	ナデ	縄文中期中層
75	78	遺跡 SD12	覆土上層	土師器	甕	口縁部	—	—	(2.3)	ロクロ	ロクロ	
75	79	遺跡 SD12	覆土上層	灰芯器	杯	口縁部	—	—	(3.4)	ロクロ	ロクロ	
75	81	遺跡 SD13	取面直上P4	土師器	甕	口縁部	—	—	(5.7)	ロクロ	ロクロ	
75	82	遺跡 SD13	覆土P1	土師器	甕	底部	—	(7.0)	(3.3)	ヘラナデ	ナデ	砂肌、ナデ
75	83	遺跡 SD13	覆土P2	灰芯器	甕	底部	—	(8.0)	3.0	ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ
75	84	遺跡 SD16	覆土中層P74	土師器	杯	略定形	(13.0)	6.4	5.3	ロクロ	ミギキ、黒色処理	回転糸切
75	85	遺跡 SD16	覆土中層P28-86	土師器	略定形	口縁部	(13.0)	5.2	5.3	ロクロ	ミギキ、黒色処理	回転糸切
75	86	遺跡 SD16	覆土中層P40-104	土師器	杯	略定形	(13.0)	5.6	5.5	ロクロ、灰ハジケ痕	ミギキ、黒色処理	回転糸切、内外側 熱ハジケあり
75	87	遺跡 SD16	覆土中層P67-86-88、覆土	土師器	杯	略定形	(12.3)	5.9	5.8	ロクロ、灰ハジケ痕	ミギキ、黒色処理、灰ハ ジケ	回転糸切
75	88	遺跡 SD16	覆土中層	土師器	杯	略定形	(12.2)	(5.8)	5.2	ロクロ	ミギキ、黒色処理	回転糸切
75	89	遺跡 SD16	覆土中層P59-68-77-80	土師器	杯	略定形	12.4	5.5	5.8	ロクロ、灰ハジケ痕	ミギキ、黒色処理	回転糸切、口縁付文
75	90	遺跡 SD16	覆土中層P72-73-102	土師器	鉢	略定形	100	—	(7.5)	ヨコナデ、ナデ、黒色物 付着	輪削痕、ナデ、ヨコナ デ、黒色物付着	
75	91	遺跡 SD16	覆土中層P101、覆土	土師器	略定形	(25.0)	—	(1.1)	輪削痕、唇土、ヨコナ デ、灰肌土付着	ヘラナデ、灰肌土付着	ヘラナデ、ヨコナ デ	
75	92	遺跡 SD16	覆土中層P30-32	土師器	甕	体部上半	(22.2)	—	(10.2)	ヨコナデ、ヘラナデ、 炭化物付着	ナデ、ヨコナデ	
75	93	遺跡 SD16	覆土中層P83	土師器	甕	口縁部	(24.4)	—	(7.7)	輪削痕、ロクロ	輪削痕、ロクロ、ナデ	
75	94	遺跡 SD16	覆土上層	土師器	甕	底部	—	9.3	(2.8)	ヘラナデ	エビナデ	砂肌、ヤキエ
76	95	遺跡 SD16	覆土中層P27-33-34-35-36- 37-42-43-35-37-58-100-106- 107、覆土下層P28	土師器	小甕	口縁部	14.0	6.4	14.2	ヨコナデ、ヘラケズリ、 ヘラナデ	輪削痕、ナデ、ヨコナ デ	砂肌
76	96	遺跡 SD16	覆土中層P1-2 SD16覆土上層	土師器	甕	口縁部	(16.2)	—	(7.1)	ヨコナデ、ナデ、帶風線 付	輪削痕、ヘラナデ、ヨコ ナデ	
76	97	遺跡 SD16	覆土中層P1-2 SD16覆土上層	土師器	小甕	体部上半	(13.0)	—	(8.8)	ヘラナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	
76	98	遺跡 SD16	覆土中層P50-56、 覆土上層	土師器	甕	体部上半	(18.0)	—	(9.0)	輪削痕、ヨコナデ、ヘラ ケズリ、炭化物付着	エビナデ、ヨコナデ	
76	99	遺跡 SD16	覆土中層P13	土師器	甕	口縁部	(14.4)	—	(4.4)	オキキ、ヨコナデ、ヘラ ナデ	輪削痕、ナデ、ヨコナ デ	
76	100	遺跡 SD16	覆土中層P45-49、覆土	土師器	甕	体部下平	—	6.3	(6.6)	ヘラナデ、ヘラケズリ	ナデ	砂肌
76	101	遺跡 SD16	覆土上層	土師器	甕	口縁部	(16.4)	—	(7.9)	ロクロ	ロクロ	
76	102	遺跡 SD16	覆土上層P31	土師器	甕	底部	(9.6)	6.2	(2.7)	ロクロ	ロクロ	唇土系切
76	103	遺跡 SD16	覆土中層P70-83、 遺構P4641 1層	灰芯器	杯	略定形	(13.8)	(5.9)	5.0	ロクロ、 火だき直、黒色物付着	ロクロ、火だき直	ナデ
76	104	遺跡 SD16	覆土中層P48-61	灰芯器	杯	略定形	(14.8)	(5.8)	5.2	ロクロ、火だき直	ロクロ、火だき直	回転糸切
76	105	遺跡 SD16	覆土中層P23	灰芯器	杯	略定形	(12.2)	(4.6)	4.3	ロクロ、火だき直	ロクロ、火だき直	回転糸切
76	106	遺跡 SD16	覆土上層、覆土中層P23、 967 層	灰芯器	杯	体部上半	12.4	—	(4.1)	ロクロ、火だき直	ロクロ、火だき直	
76	107	遺跡 SD16	覆土上層	灰芯器	杯	底部	—	(5.2)	(2.3)	ロクロ、眉書	ロクロ	回転糸切
76	108	遺跡 SD16	覆土中層P100	灰芯器	甕	口縁部	9.1	—	(7.4)	ロクロ、段書、ナデ	ロクロ、ナデ	
76	109	遺跡 SD16	覆土中層P13	灰芯器	甕	底部	—	(7.8)	(3.7)	ヘラナデ	エビナデ	高台・唇状調整 ナデ、爪あて?
76	110	遺跡 SD16	覆土中層P21	灰芯器	甕	底部	—	8.0	2.6	ヘラナデ	ロクロ?	
78	118	新立 ビコ 遺跡	覆土	土師器	小甕	口縁部	(12.4)	—	(4.5)	ヨコナデ、ヘラケズリ	ナデ、ヨコナデ	
78	120	飯立 遺跡	SP37 覆土	土師器	甕	口縁部	(28.0)	—	8.4	ロクロ	ロクロ	
80	122	遺構P1 遺構P1	978 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.1)	口縁上縁面片状 口縁上縁面片状	ミギキキ	滑石調整?、植物繊維 痕、陶器下層土?
80	123	遺構P1 遺構P1	978 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(4.1)	口縁上縁面片状 口縁上縁面片状(1)、回 転・空開面片状	平盤系ナデ	陶器下層土?
80	124	遺構P1 遺構P1	970 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.9)	口縁上縁面片状 口縁上縁面片状(看 察)	ナデ	縄文前期末-中期初 層
80	125	遺構P1 遺構P1	970 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.5)	口縁上縁面片状(1)期 末(開)面片状	ナデ	植物繊維痕、縄文 前期末-中期初層
80	126	遺構P1 遺構P1	978 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.4)	口縁上縁面片状、車輪系 痕(胎土)・車輪系	ナデ	陶器下層土?
80	127	遺構P1 遺構P1	979 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(6.4)	口縁上縁面片状 口縁上縁面片状(付け、取 削)片状、焼色	ミギキ	陶器128土164一 層体、行房上層土?
80	128	遺構P1 遺構P1	978 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(5.0)	口縁上縁面片状?、 口縁上縁面片状、削 削	ミギキ	陶器127土164一 層体、行房上層土?
80	129	遺構P1 遺構P1	981 扉書	縄文土器	深鉢	底部	—	—	(5.1)	口縁上縁面片状 胎部上縁	ミギキ	
80	130	遺構P1 遺構P1	978 扉書	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	(14.8)	口縁上縁面片状 口縁上縁面片状(1)期 末(開)面片状	ミギキ	植物繊維痕、 陶器上層土?

図録 番号	遺構 番号	遺構種	遺構名	出土位置	種類	器種	部位	計測(mm)			外側調整(文様)	内面調整(文様)	備考 (底面調整)
								口径	底径	高さ			
80	131	遺構外	970番層	縄文土器	深鉢	底部	—	14.4	59.6	底縁	—	ミナキ	植物繊維少量混入、縄文前期末～中期初葉
80	132	遺構外	972番層	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	123.3	結束帯(口縁・底)、粘土粘り付け・肌面凹痕	ナデ	準縄文系、円筒土層式	
80	133	遺構外	979番層	縄文土器	深鉢	有底突起部	—	—	8.1	粘土粘り付け・肌面凹痕	ナデ	準縄文系、有底突起・円筒土層式	
80	134	遺構外	974番層	縄文土器	深鉢	突起部	—	—	4.6	粘土粘り付け・肌面凹痕	ナデ	粘土粘り付け	円筒土層式
80	135	遺構外	979番層	縄文土器	深鉢	底部	—	16.0	7.2	結束帯(口縁・底)	—	—	縄文中期
80	136	遺構外	980番層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	4.0	口縁土層面凹痕・肌層堆文土層面、沈溝	平滑なナデ	—	986J30、I980J137-138と同一個体、円筒土層式
80	137	遺構外	980番層	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	4.6	堆文土層面、沈溝	平滑なナデ	—	986J30、I980J136-137と同一個体、円筒土層式
80	138	遺構外	980番層	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	11.5	堆文土層面、沈溝	平滑なナデ	—	986J30、I980J136-137と同一個体、円筒土層式
80	139	遺構外	978番層、980番層	縄文土器	鉢	輪定規	9.6	5.4	10.3	円筒土層面(無紋)	平滑なナデ	—	円筒土層式
80	140	遺構外	980番層	縄文土器	深鉢	口縁部	—	—	3.6	口縁・肌層、沈溝	ミナキ	—	円筒内1式
80	141	遺構外	964番層	縄文土器	深鉢	胴部	—	—	3.2	沈溝、土層	平滑なナデ	—	円筒内1式
80	142	遺構外	塚上	縄文土器	台付土器	台部	—	—	3.1	沈溝	ナデ	—	大淵A式
80	143	遺構外	979番層	縄文土器	台付土器	台部?	—	—	6.9	6.7	輪筋痕、オサエ、ナデ	ナデ	台付土器の可能性有り、縄文晩期?
82	153	遺構外	972番層	土師器	杯	底部下半	—	5.8	4.6	クワ口	ミナキ、黒色処理	—	輪筋未切
82	154	遺構外	963番層	土師器	杯	底部下半	—	5.6	3.8	クワ口	ミナキ、黒色処理	—	輪筋未切、黒色処理が確認できず
82	155	遺構外	9761番層	土師器	杯	底部下半	—	5.5	3.6	クワ口、或ハシケ痕	ミナキ、黒色処理	—	輪筋未切、丘面あり
82	156	遺構外	973番層	土師器	杯	底部下半	—	5.9	3.6	クワ口	ミナキ、黒色処理	—	黒色処理が確認できる?
82	157	遺構外	972番層	土師器	杯	底部下半	—	5.4	3.8	クワ口	ミナキ、黒色処理	—	輪筋未切
82	158	遺構外	971番層	土師器	杯	底部下半	—	4.8	3.5	クワ口	ミナキ、黒色処理	—	輪筋未切
82	159	遺構外	973番層	土師器	杯	底部下半	—	5.9	4.0	クワ口	クワ口	—	輪筋未切
82	160	遺構外	972番層	土師器	鉢	底部	—	4.6	3.0	ナデ	ナデ	—	ナデ
82	161	遺構外	972番層	土師器	鉢	口縁部	24.0	—	6.5	クワ口、ヘラナデ	クワ口、ナデ	—	ナデ
82	162	遺構外	972番層	土師器	鉢	口縁部	22.0	—	3.8	クワ口、ナデ、黒色処理	クワ口、ヘラナデ	—	ナデ
82	163	遺構外	970番層	土師器	小甕	口縁部	11.0	—	5.2	平コナデ、ヘラナデ	ナデ、平コナデ、ハタナデ	—	ナデ
82	164	遺構外	9781番層	土師器	底	底部	—	3.8	3.1	ナデ、突起粘り付着	平コナデ、ナデ	ナデ	ナデ
82	165	遺構外	972番層	土師器	底	底部	—	6.0	5.4	ヘラナデ、化粧粘り付着	ナデ	ナデ	ナデ
82	166	遺構外	972番層	土師器	底	底部	—	6.2	3.9	ヘラナデ	ナデ	—	輪筋未切、ナデ
82	167	遺構外	972番層	土師器	小甕	底部	—	6.6	3.2	クワ口	クワ口	—	輪筋未切
82	168	遺構外	972番層	土師器	ヒコナデ	底部	—	3.8	3.4	クワ口	クワ口	—	輪筋未切
82	169	遺構外	972番層	土師器	ヒコナデ	底部	—	5.6	3.7	クワ口	クワ口	—	輪筋未切
82	170	遺構外	9661番層	須恵器	杯	口縁部	12.4	—	3.6	クワ口	クワ口、火打すき面	—	須恵器
82	171	遺構外	981番層	須恵器	鉢	口縁部	13.9	—	5.1	クワ口	クワ口	—	須恵器
82	172	遺構外	972番層	須恵器	甕	胴部	—	—	7.6	吹き目	あり	—	あり
82	173	遺構外	972番層	須恵器	甕	胴部	—	—	8.3	吹き目	あり	—	あり

表16 農道9号出土石器・石製品・土製品・金属製品 観察表

図録 番号	遺物 番号	遺物種	遺物名	出土位置	種類	器種	石質	計測(mm)			備考	
								長さ	幅	厚さ		
84	35	土建物	SI05	956番層上	石器	砥石	流紋岩	29	61	19	29.2	欠損
70	52	土灰	SK28	塚上	土製品	土玉	—	23	29	21	12.1	今中復原
74	73	溝跡	SI03	974坑前土層	石製品	石製品	石英	29	24	15	11.5	全面磨き
74	74	溝跡	SD03	971坑前土層S1	石製品	石製品	チャート	35	30	9	14.6	全面磨き
75	80	溝跡	SD12	塚上土層	石器	二次加工のある 丸石	柱貫白岩	56	35	10	13.2	—
76	111	溝跡	SD16	塚上中層S6	石器	白石	安山岩	86	116	85	733.5	磨り・起き、欠損
76	112	溝跡	SD16	塚上中層S1	石器	白石	安山岩	107	102	50	498.5	磨り、欠損
76	113	溝跡	SD16	塚上中層	石器	磨石のある薄板	輝石岩	85	61	37	95.9	—
76	114	溝跡	SD16	塚上中層S4	石製品	石製品	石英	23	21	18	10.8	磨り面あり
76	115	溝跡	SD16	塚上中層S2	石製品	石製品	輝石岩	14	17	8	4.4	全面磨き
76	116	溝跡	SD16	塚上中層S3	石製品	石製品	輝石岩	22	20	6	3.3	全面磨き
76	117	溝跡	SD16	塚上中層SS	石製品	石製品	輝石岩	39	17	15	7.1	全面磨き、黒色付着物?
78	119	圓立ビロ	SP100S303	塚上	石器	砥石	安山岩	119	94	35	427.8	欠損、黒色変色部分あり
78	121	圓立ビロ	SP78	塚上	土製品	土玉	—	27	16	17	6.4	磨石
80	144	遺構外	遺構外	979番層	土製品	土器片跡	—	45	80	11	25.9	胴部、粘り面等、2点跡のみ、円筒土層式(口縁部有)を有する(準縄文系)
80	145	遺構外	遺構外	979番層	土製品	円盤状土製品	—	27	27	11	6.8	土器片(厚薄、貫通孔、取縁文)
81	146	遺構外	遺構外	974番層	石器	石	柱貫白岩	80	45	12	22.6	磨石
81	147	遺構外	遺構外	973番層	石器	不安定石部跡	柱貫白岩	34	27	10	6.1	黒土製品の可能性あり、欠損
81	148	遺構外	遺構外	979番層	石器	磨石	安山岩	93	70	31	408.1	—
81	149	遺構外	遺構外	979番層	石器	磨石	安山岩	136	123	98	2090	黒色変色部分あり
81	150	遺構外	遺構外	9701層	石器	円筒土層片打 磨石	安山岩	160	64	35	543.8	—
81	151	遺構外	遺構外	979番層	石器	白石	安山岩	148	137	46	1640	欠損、磨り面あり
81	152	遺構外	遺構外	979番層	石器	白石	安山岩	191	153	62	1231	欠損
82	174	遺構外	遺構外	971番層	土製品	支脚	—	34	38	22	19.0	—
82	175	遺構外	遺構外	974	鉄製品	筒状鉄製品	—	79	44	5	157	鉄線金具



## 第5節 農道10号

### 1 検出遺構

農道10号の平成20年度調査区は、遺跡の存在する台地の頂部から南側斜面に位置する。調査区内の土層については図4に示したが、全体的な傾向として、頂部に近い10-45～60グリッド付近では第Ⅱ～Ⅲ層の黒色土がはっきりみられるのに対し、10-65グリッド付近以南では黒色土の堆積が明確ではなく、第Ⅳ層の上位に暗褐色の土層が堆積することが多い。そしてこの部分には平安時代の遺構が多数存在している。暗褐色土層については、平安時代の地表面が遺構掘削や居住域形成による人的な攪乱を受けたためと考えられる。また、地山に関しては、頂部付近の10-45～56グリッド付近までは第Ⅶ層が欠層し、地山が白色のシルト質粘土となっている。一見沢地のように見えるがこの部分に関しては山口義伸氏によると、インボリューション発達の結果であるという（山口2009）。平安時代の遺構分布との関連がうかがわれる。

農道10号で検出された遺構は堅穴住居跡15軒（建て替え含む）、土坑21基、溝跡12条、掘立柱建物跡13棟、ピット85基、埋設土器1基、赤褐色範囲3ヶ所である。これらは埋設土器や溝跡の一部を除き、ほぼすべてが平安時代の遺構である。堅穴住居は改築されているものが多く、3期1軒（SI03）、2期4軒（SI01・02・04・09）、カマドのみ作り替えるもの1軒（SI08）で、改築しないものは3軒（SI05・06・07）である。これらの遺構で堅穴住居跡と掘立柱建物跡及び溝跡（外周溝）等がセットと考えられる建物跡（外周溝のみ検出されたものも含む）は12軒で、堅穴住居跡3軒、土坑6基、溝跡4条、掘立柱建物跡4棟、ピット85基、埋設土器1基、赤褐色範囲3ヶ所という遺構の構成になる。平安時代の遺構は10-58グリッド付近から南側に存在し、10-64～73グリッドの間に建物跡の集中範囲がある。この範囲には1辺7m前後の規模の大きい建物跡（SI06・07）が存在し、土馬（SI07）や銅製鈴・円筒鉄製品（SD07）などの遺物が出土しており、やや特殊な雰囲気を感じられる。その他、調査区内では近代以降とみられる轍や側溝跡（SD01・02）、時期不明の小ピットが検出されたが、それらは遺構配置図に位置を図示するにとどめる。以下、古代以前の遺構についてセット関係とみられる遺構毎に記述を行う。

（茅野）

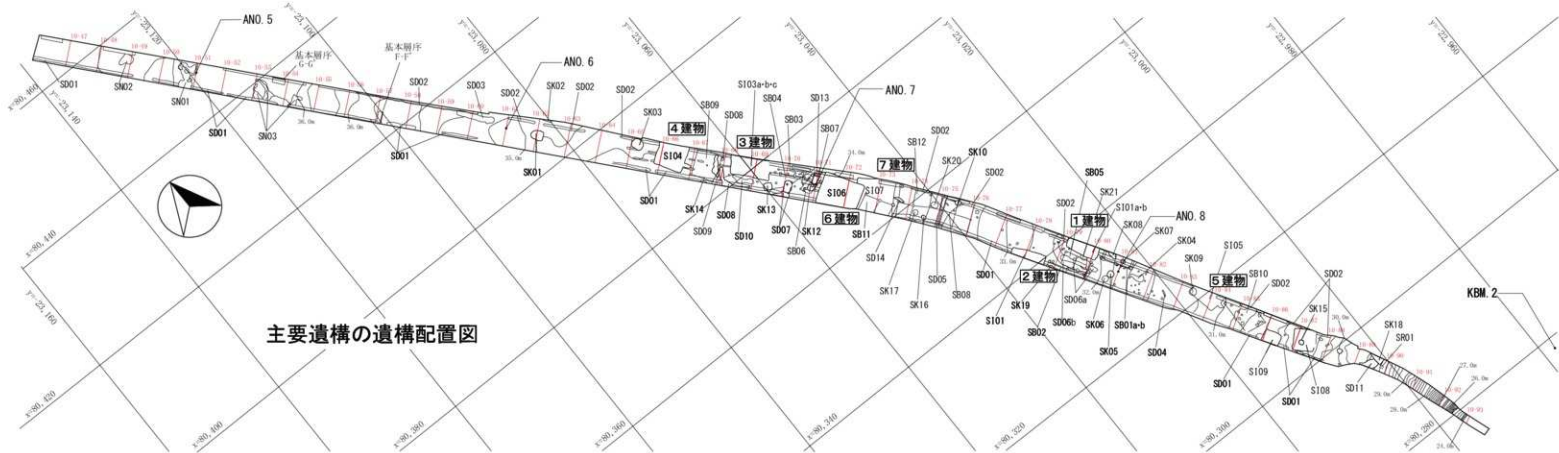
#### （1）建物跡・堅穴住居跡

##### 第1号建物跡（SI01a・01b、SD06a・06b、SK04～08・11、SB01a・01b、図84～87）

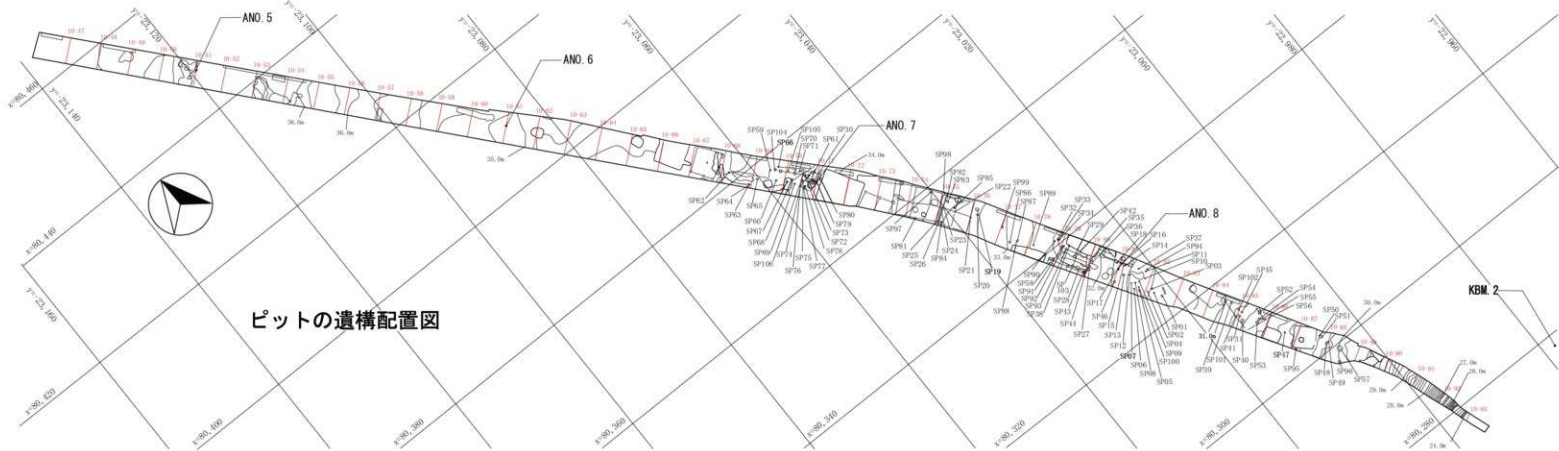
**【概要】** 調査区中央部、10-79グリッド付近に位置し、第Ⅳ層で確認した。東側約半分が調査区外に存在する。SK21・SB05と重複し本遺構が新しい。建て替えが1回行われ、古期はSI01a・SB01a・SD06a・SK05・SK11で、新期はSI01b・SB01b・SD06b・SK06でそれぞれ構成される。なお、範囲内にあるSK04・07・08に関しては建物跡に伴う可能性があり、ここで報告することとする。

##### 【堅穴住居跡-SI01a・01b】

〔平面形・規模・施設〕SI01a・01bともに平面形は方形と推定される。SI01aとして検出できたのは壁溝の一部・壁柱穴1基・支柱穴2基である。正確な規模は不明である。建て替えに際し西側壁が約30cm拡張され、南側壁が約30cm縮小されている。支柱穴はPit 3と8である。この時期のカマドは検出されなかった。SI01bは西壁が約5mを測る。壁溝がほぼ全周し、コーナーと壁中央部分に壁柱穴



主要遺構の遺構配置図



ピットの遺構配置図



がみられる (Pit 1・4・7)。主柱穴は Pit 2・9 で、掘り方は長方形を呈する。カマドの一部を南壁で検出した。白色粘土を骨材として燃焼部の袖が構築されている。煙道はおそらく半地下式であると考えられる。住居跡の軸方向は N-151°-E である。

[堆積土・床面] 第Ⅱ層に近似した暗褐色土が自然堆積している。床面は掘り方に充填した土層を平坦に仕上げている。

[出土遺物] 出土土器の総重量は1.70kgで、内訳は土師器1.53kg、須恵器0.17kgである。そのうち土師器 1 (1)、小甕 (2)、埴 (3)、須恵器 4 (4・5)、壺 (6)、磨石 (7・8)、石製品 (9)、鉄製紡錘車 (11) を図示した。3は土師器 埴 である。カマド袖部分に芯材として使用されていた。輪積み成形後体部外面にケズリ、内面にヘラナデが施される。口縁部内外面は横位のナデ調整である。

#### 【外周溝 - SD06a・06b】

[平面形・規模] 古期の SD06a と、新期の SD06b の 2 時期ある。SD06a は SI01a の西壁に平行して検出された。南側で一部切れるように見えるが本来つながっていたと考えられ、その延長線上には SK05 が位置する。幅は 60～90cm で、確認面からの深さは約 25cm である。SD06b は SI01 を囲むように配置され、南東側で開口する。北端部付近で SK11 と重複し本遺構が新しい。幅は 55～150cm であり、南端部では先細りし、その延長線上には SK06 が位置する。確認面からの深さは約 30cm である。

[堆積土・底面] SD06a の土層上位には廃棄された焼土が検出された。SD06b の堆積土は第Ⅱ層近似の暗褐色土が自然堆積している。底面には掘削時の鋤痕が見られる。

[出土遺物] 出土土器の総重量は0.98kgで、内訳は土師器0.84kg、須恵器0.14kgである。そのうち、土師器 12 (12)、小甕 (13・17)、甕 (14～16)、須恵器 18 (18)、鉢 (19) を図示した。土師器 12 には口クロ整形のものが多い。

#### 【古期外周溝の一部 - SK05】

[位置・確認] SD06a の南東側延長上に位置する。第Ⅴ層で確認した。

[平面形・規模] 平面形は直径約1.1mの円形を呈し、確認面からの深さは22cmである。

[堆積土・底面] 第Ⅱ層暗褐色土が自然堆積する。底面は第Ⅴ層を掘り込み皿状である。

[出土遺物] 出土土器の総重量は0.34kgで、内訳は土師器0.28kg、須恵器0.06kgである。そのうち、1層から出土した土師器 21 (21)、甕 (22・23)、須恵器 24 (24)、鉢 (25) を図示した。24は二次被熱を受け表面が弾けた須恵器 24 である。25は体部にヘラ書きが見られる須恵器 鉢 である。

#### 【新期外周溝の一部 - SK06】

[位置・確認] SD06b 南東側延長上に位置する。第Ⅴ層で確認した。

[平面形・規模] 平面形は直径約1.1mの円形を呈し、確認面からの深さは80cmである。

[堆積土・底面] 第Ⅱ層暗褐色土が自然堆積する。底面は第Ⅵ層を掘り込みやや傾斜する。

[出土遺物] 出土土器の総重量は0.22kgで、内訳は土師器0.21kg、須恵器0.003kgである。そのうち、土師器 26 (26・27)、焼成粘土塊 (28) を図示した。26は内面黒色処理の土師器 26 である。

#### 【掘立柱建物跡 - SB01a・01b】

[平面形・規模] 検出時は 3 基の柱穴と認識したが、精査の結果それぞれ 2 本ずつが重複し、2 つの時期が存在することが判明した。各々 3 基の柱穴で構成される。梁行は不明であるが桁行は 2 間 (4.8 m) である。柱間は a・b とともに桁方向が 2.6m と 2.2m である。

中平遺跡目

903007

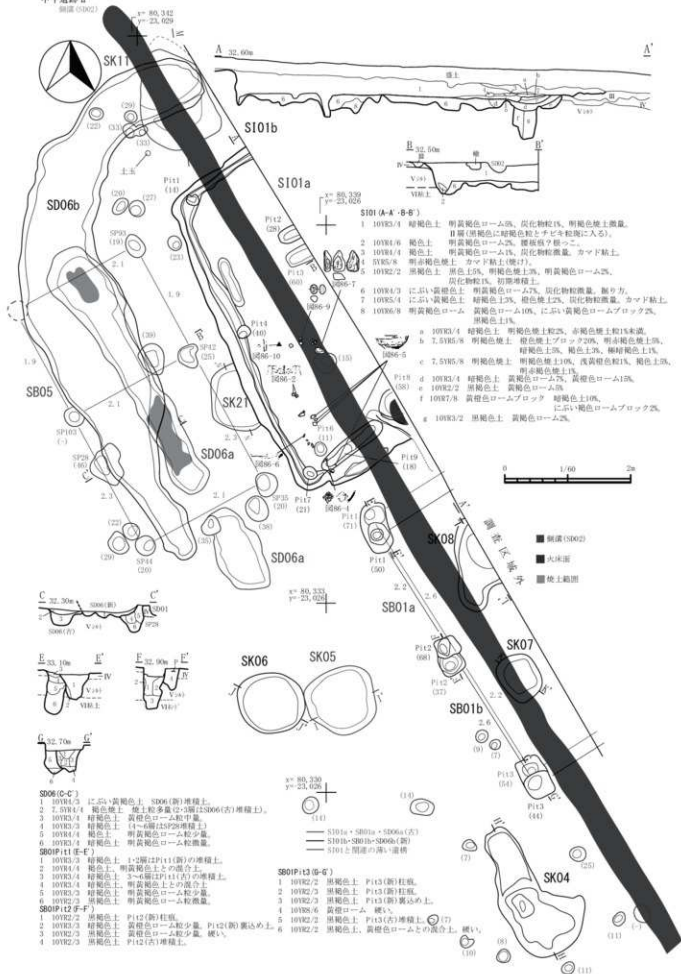


図84 第1号建物跡(1)

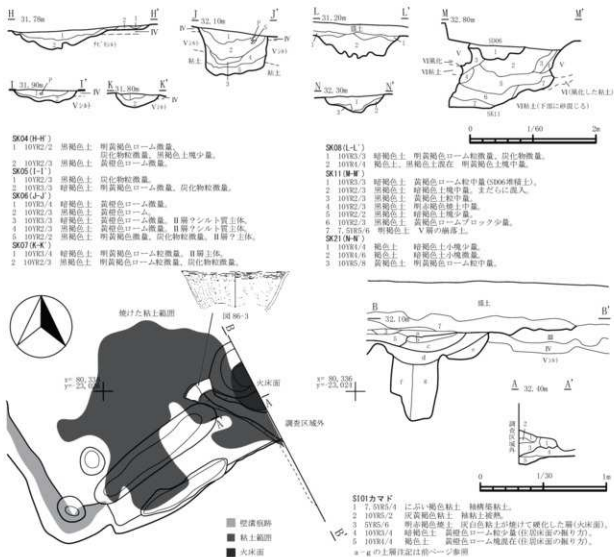


図85 第1号建物跡(2)

〔堆積土〕柱痕が検出されたものがあり、柱の太さが10～15cmと推定される。

〔出土遺物〕SB01Pit1からは棒状鉄製品(10)が出土した。

【古期のその他の施設-SK11】

〔位置・確認〕SI01の北側にあり、第V層で確認した。SD06bの北側で重複し本遺構が古いことから、SI01aに伴う施設と思われる。

〔平面形・規模〕平面形は開口部で長軸1.6m、短軸1.25mの不整形を呈する。北側壁面がオーバーハングしており、確認面からの深さは最深1.05mである。

〔堆積土・底面〕第II層暗褐色土が自然堆積する。一部に焼土や第V層塊が見られる。底面は第VI層を掘り込み、北側に向かってやや強く傾斜し、北側端部で平坦になっている。

〔出土遺物〕堆積土から出土した土師器の重量は0.65kgで、そのうち土師器杯(29)、甕(30)、小甕(31)、平玉(32)を図示した。

【その他の施設-SK04】

〔位置・確認〕SB01の南側に位置する。第V層で確認した。

〔平面形・規模〕平面形は開口部で長軸2.2m、短軸0.5～1.2mの不整形を呈する。確認面からの深さ

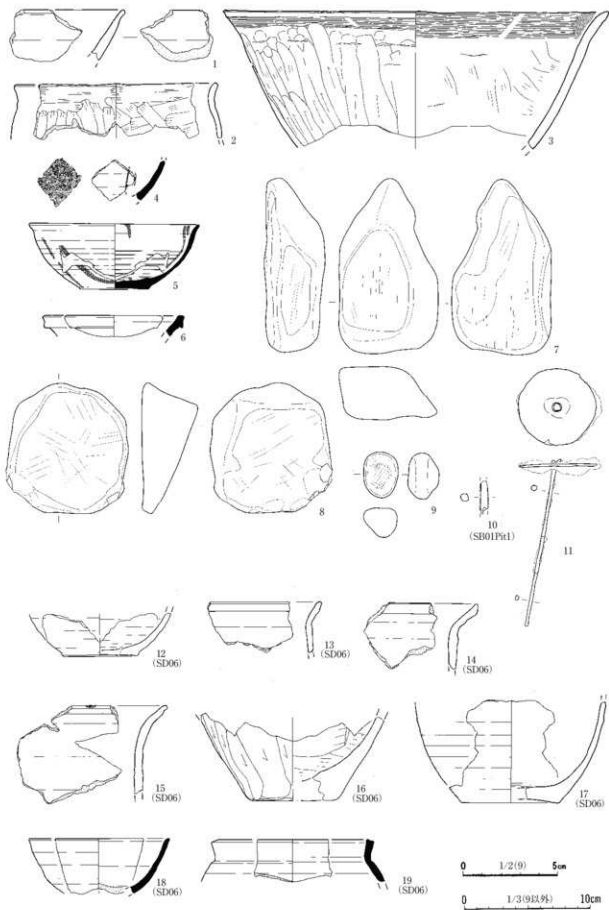


图86 第1号建物跡出土遺物(1)

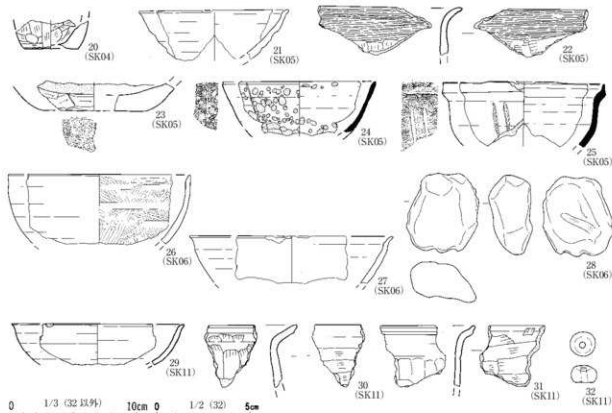


図87 第1号建物跡出土遺物（2）

は最深30cmである。

〔堆積土・底面〕第Ⅱ層暗褐色土が自然堆積し、底面は第Ⅴ層を掘り込み北から南に向かって深くなる。

〔出土遺物〕出土土器の総重量は0.23kgで、内訳は土師器0.13kg、須恵器0.1kgである。そのうち土師器ミニチュア甕（20）を図示した。

【その他の施設 - SK07】

〔位置・確認〕SB01の範囲内に位置する。第Ⅴ層で確認した。

〔平面形・規模〕平面形は開口部で長軸75cm、短軸60cmの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは最深20cmである。

〔堆積土・底面〕第Ⅱ層暗褐色土が自然堆積する。底面は第Ⅴ層を掘り込み皿状である。

〔出土遺物〕出土土師器の重量は0.004kgであるが、図示し得る遺物はなかった。

【その他の施設 - SK08】

〔位置・確認〕SB01の範囲内に位置し、約半分が調査区外に存在する。第Ⅴ層で確認し、自然地形の可能性もある。

〔平面形・規模〕平面形は開口部で長軸1.3m、短軸60cmの不整形を呈する。確認面からの深さは最深30cmである。

〔堆積土・底面〕第Ⅱ層暗褐色土が自然堆積する。底面は第Ⅴ層を掘り込み凹凸が見られる。

〔出土遺物〕出土土師器の重量は0.03kgであるが、図示し得る遺物はなかった。

【小結】本建物跡で火山灰は検出されなかったが、SI01出土遺物の特徴などから平安時代（10世紀前～中葉）の建物跡と考えられる。SK04・07・08については詳細な時期が不明である。（茅野）

## 第2号建物跡 (SI02a・02b, SK19, SB02, 図88・89)

【概要】調査区南寄り、10-77グリッド付近に位置する。第Ⅳ～Ⅴ層で確認した。西側半分以上が調査区外に存在する。SI02・SB02で構成され、外周溝は伴わない。また、SK19がSB02の範囲内に存在し、建物跡に伴う可能性がある。SI02では建て替えが1回行われている（古期：SI02a、新期：SI02b）が、掘立部では建て替えは確認できない。

### 【堅穴住居跡 - SI02a・02b】

【平面形・規模・床面・施設】SI02a・02bともに平面形は方形と推定され、確認できた堅穴の規模はSI02aが東壁で1辺4.6m、SI02bが1辺5.5mである。カマドは検出されなかった。SI02aとして検出できたのは北壁の壁溝の一部（溝2）、主柱穴と考えられる柱穴2基（Pit 1・4）、床に構築された土坑（SK01）である。Pit 4は一部分のみが検出された。床下検出のSK01は直径約1.5mの円形を呈し、床面からの深さは約40cmである。SI02bの床面構築時に第Ⅴ～Ⅵ層主体の土層で蓋がされている。SI02bは壁溝（溝1）がほぼ全周する。主柱穴はPit 2・3で、掘り方は長方形を呈する。床面は第Ⅵ層を浅く掘り込んだ掘り方に第Ⅴ～Ⅵ層ブロック主体の土層を充填し平らに仕上げている。住居跡の軸方向はN-147°-Eである。

【堆積土】第1層は白頭山苦小牧火山灰層である。2層は人為的埋め戻し土と考えられる。

【出土遺物】SI02b南コーナー部分の外側でやや遺物が集中して出土した。当初土坑などの存在を念頭に調査したが、明確に遺構と判断できる材料はなかったため、これらの遺物の出土状況について明確な説明はできない。出土土器の総重量は1.66kgで、内訳は土師器1.18kg、須恵器0.47kg、縄文土器0.01kgである。そのうち、土師器甕（33）、小甕（34）、須恵器坏（35～38）、甕（39）を図89に図示した。須恵器坏38の体部にはヘラ書きが見られる。須恵器の坏35と甕39について胎土分析による産地同定を行ったところ、いずれも五所川原産との結果を得た（第4章第5節参照）。

### 【掘立柱建物跡 - SB02】

【平面形・規模】柱穴3基で構成される。梁行は不明、桁行は2間（6.0m）で柱間はともに3mである。

【出土遺物】掘立柱建物跡に組み込まれていないがSP58覆土からは土師器甕口縁部片（40）が出土した。

### 【その他の施設 - SK19】

【位置・確認】SB02の範囲内に位置し、調査区際で確認した。約半分が調査区外に存在する。第Ⅴ層で確認した。

【平面形・規模】平面形は直径約90cmの不整な円形と推定される。確認面からの深さは38cmである。

【堆積土・底面】焼けた粘土塊や焼土が廃棄されている。底面は第Ⅴ層を掘り込みほぼ平坦である。

【出土遺物】焼けた粘土塊が出土しただけで、図示し得る遺物は出土しなかった。

【小結】出土遺物は少量であるため時期を決定する要素にはならない。SI02b堆積土最上位で白頭山苦小牧火山灰が検出されたため、10世紀前～中葉には廃絶されていたと考えられる。（茅野）

## 第3号建物跡 (SI03a・03b・03c, SK13, SD07～10, SB03・04, 図90～94)

【概要】調査区中央部、10-68グリッド付近に位置する。東側約半分が調査区外に存在する。第Ⅳ～Ⅴ層で確認した。軸方向はN-138°-Eである。2回の建て替え（拡張）が確認でき、古い方から第3号A建物跡、同B建物跡、同C建物跡の3時期がある。第3号A建物跡はSI03a・SD10・



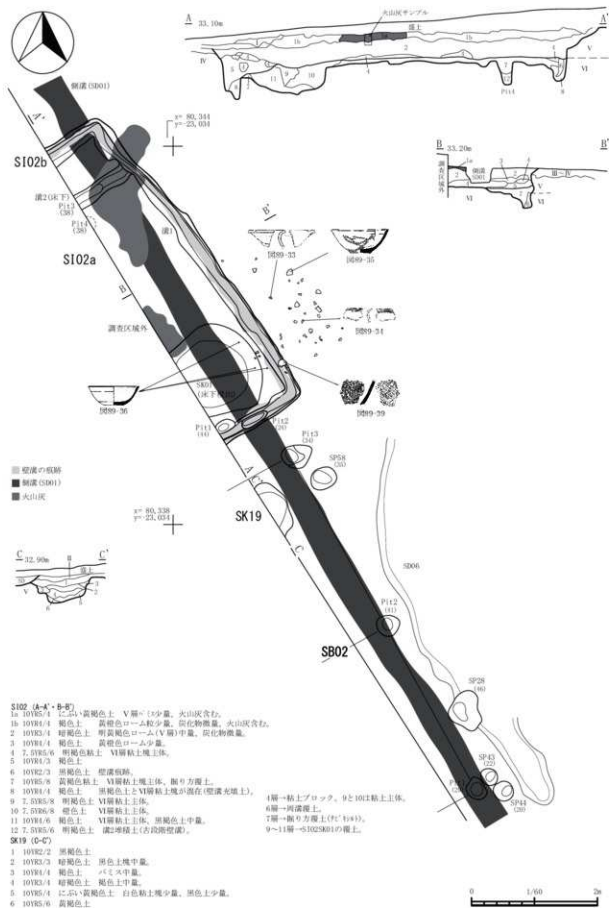


図88 第2号建物跡

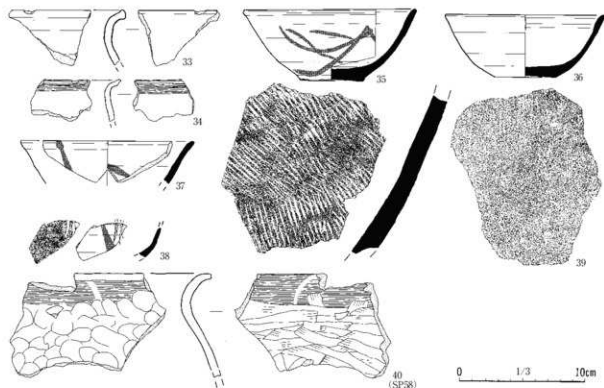


図89 第2号建物跡出土遺物

SB03、第3号B建物跡はSI03b・SD08・SK13・SB04、第3号C建物跡はSI03c・SD07・SD09・SB04でそれぞれ構成される。以下では細別時期ごとに建物跡を構成する遺構について記述する。

### 第3号A建物跡 (SI03a・SD10・SB03)

#### 【竪穴住居跡 - SI03a】

[平面形・規模] 平面形は方形と見られ、西壁が約4.85mである。確認面からの深さは約30cmである。

[堆積土] 建て替えによりこの時期の土層及び床面は残存しない。

[施設] 本時期の施設は壁溝（ほぼ全周）と柱穴2基（Pit 5・9）で、Pit 5・9が支柱穴とみられる。

[カマド] 調査区内では検出されなかった。

[出土遺物] 本建物跡に確実に伴う遺物は出土しなかった。

#### 【外周溝 - SD10】

[平面形・規模] SI03c西壁の西側直近で検出した。北西→南東方向に走行する。幅約50～90cm、確認面からの深さは約20cmである。SI03b・03cの北壁溝はSD10の延長部分を利用して構築されていると見られるため、本来SI03aを取り囲む外周溝であったと考えられる。

[堆積土] 最上層には焼土や遺物が廃棄されており、最終的に人為的に埋め戻されたと考えられる。

[底面及び施設] 底面には掘削時の動痕が見られる。

[出土遺物] 出土土器の総重量は0.33kg、内訳は土師器0.3kg、縄文土器0.03kgであるが、図示できる遺物は出土しなかった。

#### 【掘立柱建物跡 - SB03】

[平面形・規模] 梁行不明、桁行2間（推定4.4m）の方形を呈し2本の柱穴を確認した。桁間は2.2mである。

**第3号B建物跡** (SI03b・SD08・SK13・SB04)**【堅穴住居跡 - SI03b】**

[平面形・規模] 平面形は方形と見られ、西壁が約5.85mである。確認面からの深さは約20cmである。

[堆積土] 5・6層より下位の土層は本期の床構築土と考えられる。

[施設] 本時期に伴う施設は壁溝(カマド付近以外全周)、SI03内SK02(古)、SI03内SK03、柱穴3基(Pit 3・8、SI03内SK04)である。Pit 8とSI03内SK04が主柱穴とみられる。

[カマド] 本期のカマドは発見されなかった。

[出土遺物] SI03b出土遺物として、土師器甕(60)、小甕(63)、須恵器環(62)、壺(64)を図示した。60はSI03内SK02(古)、62・63はSI03内SK03、64はSI03内SK04からそれぞれ出土して本時期に伴うと考えられる。60は土師器長胴甕で内外面共にロクロ整形が見られ、63は土師器小甕口縁部片である。62はロクロ整形で底面は回転糸切り痕が見られる須恵器環で、胎土分析による産地同定を行ったが特定することはできなかった(第4章第5節参照)。64は須恵器壺口縁部片である。

**【外周溝 - SD08】**

[平面形・規模] 大半が調査区外に存在するため全体形は不明であるが、おそらく南東側に開口していると思われる。断続的に見えるのは削平のためである。幅は北西側の浅い部分で約70cm。西側の一段下がった部分は不明である。深さは深い部分で約30cm、浅い部分で約15cmである。南端が削平などのため不明瞭である。その延長線上にはSK13が存在し、おそらく一体のものであると考えられる。

[堆積土] 第V層バミスを含む黒褐色土が主体である。堆積状況については不明である。

[底面及び施設] 底面には掘削時の動痕が見られる。

[出土遺物] 出土した土師器の重量は0.48kgであるが、図示できる遺物は出土しなかった。

**【外周溝の一部 - SK13】**

[位置・確認] SD08の南端部延長上に位置する。第V層で確認した。

[平面形・規模] 平面形は直径約90cmの不正長軸1.3m、短軸1.25mの長方形である。確認面からの深さは45cmである。

[堆積土・底面] 第1層に暗褐色土塊が混じる土層が自然堆積している。底面付近からは土師器などの破片が出土した。底面は第V層を掘り込みほぼ平坦である。

[出土遺物] 出土土師器の重量は0.56kgで、底面近くから割れた状態で出土した土師器長胴甕(76・77)を図示した。ロクロ成形後、体部外面にケズリが施され同一個体の可能性がある。

**【掘立柱建物跡 - SB04】**

[平面形・規模] 桁行2間(4.5m)×梁行は不明であるが、おそらく2間×2間の方形を呈すると推定され、桁間は2.25mである。発見された柱穴は3基(SB04Pit 1～3)でそれぞれ2本の柱穴が重複していることから、同じ場所で建て替えられ、それぞれがSI03bと03cに付随すると考えられる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

**第3号C建物跡** (SI03c・SD07・SD09・SB04)**【堅穴住居跡 - SI03c】**

[平面形・規模] 平面形は方形と見られ、西壁が約6.15mである。確認面からの深さは約15cmである。

[堆積土] 第II層黒褐色土を主体とした土層が最終的に遺構を覆っているが、床面直上には焼土範囲

が広範囲に見られることから焼失住居である可能性がある。

【施設】本時期に伴う施設は壁溝（カマド付近以外全局）、SI03内SK01、SI03内SK02（新）、SI03内SK05、柱穴4基（Pit 1・2・8・10）である。Pit 1・8が支柱穴とみられる。このうち、SI03内SK02（新）にはカマド由来とみられる粘土（大半が被熱し赤変）・土師器（被熱している）が堆積土の上位から出土した。

【カマド】南東壁南寄りで見えた。燃焼部は堅穴壁際に白色系の粘土を用いて構築されている。火床面は燃焼部の端部付近に存在する。煙道は半地下式で、燃焼部から煙道部は一連の構造である。煙道部には掘り方が見られ、住居跡壁から舌状に約1m張り出す浅い掘り方の壁際には幅約20cmの溝が掘られている。壁溝はカマドの部分だけ掘削されていないようである。カマドの確認面では土師器などの破片がややまとまって出土している。

【出土遺物】SI03から出土した土器の総重量は6.65kgで、内訳は土師器6.18kg、須恵器0.46kg、縄文土器0.01kgである。これらの一部はSI03a・03bに帰属するものが含まれる可能性はあるが、大半がSI03cに帰属する。SI03cの覆土及びカマド周辺からの出土遺物として、土師器環（41～44）、甕（45～48）、小甕（49～52）、須恵器鉢（53）、壺（54）、甕（55）、砥石（56）を図示した。また、SI03cの付属施設では、SI03内SK02（新）から土師器甕（58・59・61）が、SI03内SK05からはミニチュア甕（65）が、SI03内SK01からは棒状鉄製品（57）がそれぞれ出土している。

#### 【外周溝 - SD07】

【平面形・規模】大半が調査区外に存在するため全体形は不明であるが、おそらくSD09と同一の溝跡であり、ともにSI03cを囲む外周溝と考えられる。幅は不明で確認面からの深さは約75cmである。南端部で東側に浅く舌状に張り出す溝が確認されたが（SD07-2）、これには自然地形の可能性もある。  
【堆積土】最上位には第Ⅱ層黒褐色土が自然堆積している。特に2層は黒味が強く、2層中からは土師器・須恵器・金属器（筒状鉄製品・銅鈴など）がまとまって出土している。これらは外周溝ならびに建物跡廃絶時にまとめて廃棄された可能性がある。3層より下位の層には第Ⅴ層バミス・ブロックが多く含まれ、人為的埋め戻しと掘り起こしが数回行われたような痕跡が伺える。

【底面及び施設】底面は先端に行くほど深くなり、先端部の壁面はオーバーハングした部分がある。また、底面には掘削時の跡痕が見られる。

【出土遺物】出土土器の総重量は2.50kgで、内訳は土師器1.66kg、須恵器0.77kg、縄文土器0.07kgである。そのうち、土師器環（66・67）、甕（68～70）、須恵器甕（71～73）、円筒状鉄製品（74）、銅製鈴（75）を図示した。全て1～2層からの出土である。66・67は土師器環である。66は輪積み→手づくね成形の後、体部外面はナデ・オサエ、口縁部は横位のナデが施される。全体に器壁が厚い。67はロクロ整形の後内面が磨かれ黒色処理がなされている。70は長胴甕である。輪積み成形の後体部外面にケズリ、口縁部内外面に横位のナデ、体部内面にヘラナデが施される。71～73は須恵器甕の破片である。外面にはタタキ目が見られる。出土状態では細かく割れた破片が多く、被熱した様子も見られた。74は筒状の鉄製品である。幅約5cmの鉄板を丸めて筒状に仕上げている。側面に穴等は見られない。用途は不明である。75は銅製鈴である。青銅製で、下面には紐と直行する方向に鈴口が開けられている。紐の形状は環状ではなくT字形を呈しており、特異である。この部分には紐が巻き付けられているのが確認できた。従ってこの鈴はひもでぶら下げて使用されていたことがわかる。X線撮影により内部

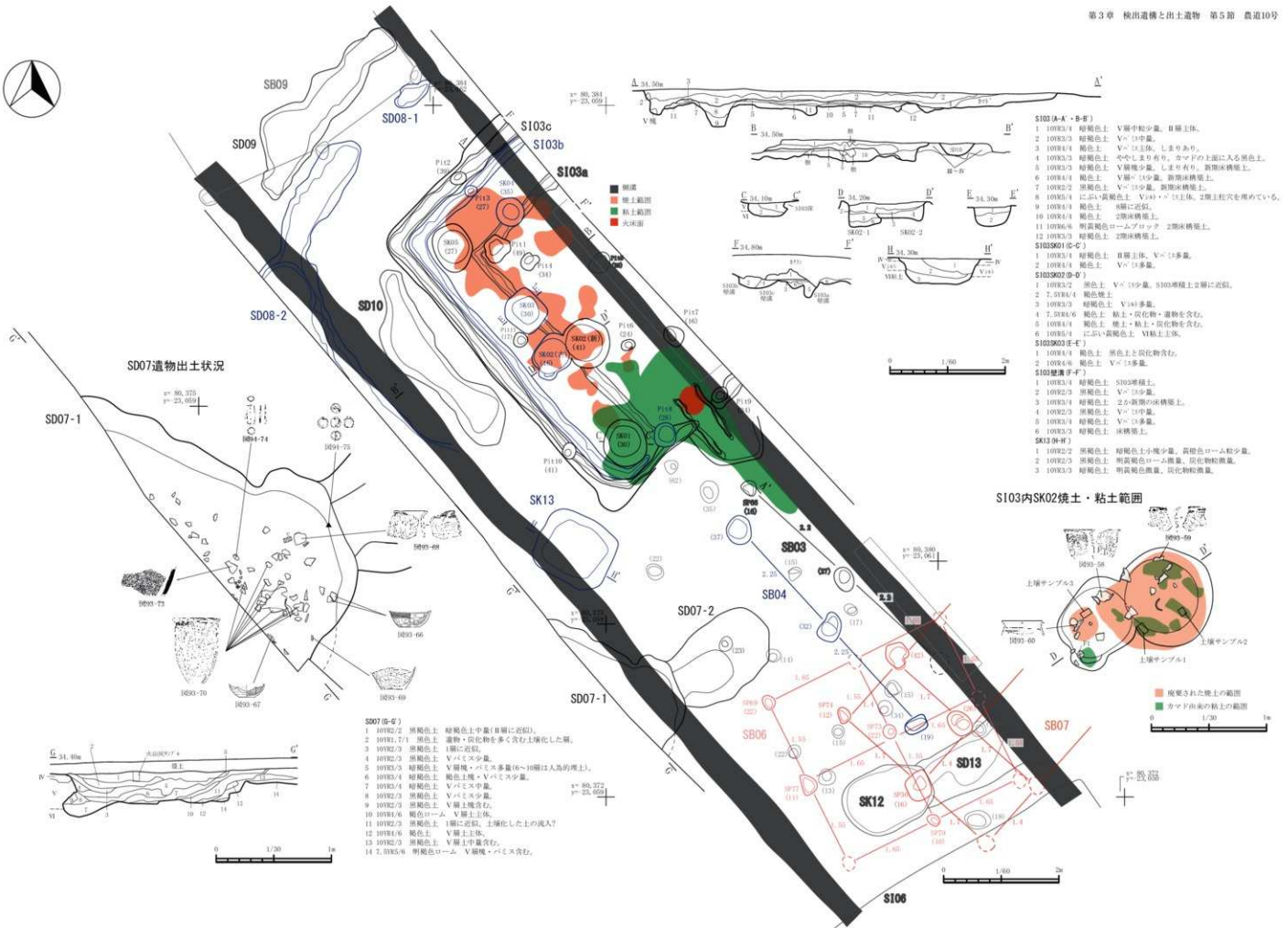
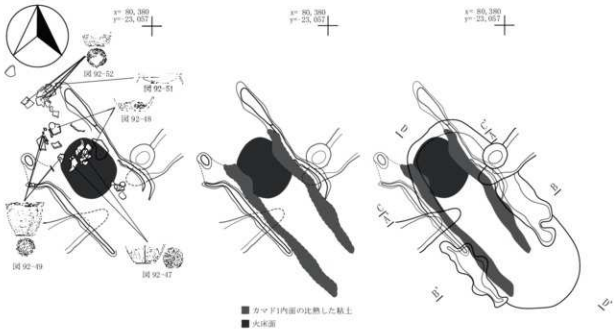


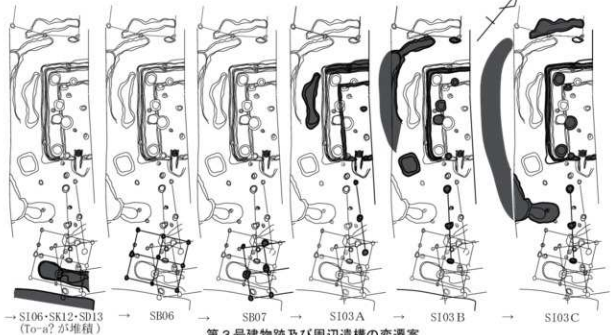
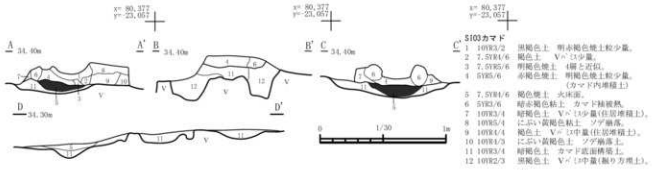
図90 第3号建物跡 (1) - 161~162 -



カマド遺物出土状況

カマド完掘状況

カマド掘り方



第3号建物跡及び周辺遺構の変遷案

図91 第3号建物跡(2)

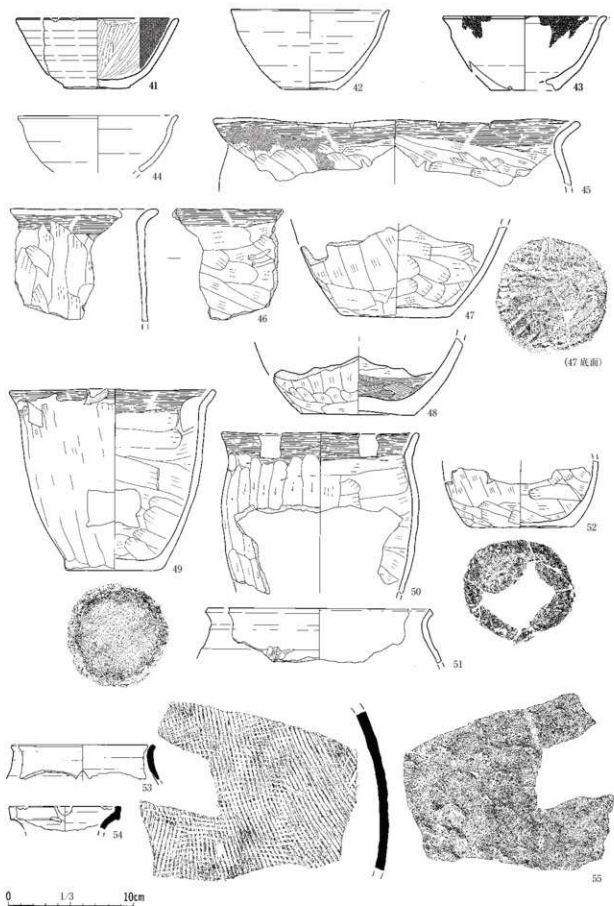


图92 第3号建物跡出土遺物 (1)

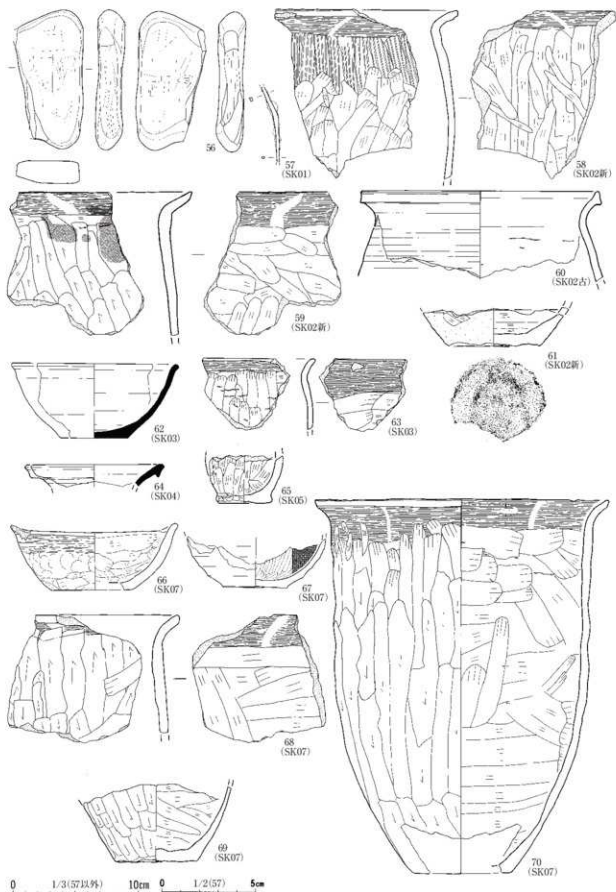


图93 第3号建物跡出土遺物(2)



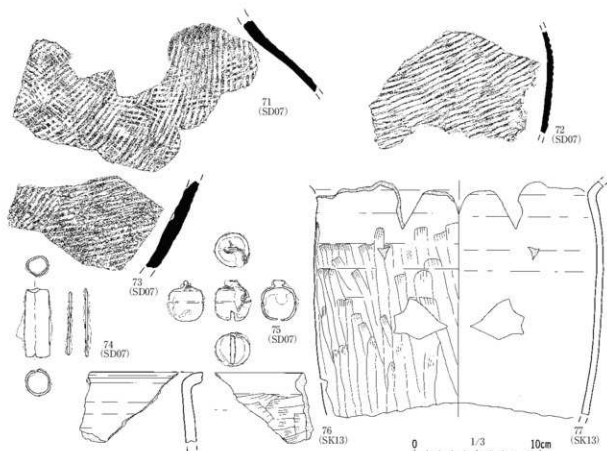


図94 第3号建物跡出土遺物(3)

に丸が残存していることが判明した(第4章第4節参照)。

【外周溝 - SD09】

【平面形・規模】 SI03cの北側に位置し、SD08の北側直近に平行して走行している。現状では長さ3.4m、最大幅1mの溝跡であるが、おそらく西側の調査区外に延びており、SD07につながっていると推定される。SB09と重複し、本遺構が新しい。確認面からの深さは約15cmである。

【堆積土】 第Ⅱ層黒褐色土に第Ⅴ層バミスが混じる土層が主体である。

【底面及び施設】 底面には掘削時の鋤痕が見られる。

【出土遺物】 縄文土器が0.04kg出土したが、平安時代の遺物は出土しなかった。

【掘立柱建物跡 - SB04】

【平面形・規模】 SB03とほぼ同じ位置に構築されている。規模や柱間もほぼ同規模である。

【小結】 第3・6・7号建物跡周辺は、遺構配置図(図83)や各遺構図(図90・103・105)にあるとおり、本調査区の中でも特に遺構が密な部分である。そこで重複関係を慎重に検討し第3・6号建物跡付近の遺構変遷案を図91に示した。SI06の堆積土には白頭山苫小牧火山灰がブロック状に確認されたが年代決定の根拠とはならず、第3号建物跡と第6号建物跡の重複関係は不明である。遺物の特徴からもSI03・SD07・SI06・SI07いずれも土師器坏に黒色処理が施されるものや、ロクロ成形甕を一定量伴う事など、概ね9世紀後半から10世紀前半にかけての年代が想定されるものの、共通点が多く明確な差異は見いだせない。従って、第3・6・7号建物跡は近接した時間内に構築された可能性が高いと

考えられる。そして第7号建物跡のSB12内に存在するSX01から検出した炭化材をAMS測定したところ、9世紀中葉から後半との年代を得ている(第4章第2節参照)。SX01は第7号建物跡を構成すると考えられるため、第7号建物跡の年代は9世紀後半と考えることができる。第7号建物跡は第6号建物跡と重複し第6号建物跡が新しいため、少なくとも第7号建物跡は9世紀末以降の年代を想定することができることになる。一方、建物跡の主軸方位を見ると、第3号建物跡(138°)、第6号建物跡(148°)、SB06(153°)、SB07(131°)であり、第3号建物跡とSB07、第6号建物跡とSB06の軸方位が近似している。またSB07はSK12・SD13より新しいことから、これらのことをまとめると、第6号建物跡→SB06→SB07→第3号建物跡という変遷が考えられる。さらに年代測定結果を考慮に入れると、本遺構は、10世紀前半の遺構である可能性がある。(茅野)

#### 第4号建物跡(SI04(新)・(古)、SK03・14、SB09、図95～98)

**【概要】** 調査区中央部、10-66グリッド付近に位置する。東側約1/4が調査区外に伸びる。SI04・SB09で構成され、SK03・14もセットになる可能性がある。SB09が第3号建物跡のSD08と重複し、本遺構が古い。全体的にⅣ～Ⅴ層で確認した。竪穴住居は床面・カマドとも2時期あり、改築されている。

##### 【竪穴住居跡-SI04(新)・(古)】

[平面形・規模] 平面形は1辺4.6m程度の方形と推定される。確認面からの深さは約45cmである。

[堆積土] 堆積土上位は第Ⅱ層黒色土が自然堆積するが、下層には第Ⅴ層塊・パミスを含む土層が堆積していて人為的に埋め戻された可能性がある。竪穴南側約半分にはカマド由来の粘土が散布している。

[カマド] 南壁西寄りで検出された。新旧2時期がある。古段階のカマドは火床面と土師器を利用した支脚の一部が確認されただけである。煙道は竪穴外に伸びる緩やかなスロープ状の掘り方が確認できたため詳細は不明である。新段階のカマドは古段階のカマドを壊した後、直上に床面を貼った上に構築されている。燃焼部から煙道の壁は白色系の粘土を使って構築されている。煙道は半地下式と考えられる。火床面の少し煙道寄りには土師器(78)が伏せてあり、支脚と考えられる。

[床面及び施設] 床面は2枚確認できた。上の床面は下の床面の上に約3cmの厚さで粘土塊などが混じった土層を貼っている。上の床面はカマド周辺の南側約半分の範囲でのみ確認された。下の床面は掘り方に充填した土層を平坦に仕上げ構築している。床面では柱穴が3基検出され、全て主柱穴とみられる。本来4基あるはずであるが、残り1基はカマド西脇付近の壁溝を利用していた可能性がある。

[出土遺物] 出土土器の総重量は5.79kgで、内訳は土師器5.52kg、須恵器0.2kg、縄文土器0.07kgである。大半がカマド周辺からの出土で、そのうち土師器(78)、ミニチュア鉢(79)、甕(80～87)、小甕(88～89)、須恵器(90～91)、刀子状鉄製品(92)、敲石(94)、縄文晩期深鉢片(93)を図示した。78と87はカマドの支脚に使用されている。78は土師器でロクロ整形である。底部の厚さが1.7mmと通常の坯と比べかなり厚い。87は土師器長胴甕の底部である。90は須恵器である。カマド廃棄に伴い広がった粘土範囲内から出土した。本遺構から出土した土師器については、特に土師器長胴甕について、ロクロ成形と輪積み成形の両方が見られる。

##### 【掘立柱建物跡-SB09】

[平面形・規模] ほぼ全体が検出できた。梁行2間(4m)×桁行2間(4m)の方形を呈するが、

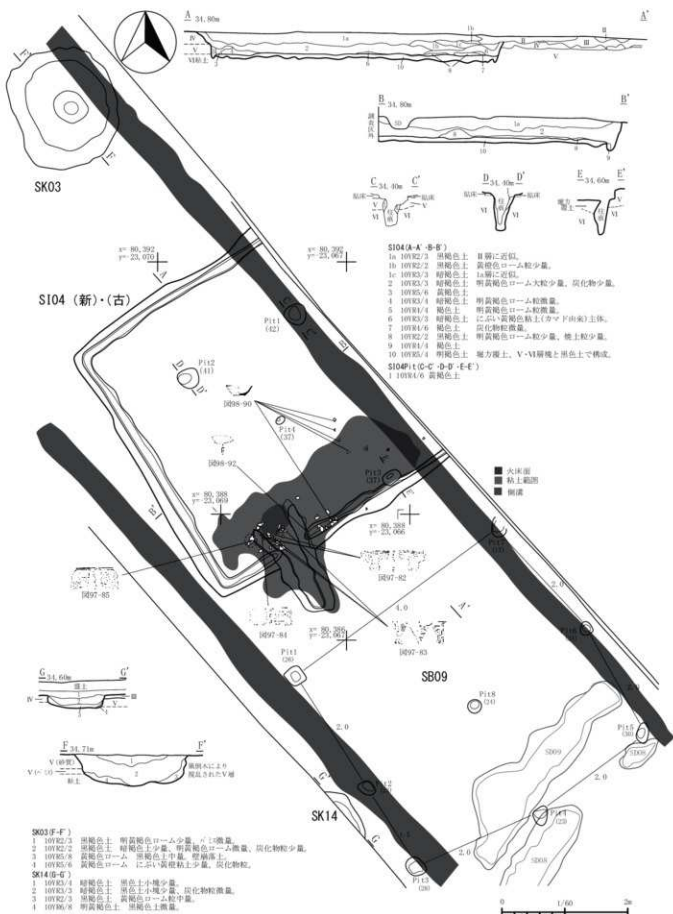


図95 第4号建物跡(1)

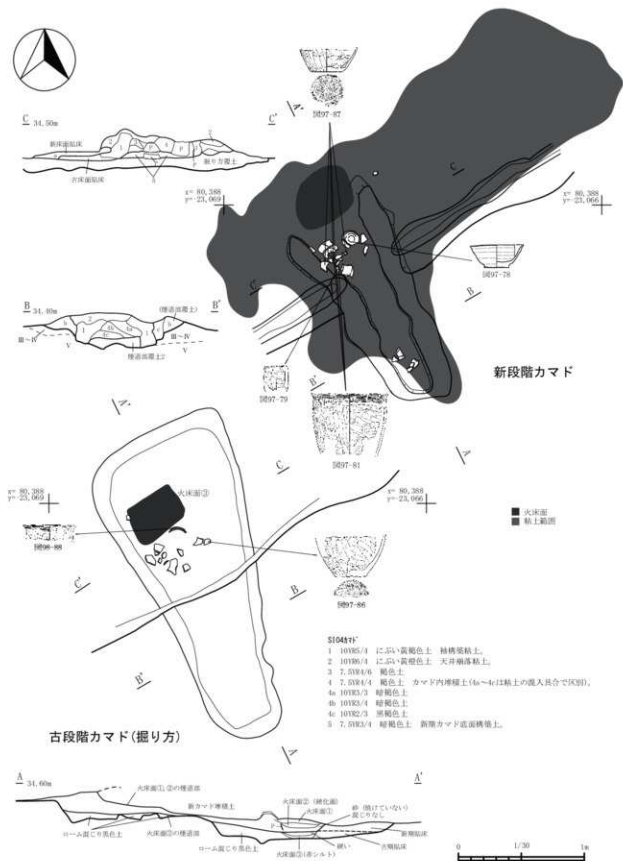


図96 第4号建物跡(2)

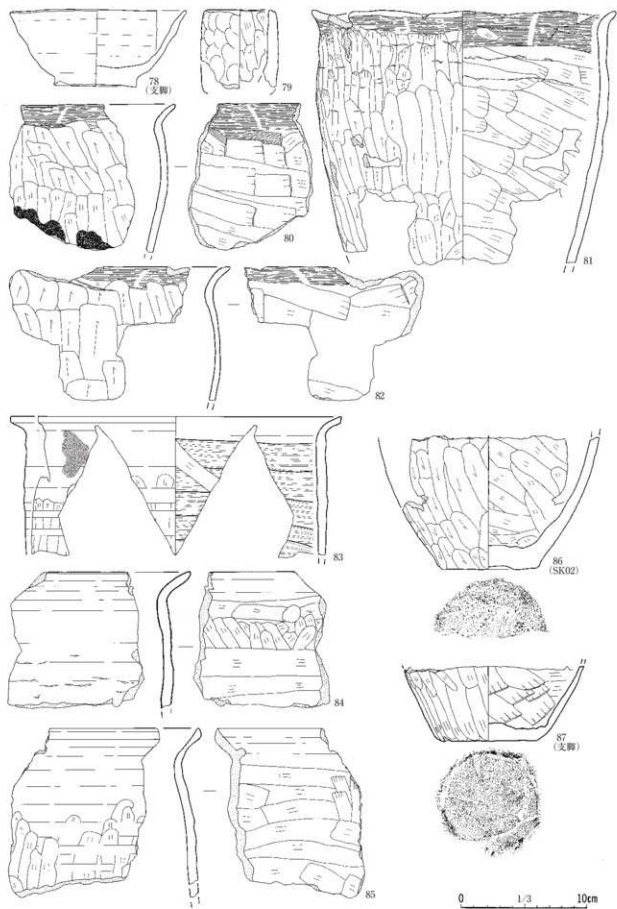


图97 第4号建物跡出土遺物 (1)

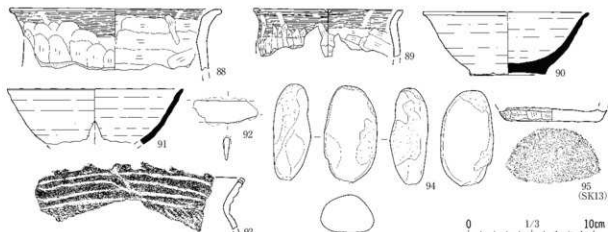


図98 第4号建物跡出土遺物(2)

北側の間柱が検出されなかった。8基の柱穴で構成される。梁間・桁間共に2mを計るが、西側でやや短くなっている。

【その他の施設 - SK03】

【位置・確認】 SI03の北側約2.3mに位置し、第IV層で確認した。

【平面形・規模】 平面形は長軸1.9×短軸1.6mの楕円形を呈する。確認面からの深さは42cmである。

【堆積土・底面】 第II層黒色土が自然堆積土し、底面の一部には第VI層のシルト質粘土が厚さ約5cmの層状に堆積している。底面は第VI層を掘り込みほぼ平坦であるが、中央部部分に深さ2cm程度円形の凹みが見られる。

【出土遺物】 縄文土器片が0.01kg出土したが、図示し得る遺物はなかった。

【その他の施設 - SK14】

【位置・確認】 SB09の西側に位置し、大半が調査区外に存在する。第V層で確認した。

【平面形・規模】 全体の平面形及び規模は不明である。確認面からの深さは20cmである。

【堆積土・底面】 第II層黒色土が自然堆積する。底面は第V層を掘り込みほぼ平坦である。

【出土遺物】 土師器等が0.04kg出土し、土師器長胴甕底部の破片(95)を図示した。

【小結】 出土遺物の特徴や重複関係から9世紀後半～10世紀前半の遺構と考えられる。(茅野)

### 第5号建物跡 (SI05, SB10, 図99～102)

【概要】 調査区南部、10-83グリッド付近に位置し、東側半分以上が調査区外に伸びる。第IV～V層で確認した。SK09と重複し、本遺構が古い。SI05とSB10とで構成される可能性がある。

【竪穴住居跡 - SI05】

【平面形・規模】 平面形は1辺4.7m程度の方形と推定される。確認面からの深さは44cmである。主軸方位はN-167°-Eである

【堆積土】 堆積土上位には第II層黒褐色土が自然堆積する。中位から下位には第V層パミスを含む人為的埋め戻し土が堆積する。更に最下層には黒色土が堆積することから住居廃絶後、やや時間をおいてから土層が廃棄されていると考えられる。

【カマド】 南壁西寄りにカマドを検出した。燃焼部から煙道にかけて楕円形の掘り方を持ち、その上

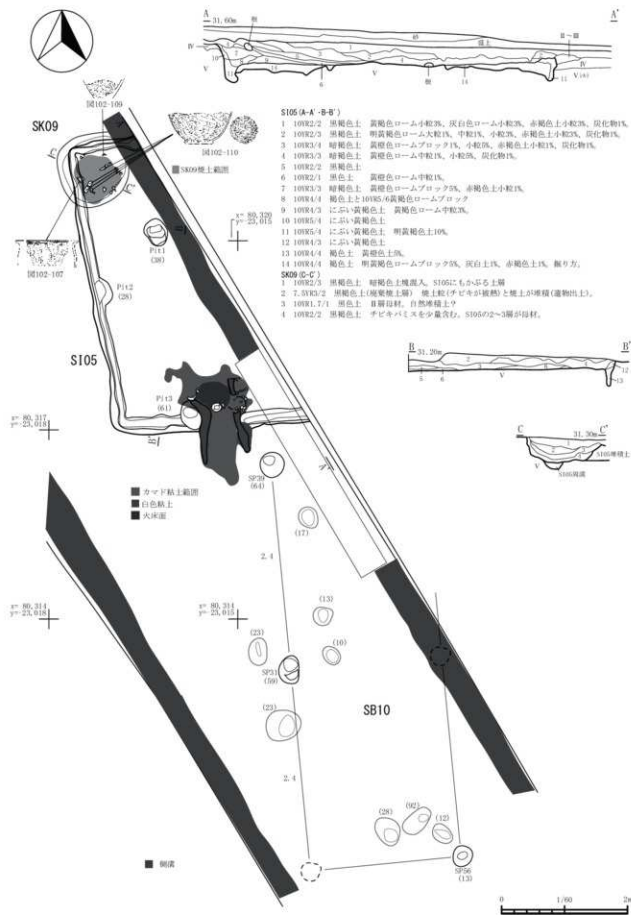


図99 第5号建物跡(1)

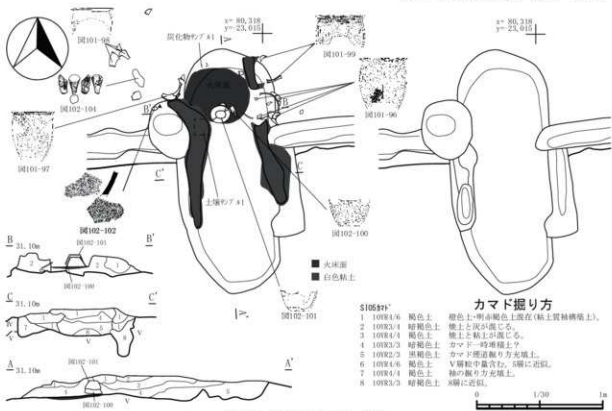


図100 第5号建物跡(2)

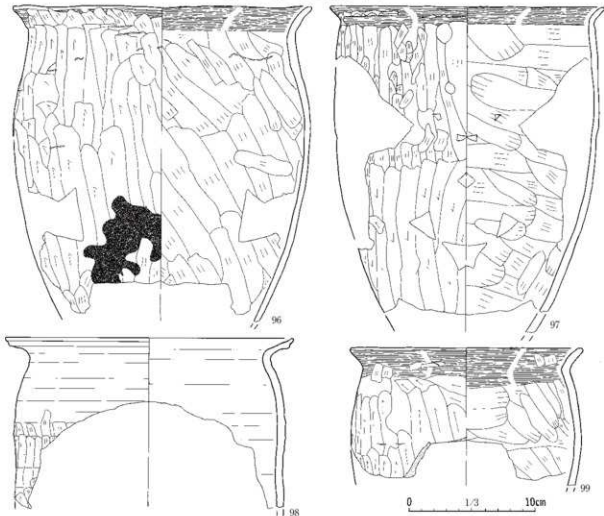


図101 第5号建物跡出土遺物(1)



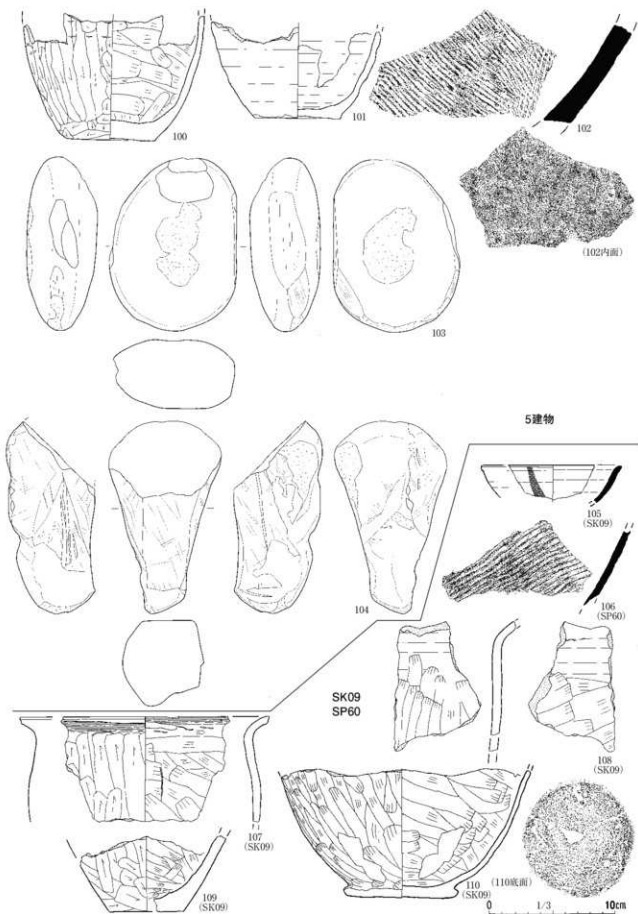


图102 第5号建物跡出土遺物(2)・第9号土坑出土遺物

部に白色系の粘土を用いて燃焼部から煙道部の壁が構築されている。煙道は半地下式である。燃焼部壁の端部付近では両袖内部に土師器長胴甕（右袖：97、左袖奥：96、手前：99）が芯材として倒立状態で埋め込まれている。火床面は燃焼部北端付近で検出され、南端部分には土師器甕体部～底部を伏せた状態で2段重ね（上：101、下：100）にした支脚が据えられていた。掘り方の東西壁際には短く浅い溝が見られる。

【床面及び施設】床面は掘り方に充填した土層で構築されており、ほぼ平坦である。カマド部分以外の掘り方壁際には壁溝が巡っており、西壁中央部では柱穴状に深くなる部分が見られる。柱穴は2基発見され、支柱穴と考えられる。Pit 1の掘り方底面は長方形を呈する。

【出土遺物】出土土器の総重量は5.03kgで、内訳は土師器4.72kg、須恵器0.28kg、縄文土器0.03kgである。カマド周辺を中心に土師器・須恵器・石器が出土し、そのうち土師器甕（96～99）、小甕（100・101）、須恵器甕（102）、敲石（103）、砥石（104）を図示した。土師器は長胴甕・甕が主体であり、輪積み成形とロクロ成形が見られ、輪積み成形がやや多い。102は須恵器甕体部破片である。

#### 【掘立柱建物跡 - SB10】

【平面形・規模】3基の柱穴で構成される。梁行1間（2.4m）×桁行2間（6.5m）の長方形を呈する。桁間が他の建物跡よりかなり大きい。柱穴の深さなどからSP56が構成外となる可能性もあるため、平面形については不確定である。

【小結】SI05カマド出土土師器などの特徴から9世紀後半～10世紀前半の遺構であると考えられる。

（茅野）

### 第6号建物跡（SI06、SD13、SK12、SB11、図103・104）

【概要】調査区中央部、10-71グリッド付近に位置し、南西側約1/4が調査区外に存在する。第IV～V層で確認した。SI06・SD13・SK12・SB11で構成される。SI06とSB11がSI07と重複し、SI07が古い。またSK12がSB07と重複し、SK12が古い。

#### 【竪穴住居跡 - SI06】

【平面形・規模】平面形は1辺6.6m程度の方形と推定される。本調査区の中で最大級の竪穴住居跡である。確認面からの深さは約44cmである。主軸方位はN-148°-Eである。

【堆積土】堆積土1層は第II層暗褐色土が自然堆積する。竪穴中央付近の1層最下面でブロック状の白頭山苦小牧火山灰が検出された。2層以下は第V層塊・パミスを含む土層であり、人為的に埋め戻されていると判断した。

【床面及び施設】床面は掘り方に充填した土層で構築されている。掘り方は壁際ほど深く、床面中央は地山が床面となっている。北及び東壁の中央部分では溝が検出された。支柱穴は2基検出され、掘り方の形状は長方形である。また、Pit 1が床面のほぼ中央部分で検出された。方形の掘り方を持ち、深さが他の2基と比べ浅い。底面からは粘土塊が出土した。Pit 1の用途は不明である。

【カマド】調査した範囲からはカマドは発見されなかった。

【出土遺物】出土土器の総重量は6.13kgで、内訳は土師器5.62kg、須恵器0.45kg、縄文土器0.06kgである。そのうち、土師器坏（111）、広口壺？（112）、甕（115）、小甕（113・114）、須恵器坏（117）、鉢（118）、壺（119～123）、棒状鉄製品（124）、刀子（125）を図示した。竪穴南側の堆積土から土師器等の破

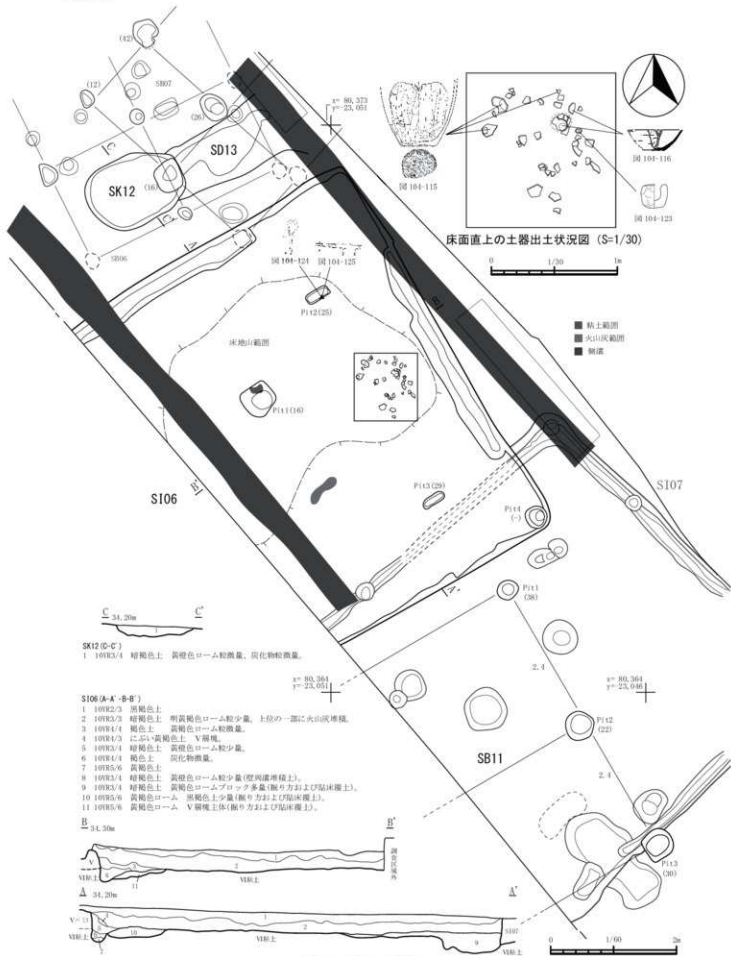


図103 第6号建物跡

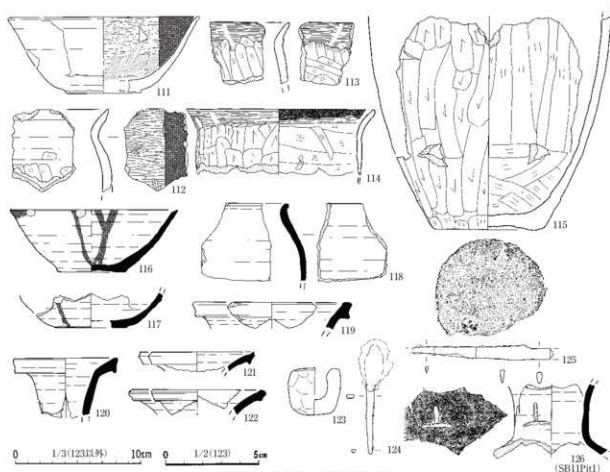


図104 第6号建物跡出土遺物

片が散発的に出土した。特に Pit 2 と 3 の間の床面直上からはややまとまって出土している (115・116・123)。117は須恵器環で Pit 1 から出土した。125は床面出土の鉄製刀子である。

#### 【外周溝 - SD13】

【平面形・規模・底面】東側が調査区外に延びるため全体形は不明である。底面は皿状であり、堆積土と壁面の境界は不明瞭であることから、自然地形の可能性もある。

【堆積土】第IV層に近似した土層が堆積する。

【出土遺物】遺物は出土しなかった。

#### 【外周溝の一部 - SK12】

【概要】SI06の北壁北側に位置し、北壁と長軸が平行する。第V層で確認した。

【平面形・規模】平面形は長軸1.6m、短軸1.1mの楕円形である。確認面からの深さは20cmである。

【堆積土・底面】第II層暗褐色土が堆積し、底面は第V層を掘り込みほぼ平坦である。

【出土遺物】覆土中から土師器片が出土した。

#### 【掘立柱建物跡 - SB11】

【平面形・規模】SI06南側に位置し、3基の柱穴で構成される。全体形は不明だが2間×2間の方形をなす可能性があり、桁間は2.4mである。Pit 1 から刻書のある須恵器長径壺頸部破片 (126) が出土した。

【小結】堆積土で検出した火山灰はブロック状であり二次的に混入した可能性が高い。(茅野)

## 第7号建物跡 (SI07、SB12、SK16・17・20、SD14・SX01、図105～107)

【概要】調査区中央部、10-72グリッド付近に位置する。西側約1/5が調査区外に伸びる。第Ⅳ～Ⅴ層で確認した。SI07・SB12・SK16・17・20・SX01・SD14で構成される。SI07がSI06・SB11と重複し、SI07が古い。SB12がSD05と重複し、SB12が古い。

## 【竪穴住居跡 - SI07】

[平面形・規模] 平面形は1辺6.2m程度の方形と推定される。確認面からの深さは約48cmで、主軸方位はN-137°-Eである。南東壁中央部から竪穴外に伸びる外延溝 (SD14) を検出した。

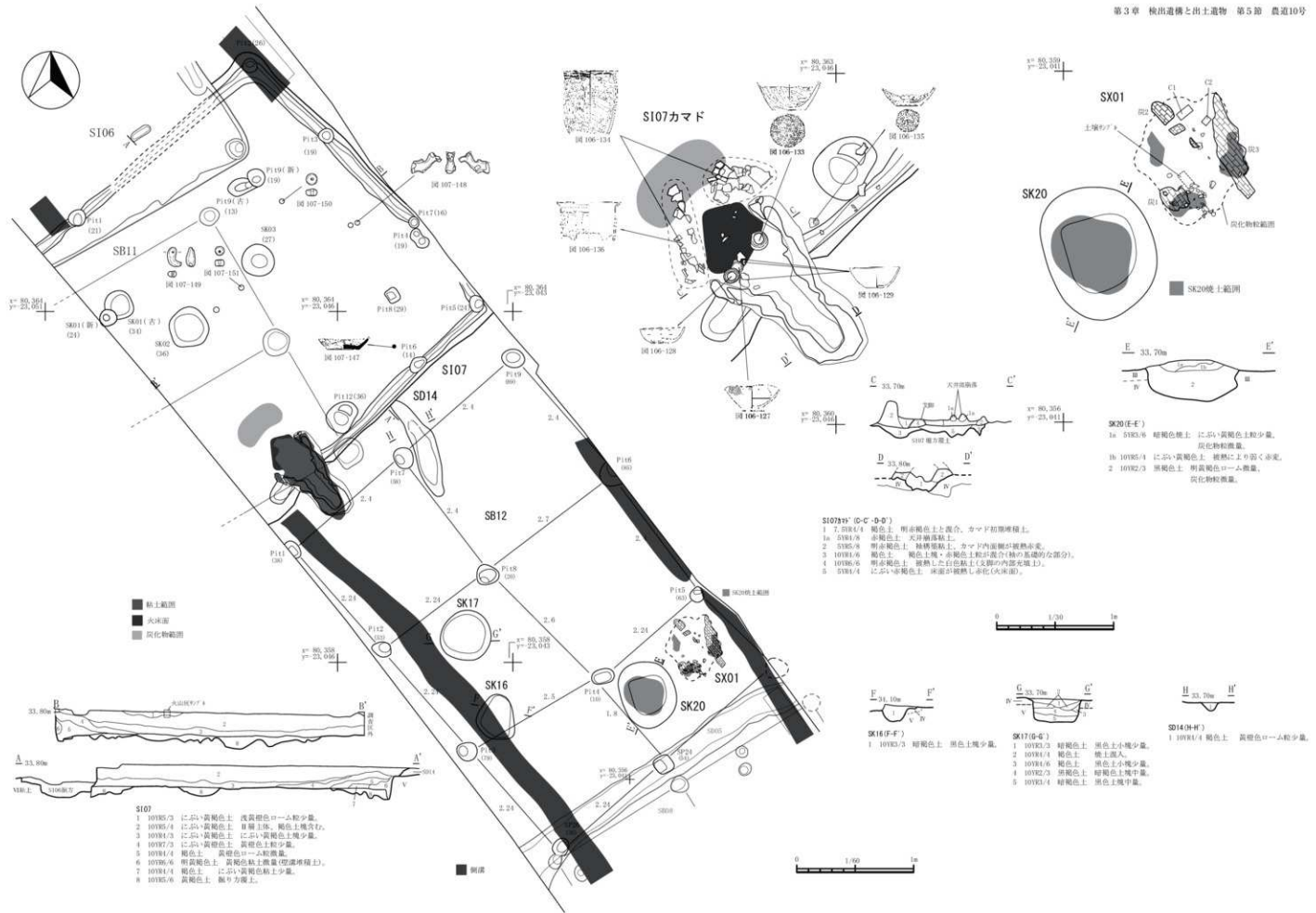
[堆積土] 1層は第Ⅴ層バミスをよく含み、第6号建物跡SB11構築時の整地土層の可能性がある。2層は第Ⅱ層黒褐色土が自然堆積し、3層より下位は第Ⅴ層を含む暗褐色土で人為的に埋め戻されている。

[カマド] 南壁西寄りで検出した。作り替えは確認できなかった。竪穴外部に舌状に張り出す緩やかなスロープ状の煙道掘り方を持ち、燃焼部の下部にも浅い掘り方を持つ。煙道は半地下式で燃焼部から煙道の壁は掘り方底面に白色系の粘土を盛って構築している。燃焼部北端部付近では火床面を確認し、火床面南縁には土師器杯 (127・128) と甕底部 (133) が3個体伏せてあった。内部には粘土が充填しており、支脚とみられる。燃焼部袖端部付近では土師器甕が横転したような状況で出土した。これらはSI05に見られるように燃焼部袖端部の芯材として埋め込まれたと考えられる。

[床面及び施設] 床面はSI06と同様、中央付近の地山を掘り残し、壁際が深くなる掘り方に充填した土層で構築されており、平坦である。掘り方壁際には壁溝が検出された。壁溝には、壁1辺につき等間隔に4基の柱穴がみられる。柱穴は7基検出された。そのうちSI07内SK01とPit 9では重複が見られ、柱穴の配置に時期差があることが判明した。古期主柱穴はSI07内SK01 (古)・Pit 9 (古)・Pit 8で、新期主柱穴はSI07内SK01 (新)・Pit 9 (新)・Pit 6・Pit12である。また、SI07内SK02・SI07内SK03とPit12はSI06Pit 1のように主柱穴とは用途が異なる可能性がある。竪穴外では、南東壁中央部から南東へ伸びる外延溝 (SD14) を検出した。長さ約1.8m、幅約40cm、確認面からの深さ22cmで、ローム粒を含む褐色土が堆積していた。

[出土遺物] 出土土器の総重量は20.23kgで、内訳は土師器19.3kg、須恵器0.76kg、縄文土器0.17kgである。図示したのは、土師器杯 (127～131)、ミニチュア鉢 (132)、甕 (133～138・140)、小甕 (139)、広口壺? (141)、埴 (142)、須恵器杯 (143～145)、壺 (146・147)、ミニチュア外耳土器 (160)、縄文前期深鉢土器片 (159)、土馬 (148)、土製勾玉 (149)、土玉 (150～152)、石製品 (153・154)、棒状土製品 (155・156)、磨石 (157)、台石 (158) である。遺構確認段階で、1層中から土馬1点 (148)、土玉3点 (149～151) が出土した。これらは本遺構ではなく第6号建物跡に帰属する可能性がある。そのほかの遺物は主にカマド周辺の3層中から出土している。土師器はロクロ整形の杯 (内面黒色処理含む)、輪積み成形の (長胴) 甕、ロクロ成形の (長胴) 甕、埴等の器種がみられる。内面黒色の杯とロクロ成形甕が一定量を占めるのが特徴である。須恵器には杯・長頸壺などがみられるが出土量は少ない。148は土製の馬形 (土馬) である。脚部と尻尾を欠き、現存で長さ2.4cm・幅3.5cm・厚さ1.2cmである。背中には2箇所の突起が見られ、鞍を表現していると思われる。鼻先に見られる剥離痕は轡周辺の馬具の表現とみられる。青森県内からは八戸市岩の沢平遺跡・黒石市甲里見 (2) 遺跡・青森市新田 (2) 遺跡等から古代の土製馬形の出土例がある。

## 【掘立柱建物跡 - SB12】



- S107**
- 1 10YR5/3 に近い黄褐色土。浅黄褐色土に少量。炭化物少量。
  - 2 10YR5/4 に近い黄褐色土。黄褐色土。褐色土塊含む。
  - 3 10YR4/6 に近い黄褐色土。黄褐色土。黄褐色土塊少量。
  - 4 10YR7/3 に近い黄褐色土。黄褐色土少量。
  - 5 10YR4/4 褐色土。黄褐色土に少量。
  - 6 10YR6/6 暗黄褐色土。黄褐色土に少量(炭化物混在層上)。
  - 7 10YR4/4 褐色土。に近い黄褐色土に少量。
  - 8 10YR5/6 黄褐色土。灰褐色土。

- S107H\* (C-C' 各点)**
- 1 7. 10YR4/4 褐色土。暗赤褐色土に混合。カマド初期層積土。
  - 2 5YR5/6 赤褐色土。天守櫓跡積土。
  - 3 10YR1/6 褐色土。暗赤褐色土。柱土範囲に被覆した部分。
  - 4 10YR6/6 暗赤褐色土。黄褐色土に少量(灰褐色土)。
  - 5 5YR4/4 赤褐色土。赤褐色土に少量(灰褐色土)。

- SK16(F-F')**
- 1 10YR5/3 暗褐色土。黒色土塊少量。

- SK17(G-G')**
- 1 10YR3/3 暗褐色土。黒色土塊少量。
  - 2 10YR1/4 褐色土。褐色土塊。
  - 3 10YR1/6 褐色土。黒色土塊少量。
  - 4 10YR2/3 暗褐色土。暗褐色土塊少量。
  - 5 10YR3/4 暗褐色土。黒色土塊少量。

- SK14(H-H')**
- 1 10YR1/4 褐色土。黄褐色土に少量。

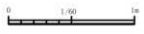
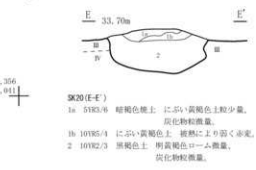
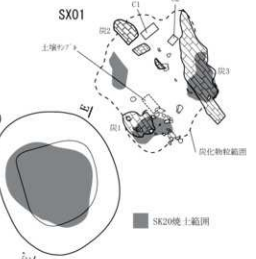


図105 第7号建物跡 - 179-180 -